

ありふれた凡骨は決闘
者の高みを目指す

生徒会長月光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはどこにでもいる決闘者が真のデュエリストになるため日々研鑽を積んでいる日常から非日常へ飛び込むお話し

戦いの儀が終わり遊戯たちは新たな一步を踏み出した。

そんな中、城之内克也は真のデュエリストになるため幾度も大会へ出場をし己を高めていた。

しかし、バトルシティやKCグランプリといった大きな大会での熱い決闘のような刺激のある大会もなく次第に真のデュエリストに必要なものは何があるのかと考えるようになってくる。

そんなある日、城之内は幼い頃からの友人で今でも親交があり良くご飯を共に食べる仲の少女が弁当を忘れていたので少女の通う学校へと届けに行く。

そして届けた先で突然教室を覆うように広がる魔法陣により異世界トータスへと召喚をされてしまう。

城之内克也はトータスでの旅路で様々な出会いを経験し、真のデュエリストに一步ずつ近付いていく。

その旅路の果てに何が待ち受けるのか。

p i x i v にもマルチ投稿してます。

目次

短編	1
異世界トータスへ	
プロログ	5
学校での一幕	9
召喚後の一幕	19
ステータスプレート	27
トータスでの幕間	35
イジメを前に城之内は友を守る	47
トラップの先に潜む脅威	56
ベヒモス戦そして…	61
帰還そして決意	70
オルクス迷宮編 友を救うために飛び込む	
悪夢を乗り越えろ！	81
奈落の底での変異…闇を照らす一筋の光	90
ハジメの変異…人生を賭けたギャンブル	104
友を信じるものたちの行進	115
溢れゆく激情を受け止める！	129
迷宮でのクラフト そして一つのケジメ	140
地獄の先の希望を探して	154

	暗闇に射す一筋の希望	169		孤高の決闘者 トータスへ降り立つ	
	封印部屋の化物退治	186		304	
	吸血姫との語らい	198		ハウリアは白き龍の威光を垣間見る	
	オルクスの最奥へ	211		309	
	絆は深まり新たな高みへと	223		覚醒の女武者！恋心は留まることを知	
	最奥のガーディアン	239		らず何処までも！	319
	奈落の先の希望を掴み取れ！	256		ライセン大峽谷へ ウサ耳少女との邂逅	
	解放者の意思	267		334	
	温泉での一時：少女は乙女となり華を			孤高の決闘者と炎の決闘者の邂逅	
	咲かせる	281		346	
	精霊たちとの語らいと、恵理の出生の			二つの世界の違い	357
秘密		292		ハウリアたちとのまったりLIFE	
ライセン大迷宮編				366	

未来を視る少女は錬成師へ愛を叫ぶ

377

幼女の正体はハジメとレイカの精霊!?

388

帝国兵を待ち受ける運命 それは……

400

ハルツイナ樹海到着

412

自然豊かな町並み フェアベルゲン

427

ハウリアの長の漢道 上に立つ者の偉

大さ

明日を思う者たちとデュエルモンス

ターズ講座

熱きデュエリストたちの戦い 海馬 v

S 城之内 471

熱きデュエリストたちの戦い 海馬 v

S 城之内 2 496

最強と結末 海馬 v S 城之内 3

512

熱き男たちの戦いの終幕 海馬 v S 城

之内 4 529

純愛 Happiness 545

フェアベルゲンにて二人は崇め奉られ

る 554

大樹への道のり 563

娘を託された一行は変態たちの巣窟へ

星の導きの先を目指す者との邂逅

816

湯船にて遭遇する乙女たち

827

さらば変態の巣窟そして星に導かれる

者の決意

838

妖怪娘たちの主人（人妻感満載）の修行

風景

849

短編

これはどこにでもいる決闘者が真のデュエリストになるため日々研鑽を積んでいる日常から非日常へ飛び込むお話し

戦いの儀が終わり遊戯たちは新たな一步を踏み出した。

そんな中、城之内克也は真のデュエリストになるため幾度も大会へ出場をし己を高めていた。

しかし、バトルシティやKCグランプリといった大きな大会での熱い決闘のような刺激のある大会もなく次第に真のデュエリストに必要なものは何があるのかと考えるようになっていく。

そんなある日、城之内は幼い頃からの友人で今でも親交があり良くご飯を共に食べる仲の少女が弁当を忘れていたので少女の通う学校へと届けに行く。

そして届けた先で突然教室を覆うように広がる魔法陣により異世界トータスへと召喚をされてしまう。

城之内克也はトータスでの旅路で様々な出会いを経験し、真のデュエリストに一步ずつ近づいていく。

その旅路の果てに何が待ち受けるのか。

「おう！恵理お前家に弁当忘れてたぞ。飯食わねえと体も丈夫になんねえぞ。」

決闘王国、バトルシティ、ドーマとの戦いを潜り抜け真のデュエリストを目指す一人の決闘者 城之内克也

「あはは。忘れてた。ありがとう克也！どうせなら一緒に食べてく？」

幼い頃に友達になり今では親友といっても過言ではなく、城之内にデュエルのアドバイスや家に招待して夕飯を共に食べる仲で、唯一克也には心を開いている少女 中村恵理

「凄い！あのバトルシティで神のカードを持っていないのにベスト4に入った城之内選手に会えるなんて！」

父親の影響もありデュエルモンスターズを知っていてカードのイラストを描いたこともある少年 南雲ハジメ

「あのバトルシティでのデュエル凄かったです！私友達と水族館でのデュエル見ました！」

ハジメの趣味を知る内にデュエルモンスターズの魅力を知っていった暴走突撃娘 白崎香織

「カードで人気になったからってそんな大層なことじゃないだろ。もっと将来を見つめ

なければ駄目だ。」

デュエルモンスターズをしない自分することを正しいと盲信する後の勇者（笑） 天之川光輝

「バトルシテイのあの羽賀ってやつとのデュエル見てたぜ。あんな凄えの初めてで見るこつちも興奮したぜ」

いつも考えることが脳筋であるがバトルシテイでのデュエルを見て興奮した様子な少年 坂上龍太郎

そしてトータスへと跳んだ後

「凄い…ハジメたちの世界は…私もやってみよう」

奈落へと封印をされていた吸血姫でありハジメたちと出会いデュエルモンスターズに興味を示す ユエ

「ヒイーーーーーいつもスパルタですう。社長手加減してくださいさあ〜い。」

未来を見ることの出来る少女でありある者を社長と呼びそれに着いていく兎人族の少女 シア・ハウリア

「ふうん！貴様ごときがこの俺の道を邪魔するというのはならば容赦はせん！精々この俺の糧になるがいい」

戦いの儀を見るのが叶わず遊戯が冥界へと旅立ってしまい再会と決闘を望むKC

社長 漫画版海馬瀬人

「とても凛々しく雄々しい姿なによりも妾と同じ黒き姿、感服したのじゃ！」

ある山脈にて遭遇した竜人族の女性 ティオ・クラルス

トータスでの出会いを経て城之内は成長していく。

全ては真のデュエリストになるために

異世界トータスへ

プロローグ

ここはバトルシティの会場にもなり、デュエリストキング武藤遊戯や海馬コーポレーション社長海馬瀬人を輩出した童実野町。

そしてここに一人の決闘者城之内克也は今日も大会を経験し真のデュエリストになるためにデュエルをする。

「はあ、何かぱつとしねえな。」

のだが最近の城之内はどこか刺激の足りない生活を送っていた。前までは遊戯と共々様々な出来事に巻き込まれたりして刺激のあるしのぎを削るようなデュエルをしていたが最近はそうだったこともなく退屈をしているようであった。

前よりも成長した城之内にとってそこらの大会の参加者程度では相手にならないほどの実力を手にしていたのも理由のひとつだろう。

しまいには、真のデュエリストになるためには何が足りないのかを、考えていた。

「どうしたの克也？ なにか悩んでる？」

「恵理か。」

「もう！何回も、呼んでたのに気付かないんだから。それで今度は何に悩んでるの？」
「ああ実はな真のデュエリストになるために何が足りないのかってな。」

「あはは。克也らしいね。うくん何だろうね。克也ってこうさ人を惹き付けるデュエルをするじゃん。確かに遊戯君や海馬社長のデュエルは、迫力があるよ。でもさ克也にはそんな二人にはない魅力何をやらかすかわからないっていうドキドキ感が僕は好きかな！」

「どーせ俺のデツキは博打ですよ。」

「でも、その博打で色んな人に勝ってきたんでしょ。それに人は人。克也は克也だもん。克也らしいデュエルが出来たら僕は良いと思うよ。」

「へっ！ありがとよ惠理。やっぱお前は頼りになるな。」ワシヤワシヤ

「もう克也つたら僕だって子供じゃないんだよ！ボソツ でも克也が撫でてくれるのは嬉しいな」

この二人昔から仲が良く惠理もバトルシティやドーマの時など同行している。

昔にある出来事があり精神を病んでいた惠理を偶々城之内が見つけて言葉を交わして暇を見つけては惠理を励ましていた城之内。その行動一つ一つに悪意を感じられずただ一生懸命に自分を励ましてくれるその姿を見て段々と心を開いていった惠理。

それからは暇なときがあればご飯に誘ったりして城之内にアタックしているのだが

中々城之内にその思いが伝わらなかつたりではあるもののその胃袋をがっちり掴んで
はいるので近い内に報われるだろう。

高校こそ違うところではあるが城之内のサポートなども行っている。城之内の妹の
静香とも仲が良くお義姉ちゃんと呼ばれている。

「克也今日僕の家でご飯食べない?」

「そりゃいいな。頼むぜ。俺は一回帰ってデツキとか色々持つてくるぜ。今日も相談
乗つてくれるか?」

「もちろん!腕によりをかけて作るね!」

そうして城之内は一度帰宅し自分のデツキや遊戯や杏子に本田からもらつたカード
といったものや海外にいる御伽が色々なパツクを送つて来たのでそれらも持ち恵理の
家へと向かう。

そして二人は恵理が作ったカレーを食べてデツキの構築や新しくもらつたパツクを
見ているというカードなのか話し更に二人でデュエルをしたりと濃密な時間を過ごし
た。

翌日恵理が早くに家を出て城之内は創立記念日で高校が休みのため遅くに起きて
デツキとカード、デュエルディスクを持ち家を出ようとした時恵理が弁当を忘れてい
るのに気付く。

「惠理のやつ弁当忘れてんじやねえか…仕方ねえ届けに行くか……」

この時何を思ったのか城之内は惠理のデッキとディスクも一緒に他の鞆に入れて持っていくことにした。

デュエリストの勤なのかこの時の城之内にも何故持っていこうと思ったのかは定かではないがまさかこの後、異世界に召喚されてしまうとは城之内も思っていなかった。

学校での一幕

城之内は昼前に恵理の通う学校へと辿り着いた。

流石に他校の生徒がウロウロするのは良くないと思い来賓用の札を首から下げて学校を歩く。

「しっかし恵理のやつうっかりしてんな。それにしても家の高校とあんまし変わらないもんだな。やっぱ高校つてどこもおんなじもんなのか？」

と歩いていると丁度曲がり角から人が来ていたようでぶつかってしまふ。幸い倒れるようなこともなく

「わりい！前みてなかった。大丈夫か？」

「あたたたついえますいません。先生も前を見てませんでした。あれ？見かけない制服ですぬ？」

「ああ、友達が弁当忘れててそれを届けに来たんだ。つていうか先生？ちっこいのに？」

「ちっこいとは失礼ですよ！これでも25才なんですから……あれ？あなたどこかで見ただような？」

「わりいわりい。見た目で判断するなんてどうかしてたぜ！なあ先生、友達の中村恵

理つつうんだけども、どこの教室か知ってたりするか？」

「えっ？中村さんですか、ええ知ってますよ。次の時間中村さんのクラスで授業をするので丁度教室に行こうと思ってたんです。良ければ案内しますよ。」

「サンキュー先生！そうだ自己紹介してなかった。俺城之内克也って言うんだ。宜しくな。」

「城之内くんですね。私は畑山愛子と言います。……あつ！もしかしてバトルシティ大会でベスト4に残ったあの城之内君ですか!？」

「その城之内だぜ！」

「こんなところでデュエルモンスターズの選手に会えるなんて凄いことです。そうそう私バトルシティの時、童実野町の水族館に遊びに行つて偶々ですがデュエル見てたんです。あの梶木選手とのデュエルとても凄かったです。特にあのシーステルスを見破ったときなんて手に汗握る攻防に興奮しました！」

「あんがとさん。あれは俺だけじゃなくて梶木も強くて共に認め合ったからこそ良いデュエルが出来たんだ。」

「城之内君は中村さんと知り合いなんですか？」

「ああ！昔からの幼馴染みみたいなもんで俺にとつて大事な奴だぜ！」

「中村さんにも春が来てたんですね！」

「ん？春？先生今は秋で春なんてまだまだ先だぜ！」

「ふふつ物の例えですよ。さあ行きましょう！」

と愛子は城之内を連れて恵理のクラスまで歩いていく。

南雲サイド

月曜日はいつもめんどくさいとある少年南雲ハジメは感じていた。ただし、ハジメの場合単に面倒というだけでなく、学校の居心地が悪く憂鬱さが多分に含まれていたが。

その日もハジメは、いつものように始業チャイムがなるギリギリに登校し徹夜でふらつく体でなんとか踏ん張り教室の扉を開けた。

そして極力意識しないように自席へ向かうハジメ。しかし、毎度のことながらちよっかいを出してくる者がいる。

「よお、キモオタ！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろう？」

「うわつ、キモく。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃんく」

一体何が面白いのかゲラゲラと笑い出す男子生徒達。

声を掛けてきたのは檜山大介といい、毎日飽きもせず日課のようにハジメに絡む生徒の筆頭だ。近くでバカ笑いをしている取り巻き三人と大体この四人が頻繁にハジメに絡む。

檜山の言う通り、ハジメはオタクだ。と言つてもキモオタと罵られるほど身だしなみや言動が見苦しいという訳ではない。髪は短めに切り揃えているし寝癖もない。コミュ障という訳でもないから積極性こそないものの受け答えは明瞭だ。大人しくはあるが陰気さは感じさせない。単純に創作物、漫画や小説、ゲームや映画というものが好きなだけだ。最近ではデュエルモンスターズがハジメの中ではトレンドになっていて、自分でイラストを描いたこともあるが流星にそれを出す勇気もなく机の引き出しに眠つてはいるのだが。

なぜ男子生徒全員が敵意や侮蔑をあらわにするのか。

その答えが彼女だ。

「南雲くん、おはよう！ 今日もギリギリだね。もっと早く来ようよ」

ニコニコと微笑みながら一人の女子生徒がハジメのもとに歩み寄った。このクラス、いや学校でもハジメにフレンドリーに接してくれる数少ない例外であり、この事態の原因でもある。

名を白崎香織といい学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る少女だ。

いつも微笑の絶えない彼女は、非常に面倒見がよく責任感も強いため学年を問わずよく頼られる。それを嫌な顔一つせず真摯に受け止めるのだから高校生とは思えない懐の深さだ。

そんな香織はなぜかよくハジメを構うのだ。徹夜のせいで居眠りの多いハジメは不真面目な生徒と思われており（成績は平均を取っている）、生来の面倒見のよさから香織が気に掛けていると思われている。

「南雲君。おはよう。毎日大変ね」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

そして学校の二大女神のもう一人の八重樫雫。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の目は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカッコイイという印象を与える。

と学校で多大な人気を誇るが何でもかんでも自分が正しいと思い込んでいる自称正義の味方な天之河光輝

見た目に反さず細かいことは気にしない脳筋タイプな坂上龍太郎が話し掛ける。

ハジメとしては勘弁してほしいのだから香織が話し掛けるので無視することもできず今日も居心地が悪い。

これならデュエルの動画を見てたほうがよっぽど良い。

特に昨日見てたあのバトルシティの動画。

武藤遊戯や海馬瀬人といったデュエリストの戦い方を見てると僕たちとは別世界の

人なんだと感じさせられるけどそんな中でも必死に食らいついてるデュエリスト城之内選手のデュエルに気付けば目が離せなくなつた。

城之内選手は武藤遊戯みたく完璧な戦略で相手の先を何手も読んで素早く切り替えるデュエルや海馬瀬人みたいに圧倒的な攻撃によるフィールドの制圧みたいなデュエルとは違つてとても平凡に見えるがそれでも彼は自分に出来ることをしてデュエル一つ一つがとても真剣でとても楽しんでる様子や運を天に任せるようなカードを使つたりと僕たち一般人でも出来そうな手で強敵を倒す姿はとても眩しくて憧れるものだった。何よりも神のカードって言われているものをその二人は所持してて決勝トーナメントはもう一人神のカードを持つてる人がいてそんな中でベスト4に入つた選手だ。父さんのツテでその決勝トーナメントの映像も見たけど迫力が違かつた。

そしてお昼の時間を迎えいつも通り携帯食を流し込むように食べもう一度寝ようとする。

「ハジメ君お昼それだけで足りるの？良かつたら一緒に食べない？」

「いや、僕はもう食べたから良いよ。」

「それなら私の分分けて上げるからどう？」

「白崎さんの分が少なくなっちゃうから悪いよ。」

と言っている。

「あっ!?!お弁当家に忘れてきちゃった…どうしよう。今月ピンチなのに。」

「エリリンがお弁当忘れるなんて珍しいね。どうしたの?もしかして昨日はお楽しみだったりとかな?」

「そんなわけないでしょ。全く鈴はすぐそうやって言うんだから。今日は偶々ですう。」

「あははごめんって。それよりお昼どうするの?」

「仕方ない購買で買うしかないかな。」

と話す声を聞いていると教室のドアが開いて次の時間の担当の畑山愛子先生こと愛ちゃん先生が入ってくる。

そしてその後ろには動画で何回も見ただあの城之内選手が、立ってた。

南雲サイドout

俺は畑山先生に付いていき恵理の教室へと歩いていく。時折先生と世間話をしたりKCグランプリの時の話しなども交えて仲も良くなった。

そして教室に先生が入るので俺も中へと入る。そしてお目当ての人物を見つけたので

「おう恵理!弁当置きっぱなしになってたぞ。昼食わねえと体も丈夫にならねえぞ!」

「ありがとう克也!今月ピンチそうだったから余計な出費も抑えられるよ。そうだ!良かったら一緒に食べない?」

「俺がいたって邪魔なだけだぜ。それにまだ授業があるんだから俺は帰るさ。」

「エリリンの裏切り者くほんとに昨日お楽しみだっただなんて私は悲しいよ！」

「ちよつと鈴違うって言ってるでしょ。全くもう（――；）」

（――；）」

「おつ！ 恵理にも学校で友達が出来てたんだな。良かったぜ。俺は城之内克也だ。あんたはっ！」

「私は谷口鈴だよ。宜しくねカツヤン！」

「カツヤンって俺のことか。」

「ふふっカツヤンだって。」

「うっせえ。まったく。お前だってエリリンなんて呼ばれてるじゃねえか。」

「細かいことは良いの！ それよりせっかく来たんだからもう少し話しようよ。」

「まあ、良いけどよ。」

「あの！ 城之内選手ですよね！ 僕バトルシティの大会見えました。お会いできて光栄です！」

「おうありがとよ。えつと？」

「南雲ハジメと言います。」

「おう南雲宜しくな。」

「ホントだ！城之内選手だ。私あのバトルシテイの時、友達と一緒に水族館に行つてデュエル見てました。凄くドキドキするデュエルで興奮しました！」

「ええ。ああいう感じでデュエルを見るのは初めてだったけどとても手に汗握る展開の連続で凄かったわ。」

「おっ！先生とおんなじか！あんたらは？」

「ごめんなさいね。私は八重樫雫。でこつちは親友の白崎香織よ。偶々あの日は遊びに行つてただけけどとても濃密な一日だったわ。」

「そっかありがとな。白崎と八重樫！」

「二人ともデュエルモンスターズといったって只のカードゲームだろ。もう少し将来を見据えて他のことをするべき……」

「あの時のバトルシテイ俺も見てたぜ！羽賀つつうやつとのデュエル、なんつうかモンスターの応酬にマジックやトラップの駆け引き、最後の墓荒らしのカードで相手の使ってたカードを使って勝利を引き寄せるなんて、俺には真似できないって思ったしすげえ興奮したぜ！」

哀れ光輝。龍太郎の声で、発言が聞こえてないようだ。

そうして話していると突然教室一帯が光始める。

幾何学的な紋様でこういったことを本で呼んだことのあるハジメは全員外に出るよ

うに言うものの時既に遅く次の瞬間には教室にいた者たちは跡形もなく消えていた。

教室には食べかけのお弁当や教科書も散乱しておりこの急な神隠し事件は世間を騒がせ城之内の親友の遊戯たちや海馬の耳にも入ることになり城之内が行方不明になつてしまった事実を突きつけられるのであつた。

召喚後の一幕

光に包まれた先で目を開けるとそこは先ほどまでの教室ではなく大きな広間のような場所であつた。

そして教室にいた者たちの前に一人の老人が立っていた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後宜しくお願い致しますぞ」

(なあ恵理…)

(何克也。)

(何か怪しくねえか。イシユタルつつうのもだが全体的に何か宗教染みを感じがするしよ。)

(本当だよね。ドーマとかエジプトのアテムのいた時代とか体験した僕たちにしてみれば何て言うかドーマのダーツに似てるような気がするよ。)

(オレイカルコスの子蛇神だったっけか。てことはこいつらさつきから話してるエヒトつつうのの代理人みたいなもんか。思いつきり敵地でヤベーじゃねえか!)

（確かにね。でも僕たちはともかくとして他は逆に言えば何も気付いてないから向こうは利用しようとするはずだから上手い具合に利用し利用される関係さえ築ければ何とかなると思うよ。でもやっぱり何とかして此処から出た方がいい気はするからね。まずは情報を集めてからになるね）

そうして召喚された一同はイシユタルから案内されるまま付いていき、その最後尾を歩きこつそり話していた。

以前ダーツの率いていたドーマのような気配を二人とも感じ取っていたので油断せず周りを気にする二人。

そうして歩くと大理石の広間へと出た。そして全員が席に着くとそのままカートに食事を乗せたメイドたちが現れ各員の前に置く。

そうしてイシユタルは話し出す。

まず、この世界はトータスと呼ばれている。そして、トータスには大きく分けて三つの種族がある。人間族、魔人族、亜人族である。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きているらしい。

この内、人間族と魔人族が何百年も戦争を続けている。魔人族は、数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそう

だ。戦力は拮抗し大規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔人族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われてる。この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっていないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獣とのことだ。

今まで本能のままに活動する彼等を使役できる者はほとんど居なかった。使役できても、せいぜい一、二匹程度だという。その常識が覆されたのである。

このの意味するところは、人間族側の「数」というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えているということらしい

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

「お気持ちはお察しします。しかしあなた方の帰還は現状不可能なのでございます。」隣に座り合った城之内と恵理は小声で話す。

(こりや予想通り真っ黒かもな。)

（だね。召喚して帰還できないって普通はあり得ないもん。だとしたら何かしらの帰られたら困る事情があるね。人間族としてなのかその神様なのか…）

（戦争なんてまっぴらごめんだぜ。だがこいつらまだ現状に追い付いてないから戦争に参加するなんて誰かが言い出したら便乗しちまうぞ！）

（そうなるって戦場に駆り出されて死ぬまでこき使われるよ。僕もそれはやだね。）

城之内と恵理は戦争の話しをある人物：海馬瀬人に少しだが聞いたことがあった。

今でこそデュエルモンスターズやソリットビジョンといったものからおもちゃに至るまで取り扱っているKCだが昔は軍事事業といったものに盛んに手を出していた。

それを海馬瀬人が社長になった時点で全て手を引かせたのだ。海馬は戦争をして金を稼いだところで替えの聞かない人材を失えばそれだけで世界にとって損失だということ。彼自身口には出さないが幼少の頃の貧しさを知っている身からすれば許せないのかもしれない。

そんな海馬は今ではアトラクションからデュエルを楽しめるアミューズメント施設のようなもの、海馬ランドを作るため世界を駆けずり回っている。

そういったこともあり恵理は海馬を傲慢だけどその言葉には重みもあり一人の人間としては敬意をもっている。

城之内も認めないだろうがそれでも海馬をすげえ奴だと心では思っている。

そしてイシユタルの話しを聞いてクラスメイトが動揺する中少年天之河光輝は声を高らかに言う。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですね？ ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる！」

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えつと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織……」

（不味いな。これだと戦争に参加するって言葉を取られちゃう! そうなると後々今さら参加しないっていう選択肢が取れなくなっちゃうな……）

（どうするの克也?）

「こうなりや……」

「なあ! イシユタルのおっさん!」

「おっさ! 何ですかな?」

「実は俺よ。朝から何も食ってなくて腹減っちゃまってよ。そういう話しは飯食ってからでもいいか? ほら良く言うだろ? 腹が減っては戦はできねえって。それによ戦うにしたって俺たちは只の高校生なんだ。だからこそこの世界でいきなり戦えつつたっていきなりは流石にキツイ。そこら辺はどう考えてんだ?」

「勿論。勇者殿たちには王国での訓練をし徐々に力を付けていってもらい戦う準備をしてもらいます。」

「成る程な! ならその訓練! 俺は参加するぜ!」

「おお！そうですか。それは良きことですな。」

「そうだね…私もその訓練参加するよ。」

そうして一度話しは終わり各々テーブルの料理に手を伸ばす。そんな中南雲ハジメ…ハジメは城之内の言葉を考える。

（凄いな城之内選手は…彼は一言も戦争に参加するとは言わなかった。それどころか天之川君が参加表明をしたことで便乗しそうになってたメンバーを一度踏みとどまらせた。時間を置けば人は冷静に判断できる。天之川君の話しを遮って不満がある人もいるかもしれないけど知名度で言えば城之内選手は天之川君より有名だし、それにそんな実力者の言葉を皆無下にはしづらい。憧れるな。）

そして件の城之内は

「うめえっ！今まで食ったことねえ味だな！」

「そうだね！克也！このお肉柔らかいよ！」

「おっ！ホントだ！だけど俺としては恵理の飯の方が合ってるな！」

「もう！克也つたら。」

（エリリン物凄くデレデレしてる！良いなく鈴もそんな顔で話し掛けてほしい！）

そうしてイシュタルの話して嫌な方に傾きかけた流れを何とか元に戻した城之内。

この先一体どうなることやら。

続
く

ステータスプレート

そうして食事が終わると一同はこの場所神山を下山することになった。

王国と教会は密接に関わっているらしく此方の受け入れも準備が終わっているようであった。

そして聖教教会の正面入り口に集まるとイシユタルが

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん——『天道』」

と台座の下の魔方陣が輝きそのまま地上に向かって降りていく。神山はかなり標高の高い所なのか所々雲海を通り抜けていく。

（これだけ見ると良い景色なんだがな。その周囲がこれだと色々台無しだな。）

（僕は克也と一緒にこういう景色を見て嬉しいよ！）

（あんがとさん）

そうして下山して、王宮に通されると玉座の間に通される。

（何かこういう景色は久し振りに見たな。）

（アテムの時のエジプト王朝の時とあんまり造りが変わらないね、）

以前二人は記憶の世界にてエジプトの玉座を見ていたのでそこまで驚きはしなかつ

たが他のクラスメイトは初めて見るものばかりで驚きと戸惑いが見て取れた。

そうして玉座に進むとそこには国王と女王、その二人の娘息子と思われる人物が立っていた。

国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナというらしい。

(おいおい何で国王が立って待つてるんだよ。普通逆だろ！)

(この世界では国王よりもあつちのイシユタルっていうの方が偉いつてことなんだろうね。アテムのところとは大違いだね。)

そうして挨拶をされて様々な官職のものたちが紹介されるなか暇になった城之内はバックにいれていたデツキを弄りながら暇を潰していた。その光景を一人の少女がじつと見つめていることに気付かぬまま。

そして此処でも、晩餐会が開かれて此処でもご馳走が出たので城之内はかきこむように食し他のメンバーも大勢の人に囲まれ話しをしていた。

そして各々に部屋が一部屋用意される中、恵理は城之内と一緒に良いと言いままま二人部屋になった。

一緒にの部屋の方がこれからを考える上で丁度良いと考えたためである。

「漸く一息つけるぜ。全く遊戯といった時はこんな風なことは何回も経験してたがまさか

今度は異世界とはな。」

「ホントだね。遊戯君の時もだけど案外克也もそういうのには慣れてるもんね。」

「まったくだぜ！さてこれからは色々聞き込んだりよりかは本を調べたりの方がいいのかだな。」

「本があつてもこの世界の歴史がちゃんとかいてあるのか保証もないからね。もしかしたら王国よりも外の国のが帰る方法も判る可能性はあるかもね。」

「何にせよやることはいつばいだな。」

「そうだね。ハアーこれなら僕もカード持つてれば良かったかな…」

「その事なんだけどよ…実は俺、恵理のデッキとディスクも持つてきててな。ほらこれ。」

「ホントだ！ありがとう克也！」

と恵理へバックごと渡し、恵理も確認をする。そして御伽から貰ったバックはまだ残っているのです。こちらも開封を試みようとする。

「あれ？可笑しいな。何でかバックが開かないな。克也ちよつと開けてみて。」

「バックが開かないわけねえだろう。まったく…：…フンツどう言うことだ！全然開かねえぞ！」

どういいうわけか昨日までは普通に開いていたバックが開かなくなってしまった。

とりあえず保留にして明日に備えて寝ることにした。

余談ではあるが次の日起きると背中に恵理が抱きついていたということがあった。

そして訓練初日まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた

「よし、全員に配り終わったな？このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

そうして要約するとステータスプレートには自分のレベルや天職、などが表示されるとのことだ。

そして異世界から来たものたちはこの世界の者たちの平均が10ぐらいだとすると約10倍のステータスだろうとのことである。

例えば光輝の場合だと

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

とチートのような性能であった。

そうしてステータスプレートを見ていくメルド団長。

そしてハジメのステータスをみて

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にハジメを目の敵にしている男子達が食いつかないはずがない。鍛冶職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。

そして案の定檜山たち子悪党組がハジメを乏しだす。

がそこに城之内が割ってはいる。

「てめえらなに笑ってやがるんだ。確かに南雲の天職がありふれてるものかも知れねえ。だがよ、弱えて思っても南雲にだって無限の可能性が秘められてるかも知れねえんだぜ。それにデュエルモンスターズでいうならなどんな攻撃力を持つてたって、たった一枚の伏せカードつまり後衛の奴の力で覆すことが出来る。将来的にはお前ら皆よりも南雲のが強くなってるかも知れねえぜ！」

その言葉には不思議と重みがあつた。

城之内は最初ド素人で数々の決闘者からも言われるほど弱かつた。しかし彼は折れずに沢山の勝利と敗北を経験し強くなつた。その言葉にハジメをバカにしていた者たちは圧倒された。

「そんなに言うならあんたのも見せてみるよ！」

と苦し紛れに言う檜山に城之内は堂々とステータスプレートを見せる。

城之内克也 17歳 男 レベル1

天職：決闘者

筋力：150

体力：175

耐性：200

敏捷：120

魔力：130

魔耐：100

技能：魔法耐性・物理耐性・剛力・縮地・先読・魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解（精霊）・精霊の加護・???の祝福・天運（ギャンブル時）・騎乗・洗脳耐性・竜の加護・神性・不屈の闘志

……突っ込みどころ満載なステータスだった。

そして城之内のステータスを、見て絶句する一同。

「フム、決闘者という天職は初めて見たな。それにステータスも光輝を、上回っている。何よりも度胸があるな。すまん！南雲よ。俺は自分の言った言葉を忘れていた。普通戦闘職が出るこのの方が稀なんだ。それなのに俺は舞い上がっていたようだ。済まなかつた！」

「いえー顔をあげてください。メルド団長！僕は僕に出きることを精一杯やっていくつもりです！」

「南雲君、気にすることはありませんよ！先生だつて非戦系？とかいう天職ですし、ステータスだつてほとんど平均です。南雲君は一人じゃありませんからね」

と愛ちゃん先生が、ステータスを見せる。

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穰天雨・言語理解

「いや！先生それは普通じゃねえだろ！」

「そんなことありませんよ城之内君！だって非戦闘職ですよ！」

「いや、愛ちゃん先生：技能とか天之川君よりあるし中々チートだと思うよ。」

とこうして前途多難なステータス表示は終わり訓練の日々が始まった。

トータスでの幕間

ステータスプレートによる各々の天職の確認が終わってからクラスメイトたちは訓練に明け暮れていた。

そんな中でもある少年。南雲ハジメは今軽い組手をして貰っていた。そう城之内にだ。

「いいか南雲……確かにステータス見ると低かったかも知れねえが何も直接相手を倒さなくても良いんだ。罨はったり足止めした隙に仲間にトドメをさしてもらおう。当面はこんな感じになるだろうからやっぱり王国の錬成師や鍛冶職人に技術を教えて貰う方向が良い。お前は観察眼が鋭いし俺なんかよりも余程冷静に物事を見れるからそれを武器にしてやろうぜ！」

「ありがとう！城之内君。それにしてもやけに戦い慣れしてるのはどうしてなの？」

「南雲君の言う通りね。私も気になってたの。私や光輝は私の実家の道場で特訓してたからある程度戦い方は知ってたわ。でも城之内君のは何て言うか絶妙な間にタイムイング良く合わせて此方を倒しに来るような感じがあるの。もしかしてデュエルモンスターズ以外にも何かやってたのかと思ってね。」

「ん？あつああ…それは…だな」

仲良くなる内に堅苦しいのはなしにしてほしいと城之内は言い年も同じなので君付けで、呼ばれるようになった。そして質問をしたハジメと八重樫雫は若干言葉を濁す城之内をみて不思議に思う。そこに

「二人は知らないと思うけど克也つて中学時代物凄い札付きの不良だったんだよ！その頃の克也もワイルドで格好良かったけどね。」

「えつ？不…不良？」

二人とも城之内がデュエルモンスターズをやっているのを知っているのでそういう不良とは無縁だと思っていた。

「おい！恵理あんまその事は言わないでくれ！俺としては恥ずかしい記憶のひとつ何だからよ。」

「でもそういつたこともあつたから今の克也がいるんだからそんなに恥ずかしがらなくても良いのに。物作りとか中学の文化祭でやったときは教師も思わず誰か大人の力を借りたのかつて言われたぐらいの腕前だし、鍵とかなくてもピッキングで鍵開けたりも出来るし…」

恵理の口から語られる数々にハジメと雫は驚愕する。

「何て言うか凄い経歴ね…何て言うか少し安心したわ。」

「?なにがだ?」

「城之内君だつて普通の男の子なんだつて。何て言うかデュエルモンスターズをしてい
る時はとても私たちとは違う世界の住人だと思つたから」

「俺なんてまだまだだぜ!遊戯や憎つきアンチキシヨーにはまだ勝ててないからな。」
「憎つきアンチキシヨーつて誰のこと?」

「海馬社長のことだよ!」

「……………えつ!あのKCの社長!一体どんな関係が?」

「まあ社長のライバルが遊戯君?で遊戯君と克也は親友でその関係からか克也から突つ
かかることが多いんだけど大体軽くあしらわれてたりでしかも会うたびに喧嘩腰で話
しかけるからね。デュエルでも遊戯君と同じで勝てないから余計に意識してるん
だよ。」

「城之内君は負けても仕方ないとかつて思つたことあるの?どうしても勝てない相手に
対して。」

「それは絶対じゃないしこれからもそうだ!だつてよ悔しくないか?負けても仕方ないな
んでそれは相手を侮辱するに等しいだろ。だつてデュエルなんて最後までやらなきや
勝敗なんて判りやしねえんだ。それに例え100回まけても101回目に勝つてそれ
から進んでいきや何時かはそいつにだつて追い付ける筈なんだからな!」

「そっか…ありがとう城之内君！僕も諦めないで頑張るよ。これから図書館で色々な種族について調べてくるよ！」

「おう！頑張るのはいいが根を詰めすぎるなよ〜」

「なんていうか敵わないわね。デュエルモンスターズも、強くてそれに南雲君からも信頼されてる。私なんて剣しか振るうことが出来ないし全然女の子ぽくないし…」

「なに言ってるんだ？八重樫は普通に女の子じゃねえか」

「えっ！で、でも私ってこう女の子らしくないしそれに剣道とか全然年頃の趣味じゃないだろうし…」

「けどよ。八重樫は八重樫だろ。そんな他がどうかよりも自分がどうしたいのかが一番大事な事だと思うぜ。例えば俺は真のデュエリストを、目指してるってことだ！」

「真のデュエリストって？」

「正々堂々何事にもデュエルに正直に生きる、だがそれは俺にもわかんねえ。何が正しくて何が間違いなんで正直迷いまくってるし今も考えてる。でも俺は一人じゃねえ。恵理や南雲それに八重樫みてえな友達や遊戯たち仲間がいる。間違ってたって仲間が正してくれると信じてる。八重樫は何か夢はあるのか？」

「……………その笑わないでね。私…可愛らしい洋服を着たり…お洒落したりその…お嫁さんになりたいの。」

「……」

「…ごめんなさい。こんなこと言っても似合わないわよね…」

「良い夢じゃねえか…少なくともまだまだ何になりたいかかって考える奴と違って八重樫はそうなりたいてって思っただらう！俺は良いと思うぜ！」

「本当に？」

「おう！漢城之内に二言はねえさ」ポンポン

「…アリガト」

「むうく克也！」

「おわっ！何だよ惠理」

「そうやって女の子に優しくしたら克也の魅力に惚れちゃうでしょ！それに克也には僕がいるんだから他の娘たちと仲良くしないでほしいなあ」

「ったく…惠理は寂しがり屋だな。俺がお前をおいていくわけねえだろ！」ワサワサツ
「もうっ！克也ったら気を付けてね。」

と訓練へと戻る一同

そして夜になり部屋に戻ってカードの整理やカードの保護フィルムで包んでカードが傷まないようにしているとコンコンと控えめなノックの音が聞こえた。

「克也さん…私です…入れて貰ってもよろしいですか？」

「おう！入って良いぞ！」

ガチャッと扉が開き入ってきたのはハイリヒ王国王女リリアーナが入ってきた。

「いらつしやい。リリアーナ王女今日も見えてく？」

「はいっ！是非ともお願いします。」

何故王女が此処にいるのかと言うとあの最初の邂逅時に城之内がカードを触っていたときにじつと見ていたのがリリアーナだったからだ。

ステータスプレートが配られた夜

「ふう全くこのトイレまでの道なげえな。」

と、トイレへと向かった城之内

その道すがら歩いていると奥から少女リリアーナ王女が歩いてきた。

「使徒様どうなされましたか？」

「姫さんか。その使徒つつうの堅苦しいから普通に呼んでくれ！とそういや自己紹介とかしてなかったな。俺は城之内克也つつうんだ！よろしくな姫さん」

「では克也さんと呼ばせていただきます。その克也さんお願いがあるので…」

「なんだ？」

「克也さんが晩餐会前に触られていたカードみたいなものを見せていただけないでしよ
うか？私昔から目が良くて遠くの物でも良く見えるんです。あの時克也さんが触って

いたカードとても綺麗な絵で描かれていて凄いと思っただけです！」

「別に良いぜ！今部屋にあるから一緒に行くか？」

「はいっ！」

と部屋に戻り恵理に事情を説明すると

「全く克也はしようがないなあ。まあ王女さんも克也よりデュエルモンスタースターのほうが気になってるみたいだし別に良いかな」

となりカードを見せると初めてみるもので凄く興奮した様子で見ている。

そして自分達の世界でデュエルモンスタースターがどういふ物なのか説明し恵理が城内のデュエルなど動画で記録した物を見てみるかどうか訪ねると二つ返事で見ると言い食い入るようにはじめ今ではデュエルを見るために部屋に押し掛けるようになった。

恵理もデュエルモンスタースターに夢中になるリリアーナを見て昔の克也みたいだと世話を焼くようになったりしてうちに仲良くなっていた。

そしてこの時に開かなかったパックのカードが突然開いてリリアーナの元へいくこととなる。

そうして恵理は海馬に改造して貰った半永久的に電池の切れないうる単独式端末でリリアーナにデュエルを、見せているとコンコンとまたもや部屋をノックする音が聞こえ

る。

「城之内君南雲だけど良いかな？」

「おう！南雲入ってきな！」

と今度はハジメが訪ねてきた。ハジメもたまに城之内のところに来てはどういったことをしたのかという世間話や今までのデュエルの話を聞いてきたりと順調に仲を深めていた。

ガチャつと入ってきたハジメだが今日は一人ではないようで後ろに二人ほど付いてきていた。

「ん？八重樫に確か白崎だったか？」

「こんばんは城之内君！ハジメ君が城之内君のところに行くのが見えたから来ちゃった！」

「私は香織に誘われたから一緒に来たの…」

「まあとりあえず入んな！」

と入れると王女が端末を食い入るように見るのを恵理が少し離れてみるように注意しているのを見ていつの間にか王女と仲良くなったのかと言う疑問が浮かぶがそこは城之内だからと納得する。

「それで南雲は判るけど二人はどうしたんだ？」

「えっとね、城之内君ってオレンジの小さいドラゴンのカード持ってたでしょ！前から気になってて見せて貰いたくなって思ってたよ！」

「オレンジのドラゴン…ああ！ベビードラゴンか！えっとほらこいつだ！」

「わぁー可愛い！あの水族館のときに出てきた時凄く可愛くて興奮したんだよ。雫ちゃんも可愛いって言ってたしね。」

「ちよっ!?香織！そんなことまで言わなくて良いでしょ！」

「でも雫ちゃんも可愛いって思ったでしょ？」

「それはそうだけど…」

「城之内君、僕はこの前話してくれたバトルシティの前にあつた決闘王国の話しを聞きに来たんだ！」

「デュエリストキングダム？」

「公式の動画は載ってないけどあのインダストリアルイリュージョン社ペガサス会長が主催した大会で武藤遊戯や海馬瀬人も出てたって噂で城之内君も確か出てたよね。」

「良く知ってるな！」

「父さんがゲームクリエイターでKCとやり取りもやってたりしてその関係で知ったんだ。」

「決闘王国は俺が初めて出た大会みたいなもんだからな…」

「あのときの克也は初心者よりも、初心者だったからね」

「えっ？ どういうこと？ 話を聞く限り武藤遊戯とか有名な人が出てたつてことは城之内君も強くて出た訳じゃないの？」

「そういう訳じゃないんだ。その時の克也にはどうしても決闘王国で勝たなきゃいけない事情があつたんだ。」

と動画を見るリリアーナから一度離れて恵理は説明する。

「克也にはね妹がいるんだ！ 静香ちゃんっていう、可愛い娘でね。僕のこともお義姉ちゃんって呼んでくれる素直な娘なんだ！ つと話がずれたね。でも静香ちゃんは目の病気に掛かっててね。治療を受けないと失明しちゃうつて医者から言われてたんだ。でも治療には莫大なお金が掛かって普通に僕たちが払える金額とは桁が違つたんだ。」

「それが、決闘王国とどんな関係が？」

「それはね遊戯君に決闘王国の招待状が届いたときにね、優勝賞金もでるつて知つたんだ。それも本当に莫大なお金が出る。だから克也は遊戯君に参加資格を分けて貰つて出場したんだ。」

「最初に出た大会が金のためつて酷いだろ。わりい軽蔑したろ」

「ううん。そんなことないよ！ 城之内君は妹思いの優しい人なんだつて分かつたもん。」

「そうだよ！ 城之内君は妹さんのために参加したんでしょ。むしろ僕は尊敬するよ！」

「ありがとな！」

「それで結果はどうだったの？」

「結果はね克也は準優勝して賞金も貰えて静香ちゃんの病気もその後、治ったんだ！」

「そうだったのね…誰かのために動けるなんて素敵ね…ホント光輝に爪の垢を煎じて飲ませたいわ。」

「あんな残念ポンコツ勇者(笑)に言ったって聴かないに決まってるでしょ。雫ももう少しあれと関わるの考えた方がいいよ！じゃないと雫が、参っちやうから。」

「ありがと。恵理。でも、あんなんでも幼馴染みだから…」

「城之内君決闘王国ではどんな人と戦ったの？」

「噂だと元全米チャンプのキースハワードと戦ったって聞いたよ。」

と香織とハジメは城之内に話し掛けるなか雫は恵理に聞いてみる。

「城之内君って初めから強かったわけではなかったのね。…私も戻ったらデュエルモンスターズ始めてみようかしら。」

「そうしなよ！雫が始めるなら僕も教えるからね！これでもデュエリストだから！」

「その時はよろしく頼むわ。」

と言っているときに恵理はパックが少し光っていることに気付いて取り出して

「ねえ雫。このパック開けられる？」

「?これはカード?」ビリビリ

「……大將軍紫炎?六武衆?」

「凄いね雫!それは新しく出たシリーズだった筈だよ!」

「そうなの?」

「そのカードは雫が貰って!」

「えっ?良いのかしら?」

「カードが行きたい場所に行くのが一番だから!雫が開けられたのなら何か意味もあるんだと思うから、ね!」

「ありがたく貰うわ。」

こうしてトータスでの一幕は続いていく。

しかし彼らに待ち受ける非日常の足音はすぐ近くまで迫っていた。

イジメを前に城之内は友を守る

訓練に明け暮れること数日。

あの夜の後リリアーナ王女とのつてが出来たハジメは近々王宮お抱えの職人たちの元で鍛冶や錬成の腕を鍛えて貰う手筈を整えていた。

漸く自分にあつた訓練をすることができるとハジメはやる気を出し図書館で様々な種族のことを知る。

図書館でトータスの知識を蓄えるハジメは考えに更けていると訓練の時間を思いだし急いで訓練施設へと向かう。

訓練施設に到着すると既に何人も生徒達がやって来て談笑したり自主練したりしていた。どうやら案外早く着いたようである。ハジメは、自主練でもして待つかと、支給された西洋風の細身の剣を取り出した。

とその時、唐突に後ろから衝撃を受けてハジメはたたらを踏んだ。なんとか転倒は免れたものの抜き身の剣を目の前にして冷や汗が噴き出る。顔をしかめながら背後を振り返ったハジメは予想通りの面子に心底うんざりした表情をした。

そこにいたのは、檜山大介率いる小悪党四人組（ハジメ命名）である。訓練が始まっ

てからというもの、ことあるごとにハジメにちよつかいをかけてくるのだ。ハジメが訓練を憂鬱に感じる半分の理由である。

「よお、南雲。なにしてんの？お前が剣持つても意味ないだろが。マジ無能なんだしよ
〜」

「ちよつ、檜山言い過ぎ！いくら本当だからつてさ〜、ギャハハハ」

「なんで毎回訓練に出てくるわけ？俺なら恥ずかしくて無理だわ！ヒヒヒ」

「なあ、大介。こいつさあ、なんかもう哀れだから、俺らで稽古つけてやんね？」

一体なにがそんなに面白いのかニヤニヤ、ゲラゲラと笑う檜山達。

「ああ？信治、お前マジ優し過ぎじゃね？まあ、俺も優しいし？稽古つけてやってもいいけどさあ〜」

「おお、いいじゃん。俺ら超優しいじゃん。無能のために時間使つてやるとかさ〜南雲
〜感謝しろよ〜」

と言いながらハジメを人目の付かないところへと連れていこうとするが檜山だが一歩進んだところで

スポッ

「「ちよつ」」

と突然開いた落とし穴に吸い込まれるように落ちた。深さはそれほど深くはないものの簡単にはよじ登れないほどの深さだ。

何の脈絡もなく落とし穴が出来たので檜山以外の三人はハジメが何かしたかと思う前にその三人の足元にも落とし穴が発生し檜山同様間拔けな表情で落ちた。

「いったいなにが?」

とハジメも状況を把握出来ていなかったが

「南雲君! 檜山君たちに絡まれてたように見えたから急いできたんだけど怪我はない!?」

「う、うん僕は大丈夫だよ、白崎さん。でも檜山君たちが何故か落とし穴に落ちてね。いったいどういうことなのか?」

「南雲! 無事か?」

「城之内君!」

「何かヤバそうな気がしたから咄嗟に罨カードを使ったんだがちゃんと発動したみたいで安心したぜ。」

「罨カード?」

「落とし穴のカードだ! いや、色々試してて装備カードを俺が使ったりしててそういう罨カードも発動するか不安だったが上手く発動してくれて良かったぜ。」

「どうやら城之内は装備カードを試していてハジメが何処かに連れていかれそうなのを見つけて咄嗟に引いていた落とし穴のカードで檜山たちを落とし穴に掛けたようである。」

「因みに装備カードは自身の魔力を消費して召喚が出来るよう威力は魔力を込めたりで変わるようである。」

「モンスターも召喚出来るようであるが余り目立つような真似はしないようにと恵理から釘を刺されていて人に近いモンスターといったものでランドスターの剣士といった攻撃力は低いものの今の城之内にとっては良い訓練になるため召喚したモンスターと戦ったりして鍛えている。今はどうやら格闘戦士アルティメーターを召喚しているよう城之内の側で佇んでいる。」

「そうだったんだね。ありがとう、城之内君！」

「南雲君いつもあんな絡まれ方してるの？もしそうだったらいつでも言ってみて！」

「いつもではないから…」

「南雲君遠慮はいらないわ。その方が香織も納得するだろうからね。」

と香織たちの様子を見に来た雫が言う

「ここで終われば良いのだがまた残念ボンコツ勇者が

「だが南雲もいつまでも城之内にばかり頼っていて努力をしないのは良くない！」

弱さを言い訳にしているは強くなれないだろう？聞けば、訓練のないときは図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ。

南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろ？」

……流石のこの言い分に雫は頭を抱える。何処からどう見ても今のは檜山たちが悪いのだ。しかし何を思ったのかこの幼馴染みは南雲君も悪いと言うのだ。

学校でも事あるごとに絡んでいたのを見ていのにこう言いしかも悪気もなく人の性善説で判断をするのだから始末に負えない。

「てめえはバカか？南雲の何処を見たら不真面目だつて言えるんだ？」

「だが図書館で読書なんて他のクラスメイトはこの国を救うために訓練して……」

「南雲は他の奴らと違って本来後衛職なんだ。お前たちと違って攻撃の手段がどうしても限られてくる。」

それを南雲は知識で補おうとしてるんだ！

お前が言ってるのは勉強が得意で運動が苦手なやつで一生懸命やってるやつに不真面目だからちゃんとやれつて言ってるのと同じことだ。

それにお前たちは一度でもこの世界の歴史を知ろうとしたか？した上でこの国を救

「いたいのか？」

「いや、そういう訳じゃないが助けてほしいと言われたし俺たちに力があるのだから救わないと」

「それならおめえは王国の職人たちをバカにしてるってことだな。」

「そんなことは言っていない！」

「王国の職人たちはな、メルドのおっさんや騎士たちに剣を打ったり色々なサポートをしてる。」

南雲をバカにするってことはそういう職人たちの事だってお前は疎かにしてるってことになるんだ！

そしてさっきの檜山たちの行動を見て何で南雲が悪いってなるんだ？普通はあいつらの方が悪いってわかるだろ。」

「それは彼らなりに南雲を思ってる……」

「……イジメなんてな、特に理由がないのにやるなんて良くあることなんだよ。」

自分よりも弱そう、態度が気に入くわねえ、人気者に構われてて妬ましいなんていくらかもあるがな

「悪意がなきゃイジメなんておこりやしねえんだよ。」

「そんなことはない！人はそんな簡単には行動に移すわけがない。きっと何かしら事情

がある筈。話し合えば和解できる……」

「今の俺だから言えることだがもしそうやって孤立しちまつてるなら俺はそいつ以外の敵になったってそいつの味方をする。」

「何で……」

「ダチだからだ！そこに理由なんていらねえ！本当にそいつを思ってるなら自分が孤立しようが関係ねえ！本当に大事なやつを俺は守るだけだ！」

「城之内ぐん」グスン

「クツ」

「分かつたら、さっさと訓練に戻りな。人も集まつてきちまつたしな。」

と訓練施設にクラスメイトが集まりつつあるので光輝は何か言いたそうであったがそのままハジメたちから離れていった。

「城之内ぐん、ありがどう」（；――；）

「ああほら泣くんじゃねえ南雲！お前は何も悪いいことしてねえんだから堂々としてて良いんだ！ほらハンカチやるよ。」

「あく克也、南雲君泣かせた〜いけないんだ〜」

「うおっ！恵理！人聞きの悪いこと言うんじゃねえよ。」

「冗談だよ。あの残念ポンコツ勇者（笑）とのやり取りは見てたから大体分かつてるよ。」

「南雲君。私も南雲君の味方だからね！何かあったら言って！」

「ありがとう白崎さん！」

「ホントに光輝がごめんなさいね。」

「八重樫が謝ることじゃねえさ。何かありや何時でも言いな！力を貸してやるからよ。」

「……ねえ城之内君……」

「なんだ？」

「もし……もしもね、私がイジメられてたらさっき言ったように守ってくれる？」

それは雫が昔に受けた女らしくない、男女、あんたっておんなだったの？といった酷いイジメのトラウマからなのか気付けば城之内に話しかけていた。

「ああ！守ってやる！友達を守るってこの城之内克也様は決めてんだ！」

「ありがとう。……もしあなたがあの時にいてくれたらなあ」ボソツ

「雫ちゃん……」

「ほら克也！雫口説いてないで今日も訓練するよ。」

「口説いてねえって。ったく、」

と城之内も訓練に戻る。

そしてアルティメーターとの組み手や恵理は自分のカードの力を降霊させて、魔法を操り速度を高めている。

魔方陣を介さないのを見てメルド団長らは流石異世界からの使徒と感心していた。因みに檜山たち4人はメルド団長らが来て漸く助け出された。そしてハジメに見当違いの感情を向けるのであった。

そして訓練も終わりいつもであれば夕食までは自由時間なのだがこの日は違った。

今回はメルド団長から伝えることがあると引き止められた。何事かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げる。

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！」

まあ要するに気合入れろってことだ！今日はゆっくり休めよ！では解散！」
着実に運命は近付いていた。

トラップの先に潜む脅威

翌日、城之内たちは「オルクス大迷宮」の正面入口があるホルアドという町の広場に集まっていた。

オルクス迷宮は全百階層からなると言われている大迷宮である。七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

にもかかわらず、この迷宮は冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気がある。それは、階層により魔物の強さを測りやすいからということと、出現する魔物が地上の魔物に比べ遥かに良質の魔石を体内に抱えている。

魔石とは、魔物を魔物たらしめる力の核をいう。強力な魔物ほど良質で大きな核を備えており、この魔石は魔法陣を作成する際の原料となる。魔法陣はただ描くだけでも発動するが、魔石を粉末にし、刻み込むなり染料として使うなりした場合と比較すると、その効果は三分の一程度にまで減退する。

要するに魔石を使う方が魔力の通りがよく効率的ということだ。その他にも、日常生活用の魔法具などには魔石が原動力として使われる。魔石は軍関係だけでなく、日常生活にも必要な大変需要の高い品なのである。

もし魔石が取れなくなればそれだけで今のトータスの生活基盤は崩れてしまうであろう。

そして城之内と恵理はここ数日こっそり城を抜け出してはホルアドの冒険者ギルドで登録をして魔物を刈るなど自分達の実力を高めてかつお金もある程度貯めるようにしていた。何時かは王国を出て帰還の手立てを探すため路銀は必要だと考えたためである。

ちなみに、良質な魔石を持つ魔物ほど強力な固有魔法を使う。固有魔法とは、詠唱や魔法陣を使えないため魔力はあっても多彩な魔法を使えない魔物が使う唯一の魔法である。一種類しか使えない代わりに詠唱も魔法陣もなしに放つことができる。魔物が油断ならない最大の理由だ。

城之内や恵理の場合最初に全力の攻撃をした時思わず魔石を消滅させたときはある程度の手加減をしなければとある程度抑えて攻撃をするように調節を繰り返しながら試していた。

その時の一部始終としては

「克也！そつちに行つたよ！」

伝説の剣を装備した城之内

「おうよ！いくぜ！城之内スラッシュ！」

スバアアアアア！

「……………克也威力強すぎて魔石なくなっちゃったね。」

「すまん、恵理！力込めすぎちった。」

「うーんある程度の手加減は必要なのかな？取り敢えずなれるまでやってみよう！」

とその後何度も挑戦をして魔石を残して倒せるようになった。

恵理もカードの力を具現化させて戦い主に四霊使いの使うサポートカードの力を試し、火霊術 紅 風霊術 雅 水霊術 葵 地霊術 鉄の4つの力を試して魔法適正もかなり高いことを確認できた。

組み合わせで火霊術と風霊術の組み合わせで巨大な火球となったり火炎旋風のようなになったり慌てて水霊術と風霊術の組み合わせで鎮火をしたりと中々組み合わせ次第では強大である。

まだ後2種類あるものの今はその4つになれるように特訓をしていた。

魔石を消滅させた割合としては城之内6割恵理が4割と二人とも威力の調整に難航した。

この時に城之内は剣使いLEVEL1恵理は精霊術LEVEL1を習得していた。レベルが上がる毎に消費魔力や剣さばきも上がるようである。

「いやーホントにこんな石が金になっちゃまうなんて俺たちの世界じゃ考えられねえな。」

「まあここは異世界だし、こっちの人たちに取ってみればこれが当たり前なんだよ。」

「だな！それにしても魔石売ってあっちのバイト代よりも出るって相当だな。」

「普通は魔物との戦闘なんて命懸けだからその分りターンが良いんだと思うよ。僕たち高校生からしたら結構な額だとは思うけどね。」

オルクス迷宮の入口はまるで博物館の入場ゲートのようなしつかりした入口があり、受付窓口まであった。制服を着たお姉さんが笑顔で迷宮への出入りをチェックしている。

なんでも、ここでステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死亡者数を正確に把握するのだとか。戦争を控え多大な死者を出さない措置だろう。

入口付近の広場には露店なども所狭しと並び建っており、それぞれの店の店主がしものを削っている。まるでお祭り騒ぎだ。こっそり城之内は露店で肉や焼きそばに似たものを買ったりして、その独特のスパイシーさに舌鼓をうち恵理やハジメそして異世界の食べ物に興味があった洋食屋の娘である園部優花にも食べさせて和やかなかつある程度の緊張感を和らげていた。

入場ゲート脇の窓口でも素材の売買はしてくるので、迷宮に潜る者は重宝しているらしい。

そしてステータスプレートを出してオルクス迷宮へと足を踏み入れた一行

今日は二十階層まで降りる予定でトラップの有無を確認しつつスムーズに進んでいた。そして二十階層にてロックマウントという魔物を勇者の一撃にて葬ったときに事件は起きた。

その衝撃で岩肌が見え、グランツ鉱石という綺麗な装飾品に使われるものらしいものがあつた。

香織や他の女子たち綺麗という中檜山がそれを取りに行こうとして、団員からのトラップの声にメルド団長が言うものの遅く切り一面を光が覆う。

ハジメ達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えないう深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

そして

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

というものの入口には大量の魔物が出現しもう片方からは

巨大な魔物が現れメルド団長は驚愕の顔をして

「まさか……ベヒモス……なのか……」

と言うのであつた。

ベヒモス戦そして…

メルド団長の狼狽え具合を見た限り途轍もないほどの危機が迫っていることを全員が悟った。

後ろの無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

さらに十メートル級の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現し、それをメルド団長はベヒモスと呟いた。もつとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが……

ベヒモスという魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアア!!」

「ッ!?!」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイ
ル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ
！」

「待って下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバ
イでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五階
層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！
さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

そうしている間にもベヒモスは、勢いを付けてこちらを轢き殺さんとはかりに咆哮を
あげて突進してくる。

団員たちが障壁を張るもののその突進の威力だけで障壁にヒビを入れる。

更には橋にも亀裂が走りこのままでは危ないと判断した城之内は

「惠理！ 護封剣だ！」

「うん！ 光の護封剣！」

と空中から無数の光の剣がベヒモス目掛けて降り注ぎ完全に動きを止めさせた。

「メルドのおっさん！ 護封剣も長くは持たねえ！ 今のうちにずらかるぜ！」

「すまん！」

「待ってください！身動きの取れない今、倒さないと皆が…」

「バカヤローそれよりもクラスメイトを良く見やがれ！このままだと何人も死んじまうんだぞ！魔物倒すより命を救う方が先決だろうが！」

「克也の言う通りだ！トラウムソルジャーでも三十八階層に出現する魔物。今までの魔物よりも遥かに強い！早く撤退をするんだ！」

「でも、」

という間に光の護封剣の効力が弱まり再び障壁に突進してくるベヒモス

一方のクラスメイトたちはトラウムソルジャーと現在も体当たりをするベヒモスに恐怖を感じ、パニックを起こしていた。

そしてその内の一人である園部優花はパニックのなかで押し出されトラウムソルジャーの凶刃に命を奪われかける。

しかしそれは地面を錬成し隆起をさせたハジメにより事なきを得る。そしてハジメは全員が生き残るのには光輝の力が必要だと素早くベヒモスの方にいる光輝のもとへと走る。

「天之河くん！早く撤退を！皆のところを！君がいないと！早く！」

「いきなりなんだ？それより、なんでこんな所にいるんだ！ここは君がいていい場

所じゃない！　ここは俺達に任せて南雲は……」

「そんなこと言っている場合かつ！」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、ハジメは今までにない乱暴な口調で怒鳴り返した。

いつも苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに思わず硬直する光輝。

「あれが見えないの!?　みんなパニックになってる！　リーダーがいらないからだ！」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれ右往左往しているクラスメイト達がいた。

恵理も精霊術でなぎ払ってはいるもののクラスメイトも大勢いるなかでは本来の威力を出せず物量で押しきられてしまっている

訓練のことなど頭から抜け落ちたように誰も彼もが好き勝手に戦っている。効率的に倒せていないから敵の増援により未だ突破できないでいた。スペックの高さが命を守っているが、それも時間の問題だろう。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ！　皆の恐怖を吹き飛ばす力が！　それが出来るのはリーダーの天之河くんだけでしょ！　前ばかり見てないで後ろもちやんと見て！」

「南雲のいうとおりだ！　早く行け！」

と光輝たち前衛が動き出すと同時に障壁が完全に割れる。

その衝撃でメルド団長たちが吹き飛ばされる。

その光景に覚悟を決めた城之内は一人ベヒモスへと立ち向かう。

「南雲！八重樫！メルドのおっさんたち連れて先行け！」

「城之内くんは!?!」

「出来る限りこいつを足止めする！その後は退路を確保したら直ぐにずらかる！早く行け！」

と城之内は鎖付きブーメランと伝説の剣を携えて一人ベヒモスへと突撃する。

なおも突進するベヒモスに鎖付きブーメランをその片足へと巻き付かせ思い切り

引つ張り踏ん張りを付けさせないようにし、勢いを削ぐ城之内。

さらに伝説の剣で斬り付けるがその皮膚は固く浅く斬り裂くに留まる。

そして頭部が赤熱化し、更に突進してくる。

咄嗟に下がり鎖付きブーメランを解除するとマジックアームシールドを召喚しそのアームハンドがトラウムソルジャーを数体鷲掴みするとベヒモスの進路へと誘導しそのまま衝突をさせる。

腕に痺れを感じた城之内だがそれでも何とか時間を稼ごうと必死で食らいつく。

そしてそれを見たハジメは全員が助かる方法を取るために行動を取る。

「城之内君！」

「南雲！早くお前も避難しろ！」

「それよりも全員が助かる方法が一つあるんだ！協力してくれる？」

「わかったぜ！お前を信じる！」

と城之内は再びマジックアームシールドでトラウムソルジャーを、つかむと今度は挑発するするようにベヒモスを、誘う。

そしてまた突進するベヒモスに向かって伝説の剣のはらを渾身の力で叩きつける。

そして頭部をめり込ませるベヒモスに、ハジメが飛びついた。赤熱化の影響が残っておりハジメの肌を焼く。しかし、そんな痛みは無視してハジメも詠唱した。名称だけの詠唱。最も簡易で、唯一の魔法。

「錬成！」

ベヒモスは足を踏ん張り力づくで頭部を抜こうとするが、今度はその足元が錬成される。ずぶりと一メートル以上沈み込む。更にダメ押しと、ハジメは、その埋まった足元を錬成して固める。

ベヒモスのパワーは凄まじく、油断すると直ぐ周囲の石畳に亀裂が入り抜け出そうとするが、その度に錬成をし直して抜け出すことを許さない。ベヒモスは頭部を地面に埋めたままもがいている。

そして何度目かの錬成で退路を確保したメルドたちからの合図もあり、城之内は魔力を使い果たしたハジメをそのまま背負い急ぎ距離を取る。

そして魔法による一斉照射がベヒモスへと降り注ぐ。

その魔法による一斉照射を、潜り抜け城之内は細心の注意を払い走る。いよいよ大丈夫と思つた矢先、一つの火球が二人へと降り注いだ。

幸いにして、直撃は避けたもののその衝撃によつて後ろへと後退してしまった。そしてベヒモスの最後の足掻きとばかりに突進をして橋に衝撃をはしらせる。

そして橋が崩落する。

ベヒモスは断末魔を叫びながら橋より落ち、城之内は必死にハジメを落とさないように背負い気合いで何とか崩落する橋を走り体勢を崩しながらも橋の崩れた端に何とかしがみついた。

高校生一人を背負い自分の体重を支えるというのはあまりにも無茶である。城之内の腕は悲鳴をあげるが絶対に離してなるものかと必死に食いつく。

「城之内君！このままだと二人とも落ちる！それなら僕みたいな無能を置いて君だけでも…」

「バカヤロー！んなこと二度と言うんじゃねえ！お前は無能なんかじゃねえ！誰よりも勇気のある立派な男だ！それに仲間を見捨てて一人で逃げるなんて出来るか！俺は友

達は見捨てねえ！」

「城之内君……」

そして何とか腕の力だけで這い上がる城之内。

それに安堵を洩らす香織と、恵理。

後は皆の前に戻れば無事に脱出……

ガラガラッ

しかし現実是非常……

這い上がった場所も崩れてしまう。

このままだと二人とも落ちちゃう。ハジメは自分を友達と言ってくれた城之内を救

うために限界を超えて

「錬……成……」

本来は手で触らなければならないのだが土壇場で足でも錬成することが出来るようになり橋を錬成しなおしてこれ以上崩落しないようにして、

ドンッ！

城之内を思い切り前へと突き飛ばす。

その反動でハジメは奈落へと落ちてしまう。

その懐へある城之内のもつ二枚のカードが入り込む。

城之内は必死に手を伸ばすものの届かない。

（ああこれは走馬灯つてやつなのかな僕は父さんや母さんの仕事の手伝いをして何時かは同じように働きたいと思ってた。そのための手伝いをして友達何ていらないうって

でも、短い間でも僕を友達だつて言ってくれたこと、誰でもない僕の味方をしてくれるって言ってくれた城之内君。

もし僕が女の子だつたら惚れてたなあ…君と友達になれたことは僕の一生の宝物だ。だから）

「ありがとう…生きて城之内君」

「南雲————!!!」

さようなら

帰還そして決意

墜ちていく自分を助けた友達の前に城之内は

「待つてろ！南雲今行くぞ！」

「克也ダメ！」

「離せ恵理！南雲が！」

「南雲君の覚悟を無駄にする気！今は全員を離脱させないと！」

「ちきしよおおお！」

「離して雫ちゃん！南雲くんの所に行かないと！約束したのに！私があ、私が守るって
！離してえ！」

迷宮に響く友を守れなかった城之内と前日に守ると約束をした香織の叫び。そんな
状態を危惧したメルドが、香織を気絶させた。

そして、城之内は友を守れなかった虚しさと自分への怒りを押し殺して、

階層を引き返す。その手は血で滲んでいた。

そうして引き返す最中も城之内たちを落とそうとした攻撃をした者を見ていた恵理
は

（許さない克也を殺そうとしたこと、そして克也を救ってくれた南雲君を落としたこと。纏めて償わせてやる…）

そして無理を通して全員が迷宮の入り口へと戻ってきた。クラスメイトたちは生きているという実感を分かち合うが城之内やハジメに助けられた者たち己の無力さを嘆いていた。

そしてホルアドで一泊をして早朝に王国へ戻る手筈になり各々が部屋へと戻る。城之内は自分を責めていてどうしてハジメを助けられなかったのか自問自答せずにはいられなかった。

その様子を見ていた恵理が魔法カード催眠術で無理矢理寝かし付けた。そして恵理は行動に移る。

「ヒ、ヒヒヒ。ア、アイツが悪いんだ。雑魚のくせに……ちよ、調子に乗るから……て、天罰だ。……俺は間違っていない……白崎のためだ……あんな雑魚に……もうかかわらなくていい……俺は間違っていない……ヒ、ヒヒ」

暗い笑みと濁った瞳で自己弁護している檜山

そう、あの時、軌道を逸れてまるで誘導されるようにハジメを襲った火球は、この檜山が放ったものだったのだ。

階段への脱出とハジメの救出。それらを天秤にかけた時、ハジメを見つめる香織が視

界に入った瞬間、檜山の中の悪魔が囁いたのだ。今なら殺つても気づかれないぞ？とそして前から自分の邪魔をする城之内も纏めて殺れると

そして、檜山は悪魔に魂を売り渡した。

結果あの魔法の一斉照射により、誰が放つたかも分からず檜山の計画は完璧かと思われた…

「やあ人殺しさん？今どんな気持ち？恋敵をどさくさに紛れて殺すのってどんな気持ち？」

それを目撃されていなければ

「な、何で？」

「何で？そりゃあ見てたからね。君が火球を放つところを。」

正直昔の自分なら克也さえいれば良かったけどね。でもある人に仲間って良いものだって気付かされて、特にクラスメイトの中では香織や雫、鈴や優花そして南雲君は気に入ってたんだ。

特に南雲君は克也のことを尊敬してくれててそして最後自分が落ちることになっても克也を助けたいと行動を起こしてくれたこと。

だからね、君がのうのと生きてるのは気に食わないんだよ。でも殺したらその場で苦しみは終わっちゃうからね。」

そう言い恵理は檜山に近付いて額に指を当てる。

「あの人が言うには罰ゲームって言つてたけど僕からの贈り物だ。たつぷり味わうと良い。克也を殺そうとしたんだから当然の報いだよ。」

そうして闇霊術 欲の黒い力を指に収束させて檜山に浴びせる。

ピカーン

そして呆然とする檜山に先程の城之内にやったように催眠術をかける。

自分がここにいたこと、話したことを全て忘れさせそのまま眠らせる。

「…香織は大丈夫かな…あの時、克也も落ちてたら僕も取り乱してた。…僕に出来ることなら協力しよう。」

そしてホルアドでの一日が過ぎ翌日馬車で王国へと戻った一同。

帰還を果たしハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが勇者の一人が死んだと思うがそれが「無能」のハジメと知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。

国王やイシュタルですら同じだった。強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔族に勝てるのかと不安が広がっては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

だが、国王やイシュタルはまだ分別のある方だっただろう。中には役に立たない無能などハジメを罵る者までいたのだ。

「てめえ！もう一回言ってみろ！南雲はな…南雲は無能なんかじゃねえ！あいつはあんな状況でも諦めねえで最後まで戦ったんだ！それを無能だと!!!ふざけんな！」

城之内の烈火のごとく怒る姿を見たイシユタルや国王はステータスの高い城之内に悪い印象を与えてはならないとその貴族たちを処分した。

しかし、ハジメの無能というレッテルは剥がれずそのままになってしまっていた。

そしてハジメが落ちてから3日程経ったその夜…

「…どこへ行くのですか克也殿？」

「姫さんか。わりいなそこを退いてくれないか？」

「…南雲さんを探しに行くのですか？彼は奈落へと落ちた。その高さから落ちれば死亡は免れないでしょう。それに今王国をでたらあなたは王国の反逆者と見なされてしまいます。それなのに…」

「んな理屈は関係ねえ。俺はどんなに可能性が低くたってあいつは生きてるって信じてる。それにここで動かなかつたら一生俺は後悔をする。頼む姫さん！見逃してくれねえか？」

「それは…」

「リリイ。克也を行かせてあげてほしい。」

「恵理！」

「恵理しかし……」

「大丈夫！僕も一緒に行くから心配はしないで！」

「恵理！これは俺の問題だ！だから」

「南雲君は克也を助けてくれたんだ。なら今度は僕たちが助ける番だ。違う？」

「恵理……すまねえ。」

「違うよ克也！そこはありがとうだよ！」

「止めても無駄なようです。克也殿と恵理は確か冒険者の登録をしましたね？」

「ああ？確かにしてるが」

「ではハイリヒ王国第一王女リリアーナ・S・B・ハイリヒが冒険者城之内克也と中村恵理へ依頼をします。依頼内容は勇者一行の一人南雲ハジメの救出。そしてどんなかたちでも良いので私のところへとその姿を見せてください。それをもって依頼は完了と見なします。」

それは彼らを、反逆者にしないためのリリアーナなりの発破であった。

「リリイ、そんなことしたら国王やあの教皇に……」

「構いません！ハジメ殿がくれた、いらすと？とやらを拝見し他の画家や絵描きたちへ見せた時、彼らはとても感激をしていました。」

人を笑顔にするというのはとても難しいことです。それを可能とする才能を見す見

す逃すことは国益を損なうに等しいことです。もしお父様やイシユタル様が何を言おうと大丈夫なようにこれにサインをしてください。」

とリリアーナは二枚の羊皮紙を取り出し城之内たちへと見せる。

「なにになに？私、リリアーナ・S・B・ハイリヒは城之内克也ならば中村恵理といった同行者へと依頼をしたと旨を書き記す。これが破られたとき、私リリアーナ・S・B・ハイリヒは自害をする……って」

「いくらイシユタル教皇でも、これを破られれば王族の仕事が滞って教会との仲が拗れるから口を出すことはないとは思いますが。」

「だが姫さんが命を懸けることはねえんだぜ！」

「私はデュエルモンスタースを知り相手と分かり合う手段としても使うことが出来ると貴方のデュエルを見て感じました。」

いつかトータスでも殺し合いではなく理解し合う戦い……デュエルを広げたいんです。そのためにはハジメ殿の力は絶対に必要なのです。

それにハジメ殿は私にとつても友だちです。私にも友だちのために命を張らせてください。」

「姫さん！ありがたうな！」

「リリアーナありがとう！」

そして二人はその書類へと判を押し最後にリリアーナもともに判を押した。

「これで良いですね。依頼が終わったらまたデュエルを教えてください」

「ああ！必ずデュエルを教える！だから待つてくれ！」

羊皮紙の片方をもらう城之内。もし地上に出た後で何かあれば保証人として信頼されている証明にもなり得るものでもある。そしてリリアーナが、ホルアドまでの馬車を準備させている間、彼らは未だに目を覚まさない香織の元へと向かう。

因みに恵理は鈴へはこの事を報告していて必ず帰ると約束をしていた。

そしてドアの前まで行くと

「離して！離してよお！南雲くんを探しに行かなきゃ！お願いだからあ……絶対、生きてるんだからあ……離してよお」

と香織と雫の声が聞こえた。

コンコン「わりいな。話し中で……目が覚めた見てえだな。」

「城之内君……」

「城之内君……。私が気絶した後、南雲くんも助かったんだよね？ね、ね？　そうでしょ？　ここ、お城の部屋だよ？　皆で帰ってきたんだよ？　南雲くんは……訓練かな？　訓練所にいるよね？　うん……私、ちよつと行ってくるね。南雲くんにお礼言わなきゃ……」

「すまねえ……」

「どうして南雲くんが、いないの？どうして、どうして私、助けるって約束したのに、なのに、私は…」

香織の涙なからの訴えの言葉は城之内の胸に突き刺さる。

「……白崎」

「…なに。」

「俺はこれからオルクス迷宮に戻って南雲を探しに行く。」

「何を言ってるの！南雲君は奈落に落ちたのよ。もうここにはいないのよ。なのにどうして死に行くようなことを…」

「俺は死なねえよ。南雲を連れ戻すまでは死ぬわけにはいかねえ。それにな、」

「それに？」

「俺はあいつに助けられたんだ。友だちが命を張ったんだ。今度は俺たちが命を張る番だ。」

「克也は一度言い出したら止まらないからね。」

「…城之内君。」

「なんだ？」

「お願い！私も連れてって！」

「香織！あなたまで何を言ってるの!？」

「わかってる。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。……でもね、確認したわけじゃない。可能性は一パーセントより低いけど、確認していかないならゼロじゃない。……私、信じたいのそれにただ待つてるだけじゃ駄目だって。南雲君を見つけて今度こそ私の気持ち伝えるの！」

それとね荒唐無稽かもしれないけどね。私他のクラスメイトが南雲君を悪く言ったり、貴族の人が南雲君を悪く言ったりしてたのを夢で見たの。それで城之内君が南雲君のために怒ってくれたこととか見てたの。それを夢とは言え見るとイヤな気持ちになつたの。」

「香織……」

「あんな人たちのために戦いたくなんてない。それなら南雲君を救うために戦う城之内君たちに付いていきたいの」

「はあ全く。香織も言い出したら止まらないんだから。」

「お互い大変だね。」

「まったくよ。城之内君香織のこと、南雲君を見つかるまでお願いね。」

「見つけるまでで良いのか？」

「だってそこからは南雲君が守ってくれるだろうから。」

「わかつたぜ！」

「香織必ず帰ってきなさい！どんなに時間が掛かっても良いから。無事に私たちのところに帰ってきなさい。」

「ありがとう！雫ちゃん！」

その後、恵理は予備の端末を雫へと渡して連絡を取れるようにしておいた。これにより状況を把握することや生存確認もしやすく、デュエルの映像を見るという建前で雫のもとにリリアーナが、来ても不自然ではないようにした。

そうして城之内、恵理、香織の三人はリリアーナの用意した馬車でホルアドへと向かった。

全ては友達を想い人を助けるために再びオルクス迷宮に挑むのであった。

オルクス迷宮編 友を救うために飛び込む 悪夢を乗り越えろ！

夜に王国を出た城之内たちは明け方にホルアドに到着をした。

流行る気持ちを抑え、まず救出しに向かうため装備や食料を整える。

「城之内君。お金とか大丈夫なの？」

「ああ！いくら稼いでおいたからな。奈落に落ちた南雲はきつと腹も減ってる。空腹過ぎれば人間死んじゃう！だから持てるだけ食料は持つてく。金なら気にすんな！人の命に比べりゃ金なんて安いもんだ。」

そうして城之内はパンや肉、レモンやみかんに似た果物も買っていく。果物は水分も含むので水分補給や体に必要なビタミンも摂れる。

そして恵理の方も幾つか袋を出しては肉などを魔法で真空状態にして保存状態を良くして長持ちをするようにして調味料塩や胡椒も購入した。昔の人は胡椒を使って保存状態を保ったという話もある。そして小さいサイズではあるものの鍋を一つ購入する。

煮る、蒸す、焼くなど一つの鍋で、できる優れもので値段は張ったものの必要経費と

して購入した。

そして香織には回復ポーションや魔力ポーションといったものをお金のあるかぎり買ってもらい準備を済ませた。

そして受付が開く前だったので見付からないように強引にそのままオルクス迷宮に突入する。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る、ラットマンという魔物や道中にロックマウントが蠢くなか城之内を先頭に斬つては進みある時は恵理が風霊術 雅で壁に叩きつけながら火霊術 紅で焼き尽くす。

「…二人は凄いな。」

「どうしたの香織?」

「…城之内君は先を切り開く力があつて、恵理ちゃんも魔法、罨をうまく使つて攻撃してる。でも私は回復させるしか出来ないからちよつとね。」

「んなこたねえよ。確かに俺は攻撃できるが人を癒すことは出来ねえ。恵理もそういう回復は出来るが本職ほどじゃねえ。白崎の力はすげえ。南雲が怪我してたら治してやれるのはお前だけだ!だから自信と後は覚悟さえあれば実力だつて付いてくるさ。」

「ありがとう!それに城之内君たちからもらつたカードもあるから私頑張る!」

そうしてあの時檜山が触れてしまった岩盤にまで辿り着いた。

「二人とも。準備はいいな。また触ればトラップが、作動するはずだ。ここからは気を引き締めていくぞ!」

「そうだね!」

「うん! いろいろ!」

そうして城之内が触れる!

光が、溢れてそしてその場から三人は消えた。

そして目を開くとそこはハジメが落ちた場所そのままであったが橋は修復され更にトラップも健在で背後からトラウムソルジャー、そして

「グルアアアアアアアアアア!」

あの時の悪夢が蘇る。

「恵理後ろの奴ら頼めるか?」

「任せて! 克也はやるんでしょ?」

「…ああ! 前に進むためにもこいつはここで倒す!」

そしてベヒモスは最初の時と同じく突進をしてくる。

「優しき光を全てを抱く 光輪」

「守護の光をここに 光絶!」

それを香織が魔法で衝撃をある程度殺して障壁で一瞬動きを止めたあと城之内は稲妻の剣をもち勢い良く横風に振るう。

ガギイン

「ちっ！まだかてえか！」

「それ！くっ！数がやっぱり多いね。それなら！」

恵理の方は無数に増えるトラウムソルジャーを相手に火霊術 紅で焼き尽くしていたがキリがないので今度は水霊術 葵でトラウムソルジャーたちを全て飲み込む水流で次々と橋から落としていく。

「二人とも！天恵よ、遍く子らに癒しを 回天！」

そして、回復魔法を掛けて二人をサポートする香織

戦況は恵理の方は段々有利になってきたが城之内の方は劣勢に立たされている。

（くそっ！剣が中々入らねえ！ここで足踏みしてる場合じゃねえつつうのによ。ここで苦戦してたら南雲を助けることなんて出来ねえ！俺は…俺は！）

そしてベヒモスは頭部を赤熱させ突進をする！

城之内は咄嗟にサラマンドラのカードを発動させ受け止める。しかしその突進の威力は凄まじく腕への衝撃で、サラマンドラを落としかけるが踏ん張り耐える。

（南雲は俺みてえな力もねえのにこいつに立ち向かったんだ！俺がこんなところでくた

ぼっちまったら助けてくれた南雲に顔向け出来ねえ!」

ズツズツ

次第に城之内は押され始める。香織も

「天の息吹、満ち満ちて、聖浄と癒しをもたらさん 天恵」

対象の体力、魔力を回復させる天恵で城之内をサポートする。

「うおおおおお! 負けてたまるか! 俺は…あいつを…南雲を仲間を助けるんだ!」

その時城之内へ声が聞こえてきた。

「そうだ。お前は友を助けるために前へ進まねばならない。ここで立ち止まっている暇はない。」

(誰だ!? 声をかけてきたのは?)

「お前は私のことを知っている。その剣を使うのだ。分かるはずだ。我が名を呼ぶのだ!」

(サラマンドラが…! そうかお前なんだな。いつも俺を助けてくれた…頼む俺に力を貸してくれ!)

「炎の剣士!」

ピカーン

「眩しッ」

「克也？」

そして光が止むとそこには炎の剣士の姿をした城之内がサラマンドラを、携えて立っていた。

再びベヒモスは突進するが今度はきつちり受け止める城之内

「ぜつてえに助けて見せる：てめえで、時間を使つて余裕なんざねえ！
うおおおおお！」

闘気炎斬剣!!!」

ズオオオオオオ!

その一撃はベヒモスを、斬り裂きベヒモスが炎に包まれた。

そしてある程度すると動きが緩やかになり殆ど瀕死になっていた。

そしてそこに近づく香織

「おまえが おまえがいたから南雲君は：ハジメくんは落ちたんだ：許さない：私の無力さも約束を守れなかった自分も許せない。だからこれは弱い自分と決別するためのもの。」

そして香織はご隠居の猛毒薬の魔法カードを使い二つ目の効果相手へ800ダメージを与える方を使い

「毒の息吹よ あらゆる命に災いを！ 毒災」

とオリジナルの魔法を使う。

途端にベヒモスは苦しみ出す。城之内の一撃で動くことも出来ずそのままベヒモスは息絶えた。

「…白崎」

「ごめんなさい。城之内君：私は私を許せないの。あの時守るっていったのに…」

「ならその言葉を嘘にしねえためにも進もう！」

「にしても、克也？その姿はどうしたの？」

「いやあ、俺にもわかんねえんだけど炎の剣士が力を貸してくれたんだ。」

「よくぞやった。克也よ。」

「炎の剣士！」

「うそっ！炎の剣士が実体化して喋ってる！」

「漸く我が声が届いたのだな。これからは我らも共に力を貸そう！」

「もしかして精霊ってやつなのか？」

「その通りだ。我らは見えないながらも陰ながら見守っていたのだ。」

「城之内君精霊って？」

「ああ！俺たちの世界とはまた別にデュエルモンスターの精霊たちの住む世界があるって聞いたことがあってな。あっちじゃ見えなかつたんだがどうも見えるように

なつたみたいだな。」

「克也が最初から使つてる愛着あるカードだからなのかな？」

「それもあつぞ。そして恵理…克也の伴侶よ。」

「伴侶!?」ボフィン

「克也は何かと危なつかしいからお主が支えてやるのだぞ！」

「あはは…精霊さんからのお墨付きつて凄いね恵理ちゃん！」

「うう恥ずかしいよ。」

「それと克也よ。お主の仲間、南雲ハジメはまだ生きているはずだ。」

「!本当か！」

「その側にも精霊がいて微妙にはあるが分かる。」

「よしっ!早いところ行くとするか！」

「でも、この下にどうやって?」

「それなら！」

と城之内はカードを召喚する。

「グアア！」

「ベビードラゴン！」

「グアア！」スリスリ

「はははつくすぐぐつてえ！」

「ベビードラゴンはまだまだ子供だから甘えたい盛りではあるがその飛行能力は本物だ。その小柄な姿なら狭い洞窟などでもスムーズにいけるはずだ。」

「頼むぜベビードラゴン！」

「グアア！」

こうして三人はベヒモスを倒し奈落の先へと進む。

この先に待ち受けるものを退けハジメを救出に向かう決意を固める三人であった。

奈落の底での変異：闇を照らす一筋の光

城之内たちがベビードラゴンに乗り奈落を下降する前

ハジメが奈落へと落ちた時まで遡る。

ハジメは奈落へと落ちたが奇跡的に生きていた。

彼が気付くと川に下半身が浸かり、上半身が浮き出た岩に乗り上げていた。

それは落下途中の崖の壁に穴があいており、そこから鉄砲水の如く水が噴き出していたのだ。ちよつとした滝であった。そのような滝が無数にあり、ハジメは何度もその滝に吹き飛ばされながら次第に壁際に押しやられ、最終的に壁からせり出していた横穴からウォータースライダーの如く流されたのである。とてつもない奇跡だ。

もつとも、横穴に吹き飛ばされた時、体を強打し意識を飛ばしていたのでハジメ自身は、その身に起きた奇跡を理解していないが。

まずは服を乾かさなければと錬成で魔方陣を刻み火種をの魔法を使う。

そうして服を乾かす間、

「城之内君は大丈夫かな？あの後無事に皆と合流できたのかな。……早く地上に出て、城之内君に会いたいな。」

そうして服も乾き出口を探すために道を進むハジメ。

巨大な通路になっている洞窟は複雑で障害物だらけでも通路の幅は優に二十メートルはある。狭い所でも十メートルはあるのだから相当な大きさだ。歩き難くはあるが、隠れる場所も豊富にあり、ハジメは物陰から物陰に隠れながら進んでいった。

そして4方向へ伸びる道へと差し掛かり気配を潜ませる。

そつと顔だけ出して様子を窺うと、ハジメのいる通路から直進方向の道に白い毛玉がピョンピョンと跳ねているのがわかった。長い耳もある。見た目はまんまウサギだった。

ただし、大きさが中型犬くらいあり、後ろ足がやたらと大きく発達している。そして何より赤黒い線がまるで血管のように幾本も体を走り、ドクンドクンと心臓のように脈打っていた。物凄く不気味である。

明らかにヤバそうな魔物なので、直進は避けて右か左の道に進もうと決める。ウサギの位置からして右の通路に入るほうが見つかりにくそうだ。

ハジメは息を潜めてタイミングを見計らう。そして、ウサギが後ろを向き地面に鼻を付けてフンフンと嗅ぎ出したところで、今だ！ と飛び出そうとした。

その瞬間、ウサギがピクツと反応したかと思うとスツと背筋を伸ばし立ち上がった。警戒するように耳が忙しくあちこちに向いている。

(やばい！ み、見つかった？ だ、大丈夫だよね？)

岩陰に張り付くように身を潜めながらバクバクと脈打つ心臓を必死に抑える。あの鋭敏そうな耳に自分の鼓動が聞かれそうな気がして、ハジメは冷や汗を流す。

しかしウサギが見つけたのはハジメではなく大きな狼のような魔物であった。

ハジメは狼のほうが強いと思っていたがウサギは素早く空中を蹴るように移動し雷を放出しながら蹴り狼を仕留めた。

そして

カラン

とハジメは音をたててしまい、ウサギに気付かれてしまう。

そしてハジメは本能にしたがいその場を横つ飛びで退避する。

直後、一瞬前までハジメのいた場所に砲弾のような蹴りが突き刺ささり、地面が爆発したように抉られた。硬い地面をゴロゴロと転がりながら、尻餅をつく形で停止するハジメ。陥没した地面に青褪めながら後退る。

(どうする!? 錬成で地面に触れて落とし穴を作ろうにもさっきの空中での動きを見ても簡単に抜けられる。それにそんな猶予を与えてくれるようには……いや相手が油断さえしてくれば!)

そうして隙を探すハジメであつたがそれは唐突に現れた。

よく観察をしていると蹴りウサギがふるふると震えているのだ。

(な、何?何を震えて……これじゃまるで怯えているみたいな……)

まるでではなく、事実、蹴りウサギは怯えていた。

ハジメが逃げようとしていた右の通路から現れた新たな魔物の存在に。

その魔物は巨体だった。二メートルはあるだろう巨軀に白い毛皮。例に漏れず赤黒い線が幾本も体を走っている。その姿は、たとえるなら熊だった。ただし、足元まで伸びた太く長い腕に、三十センチはありそうな鋭い爪が三本生えている。

そして蹴りウサギは全力で逃げるため空中を何度も蹴り移動をするがその爪熊は鋭い爪を振りかぶると次の瞬間蹴りウサギは八つ裂きにされていた。

その光景を見ていたハジメは恐怖のあまり動けなかった。

爪熊が蹴りウサギを食してその鋭い眼光をハジメに向けた。

「うわあああー!!」

ハジメは恐怖に襲われながらも必死に逃走を図る。

しかし先程の自らよりも強い蹴りウサギが、逃げきれなかった相手にハジメが逃げきれぬはずもなく、爪熊から放たれた風がハジメの左側面を襲う。

「がはっ!」

肺の空気が衝撃により抜け、咳き込みながら壁をズルズルと滑り崩れ落ちるハジメ。

衝撃に揺れる視界でどうか爪熊の方を見ると、爪熊は何かを咀嚼していた。

だが、一体何を咀嚼しているのだろうか。蹴りウサギはさつき食べきったはずである。それにどうして、食はんでいるその腕は見覚えがあるのだろうか。

ハジメは理解できない事態に混乱しながら、何故かスツと軽くなつた左腕を見た。正確には左腕のあつた場所を……

「あ、あ、あがあああああー！！！！」

ハジメの腕を咀嚼し終わつた爪熊が悠然とハジメに歩み寄る。その目には蹴りウサギのような見下しの色はなく、ただひたすら食料という認識しかないように見えた。

左腕を失つた絶望と間近に迫る死にハジメは無我夢中で

「あ、あ、ぐううう、れ、錬成え！」

右腕で背後の壁を錬成すると人一人分入れるスペースが出来、ハジメはその中へと転がり込む！

目の前で獲物を逃したことに怒りをあらわにする爪熊。

「グウルアアア！！」

咆哮を上げながら固有魔法を発動し、ハジメが潜り込んだ穴目掛けて爪を振るう。凄まじい破壊音を響かせながら壁がガリガリと削られていく。

「うああああああああ。錬成！錬成！錬成！」

爪熊の咆哮と壁が削られる破壊音に半ばパニックになりながら少しでもあの化け物から離れようと連続して錬成を行い、どンドン奥へ進んでいく。

尚も壁を削る爪熊。

しかし、爪熊を次の瞬間襲ったのは鋭い斬撃であった。

爪熊は苛立ちながらみるとそこには鋼の鎧を身に纏う鋼鉄の戦士が静かに佇むようにしていた。

その無言のプレッシャーに爪熊は怯む

その隙にもう一撃爪熊へと斬撃を放つ！

ザシユツ！

「グオオオオオ」

その一撃は爪熊の左目を抉りたまらず爪熊は撤退をする。

そして鋼鉄の戦士は苦しそうに身をかがめるがそれを耐えてそのまま姿を消した。

—————

ピチャン ピチャン

水滴が頬ほおに当たり口の中に流れ込む感触に、ハジメは意識が徐々に覚醒していくのを感じた。そのことを不思議に思いながらゆっくりと目を開く。

あの後限界まで錬成を行使し続けたハジメは酷い倦怠感と出血から意識を失っていた。彼自身爪熊からどうやって逃げられたのか分かっていなかった。ましてや鋼鉄の戦士がハジメの窮地を救ったことも。

(……生きてる? ……助かったの?)

疑問に思いつながらグツと体を起こそうとして低い天井にガツツと額をぶつけた。

「あぐっ!」

自分の作った穴は縦幅が五十センチ程度しかなかったことを今更ながらに思い出し、ハジメは、錬成して縦幅を広げるために天井に手を伸ばそうとした。

しかし、視界に入る腕が一本しかないことに気がつき動揺をあらわにする。

しばらく呆然とするハジメだったが、やがて自分が左腕を失ったことを思い出し、その瞬間、無いはずの左腕に激痛を感じた。幻肢痛というやつだ。

そして、表情を苦悶に歪めながら反射的に左腕を押さえて気がつく。切断された断面の肉が盛り上がって傷が塞がっていることに。

「な、なんで? ……それに血もたくさん……」

暗くて見えないが明かりがあればハジメの周囲が血の海になっていることがわかっただろう。普通に考えれば絶対に助からない出血量だった。

ハジメが右手で周りを探れば、ヌルヌルとした感触が返ってくる。まだ辺りに流した

血が乾いていないのだろう。やはり、大量出血したことは夢ではなかったようだし、血が乾いていないことから、気を失って未だそれほど時間は経っていないようである。

にもかかわらず傷が塞がっていることに、ハジメが疑問を感じていると再び頬や口元にぴちよんと水滴が落ちてきた。それが口に入った瞬間、ハジメは、また少し体に活力が戻った気がした。

「……まさか……これが？」

ハジメは幻肢痛と貧血による気怠さに耐えながら右手を水滴が流れる方へ突き出し錬成を行った。

そうやってふらつきながら再び錬成し奥へ奥へと進んで行く。

不思議なことに、岩の間からにじみ出るこの液体を飲むと魔力も回復するようで、いくら錬成しても魔力が尽きない。ハジメは休まず熱に浮かされたように水源を求めて錬成を繰り返した。

やがて、流れる謎の液体がポタポタからチヨロチヨロと明らかに量を増やし始めた頃、更に進んだところで、ハジメは遂に水源にたどり着いた。

「……それは……」

そこにはバスケットボールぐらいの大きさの青白く発光する鉱石が存在していた。

その鉱石は、周りの石壁に同化するように埋まっており下方へ向けて水滴を滴らせて

いる。神秘的で美しい石だ。アクアマリンの青をもっと濃くして発光させた感じが一番しつくりくる表現だろう。

ハジメは一瞬、幻肢痛も忘れて見蕩れてしまった。

そして縋り付くように、あるいは惹きつけられるように、その石に手を伸ばし直接口を付けた。

すると、体の内に感じていた鈍痛や靄がかかったようだった頭がクリアになり倦怠感も治まっていく。

ハジメが生き残れたのはこの石から流れる液体が原因らしい。治癒作用がある液体のようだ。幻肢痛は治まらないが、他の怪我や出血の弊害は、瞬く間に回復していく。

ハジメは知らないが、実はその石は「神結晶」と呼ばれる歴史上でも最大級の秘宝で、既に遺失物と認識されている伝説の鉱物だったりする。

神結晶は、大地に流れる魔力が、千年という長い時をかけて偶然できた魔力溜りにより、その魔力そのものが結晶化したものだ。直径三十センチから四十センチ位の大きさで、結晶化した後、更に数百年もの時間をかけて内包する魔力が飽和状態になると、液体となって溢れ出す。

その液体を「神水」と呼び、これを飲んだ者はどんな怪我也病も治るといふ。欠損部位を再生するような力はないが、飲み続ける限り寿命が尽きないと言われており、その

ため不死の霊薬とも言われている。

ようやく死の淵から生還したことを実感したのか、ハジメはそのままズルズルと壁にもたれながらへたり込んだ。

そして、死の恐怖に震える体を抱え体育座りしながら膝に顔を埋めた。既に脱出しようという気力はない。ハジメは心を折られてしまったのだ。

爪熊のあの目はダメだった。ハジメを餌としてしか見ていない捕食者の目。弱肉強食の頂点に立つ人間がまず向けられることのない目だ。その目に、そして実際に自分の腕を喰われたことに、ハジメの心は砕けてしまった。

(誰か……助けて……)

ここは奈落の底、ハジメの言葉は誰にも届かない…

そうして顔を埋めて何日たったであろうか。

ハジメは、現在、横倒しになりギョツと手足を縮めて、まるで胎児のように丸まっていた。

ハジメが崩れ落ちた日から既に四日が経っている。

その間、ハジメはほとんど動かず、滴り落ちる神水のみを口にして生きながらえていた。

しかし、神水は服用している間は余程のことがない限り服用者を生かし続けるものの

空腹感まで消してくれるわけではなかった。死なないだけで、現在ハジメは壮絶な飢餓感と幻肢痛に苦しんでいた。

(どうして僕がこんな目に?)

ここ数日何度も頭を巡る疑問。

痛みと空腹で碌に眠れていない頭は神水を飲めば回復するものの、クリアになったがためにより鮮明に苦痛を感じさせる。

もういつそのことこのまま……と神水を飲むのをやめてしまった。

さらに2日過ぎると再び幻肢痛と飢餓感に襲われる。

この時点で既にハジメの精神は限界を超えてヒビが入り始めていた。何故自分がこんな目に……どうして助けにきてくれないのか……憎い、自分を追い詰める全てが……裏切ったクラスメイトが……友が……

自分を追い詰める物はいらない。

敵は殺す！ コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス
 コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス
 コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス
 コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス
 コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス

…直前ハジメの懐が光出す。

な…にが……？

ぼとっ ボトボト！

ハジメの懐が光だしその懐から缶詰めや乾パンといった物が溢れるように出現した。

「たべ…もの？」

ハジメは無意識に乾パンに手を伸ばし封を切ると口へとそのまま運ぶ

サクっ！

その乾パンは今まで食べた物より美味しく感じた。

ハジメの体は栄養を求めて他の缶詰めに手を伸ばす。体を起こし両足で缶詰めに挟み右腕で開ける。魚や保存された肉、とにかく体の中へと入れるように無我夢中で口へと運ぶ。

(おいしい 美味しい 体に力がどんどん入るみたいだ…)

そうして食べられる分だけ食べたハジメは懐に手を伸ばす。先程の光がなんであったのか確認するために。

「これって……………」

そこには二枚のカード 鋼鉄の戦士ギア・フリード 非常食のカードがあった。

「ああ……………城……之内くん」

ハジメの黒い思考が少し暗れる。

(そうだ。自分を友と言ってくれた人が…仲間が待ってる！なら僕は…俺は生きる！生きてここを出て友に会いたい！)

奈落の底で尽きかけていた精神が再び立ち上がる。

生きるために敵を殺す。友に会いたい。

そんな二つのココロに突き動かされるようにハジメはその瞳に火を灯す。

全ては生き残るために／友に会うために。

ハジメの変異……人生を賭けたギャンブル

ハジメは満腹になり今の状況でまず装備を考える。

今の自分ではこの奈落の魔物たちには勝てないのは分かっている。ならば魔物にはなく自分にしかないものを持って戦う。

ハジメは真結晶から出る神水を錬成で作り出したビンに詰める。

まずは防具を整えるべきだと考える。この奈落で装備が軽装だとすぐに死ぬと思っただハジメは奈落の魔物から取った素材で軽くて丈夫な防具で身を固めることにする。

ハジメは錬成をしながら奈落の迷路のような場所を歩き岩陰があるような獣の狩りにて最適だろう場所に錬成で落とし穴をつくりトラバサミのように踏めば噛みつきもがけばもがく程食い込むようなものを設置する。

錬成のイメージをより明確にするように生きるためになのか精度がどんどん上がる。それは一重に生きるためかはまた友に再会したいという思いからなのか。

そして壁に錬成をして、そこに潜むように息を潜め壁をまた錬成で塞ぎ、目で確認できるように少し穴を開けて獲物が来るのを待つ。

—————

そしてしばらくすると二尾狼の群れが丁度通りかかる。

二尾狼は四く六頭くらいの群れで移動する習性があり単体ではこの階層の魔物の中で最弱であるため群れの連携でそれを補っているのだ。この群れも例に漏れず四頭の群れを形成していた。

周囲を警戒しながら岩壁に隠れつつ移動し絶好の狩場を探す。二尾狼の基本的な狩りの仕方は待ち伏せであるからだ。

しばらく彷徨っていた二尾狼達だったが、納得のいく狩場が見つかったのか其々四隅の岩陰に潜んだ。後は獲物が来るのを待つだけだ。その内の一頭が岩と壁の間に体を滑り込ませジツと気配を殺す。これからやって来るだろう獲物に舌舐りしていると、ふと違和感を覚えた。

仲間の気配が一頭足りないのに気付く。

二頭が気配の消えた一頭のいた場所に鼻を近付ける。

その瞬間またもや消える。

慌てる最後の一頭もその場を後ずさろうとするが瞬間地面が消え一時的に身動きが取れなくなるがこの程度であれば脱出出来ると勢い良く飛び上がろうとするが足を何かに封じられ跳べずさらには動く度にどんどん食い込むそれに悲鳴を上げながら今度

は壁に呑み込まれた。

「よし。まずは第一段階はクリア。魔物は生命力が高いからトドメを差す必要がある。」

ハジメは、右腕を壁に押し当てると錬成の魔法を行使する。岩を切り出し、集中して明確なイメージのもと、少しずつ加工していく。すると、螺旋らせん状の細い槍のようなものが出来上がった。更に、加工した部品を取り付ける。槍の手元にはハンドルのようなものが取り付けられた。

そして

「悪いが生きるためだ。お前たちには俺の糧になつてもらおう。」

と二尾狼の皮膚に差し込む。カキン

「やっぱり刺さらないか。だが人の知恵を使えば！」

とハジメは槍をドリルのように回転をさせながら体重を思い切りかける。

二尾狼の悲鳴が響くが

「悪いが俺がここから出るためにも止めるわけには行かない。俺にあつたことを不運に思ってくれ。」

そして暫く悲鳴が続くがそれも長く続かず悲鳴が途絶える。

残りの三頭にも同じ要領でトドメをさしていく。

「よし。あとは拠点を持ち帰るか。…何とか神水は使わずにすんだな。」

と拠点に戻っていく。念入りに壁も錬成で塞いで拠点を隠す。

そして拠点に戻ったハジメは二尾狼を骨と肉、毛皮と分けて解体をしていく。その際も錬成を駆使して固い部位も分解する。骨と皮は洋服にしていく。耐久力を高めるために四頭分の皮を重ねて骨は砕いて皮に混ぜるようにして錬成で合わせていき、残った骨や皮は今現在考案している在るもの入れ物にするために残しておく。

片腕だけに時間は掛かるものの幸いにして時間は沢山在った。神水で魔力も無尽蔵に湧き出て、食べ物も今のところは非常食のカードのお陰で何とかなっている。

そしてコートのような形で全身を覆える物が完成した。

へたな剣や槍ならば刃も通さず、二尾狼の纏っていた雷のようなもののお陰が帯電性と雷属性への耐性もあり、後にハジメのスキルに雷耐性が追加される。

「……これで防具は完成した。あとは武器だ。ここを出るためにも強い武器がいる。近付かずに相手を攻撃出来るとしたら……銃だ。だが再現するにも火薬は必須だ。

幸いにして鉱物鑑定系があるから何かしら代用できるものを探すしかない……ここから出るためにはやるしかない……絶対に……」

とハジメはコートを羽織り鉱物を探すために奈落を探索する。

緑光石や銃をつくるための土台のタウル鉱石を発見することができた。途中何度も魔物と遭遇するが時には隠れ、時には地面と同化して、殺した二尾狼の生き血を体に付

け獣臭を利用して自分の匂いを隠してやり過ぎたりもした。どんなに泥臭くともどんなに惨めでも何としてでも生きるためにハジメは忍耐強く探す。

そしてついに

燃焼石

可燃性の鉱石。点火すると構成成分を燃料に燃焼する。燃焼を続けると次第に小さくなり、やがて燃え尽きる。密閉した場所で大量の燃焼石を一度に燃やすと爆発する可能性があり、その威力は量と圧縮率次第で上位の火属性魔法に匹敵する。

「漸く見つけた！これなら火薬の代用が出来る！これなら魔物たちとも戦える…いや、まだだ。

慎重に…慎重にやらないと、絶対に死ぬわけにはいかない。城之内君に合う前に死んでたまるか！」

そして二尾狼の余った皮で作ったバックに詰めるだけ詰める。

自分しか分からないように目印を付けて足りなくなれば補充を出来るようにする。

そして拠点に戻り一息つく。

そして放置していた二尾狼の肉を見て

「……魔物の肉は毒つては書いてあったが…魔力が巡ってるならその魔力を自分に取り入れることが出来たら強くなれるが取り入れるなら食うか肉体を錬成で弄って文字通

り血肉にするか……どちらにしても危険はある。」

迷うハジメ。銃を造ったとしてももし万が一効かなければ待っているのは死。ならば生き残るためにも……

覚悟を決めなければ。

とハジメは決意をして、魔物肉を手取る。

ハジメは魔物肉を直接食べることにした。

肉体に同化させてもよかったがもし適合できなければその部位を切り落とさなければならぬ。しかし体に摂取しても同じだがここには神水があるその回復力があれば何とかなるかもしれない。

気休めに魔物肉に神水を浸らせるようにして染み込ませる。

そして魔物肉にかぶりつく。

暫く咀嚼して呑み込むと同時に神水を飲む。

そして暫くすると、

「ぐうあああつーク……ソツ……ガアツ」

その身に激痛が走る！ハジメはまた神水を急いで口に含む。

「ガアアアアアアア!!!!まだ……まだ……しんでたまるかあああああああ!!」

そうしている内にハジメの身体に異変が起こる。

髪はこれまでの奈落でのストレスで白みをおびていたものが銀髪に近い白へと変化した髪も伸びる。筋肉や骨格も本来のものよりも強靱になり、体の内側に薄らと赤黒い線が幾本か浮き出始める。

ここまでであれば原作のハジメと変わらぬ変貌であった。しかし歯車が少しずれたのかはたまたま運命のいたずらなのか

身体か女性らしい靱やかさかつ胸やお尻も大きくなり始める。

神水による超回復によって身体が作り替えられていく激痛に耐えながら生きるために友に会いたいという想いが勝ったのか。

変化が収まる頃にはそこには中性的な容姿で男にも女にも見える存在になったハジメが横たわっていた。

ピクッ！

「はあ、はあ……どうやら成功したみたいだな。」

とハジメは起き上がり自分の状態を確認する。

腕や腹を見ると明らかに筋肉が発達している。身長も170ちよつとまで伸びている。以前のハジメの身長は百六十五センチだったが少し伸びたようである。

そして錬成で造った鏡のように反射する鉱石で自分の姿を確認する。

「ん？何だが目の前に綺麗な顔が写ってるような？……俺？」

そこには中性的な顔立ちで移る少女とも少年とも言える姿になった自分がいた。

「何だが中途半端な姿になっちゃったな。それに胸まであるし、」

体の変化だけでなくハジメは体内にも違和感を覚えていた。温かいような冷たいような、どちらとも言える奇妙な感覚。意識を集中してみると腕に薄らと赤黒い線が浮かび上がった。

「…なんつうか魔物みたいになっちゃったみたいだな。……ひとまずステータスを見てみるか。」

とステータスプレートを見てみる。

南雲ハジメ 17歳 男女？ レベル：8

天職：錬成師

筋力：100

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：300

魔耐：300

技能：錬成「十鉱物系鑑定」「十鉱物系探査」魔力操作・胃酸強化・纏雷「十雷耐性」
言語理解

「……なんでやねん」

とステータスプレートをみて一人突っ込むハジメ。しかし考えたのもつかの間。

「魔力操作？」

文字通りなら魔力が操作できるということだろうか。

ハジメは、「もしかや先程から感じている奇妙な感覚は魔力なのでは？」と推測し、先程と同じく集中し「魔力操作」とやらを試みる。

ハジメが集中し始めると、赤黒い線が再び薄らと浮かび上がった。そして体全体に感じる感覚を右手に集束するイメージを思い描く。すると、ゆっくりときこちないながらも奇妙な感覚、もとい魔力が移動を始めた。

「おっ、おっ、おお〜？」

なんとも言えない感覚につい声を上げながら試していると、集まってきた魔力がなんとそのまま右手にはめている手袋に描かれた錬成の魔法陣に宿り始めた。驚きながら錬成を試してみるハジメ。するとあっさり地面が盛り上がった。

「マジかよ。詠唱いらずつてことか？ 魔力の直接操作はできないのが原則。例外は魔

物。……やつぱり魔物の肉食ったせいでその特性を手に入れちゃったのか？」

ハジメは確かに魔物の特性を取得していたのだ。ハジメは、次に纏雷（てんらい）を試そうとする。

「えつと……どうやればいいんだ？　　“纏雷” つてことは電気だよな？　あれか？　二

尾狼の尻尾の……」

あれこれ試すがなんの変化もない。魔力のように感じるわけではないから取っ掛かりがなくどうすればいいのか分からないのだ。胸の下で腕を組み考えるハジメ。

腕を組んだからなのか胸が強調されるが気にせずに考える

「う〜ん」と唸りながら、そういえば錬成するときはイメージが大事だということを出す。魔法陣に多くの式を書き込まなくてよい分、明確なイメージがそのまま加工物に伝わるのだ。

ハジメはバチバチと弾ける静電気をイメージする。すると右手の指先から紅い電気がバチツツと弾けた。

「おお、できたよ。……なるほど、魔物の固有魔法はイメージが大事ってことか」

その後もバチバチと放電を繰り返す。しかし、二尾狼のように飛ばすことはできなかった。おそらく“纏雷”とあるように体の周囲に纏まとうか伝わらせる程度にしかできないのだろう。電流量や電圧量の調整は要練習だ。

「まあステータスが上がったのはラッキーだな。これなら城之内君に再会しても」

一緒に戦えると声を出そうとするも不安がよぎる。

はたしてこんなにも変わってしまった自分に気付いてもらえるのか服の下には赤黒い線が入り魔物のようなある意味化物のような形になってしまっている。それに男か女かもわからない性別になってしまった自分を受け入れてくれるのだろうか？

悪い考えは止まらずハジメの頭には拒絶されてしまうのではという思いが募る。

そして考えがまとまらない内に

「南雲オオオオオオ！」

再会を果たすことになる。

友を信じるものたちの行進

城之内たちがハジメを追いかけ奈落へと向かい数日

ベビードラゴンに乗り奈落を降りる三人。

奈落へと続いていき途中いくつもの滝壺があり洞窟も複数あったもののベビードラゴンが、ハジメのもつカードの精霊の匂いを感じとりそれを頼りに進む。

そして流れの遅い川原のような場所へと辿り着き、そこに魔法陣の後を発見する。

「こいつは…確か火種の魔法陣だったな。つてことはここに南雲がいた可能性が高いな。」

「火種の跡も真新しいからその可能性は高いね。問題は何処に行つたかだよな。」

「ハジメ君……」

「白崎、南雲の痕跡を探すぜ！こうした跡を辿れば何かしらの手がかりがあるはずだ。」

「城之内君…そうだね。ハジメ君を絶対に見付ける！」

そうして進む中通路になっている道へと差し掛かる。

そこは4方向からなる道へと続いていた。

「道が3方向に別れてる…どっちに行つたもんかな。」

「しらみ潰しに探してたら南雲の生存率も下がっちゃう。ベビードラゴン何か感じないか？」

「グウ…グウア！」

とベビードラゴンは何かの匂いを感じたのかそちらへと歩を進める。

その場には破碎跡が残っていた。まるで何かを発掘するために無理矢理掘ったかのように壁に生々しい後が付いてその付近に乾いた大量の血痕が残されていた。

「グウア！」

「こいつはまさか!？」

「…乾いて新しい…それにこの出血の量考えたくないけど…」

城之内と恵理は最悪の可能性がよぎる。それは香織も同じであった。

目が虚ろになりそして

「…嘘…嘘だ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…いや…いやあああああああ」

「香織！」

「白崎!しつかりしろ！」

「ハジメ君が…ハジメ君が…」

「まだ決まった訳じゃねえ！」

「でも!人って血を沢山流したら死んじゃう…こんな見たことない量じゃ…」

「確か体重50キロの人を平均だとすると血液量は4リットルその内の20%が失われると出血性ショック、30%で死ぬって。…僕たちは医者じゃないから正確なことなんて分からないけどこの出血だと…」

「そんな…ハジメ君がいない…大好きな人のいない世界で生きてくなんて」と護身用に使っていた短剣を香織は取り出す。

「香織!?!早まつちや駄目っ!」

「ハジメ君…私もそつちに行くね。来世でまた会えると良いなあ」

グサツ プシャアアアア

その場に新たに鮮血が迸った。

「いってえな……」

しかしそれは香織からではなく城之内の手からであった。

城之内は咄嗟に香織の首筋におかれたナイフを素手で掴み首筋に傷がいかないようにし力を込めた分城之内の手を傷付けただけに留めた。

「克也！」

「邪魔しないでよ城之内君！ハジメ君のところへ逝かせてよ!!」

「落ち着け白崎。」

「落ち着けて。ハジメ君が死んじゃったのに落ち着けるわけないよ！どうして…どう

してなの。ハジメ君は悪いことなんてしてないのに……何で」

「……」

「あの時、あの時ハジメ君じゃなくて城之内君が」

最後まで言わなかったが錯乱状態に近い香織の心境は城之内が落ちてれば良かったのにというマイナスでどす黒い思考に偏りかけていた。

「……なあ白崎。俺たちはまだあいつのくたばった姿を見ちゃいねえ。ならよ。諦めるのは早いんじゃないか。」

確かに絶望的なのかもしれない。だが可能性がゼロじゃねえならそれに賭けねえか。」

「でも……」

「それにな俺はここ一番の賭けには強えんだぜ！俺は南雲は生きてるっ思ってる。だから俺は信じてくれなんて言葉しか言えねえ。」

「もしそれでも見つからないってんなら煮るなり焼くなり好きにすりゃいい。」

「……分かった。今は城之内君を信じる。でももし見付からなかったら」

「男城之内！一度言ったことはぜってえに守る!!」

「……そういうのは良いから早く手を見せて！」

と恵理は城之内の手を見る。

「いてててててっ!? 恵理もうちよい優しく」

「いつも克也は無茶してどれだけ僕が心配してるか! まったくもう!」

と言いつつも手当てを始める。

「ごめんね、城之内君: 私のせいで」

「気にすんな。こんなもん睡でもつけときやその内治るって。」

「じゃあそのままにしとこうか? 切り傷ってヒリヒリしたりして地味に痛いんだよ?」

「冗談だつて(; 0。)」

「天の息吹、満ち満ちて、聖浄と癒しをもたらさん 天恵」

「わりい白崎助かつたぜ!」

「ううん。元はと言えば私のせいだもん。これぐらいはさせて。」

「はあ: もうビックリした。香織!」

ビックツ 「はいっ!」

「一人で思い込んで背負つての行動は慎むこと! 何かあれば頼ること! 分かった?」

「うん: 恵理ちゃんありがとう。」

「グウア!」フリフリ

「ベビードラゴン? 何か気付いたことが?」

「克也よ。どうやらまだ希望を捨てるのは早いようだ。」

「どういうことなんだ？」

「そのハジメという人物と共にある精霊はカードの状態で動いているのが分かる。その反応を辿れば……あくまでも可能性ではある。」

「なら諦めるわけにはいかねえ！どんなに小さい希望だろうと必ず見つけてやる。」

そうして決意を新たに道を進む城之内たち。

暫く歩いていると魔物同士のいざこざか争いが起こっているのが聞こえた。

二尾狼の群れと三匹の蹴りウサギの群れの争いのようで一匹の蹴りウサギに対して二尾狼は三匹以上で戦い均衡を保っているかのようであった。

それを見る城之内たちは引き返そうとして、

香織の足がカランと小石を蹴ってしまった。

戦闘中だった二尾狼はこちらを振り向くがその隙を見逃さない蹴りウサギではなく

グギヤ

と瞬く間に二尾狼は蹴りウサギの前に蹂躪されることになる。

「やるしかねえか！」

「そうだね。あの速度じゃ逃げても追い付かれる。それならここでやるしかないね。」

「二人ともごめんなさい。私の不注意で」

「どのみちいつかは戦わなきゃならねえんだ。白崎のせいなんかじゃねえよ。」

「気を抜いちや駄目だよ。気を抜けば僕たちもあの狼と同じことになる。」

そしてデュエルディスクを構え臨戦態勢になる。

「頼むぜ！格闘戦士アルティメーター」

「ハアアツ！」

「香織は僕の後ろにいて！地霊術 鉄！」

と恵理は壁や地面を隆起させ無数に針の形状へと変化させて蹴りウサギを捉えようとする。

「抑する光の聖痕、虚より来りて災禍を封じよ 縛光刃」

と光の十字架を飛ばして対象を捕縛する光属性の魔法を放つ

しかし途轍もない速さで動く蹴りウサギは難なくかわして此方へと殺到する。

アルティメーターはその拳で応戦するものの蹴りウサギの空中を自在に走り回り翻弄するせいで空をきる。

そして三匹の蹴りウサギの蹴りがアルティメーターへと無数に降りそそぐ

シユユン

とアルティメーターは破壊されてしまった。

「ぐうああああああ」

「克也！」

「この感覚マリクとの闇のゲームに似てやがる。モンスターが破壊されるとダメージがこつちに來るって訳か……」

モンスターが破壊されればそれを召喚したものと負荷がいく。今まで破壊されなかったのだからなかつたが慎重にならざるを得なくなつた。

ベヒモスとの戦闘のように炎の劍士になれば良いがその間に恵理たちへ攻撃がいかないとも限らない。

そうこうしている間にも、ウサギは回し蹴りの遠心力を利用して更にくると空中で回転すると、逆さまの状態で空中を踏みしめて地上へ隕石の如く落下し、着地寸前で縦に回転。強烈なかかと落としを着地点にいた三人へと迫る。

「トラップ発動！マジックアームシールド！」

とマジックアームが出現し迫っていたうちの一匹を捕まえて盾にする。
グシャア

と蹴りウサギの蹴りが命中して絶命する。

「残り二匹！闇霊術 欲 縛！」

と恵理は闇霊術欲を鎖状に変化させて二匹の内の一匹へと向ける。

空中を蹴りながら回避する蹴りウサギ

そこへ詠唱を素早く唱えた香織が縛煌鎖を使い光の鎖で援護する。

逃げ回る蹴りウサギだが恵理の闇霊術が蹴りウサギを捉えた！

足に絡み付いた闇の鎖はそのまま地面へと拘束されそこへ縛煌鎖の光の鎖も追加で絡み付く。更にそこへ駄目押しとばかりに香織は封禁を使い光の檻で閉じ込める。

すかさずマジックポーションで魔力を回復させる二人はさらに魔法を放つ

「火霊術 紅 バースト！」

「守護の光をここに 光絶！」

火霊術による勢いを増した炎を封禁の間から蹴りウサギへと殺到してそこへ光絶により檻の四方を密閉された炎は蹴りウサギを容赦なく焼く。

暫く蹴りウサギの断末魔が響き渡るが少しすると丸焦げになった蹴りウサギが封禁内に残るだけとなった。

「水霊術 葵」

恵理はそれでも油断せずに蹴りウサギの頭を水霊術で出した水をウォーターカットターへと変質させ切り落とした。

「恵理ちゃんやりすぎじゃ」

「香織、ここは僕たちのいた世界じゃないんだ。常識はずれのことだってあるかもしれない。首を切り落としたとしても生きる可能性はあるかもしれないけど見た感じこいつはない。」

首を切り落としたとしても生きる可能性はあるかもしれないけど見た感じこいつは

違うから生命力が強くて今でも死んでなければ僕たちも危ないんだ。確実に倒さない」と。

そしてもう一匹のほうは城之内が伝説の剣で蹴りを受け止めるがその蹴りの威力は城之内を持つてしても受け流すので精一杯だ。

「こいつ自身素早くてこっちの攻撃が当たる気がしねえな。何とか動きを止めねえと！ そうだ！

頼むぜ、リトルウインガード！」

と城之内はリトルウインガードを召喚する。

そして蹴りウサギが再度攻撃を仕掛けてくるがリトルウインガードは盾を使い受け止め空中へ放り投げ

「今だ！鎖付きブーメランそしてサラマンドラ！」

リトルウインガードに鎖付きブーメランが装着され素早くそれは蹴りウサギを拘束する。

すかさず自身は炎の剣士の力を見に纏いサラマンドラの炎を蹴りウサギへと放ち

「闘気炎斬剣！」

その攻撃で蹴りウサギは真つ二つになり戦闘は終わった。

「克也！平気？」

「おう！だがこいつらべヒモスと同等…いやそれ以上に厄介だった。南雲を見つけねえと不味いな。」

「そうだね。それに南雲君が落ちてから大分経ってるから空腹で倒れる可能性だってある。急がないと。」

「ハジメ君…」

「香織行こう！ここまで来たんだから絶対に見つけよう！」

「ありがとう恵理ちゃん」

「それにしても二人ともすげえな。そっちの丸焦げじゃねえか」

「そういう克也だってそうじゃん。」

「まあ二人とも倒せたから良いんじゃない？それよりこのウサギどうする？」

「そうだな…何か使えそうだから捌いてこいつに入れるか。」

とずだ袋に蹴りウサギの肉と毛皮を入れ、更に奥へと目指す。

途中二尾狼の群れとも逢うが恵理の水霊術と城之内の稲妻の剣による感電で倒したり、狭い通路でまた遭遇した蹴りウサギは通路の端まで誘き寄せ香織が光絶で通路から出られなくした上で毒霧を出した上に腐食作用のある魔法で毒花というオリジナル魔法で蹴りウサギを毒殺したり（その時ニヒルに笑う香織を見て二人は少し引いていたが）と迷宮を進む。

溢れゆく激情を受け止めろ!

城之内たちはハジメの声が聞こえた方向へと向かった。

そこには一人の人物が座り込んでいた。

「南雲!!無事か!」

「ハジメ君!」

「来ないで!!!」

とハジメは辺りへ雷を放出させる。

「これってさっきの狼と同じ?」

「お願いだから…来ないで!こんな…こんな姿…見られたくない!!」

ハジメの所々破けたた服の下には赤黒い線が入り身体も女性のそれと変わらないものになっている。

更に雷は激しさを増していく。それは雷を放つハジメ自身も傷付けていく。

確かにハジメは二尾狼の技能を会得したが試運転もなしに辺りへ放出しているのだ。いくら雷耐性があるうと耐性なので負荷はかかる。身体の負荷も気にせずに使えば自分を傷付けることに気付かず更に雷は激しくなる。

「不味いね。このままだと自分の雷で血が沸騰して南雲君雷の余波で感電死しかねないよ。」

「でもどうやって近付けば…」

「…あいつは今混乱してるんだろうな。こんな場所で一人きりで生き抜いて…」

ガチャ

「惠理…わりいがデュエルディスク持つててくれ。」

「克也？何を…まさか!？」

カツカツカツ

「来ないで!!」

ゴロゴロゴロ　ビリビリビリ

「城之内くん!？」

「大丈夫だ…」

「なんで…どうして　僕が何したって言うんだ…こんな…男か女か分かんなくて魔物みたい…どうして早く来てくれなかったの…どうして…今更になって来たの…どうして…」

ハジメは感情を爆発させたように言葉を発する。

カツカツカツ

城之内はその歩みを止めずハジメへと近付いていく。身体を掠める雷で肌が焼け血が出るがそれでも歩みを止めない

ゴロゴロゴロ ジュツ

「誰も助けてくれなかった!辛くてもお腹が空いても誰も来なかった。それなのに今更
…あの時僕がしたことは間違つて…」

コツ…

城之内はハジメの前まで来た。良く見れば左腕はなくそれに黒く所々線が入り身体もボロボロだった。

そして…

ソツ ポン

「ごめんな。南雲…一番辛いときに側に居てやれなくて。それでもあん時にした行動は俺を助けてくれた。」

お前がどんなに変わろうが俺たちの関係は変わらねえ。良く生きててくれた。遅く
なつて悪かった。南雲…

「助けに来たぜ。」

「…城之内君…怖かった、こわかったよおお

(…∇…)ずっとひとりぼっちで誰にも、見つけてもらえないんじゃないかって…ヒグツ

うああああああああああああ

ハジメは友達が助けに来てくれたこと。どんなに変わっても友達だと肯定してくれたその優しき、人肌の体温に安心をした。

「克也つたらまた無茶して。まあでもまつすぐに他人思いで人の痛みを分かかって…そんな克也だから好きになったんだけどね。」

「城之内君は凄いな。ちゃんとハジメ君を信じて本当に見つけてみせたんだもん。」

そうして暫くして泣き止んだハジメは城之内以外にもいたことに気付く。

「中村さんと…白崎さんまでどうして…」

「僕たちも南雲君を助けに来たんだ。君は克也のことを助けてくれたいわば恩人だからね。それに克也がいくのに僕が行かないっていう選択肢はないからね。克也の行くところなら火の中水の中ってね。」

「私もハジメ君を助けに来たの。」

「どうして？だって天之河くんや八重樫さんだっていたんだからそつちのが安全なの。」

「私は貴方が…ハジメくんのが好きだから。理屈なんて関係ないもん。好きな人を、放っておけるわけないよ。」

「僕、もう男か女かも分かんないよ。」

「関係ない。私が好きになつたのはハジメ君だから。男か女かなんて些細な問題だよ。」

「左腕もないから不便だろうし迷惑もかけるよ。」

「私がハジメ君の左腕の代わりになるし今思えば私もハジメ君に迷惑をかけちゃつてたんだもん。今度は私が支えるよ。」

「身体の黒い線があつて魔物みたいに……」

ギョッ

「そんなことで私がハジメ君を、嫌いになるわけない！ハジメ君が嫌つて言つても離れない。私は南雲ハジメ君を愛してるんだから！」

「その……あの（〃▽〃）こう情熱的に言われたことなくて、何て言えば良いのか……不束者ですが宜しく願ひします（*／＼*）」

こうして無事とも言えなくはないがハジメを発見した城之内たち。そしてハジメが落ちてからの経緯を聞いたり城之内たちもどうやって来たかを話し合つた。

「城之内君、火傷大丈夫？ごめんね。僕が……」

「気にすんな！こんなのですぐ治るさ。それより南雲も波乱万丈だったんだな。」

「それにしてもこの缶詰めとかこの水はどうしたの？」

「水は神水っていう物らしいんだ。所謂エリクサーみたいなものでそれのお陰で僕は生きていたようなものだね。」

「そういうことだったんだね。大量の血痕を発見したからもしかしたらつて。香織、南雲君のあとを追おうとしてたんだよ。」

「…心配させちゃったね。」

「それでこの缶詰めは？」

「それはね。このカードのお陰なんだ。」

と懐から非常食のカードを取り出すハジメ。

「これは推測なんだけどデュエルモンスターのカードは魔力で実体化出きるんだと思う。僕は魔力も低いから普通なら召喚出来ないんだろうけど神水のお陰か魔力をそこから拝借できた。そのお陰で餓死することだけは免れたんだ。」

「成る程ね。後は精霊界の何処かから転送みたいな形で呼び寄せてるっていうのも候補かな。」

「精霊界って？」

「デュエルモンスターのカードには精霊が憑いていたりしてな。俺もこつちに來てから見えるようになったんだけど、結構沢山いるみたいなんだ。只それが見える奴っていうのは殆どいないんじゃないか。まあ俺が知らないだけでまだまだいそうな気はする

がな。」

「そうなんだね。」モジモジ

「どうした南雲？」

「あの出来れば下の名前で呼んでほしい…とその見られると恥ずかしい（／＼／＼▽／／／）」

今のハジメの格好は二尾狼で作った洋服だが魔物肉を食べた影響で胸が大きくなり隠すのがやつとな形で少し動いてしまうと…

…お分かりいただけただろうか

「克也回れ右！」

「おうっ」グルンツ

と恵理に言われるがままに後ろを向く城之内

「とりあえずどうしようかサラシみたいに包帯で巻くか香織の替えの下着で代用するかしないとね。」

「そうだね。男は狼とは言うけど城之内君なら大丈夫そうだけど動いたりするときはまだ違和感あるだろうし…私ので入るかな？」

「城之内君になら別に………」

「ううううまさか一番の強敵が城之内君なんて。確かに色々頼れるしこの中だと一番強

いし、うーん。私も頑張らないと！」

「あつちはまだかかりそうだからこつちだな。魔物の肉を食うとヤベエってことだな。俺たちの持つてきた食料だつて限りがあるしなるべく早くここから脱出しないとんだが……」

「グウア〜」

「ベビードラゴン！どうだった？」

「グウウ」フリフリ

「どうやら元来た道は通行が出来なくなっていたようだ。まるで何かに阻まれるかのように進めなかったそうだ。」

「ありがとな炎の剣士！となるとこういう迷宮系のものは最下層に行つて転移できるよ。うなもんがありや良いんだが。そうなると絶対に食料が足りないし魔物肉をどうにか食えるようにしねえとな。」

と城之内なりに考えていると

「克也とりあえず良いよ！」

「一先ずサイズが合つて良かった。」

「このままでも良かったのに。」

「こういうの付けとかなないとあとで皮膚が痛くなつたりするから絶対付けた方が良い

よ。」

「どこまで話したっけな…」

「一区切り付いてこれからについてだね。」

「実は一つ考えてたことがあってね。鉱石鑑定出来るようになって調べてたら火薬の代わりとかあつて銃を作れるんじゃないかと思つてね。試作を作つて見て使えるようにしたいと思つてるんだ。」

「成る程な。確かに遠距離からの攻撃手段が増えればここを出れる確率も上がるしな。よし—」

とそれから四人で話し合いハジメと城之内は銃の製作や火薬に銃弾を作り出すこと。

恵理と香織は魔物肉を何とか食べられるように工夫する方向になった。

魔物肉は毒素が強いのでどうしようかと思つたが城之内がふと毒を毒で殺せたりしねえかなという言葉に恵理が思いつき香織の使えるようになった毒魔法を頼りに中和剤の役目をした物を作成することにした。

4人の迷宮から脱出するための活動が始まった。

そして食事であるが持つてきた食料で豚まるごとといった形で肉を削ぎ落としていき丸みを帯びて平らな石を熱消毒してそれを土台に竈門のように組み立てて恵理が火霊術で炎を灯して調理をする。

それを横目に小麦粉を使って豚のような肉を削ぎ落とした豚足やらを簡易鍋に放り込みじっくりと煮込んで、その間に大きく良く練り込んだ小麦を取り敢えず一人二食ペースをと8〜10人前ぐらいに分ける。

そしてハジメに作ってもらった丸い棒状の物で薄く広げて均等に包丁で切る。

更にハジメも何を作っているのか察したのか四人分の器や箸を錬成して作り出した。

そして出来上がった豚ベースのあっさり豚骨スープに均等に切った小麦麵を入れて焼いた肉を少し入れて、胡椒などで味を整えて完成した。

あっさり豚骨小麦ラーメン 季節の野菜をのせて

野菜系は旬な物を迷宮に入る前に購入して恵理が水霊術を応用して冷凍保存して定期的に冷凍させていたので鮮度は抜群である。

更にハジメにビタミンを摂らせるために蜜柑のような果物やレモンを食べやすいように香織が剥いていく。

「おおお！凄いい！トータスに来てラーメンを食べれるなんて！」

「おかわりもあるから遠慮なく食べてくれ！」

「頂きます！」

「迷宮でこういう風にラーメンが作れるなんてね。」

「それに豚の臭みもなくて香ばしい匂いが食欲を誘うね。」

ズルズルズルズルズルチュルンツ!

「うまああああああああああいい!!!」

「流石にこういう環境で作ったことはなかったが口に合って良かったぜ!」

「城之内君…料理も出来て頼りがいがある…やっぱり一番のライバル!」

「そんなこと言つてないで食べて英気を養わないとね。これから頑張つて研究して魔物肉を安全に食べれるようにしないとイケない大事な仕事があるんだから。」

「城之内君!おかわり!」

「あいよ!」

そうして迷宮で再会したハジメにご飯を振る舞った城之内。

迷宮攻略へと4人は挑んでいくことになるのであった。

迷宮でのクラフト　そして一つのケジメ

迷宮にて各々役割を決めて作業をすること数日

ハジメは自分の知識を元に銃の開発をして城之内は部品を組み立てや弾丸の作成などハジメのサポートをする。

香織は毒魔法を使用しては魔物の毒を別の物へと変えられるように中和剤の役目をする毒をブレンドし、恵理はそれらを見比べて魔法カード古代の遠眼鏡を使用して毒素に変化があるのかを確認していく。

変化したものはハジメが試しに食べて違いを確認したりなどして共同作業が続いていた。

そして何千回もの失敗と調整をした結果

遂に完成した。ハジメだけのオリジナル武器

音速を超える速度で最短距離を突き進み、絶大な威力で目標を撃破する現代兵器。

全長は約三十五センチ、この辺りでは最高の硬度を持つタウル鉱石を使った六連の回転式弾倉。長方形型のバレル。弾丸もタウル鉱石製で、中には粉末状の燃焼石を圧縮して入れている。

すなわち、大型のリボルバー式拳銃だ。

しかも、弾丸は燃燒石の爆発力だけでなく、ハジメの固有魔法「纏雷」により電磁加速されるといふ小型のレールガン化している。その威力は最大で対物ライフルの十倍である。ドンナーと名付けた。なんとなく相棒には名が必要と思つたからだ。

更に香織の方も中和剤はまだであつたが何十種類の毒を作ること成功し戦略の幅が出来た。抗体も出来ていてそれらを複数体内で合成させて新しく抗体を作りその抗体を他の三人へと打ち込んで自分の毒で被害がいかないようにした。

恵理は神水を水筒へと移し替えて何かあつても良いように割れにくい容器を複数それぞれ持てるように移し替えて靈術の強化や他の魔法カードを上手く使えるようにしていた。

その副産物か魔物肉をどうにかする方法を見つけられた。

神秘の中華鍋というカードだ。

それは恵理がトータスへと来る前に当てたカードでカード効果もまだ確認しておらず忘れていたカードであつたが試しに召喚して使つてみたところ神秘が付与されたのか魔物肉でも調理して食べても問題ないぐらゐまで毒が軽減され魔物の技能やステータスアップへと繋がつた。

ハジメが自分の食べた意味はと嘆くが

「ハジメ君の決意まで無駄になった訳じゃないしそれにどんなハジメ君でも私は貴方の側から離れないよ。」

「ありがとう香織。何だか照れちゃうな（//▽//）」

ここ数日で二人は名前前で呼び合うようになり一層仲を深めていた。

「おしどり夫婦さん仲が良いのは良いけど食事だよ。それと食べたら：行くんでしょ。今のうちに英気を養わないとね。」

「そうだけ。腹一杯食って休んでからじゃねえといざというとき力を出せないかもしれないからな。」

「ありがとう城之内君。」

「もうおしどり夫婦って恵理ちゃんったら（//▽//）でもハジメ君とならどこまでだつて一緒に：子供は何十人ほしいな。」

「いや桁が違うでしょΣ、（。▽。；）」

「ハジメ君の子供なら何人だって欲しいもん。私とハジメ君の愛の結晶：うえへへへへ」

「香織：女の子がしちやいけない顔になってるよ。全くもう。」

「目標を持つのは良いことだぜ。どんなことでもそれに向かって走ることが出来んだからな！ほら蹴りウサギと旬の野菜のパラパラチャーハンお待ち！」

「あとは中華鍋で二尾狼の出汁をとった中華スープだよ!!」

「城之内君たち何気に料理得意なんだね!」

「まあ僕はアルバイトで優花のところまで働いてて料理を教わったりして色々作れるようになったからね。克也もそれなりに料理できるから交代でご飯作ったりして食べてたからね。」

「ある程度は作れるようにしとかねえと将来大変だからな。」

「ここを出たら私に教えてくれる?」

「僕に出きることなら良いよ!」

「あの中村さん僕も良いかな? こう色々勉強したいしそれにお礼もしたいし。」チラツ

「? ああなるほどね。それぐらいなら構わないよ。」

と食事を済ませる四人。

何かあっても良いように交代で見張りをすることにして所々休みながら作業していた恵理と香織が見張ることにして休まずに作業し続けていたハジメと城之内は平らな地面にリュックなどを敷いて眠りに入る。

zzzz

「……恵理ちゃん……ありがとね。」

「急にどうしたの?」

「ハジメ君が生きてるって信じてくれて。私凄く混乱して城之内君にも迷惑かけて…恵理ちゃんが命懸けで助けに行つてそのお礼とかも出来てないし…」

「別に迷惑をかけちゃいけないなんてことはないと思うよ。僕にとつては克也の命の恩人だからね。それに克也も言うと思うけど南雲君を見捨てたら明日の僕に顔向け出来ないもの。ねえ香織、見えるんだけど見えないものって何だと思う?」

「えっ? 見えるんだけど見えないもの?... うくんなどぞぞ? 何だろう…」

「難しく考えなくて良いんだよ。香織がどう思うのかで良いから。」

「それなら…ハジメ君との繋がりがかな? トータスに来るまではハジメ君のこと分かつてるつもりだったけどそれでもまだ知らないことが沢山あつて今は徐々にそういった見えなかったことを拾うことかな。」

「まあ答えなんてないんだけどね。今のつて前に話したっけかな? 遊戯君が克也に言つてたことなんだ。」

遊戯君は克也がまだ不良で喧嘩ばかりしてでもいつの間にか友達になつててね。傷付いて帰つてくる克也を治療するぐらいしか出来なかつた僕は当時嫉妬してた。

でもね。克也に言つた言葉と王様の言つてくれた言葉は今でも響いてるよ。僕にとつての見えるんだけど見えないものは克也への愛だ。克也はいつも僕が辛いときや苦しい時は言葉じゃなくて態度で示してくれるんだ。僕に寄り添つてくれるそんな優

しい克也への愛なんだ。」

「…そっか。恵理ちゃんは凄いな。私も堂々とハジメ君に愛を伝えられるようにしたいな。」

「堂々としてあつちにいた時もまあ突撃してたけどもうちよつと抑えなよ。雫も大変だつて愚痴つてたよ。よりによって成人ゲームの所行つたりとかしたつて聞いたよ。」

「あははは(；▽)ハジメ君の趣味をもつと知らないと思つて。デュエルモンスターズもそういう経緯で知つて始めたんだ。その時にバトルシテイがあつて他の選手のデュエルとか携帯で見たりして雫ちゃんと水族館へ行つたら城之内君を見かけてそのデュエルを見たんだよ。」

「その時の克也も色々と背負つてたからね。その話しはまた今度してあげるよ。」

「うううういや 置いてかないで 一人はもう いや」

「！香織、南雲君に膝枕してあげて。それと出来る限り安心させてあげるように声もかけてあげて。」

「うん、大丈夫だよハジメ君…私はここにいるよ。貴方を一人になんてさせないからね。大丈夫…大丈夫」 ナデナデ

スー

「落ち着いたみたいだね。…一人はいや…か。誰もいないこんな迷宮に一人で生きてた

んだ。精神的にまいったり下手したら自我崩壊してたつて可笑しくない。」

「…私がハジメ君を支えないと…ハジメ君を脅かす敵は許さない…ハジメ君を苦しめるならその障害は私が排除する。例えどんなことをしても…」

「香織…」

「そう考えるとクラスメイトは雫ちゃん優花ちゃん恵理ちゃん、鈴ちゃん以外信用できないなあ…ハジメ君が落ちた原因を作ったんだもの。天之河くんは特に信用できない。ハジメ君に難癖付けて来るに決まつてる。何で過去の私はあんなの友達になつたのかなあ。……恵理ちゃんはハジメ君と城之内君に魔法打つた犯人知つてたりする？」

（● ●）

「それを知つてどうするの?」

「痛覚だけに作用する毒で身体中痛みがはしるけど神経毒で身体を動かなくして爪を一枚一枚剥いで全身毒まみれにして徐々に身体が腐つていく腐蝕毒で死ぬ一歩手前までやつて回復魔法で全部回復させてを繰り返して犯人には生まれてきたことを後悔させるつもりだけど?それでどうなの?」

（覚悟決めすぎでしょ。雫は良くストッパーしてたよ。犯人知つてるけど今は…）

「確証はないけどね…でもそんなことするよりも南雲君のが大事でしょ。心に負つた傷つて中々癒えないからね。時間をかけて香織が癒してあげないと。」

「そうだね。そんなことよりもハジメ君のが大事なもの。今はそれで納得しとくよ。」
そうして二人の語らいは好きな人のことへとシフトしていく。それは城之内とハジメが起きるまで続いた。

そして準備が整い四人はハジメが遭遇した爪熊を探し…そして、見つけた

爪熊は現在食事中のようだ。蹴りウサギと思しき魔物を咀嚼している。その姿を確認するとハジメは悠然と歩き出した。

爪熊はこの階層における最強種だ。主と言ってもいい。二尾狼と蹴りウサギは数多く生息するも爪熊だけはこの一頭しかいない。故に、爪熊はこの階層では最強であり無敵。

それを理解している他の魔物は爪熊と遭遇しないよう細心の注意を払うし、遭遇したら一目散に逃走を選ぶ。抵抗すらしらない。まして、自ら向かって行くなどあり得ないことだ。

しかし少し前に爪熊はその左目を喪う出来事が襲った。

二度とこんなことはないと思っていたがしかし、現在、そのあり得ないことが目の前で起こっていた。

「爪熊。久しぶりだね…僕の腕は美味かったか？」

爪熊はその鋭い眼光を細める。目の前の生き物はなんだ？　なぜ、己を前にして背を

見せない？ なぜ恐怖に身を竦ませ、その瞳に絶望を映さないのだ？

かつて遭遇したことの無い事態に、流石の爪熊も若干困惑する。

「リベンジマツチだ。この先へ進むためにそして僕が守られるだけじゃないって証明するための糧になれ！」

そう言つて、ハジメはドンナーを抜き銃口を真つ直ぐに爪熊へ向けた。

ハジメは構えながら己の心に問かける。「怖いか？」と。答えは肯だ。あの時の恐怖は今でもこびりついている。しかし絶望に目の前が暗くなることも、恐怖に腰を抜かしガタガタ震えることもない。何故なら今の自分には仲間が：友達が：恋人がいる！それは純粹な生への渴望と仲間への信頼とこんな自分を助けに来てくれた三人への決意だった。

ハジメの身体からはそんな決意に呼応するように闘志が溢れていた。

「まずは小手調べ！」

その宣言と同時にハジメはドンナーを発砲する。ドパンツ！と炸裂音を響かせながら毎秒三・二キロメートルの超速でタウル鉱石の弾丸が爪熊に迫る。

「グウウ!!」

爪熊は咄嗟とつさに崩れ落ちるように地面に身を投げ出し回避した。

弾丸を視認して避けたのではなく、発砲よりほんの僅かに回避行動の方が早かったこ

とから、おそらくハジメの闘志に反応した結果だろう。流石は階層最強の主である。二メートル以上ある巨軀きよくに似合わない反応速度だ。

だが、完全に避け切れたわけではなく肩の一部が抉れて白い毛皮を鮮血で汚している。

爪熊の瞳に怒りが宿る。どうやらハジメを「敵」として認識したらしい。

咆哮を上げながら物凄い速度で突進する。二メートルの巨軀と広げた太く長い豪腕が地響きを立てながら迫る姿は途轍もない迫力だ。

爪熊から凄まじいプレッシャーを掛けられながらもハジメは慎重にけれど隙を探す。

ここがターニングポイントだ。

ハジメの左腕を喰らい、心を砕き、変心する一歩手前の原因となった魔物を打ち破る。これから前へ進むために必要な儀式。それができなければ、きつと己の心は「妥協」することを認めてしまう。ハジメはそう確信していた。だからこそ三人には一人でやらせて欲しいと頼んだ。香織は駄目と言ったが城之内君と中村さんは思うようにやれと言ってくれた。香織も危なくなったら介入するとなつとくしてもらった。

突進してくる爪熊に、再度、ドンナーを発砲する。超速の弾丸が爪熊の眉間めがけて飛び込むが、なんと爪熊は突進しながら側宙をして回避した。どこまでも巨軀に似合わない反応をする奴である。

自分の間合いに入った爪熊は突進力そのままに爪腕を振るう。固有魔法が発動しているのか三本の爪が僅かに歪ゆがんで見える。

ハジメの脳裏に、かつてその爪をかわしたにもかかわらず両断された蹴りウサギの姿が過つた。ハジメはギリギリで避けるのではなく全力でバックステップする。

刹那、一瞬前までハジメがいた場所を豪風と共に爪が通り過ぎ、触れてもいないのに地面に三本の爪痕が深々と刻まれた。

爪熊が獲物を逃がしたことに苛立つように咆哮を上げる。

とその時、爪熊の足元にカランと何か転がる音がした。釣られて爪熊が足元に視線を向けると直径五センチ位の深緑色をしたボール状の物体が転がっている。爪熊がそのことを認識した瞬間、その物体がカツと強烈な光を放った。

ハジメが城之内と共に製作した「閃光手榴弾」である。

原理は単純だ。緑光石に魔力を限界ギリギリまで流し込み、光が漏れないように表面を薄くコーティングする。更に中心部に燃焼石を砕いた燃焼粉を圧縮して仕込み、その中心部から導火線のように燃焼粉を表面まで繋げる。

後は「纏雷」で表に出ている燃焼粉に着火すれば圧縮してない部分がゆっくり燃え上がり、中心部に到達すると爆発。臨界まで光を溜め込んだ緑光石が砕けて強烈な光を発するというわけだ。ちなみに、発火から爆発までは三秒に調整してある。苦労した

分、自慢の逸品だ。

当然、そんな兵器など知らない爪熊はモロにその閃光を見てしまい一時的に視力を失った。両腕をめちゃくちゃに振り回しながら、咆哮を上げもがく。何も見えないという異常事態にパニックになっているようだ。

その隙を逃すハジメではない。再びドンナーを構えてすかさず発砲する。電磁加速された絶大な威力の弾丸が暴れまわる爪熊の左肩に命中し、根元から吹き飛ばした。

反対側も同時に発砲して爪熊の攻撃力を落とす。右肩へと命中した弾は弾け爪熊の右肩から先を濃縮された腐蝕毒が襲い腐り落ちた。

「香織の協力で作ったこれ人に向けたらヤバイな…使うときは魔物相手にしとこう。」

両腕を失い毒が回り身体も動かせなくなったが右目に宿る眼光は未だ鋭く殺意に満ちていてハジメを睨んでいる。

ハジメは真つ直ぐその瞳を睨み返し、ドンナーを抜きながら歩み寄り、爪熊の頭部に銃口を押し当てた。

「恨みはある。どうしてこんな目になって思った。でも僕はお前を倒した前へ進む。…さよなら」

その言葉と共に引き金を引く。撃ち出された弾丸は主の意志を忠実に実行し、爪熊の

頭部を粉碎した。

迷宮内に銃声が木霊する。

爪熊は最期までハジメから眼を逸らさなかった。ハジメもまた眼を逸らさなかった。想像していたような爽快感はない。だが、虚しさもまたなかった。ただ、やるべきことをやった。生きるために、この領域で生存の権利を獲得するために。

そんなハジメの右手を暖かく優しい両手が握りしめる

「ハジメ君……良かった。心配したんだからね！これからは私も一緒にハジメ君と戦う！どんな困難が待ってても乗り越えて一緒に生きよう！」

僕は……香織と……こんな僕に寄り添ってくれる最愛と共にに生きたい。

こんな身体になっても好きだと仲間だと言ってくれた人たちの隣を歩みたい。

そうやって生きて……

そして……

故郷に帰りたい。

そう、心の深奥が訴える。

「ハジメ。挫けたって良い、悩んだって良い、弱音を吐きたきや吐いて良いんだ。只諦めちゃいけない。お前には俺たちが付いてる。どんなことだって仲間と一緒になら乗り越えられる！」

「僕も克也も南雲君の仲間だし友達だ。だから無理に一人でしようとしなくて良い。僕たちだって力を貸す。時には後ろを振り返ったって良い。大事なものを拾い集めたって誰も責めやしない。君の人生なんだ。だから後悔の少ない生き方をしよう。」

僕は幸せ者だ。愛する人や仲間がいる。僕は僕に出来ることで恩返ししていこう。

僕は／私は三人が好きだ。

僕は／私は、香織が／香織と城之内君と中村さんが大好きだ。

こんな僕を／私を仲間だと愛してくれると言ってくれた。

この思いはずっと消えない。消させやしない。

ずっと永遠に……だから僕は／私はここを絶対に脱出してやる！

こうして爪熊へのケジメを付けたハジメ。

四人はまだ見ぬ階層へと挑んでいくことになるのであった。

地獄の先の希望を探して

爪熊との決着を付けたハジメ。

そして四人は希望を求めてオルクス迷宮を下る。

道中身体を石化させるバジリスクが出現しハジメの左肘から徐々に石化させ始めた瞬間に香織から激流のごとく毒を吹き出し毒が効きにくいはずのバジリスクを毒で苦しめるとハイライトを消した瞳で

「私のハジメ君に何してるの？ そんなに死に急ぎたいなら楽にしてあげる。ハジメ君を石化させようとするなんて許さない：フフフフじっくりいたぶってあげたいけど、そんな時間も勿体ないから」

と一息に毒槍を作り出して毒に侵食されてない部分を切り落としてバジリスクは毒に沈んだ。その間に神水で回復したハジメと城之内、恵理は

「ひえ〜白崎のやつ怒ってんなあ、」

「香織にとって南雲君は大切だからね。そりゃ怒るよ。克也も女心を分かかってないなあ」

「あははは(；▽；) 香織も無茶しちや駄目だよ。香織に何かあっても僕は嫌だから…」

「ありがとうハジメ君！心配してくれるハジメ君も大好き！」ムギユ

「ほら新婚夫婦宜しくしないで進んでいかないと」

「まああんまり気を張りすぎても疲れちまうから程々にな。」

「はーい！」

そしてフラム鉱石という火気類を出せば爆発するという火気厳禁のエリアでは唐突に攻撃を受けて時は

「水霊術 プラス地霊術 金縛り！」

と恵理が水霊術による水で襲ってきた魔物を水浸しにして位置を特定して地霊術で縛り上げて壁へと叩きつけて魔物の正体を探るとサメのような魔物であったので恵理はそのままウォーターカッターで首を切断してタールのようになったフラム鉱石を大量に採取をしていく城之内たち。

「こういうのがあれば爆弾みたいに遠くから攻撃したり道が塞がってもこいつで壊せたりするから便利だぜ！」

「そういうえば恵理ちゃんそのサメどう食べるの？」

「サメ肉を普通に食べるのも良いけどどうせならフカヒレみたいに出来ないかなと思つてね。中華鍋でやれば美味しくなると思つて。」

「フカヒレかあ…あつちで食べたことないから食べたらどんな味がするんだろう？」

「まあ後のお楽しみだな！それよりここを抜けねえとまた気配なく来たら厄介だ。」
「そうだね！急ごう！」

と更に階を降りる

階を降りて安全を確認してサメ肉を調理してフカヒレ風味にすることが出来て四人で美味しく頂きステータスと技能も増えることになった。

四人とも各々魔力操作の技能も会得したので詠唱入らずでどんどん階層を降りていく。

そんな中で階層を降りていくうちにハジメや香織は城之内の新しい一面を見ることができた。

それは例えば、迷宮全体が薄い毒霧で覆われた階層では毒の痰たんを吐き出す二メートルのカエル（虹色だった）や、麻痺の鱗粉を撒き散らす蛾が（見た目モ〇ラだった）に襲われた時

「うおおおおおおお!? 恵理イイイ何とかわしてくれえええ」

「もう克也つたら相変わらずの虫嫌いなんだから…まあでもこれは流石に気持ち悪いね。さっきのタール状のフラム鉱石を遠くに投擲して…火霊術！」

ドガアアアアアアアアアアア

とフロア全体を揺らすほどの衝撃が響き渡り丸焦げになったカエルと蛾であった。

四人は香織が張った三重にした聖絶により無事であった。

「恵理ちゃんどれだけの火力で焼き払ってるの？」

「いやあく也が嫌がってるのを見ると僕も嫌だからつい激し目にね」

「城之内君虫駄目なんだ：ボソツ また一つ城之内君のこと知れた」

「そうだよ。それにオカルトとかの幽霊系も駄目だもんね」

「おおお俺は幽霊なんて信じねえ！」

「そうなんだ……あつあそこに火の玉が」

「うおおおお!？」

ええええ恵理頼むうううううう」

「フフフフフッ香織駄目だよ。あく也をからかっちゃ。

でも僕を頼ってくれるあく也も好きだなあ（へーへー）」

（……僕も／私もいざとなったら抱きつこうかなあ）

そうして階層を降り続ける四人。何かあってもよいように奥歯に神水を仕込んで嘸み砕ける程度に薄くした石で出来た小さな容器にしたり緊急用に仕込んでおいたりした。

そして当然、二体とも食べた。蛾を食べるのは流石に抵抗があったが、少しでも迷宮を攻略するためと割り切りそして自身を強化するためだと意を決して料理して食べた。

取り敢えず何の肉か分からないように唐揚げにして食べたが蛾の方がカエルよりちよつと美味かったことに、なんとなく悔しい思いをする城之内たちであった。

更に進むと密林のような階層に出た。物凄く蒸し暑く鬱蒼うつそうとしていて今まで一番不快な場所だった。この階層の魔物は巨大なムカデと樹だ。

密林を歩いていると、突然、巨大なムカデが木の上から降ってきたときは、全員全身に鳥肌が立った。余りにも気持ち悪かったのである。

しかも、このムカデ、体の節ごとに分離して襲ってきたのだ。一匹いれば三十匹はいると思えという黒い台所のGのような魔物だ。

城之内は無我夢中で炎の剣士の力を身に纏いサラマンドラも使い片っ端から炎で焼いていく。

香織も毒魔法で作った槍から剣、斧といったもので串刺しにしてハジメがドンナーでトドメをさしていくものの如何せん数が多く、「風爪」で切り裂く方法に切り替えた。それでも間に合わないものは慣れない蹴りや恵理が火霊術で焼いていくといった風に文字通り必死に戦った。

この時、ハジメは素早くリロードする技法と、蹴り技を磨くことを決意した。香織は何回か分裂ムカデの紫色の体液を全身に浴びながらもその毒も自分の物にして倍返しでムカデに喰らわせていた。

「もうっ！可愛い服だったのに台無しになっちゃったよ。」

「毒も滴る良い女って感じだね。」

「恵理服についた毒だけ焼くこととか出来たりしねえか？」

「うーん出来なくもないけどどうっかかり服を燃やして香織が素っ裸になっちゃったら困るから辞めとくよ。」

「？別に三人になら見られても大丈夫だよ？」

「女の子がそんなこと言っちゃ駄目でしょ！」

「白崎の暴走具合がヒートアップしてんなあ」

「香織のことをどんどん知れて嬉しいな（――）」

そしてムカデの次は樹の魔物でRPGで言うところのトレントに酷似していた。木の根を地中に潜らせ突いてきたり、ツルを鞭のようにしならせて襲ってきたり。

しかし、このトレントモドキの最大の特徴はそんな些細な攻撃ではない。この魔物、ピンチなると頭部をわっさわっさ振って振り赤い果物を投げつけてくるのだ。これには全く攻撃力はなく、飛んできた果物をハジメは食べてみたのだが、直後、数十分以上硬直した。毒の類だと思われ香織が激怒しかけたもののめちやくちや美味かったのだ。甘く瑞々しいその赤い果物は、例えるならスイカだった。リングゴではない。

この階層が不快な環境であることなど頭から吹き飛んだ。むしろ迷宮攻略すら一時

的に頭から吹き飛んだ。実に、何十日ぶりかの新鮮な果実である。城之内たちの眼は完全に狩人のそれとなり、トレントモドキを狩り尽くす勢いがかかった。ようやく満足して迷宮攻略を再開した時には、既にトレントモドキは三匹程残し全滅していた。

また来たときにこういったゾーンを通るのに食料があつた方がいいという配慮をしたそうである。

途中でパイのようにサクツとしたアップルパイ風味にしてみると果汁が中からジュワツと広がり甘い味が口を蹂躪するようであつた。これも神秘の中華鍋のおかげなのであろう。

そうして突き進んでいくうちに遂に50階層へと辿り着いた。

そこは今までよりも不気味で異様な雰囲気を感じ出していった。

それは、なんとも不気味な空間だった。

脇道の突き当りにある空けた場所には高さ三メートルの裝飾された荘厳な両開きの扉が有り、その扉の脇には二対の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋め込まれるように鎮座していたのだ。

偶然それを見つけた城之内はその空間に足を踏み入れた瞬間全身に悪寒が走るのを感じ、これはヤバイと一旦引いたのである。もちろん装備を整えるためで避けるつもりは毛頭ない。ようやく現れた“変化”なのだ。調べないわけにはいかない。

そうして四人は期待と嫌な予感を両方同時に感じていた。あの扉を開けば確実になんらかの厄災と相對することになる。だが、しかし、同時に終わりの見えない迷宮攻略に新たな風が吹くような気もしていた。

「一体ここには何があるつづうんだらうな？」

「さながらパンドラの箱だね。中には絶望がわんさかあるのか……それとも希望が入ってるのか？開けてみないと分からないね。」

「例え何が入っていてもここで立ち止まるわけにはいかない。」

「出たとこ勝負だな。」

「ハジメくんたちとなら何処までだつて行けるよ！」

そうして各々自分の今持てる武技や武器、そして技能、カードの整理。それらを一つ一つ確認し、コンディションを万全に整えていく。全ての準備を整え、扉へと歩みを進める。

扉の部屋にやってきた城之内たちは油断なく歩を進める。特に何事もなく扉の前にまでやって来た。近くで見れば益々、見事な装飾が施されているとわかる。そして、中央に二つの窪みのある魔法陣が描かれているのがわかった。

「わからないね。結構勉強したつもりだけど……こんな式見たことない。」

「克也分かる？」

「ハジメが分からねえのに俺が分かるわけないだろ」

「でもこれって改めてみると相当格式が高いというかなんか後生大事に閉じ込めてる感があるね。」

ハジメは無能と呼ばれていた頃、自らの能力の低さを補うために座学に力を入れていた。もちろん、全ての学習を終えたわけではないが、それでも、魔法陣の式を全く読み取れないというのは些いささかおかしい。

「相当、古いつてことなのかな？」

ハジメは推測しながら扉を調べるが特に何かがわかるといふこともなかった。いかにも曰いわくありげなので、トラップを警戒して調べてみたのだが、どうやら今のハジメ程度の知識では解読できるものではなさそうだ。

「仕方ない、いつも通り錬成で行こうかな？」

一応、扉に手をかけて押ししたり引いたりしたがビクともしない。なので、いつもの如く錬成で強制的に道を作る。ハジメは右手を扉に触れさせ錬成を開始した。

しかし、その途端、

バチイイ！

「うわっ!?!」

「ハジメくん!?!」

扉から赤い放電が走りハジメの手を弾き飛ばした。ハジメの手からは煙が吹き上がっている。急いで神水を飲ませる香織。その直後に異変が起きた。

——オオオオオオオオオ！！

突然、野太い雄叫びが部屋全体に響き渡ったのだ。

城之内たちはバツクステップで扉から距離をとり、腰を落として手をデッキに置き、ハジメはホルスターのすぐ横に触れさせいつでも抜き撃ち出来るようにスタンバイし香織は毒の槍をいつでも打ち出せるようにする。

雄叫びが響く中、遂に声の正体が動き出した。

「まあ、王道つてとこかな？そんなにごこを通したくないのか…」

苦笑いしながら呟く恵理。

扉の両側に彫られていた二体の一つ目巨人が周囲の壁をバラバラと砕きつつ現れた。いつの間にか壁と同化していた灰色の肌は暗緑色に変色している。

一つ目巨人の容貌はまるつきりファンタジー常連のサイクロプスだ。手にはどこから出したのか四メートルはありそうな大剣を持っている。未だ埋まっている半身を強引に抜き出し無粋な侵入者を排除しようと四人の方に視線を向けた。

その瞬間、

ドパンッ！

シユパンツ!

凄まじい発砲音と共に電磁加速されたタウル鉱石の弾丸と毒の槍が右のサイクロプスのたった一つの目に突き刺さり、そのまま脳をグチャグチャにかき混ぜた挙句、後頭部を爆ぜさせて貫通し、後ろの壁を粉碎した。

左のサイクロプスがキョトンとした様子で隣のサイクロプスを見る。撃たれたサイクロプスはビクンビクンと痙攣したあと、前のめりに倒れ伏した。巨体が倒れた衝撃が部屋全体を揺るがし、埃ほこりがもうもうと舞う。

「まずは一匹……二匹で来られたら厄介だもの……先に倒さない」と

「悪いけど、命懸けなんだから空気を読んで待つていられるほど出来た敵役じゃあないんだ。」

いろんな意味で酷い攻撃だった。四人の経験してきた修羅場を考えれば当然の行いのだろうが、あまりに……あまりにサイクロプス(右)が哀れだった。

おそらく、この扉を守るガーディアンとして封印か何かかされていたのだろう。こんな奈落の底の更に底のような場所に訪れる者など皆無と言っているはずだ。

ようやく来た役目を果たすとき。もしかしたら彼(?)の胸中は歓喜で満たされていたのかもしれない。満を持しての登場だったのに相手を見るまでもなく大事な一つ目ごと頭を吹き飛ばされる。これを哀れと言わずしてなんと言うのか。

ゲームなら待たされてしまいうだろうがしかしこれは現実だ。

命の懸かった場所で悠長に待つなど自殺行為以外の何物でもない。

サイクロプス（左）が戦慄の表情を浮かべはじめに視線を転じる。その目は「コイツなんてことしやがる！」と言っているような気がしないこともない。

「よし！横のは倒れたからあとはいっただけだな！」

「とにかく何かする前に片付けないとね。」

四人は、動かずサイクロプス（左）を睥睨する。それぞれの武器を見たことのないサイクロプスは警戒したように腰を低くしいつでも動けるようにしてはじめを睨む。

十秒、二十秒……

いつまで経っても動かないはじめに業を煮やしたのかサイクロプス（左）が雄叫びを上げ踏み込み剣を振り上げる

「頼むぜ！バーバリアン二号！」

と城之内は己のデッキからどこか鬼を彷彿させるような棍棒を持ったモンスターが現れサイクロプスの剣を受け止める。

すかさず今度は剣を握ってない方で打撃を加えるがそれを器用に足で受け止める。

ズウン ドゴオ ズシン！

剣と棍棒の応酬は続く。先程から何度も棍棒は当たっているのの先程よりも固いせ

いかダメージが、入りづらいようである。

「あの魔物防御の固有魔法を持つてるのか固いね。一点集中で倒すかさつきみたいにあの目の所を不意打ちで撃ち抜ければ！」

「でもそんな隙を晒すかどうか分からないね。今はあのバーバリアンが戦ってくれてるけどなにか良い案は……」

「一人でダメなら二人でだ！力を借りるぜ……本田！頼むバーバリアン一号！」

グオオオオオオオ

と二号とは別の赤いバーバリアンが出現する。

このバーバリアン一号は城之内の親友の本田からもらい受けたカードで友情の証として持ち歩いているものである。

「さらにデーモンの斧をバーバリアン二号へ装備！」

とどこか厳つい斧が現れそれを二号が装備する……のだから

おもむろに二号はデーモンの斧を置くとそれに伴い一号も棍棒を置く。

「何で棍棒を置いたんだ？それに一体何をやる気だ？」

ゴキッ　ゴキッ

と指を鳴らす二体のバーバリアン。

「何だろう？昔の克也みたいな……もしかして素手でやるってこと？」

「そんな?!いくらなんでも無茶じゃ」

と言う間にサイクロプスが剣を再び振り上げ向かってくる。

そして一号がまず剣を持つ手を思い切り強打し剣を叩き落とした。

続いて二号が、力強い掌打を鳩尾へと叩き込むと宙を浮くサイクロプス

そして一号、二号は同時にジャンプするとそのまま上から指を組んで上から振り下ろすダブルスレッズハンマーをお見舞いする。

そしてそのままデーモンの斧の刃が上向きにされた地面に叩きつけられ首を一刀両断された。

流れるような連携に呆然としたものの一号、二号は城之内にグッと親指を立てそのまま消えた。

「何だかバーバリアンに全部持ってかれちまったけどこれで終わりだな。」

「何かああいう連携見てると克也と本田くんみたいだったね。」

「本田君って?」

「俺の親友さ。何だかんだ付き合いも長いけどあいつに助けられたことも数えきれない程ある。」

「決闘王国でも何度も挫けかけた克也を励ましたり色んなことがあったね。」

「とりあえず扉に入りそうな魔石っぽいのがあったからはめてみよう!」

「香織いつの間に…ってどうか何だか手慣れてきたね。」

「もう片方も魔石があったからはめてみるよ。」

「そうだな。こんなに嚴重に守ってんだ。何かしら役に立つようなもんがありや良いけどな。」

「もしかしたら囚われのお姫様がいたりしてね…まあ流石にそんなファンタジーなことなんてあるわけないよね。」

「トータス自体俺たちにとつて不思議なことだらけだからな。恵理の言うようなこともあるかも知れねえな。」

そうして魔石をはめるとピツタリとはまり込んだ。

直後、魔石から赤黒い魔力光が迸ほとばしり魔法陣に魔力が注ぎ込まれていく。そして、パキヤンという何かが割れるような音が響き、光が収まった。同時に部屋全体に魔力が行き渡っているのか周囲の壁が発光し、久しく見なかつた程の明かりに満たされる。

そして……

「だ……これ……？」

それは長きに渡り封印された吸血姫にとつての救いになるのであった。

暗闇に射す一筋の希望

???

ここに閉じ込められてどれぐらいたったんだろう…

あの日に…叔父様から…いらないうって…

家臣のみんなも…私をいらないうって…化物つて

それでも良かった…叔父様がいてくれれば…

でもそんな小さな願いも…叶わなかった…

吸血鬼族の未来…大事だったけど…叔父様が褒めてくれて…

そんな些細な日常が続くと…思ってた…

裏切られた…

何がいけなかったんだろう…

ここに閉じ込められて…ずっと考えた…

でも分からなかった…

ずっと…ずっと…信じてたのに…

暗い…一人は…いや…

誰か……たすけて……

そんな思いを抱えて数百年も経った。

少女の心の中には裏切られた絶望で苛まれ

心に穴が空いたような虚無感が支配していた。

いつしか助けなんて来ないと……期待するだけ無駄だと自分に言い聞かせるようになっていた。

しかしその心は泣き叫んでいた。

そんなとき……

扉から一筋の光が射し込んだ。

それは絶望という箱に閉じ込められた少女に希望がもたらされたかのようなだった。

「だ……れ……?」

かすれた、弱々しい女の子の声だ。ビクリツとして四人は慌てて部屋の中央を凝視する。すると、先程の“生えている何か”がユラユラと動き出した。差し込んだ光がその正体を暴く。

「人……なのか?」

“生えていた何か” は人だった。

上半身から下と両手を立方体の中に埋めたまま顔だけが出ており、長い金髪が某ホラー映画の女幽霊のように垂れ下がっていた。そして、その髪の隙間から低高度の月を思わせる紅眼の瞳が覗のぞいている。年の頃は十二、三歳くらいだろう。随分やつれているし垂れ下がった髪でわかりづらいが、それでも美しい容姿をしていることがよくわかる。

流石に予想外だった四人は硬直し、紅の瞳の女の子も四人をジッと見つめていた。

こことは違う世界線ではハジメ一人で心身ともに擦りきれていたもの。ここには四人いる。そしてこの男には放っておくという選択肢はない。

「おいっ!?大丈夫か!」 タッタッタ

「城之内くん!」

「克也つたら……まあでも放っておけないね。」

「とにかく追いかけてよう!」

と四人は中央に閉じ込められている少女のもとへと駆ける。

「これって!?!栄養失調っぽいし体もポロポロ……なんて酷い……!」

「……たす……けて……」

「待つてろ！今出してやるからな！」

「待つて城之内くん！もし罠だったらどうするの！こんな場所に封印されるって余程のことじゃない？それなら事情を聞いてからでも遅くないと思う。」

「南雲くんの意見も一理あるし…事情話せそう？」

少女は頷くとたどたどしく話し始めた。

「私、裏切られて…私が先祖返りの吸血鬼で…すごい力持つてる…だから国の皆のために頑張った。でも…ある日…家臣の皆…お前はもう必要ないって…おじ様…これからは自分が王だって…私…それでもよかった…でも、私、すごい力あるから危険だって…殺せないから…封印するって…それで、ここに…」

枯れた喉で必死にポツリポツリと語る女の子。話を聞きながら四人は呻いた。なんとまあ波乱万丈な境遇か。しかし、とどこころ気になるワードがあるので、湧き上がるなんとも言えない複雑な気持ちを抑えながら、代表してハジメは尋ねた。

「君はどこかの国の王族だったの？」

「……（コクコク）」

「殺せないって？」

「……勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「……そ、それは凄まじいね。……すごい力ってそれ？」

「これもだけど……魔力、直接操れる……陣もいらぬい」

「陣も必要ないって凄いな。陣が分からなければ相手もそれが魔法か判別できないし反則じみてゐるね。」

少女の規格外な力を聞き四人は考える。

「たすけて……」

「……はあ……何か他人事のような気がしないなあ……昔の僕みたい……信じてたものに裏切られて……ひとりぼっちになって……克也、僕はこの娘を助きたい」

「そうだね。僕も助けてあげたい。裏切られたつとても辛いし一人になる怖さは想像以上に堪えるのを知ってるから。」

「ああ俺も助けたいと思う。こんな暗い場所で一人なんて可笑しくなつちまいそうだから困ってる奴は見逃せねえ。ここで見捨てるなんて簡単かもしれねえ。だがよそんなことで明日の自分が胸張って生きてくなんて俺には出来ねえ！」

「そうだね。うん！でもどうすれば……」

「もしかしたらこれ……錬成なら！」

とハジメは少女を捕らえる立方体に手を当てる。

「あつ！」

ハジメの魔物を喰ってから変質した赤黒い、いや濃い紅色の魔力が放電するように迸

る。

しかし、イメージ通り変形するはずの立方体は、まるでハジメの魔力に抵抗するように錬成を弾いた。迷宮の上下の岩盤のようだ。だが、全く通じないわけではない。少しずつ少しずつ侵食するようにハジメの魔力が立方体に迫っていく。

「ぐつ、抵抗が強い！……だが、今の僕なら！」

ハジメは更に魔力をつぎ込む。そこまでやってようやくやく魔力が立方体に浸透し始める。既に、周りはハジメの魔力光により濃い紅色に煌々と輝き、部屋全体が染められているようだった。

ハジメは更に魔力を上乗せする。女の子を封じる周りの石が徐々に震え出す。

「まだまだあー！」

「ハジメ！俺の魔力も持ってけ！」

と城之内は魔力を譲渡しハジメは気合を入れながら魔力をつぎ込む。属性魔法なら既に上位呪文級、いや、それではお釣りが来るかもしれない魔力量だ。どんどん輝きを増す紅い光に、女の子は目を見開き、この光景を一瞬も見逃さないとでも言うようにジツと見つめ続けた。

ハジメは初めて使う大規模な魔力に脂汗を流し始めた。少しでも制御を誤れば暴走してしまいそうだ。だが、これだけやっても未だ立方体は変形しない。ハジメはもうヤ

ケクソ気味に魔力を全放出してやった。

今や、ハジメ自身が紅い輝きを放っていた。正真正銘、全力全開の魔力放出。持てる全ての魔力を注ぎ込み意地の錬成を成し遂げる！

直後、女の子の周りの立方体がドロツと融解したように流れ落ちていき、少しずつ彼女の枷を解いていく。

それなりに膨らんだ胸部が露わになり、次いで腰、両腕、太ももと彼女を包んでいた立方体が流れ出す。一糸纏わぬ彼女の裸体はやせ衰えていたが、それでもどこか神秘性を感じさせるほど美しかった。そのまま、体の全てが解き放たれ、女の子は地面にペタリと女の子座りで座り込んだ。どうやら立ち上がる力がないらしい。

ハジメも座り込んだ。肩でゼハーゼハーと息をし、すっからかんになった魔力のせいで激しい倦怠感に襲われる。

城之内もハジメ程ではないものの倦怠感があるがそれでもそれを見せないように振る舞うが恵理にはお見通しで魔力ポーションを手渡されそれを飲む。

荒い息を吐き震える手でハジメは神水を出そうとして、その手を女の子がギュツと握った。弱々しい、力のない手だ。小さくて、ふるふると震えている。

ハジメが横目に様子を見ると女の子が真っ直ぐにハジメを見つめている。顔は無表情だが、その奥にある紅眼には彼女の気持ちが溢れんばかりに宿っていた。

そして、震える声で小さく、しかしはつきりと女の子は告げる。

「……ありがとう」

その言葉を贈られた時の心情をどう表現すればいいのか、ハジメには分からなかった。しかし、きつと消えることのない光が宿った気がした。

繋がった手はギュツと握られたままだ。いったいどれだけの間、ここにいたのだろうか。少なくともハジメの知識にある吸血鬼族は数百年前に滅んだはずだ。この世界の歴史を学んでいる時にそう記載されていたと記憶している。

話している間も彼女の表情は動かなかった。それはつまり、声の出し方、表情の出し方を忘れるほど長い間、たった一人、この暗闇で孤独な時間を過ごしたということだ。

しかも、話しぶりからして信頼していた相手に裏切られて。よく発狂しなかったものである。もしかすると先ほど言っていた自動再生的な力のせいかもしれない。だとすれば、それは逆に拷問だっただろう。狂うことすら許されなかったということなのだから。

「むう〜ハジメ君だったら私と言うものがあるがら〜」

「はいはい。感動のシーンを台無しにしないの」

「神水を飲めるのはもう少し後かな」と苦笑いしながら、気怠い腕に力を入れて握り返す。女の子はそれにピクンと反応すると、再びギュギュと握り返してきた。

「……名前、なに？」

女の子が囁くような声でハジメに否四人に尋ねる。そういえばお互い名乗っていなかったとお互いに苦笑いを深めながらハジメは答え、女の子にも聞き返した。

「ハジメ。南雲ハジメ。」

「俺は城之内克也だ！」

「僕は中村恵理だよ。将来的には城之内恵理になるけどね。(☆ゝ▽・)ノ」

「私は白崎香織。私も将来的には南雲香織になるよ！」

女の子は「ハジメ、カツヤ、ハジメ、エリ、ハジメ、カオリ、ハジメ」と、さも大事なものを内に刻み込むように繰り返し呟いた。

……ハジメの名前を入念に言っていたような気がするが気にしてはいけない

そして、問われた名前を答えようとして、思い直したようにハジメにお願いをした。

「……名前、付けて」

「ん？付けるってどうして？まさか忘れたとか？」

長い間幽閉されていたのならあり得ると聞いてみるハジメだったが、女の子はふるふると首を振る。

「もう、前の名前はいらぬ。……ハジメの付けた名前がいい」

「前の自分と決別したいってことかな？」

「……はあ、そうは言っても…」

前の自分を捨てて新しい自分と価値観で生きる。

ハジメも城之内がいなければそんな風になっていたかもしれないと思いに深けるが女の子は期待するような目でハジメを見ている。

「そうだな…なら沙都子とかはどうだ！」

「何だか…百合百合しくて病みそう…却下」

「それならメアリーなんてどうかかな！」

「絵とかに拐われて監禁しそうな名前…却下」

「うくん…ヒカリは？もしくはルナかな？暗い過去からこれからの人生に光あれとか月みたいに綺麗な髪だからとかなんだけど。」

「…おしい…」

城之内たちが考える中ハジメはカリカリと頬を掻くと、少し考える素振りを見せて、自分の考えた彼女の新しい名前を告げた。

「ユエ」なんてどうかかな？ ネーミングセンスないから気に入らないなら別のを考えるけど……」

「ユエ？ ……ユエ……ユエ……」

「ああ、ユエって言うのは、僕の故郷で『月』を表すんだよ。最初、この部屋に入ったとき、君のその金色の髪とか紅い眼が夜に浮かぶ月みたいに見えたから……どうかな？」

「確か中国の読み方でそう読むんだっけ？ 何だかしっくりくる気がするね。」

思いのほかきちんとした理由があることに驚いたのか、女の子がパチパチと瞬きする。そして、相変わらず無表情ではあるが、どことなく嬉しそうに瞳を輝かせた。

「……んっ。今日からユエ。ありがとう」

「うん。取り敢えずね……」

「？」

礼を言う女の子改めユエは握っていた手を解き、着ていた外套を脱ぎ出すが恵理が予備の服を取り出してユエに羽織らせる。不思議そうに見るユエにハジメは

「いつまでもその格好だと正直その……目のやり場に困るといっか……ユエの綺麗な身体をもっと眺めてたいけどその風邪引いちやうし……香織とはまた別の魅力が垣間見えて……」

その……」

「……」

そう言われて差し出された服を反射的に受け取りながら自分を見下ろすユエ。確か

に、すっぽんぼんだった。大事な所とか丸見えである。ユエは一瞬で真つ赤になると恵理からの服をギョツと抱き寄せ上目遣いでポツリと呟いた。

「ハジメのエツチ…そんなに…私のカラダみたいなら後でいくらでも見せてあげる…」
「……」

何を言っても墓穴を掘りそうなのでノーコメントで通すハジメ。ユエはいそいそと服を羽織る。ユエの身長は百四十センチ位しかないので恵理の服はぶかぶかだ。一生懸命裾を折っている姿が微笑ましい。

因みに城之内はちゃんと後ろを向いている。

ハジメは、その間に神水を飲んで回復する。活力が戻り、脳が回転を始める。そして“気配感知”を使い……凍りついた。とんでもない魔物の気配が直ぐ傍に存在する。とに気がついたのだ。

場所はちようど……真上！

ハジメがその存在に気がついたのと、ソレが天井より降ってきたのはほぼ同時だった。

咄嗟に、ハジメはユエに飛びつき片腕で抱き上げると全力で“縮地”をする。他の三人も飛び退く一瞬で、移動したハジメが振り返ると、直前までいた場所にズドンツと地

響きを立てながらソレが姿を現した。

その魔物は体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしやわしやと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。

一番分かりやすいたとえをするならサソリだろう。二本の尻尾は毒持ちと考えた方が賢明だ。明らかに今までの魔物とは一線を画した強者の気配を感じる。自然とハジメの額に汗が流れた。

部屋に入った直後は全開だった“気配感知”ではなんの反応も捉えられなかった。だが、今は“気配感知”でしっかり捉えている。

ということとは、少なくともこのサソリモドキは、ユエの封印を解いた後に出てきたということだ。つまり、ユエを逃がさないための最後の仕掛けなのだろう。それは取りも直さず、ユエを置いていけばハジメだけなら逃げられる可能性があるということだ。

しかし考えるハジメをサソリモドキは待つてくれず尻尾の先から紫色の液体：見るからに毒を放つてくる。

反応が遅れたハジメであつたが

「っ…させない！」

とハジメとユエの前に香織が割り込み毒魔法でコーティングした装束ポイズンドレスを展開し毒の盾を受け流すように作り毒を分散させる。

シユユウウ

しかし毒の成分が強いためか相殺しきれなかった毒が香織の肌を焼く。

「カオリ！」

「二人とも大丈夫？」

「それより早く神水を！」

「大丈夫だよ。私は治療師だからこれぐらいなら平気。」

と天恵で自身の傷を癒す。

「白崎！野郎！一刀両断侍！ワイバーンの戦士！ランドスターの銃士！」

「地霊術改 重！」

と城之内は三体のモンスターを召喚し恵理は新たに作り出した地霊術の改良型で一定の重力を短時間操作する擬似的な重力操作を施しモンスターの速度を上げる

「どうして？」

「うん？」

「どうして逃げないの…ハジメたちだけなら逃げれるのに…」

「…助けるだけ助けてその後は知らないなんてそんな無責任なことをしたくない…それに折角仲良くなれたんだ。もつとユエと語り合いたいし見捨てたくないんだ。」

「ユエちゃんを見捨てたらあの時ハジメ君を裏切ったあいつらみたいになる…それにハ

ジメ君が見捨てないって言ったんだもん。それにユエちゃんとお話しも沢山してみたからね。」

そして一度モンスターたちに戦闘を任せた城之内たちはハジメたちの方へと戻る。

「三人とも無事？」

「うん！大丈夫だよ。」

「カツヤもエリもどうして逃げないの……」

「俺が助けてえと思つたから、それになどうにもユエの目を見るとあの時の静香を思い出すんだ。」

「シズカ？」

「俺の妹だ。あいつは目の病気だよ。一生何も見えなくなつちまうとこだった。暗闇が怖いって……時には眠るのが怖いって。」

寝ておきたら何も見えなくなるんじゃないやねえかって。ユエの目を見るとな暗闇が怖いって言つてたあいつと被つちまつてよ。それにユエが折角暗闇の中で光を見つけたのを俺たちが遮るなんてあつちやいけねえ！」

「そうだね。そんなことあつちやいけない。それに助けるって僕は決めたんだ！自分の言葉を曲げるなんてことしたら克也の隣で一緒に歩むなんて出来ないからね！」

そうしてハジメはユエにポーチから取り出した神水をユエに渡す。

「んじゃあやるぜ!!」

「そうだね!」

「さしずめ囚われのお姫様救出劇ってところかな?」

「僕たち四人ならどんな敵だろうと敵わないって教えようか!」

そして城之内は一度、一刀両断侍を呼び戻し

「一刀両断侍を生け贄に魔法カード発動! スターブラスター!」

と何処からともなくサイコロを手にした天使なのか悪魔なのか判別出来ないのが現れる。

「スターブラスターの効果! モンスター、一体をコストにサイコロの出た目の数とコストにしたモンスターのレベルの合計したレベルのモンスターを手札から特殊召喚する!」

「サイツ!」

ゴロツゴロゴロゴロ

バーン 5

「出た目の数5と一刀両断侍のレベル2を足した数は7! トータスじゃ俺の魔力が足りねえから召喚しづらいが一刀両断侍の力とスターブラスターのエネルギーを糧に現

れろ！」

その場に旋風が巻き起こる！

「俺の相棒で魂のカード！レッドアイズ・ブラックドラゴン！」

グオオオオオオオオオオオ

その姿を見たユエは昔に叔父が語った昔話の竜人族の話しを思い出す。

それは高潔で清廉な一族で良く王族の在り方の手本のように憧れの存在

今黒竜は少女の障害を粉碎せんとその姿を現した。

ギチギチと音を立てながらにじり寄ってくるサソリモドキ。城之内たちは背中
にユエを感じつつ、サソリモドキを相手取るのであった。

封印部屋の化物退治

封印部屋にて少女を発見した城之内たち。

ハジメの錬成により囚われた少女を救出したものの封印解除と同時にサソリのような魔物が少女、ユエを狙う。

城之内はレッドアイズを召喚し応戦をするのであった。

サソリモドキはレッドアイズを脅威と見たのかももう一本の尻尾の針がレッドアイズに照準を合わせた。そして、尻尾の先端が一瞬肥大化したかと思うと凄まじい速度で針が撃ち出され針が途中で破裂し散弾のように広範囲を襲う。

「レッドアイズ!!」

掛け声と共に上昇し難なく散弾をかわす。

レッドアイズもお返しと無数の火球を吐き出しサソリモドキへと向かう。

しかしサソリモドキはその見た目に反して素早い動きで躲すと今度は城之内たち：否、後ろのユエに向けていた。

その隙を逃さずワイバーンの戦士が後ろへ回り込み尻尾を切断しようと剣を振るう。

キーン!

しかし固い甲羅に阻まれ切断に至らなかつたものの散弾は見当違いの方向へと飛ぶ。

「ワイバーンの戦士でも切断できないほど固いなんて！」

「だが攻撃を反らすことは出来そうだな。」

「気を付けないといけないのはあのハサミと溶解液、それに尻尾の散弾だね。そして非常に固い甲羅をどう削るかだね。」

「毒のほうは何とかなるけどあのサソリ、ユエちゃんを狙ってるから気を付けないと！」
そう言いながら四人はユエを守るようにし、攻撃を加える。

城之内はワイバーンの戦士とランドスターの銃士にサソリもどきの動きを牽制させるようにしてもらいレッドアイズは翼を大きくはためかせ真空刃を生み出しサソリもどきに傷を付けていく。

その風に合わせて香織は毒魔法を放つが見た目によらず素早い動きで躲される。

何度か液状の毒を広範囲で撒くもののもどれも躲される。

サソリもどきはなにがなんでもユエを逃したくないようで攻撃を受けながらも溶解液を広範囲に撒き散らす。

それを城之内は難なく躲して右手にサラマンドラを装備してその炎で蒸発させる。

さらに香織は全員に付加魔法で速度を上昇させ、対応を速める。

恵理は風霊術と火霊術を組み合わせた巨大な炎弾で応戦する。

ユエを抱えながらも自身もドンナーによる射撃で応戦するハジメは散弾を放ったサソリもどきへポーチから取り出した手榴弾を投げつける。

サソリモドキはドンナーの一撃を軽々耐えきり、更に散弾針と溶解液を放とうとした。しかし、その前にコロコロと転がってきた直径八センチ程の手榴弾がカツと爆ぜる。その手榴弾は爆発と同時に中から燃える黒い泥を撒き散らしサソリモドキへと付着した。

いわゆる“焼夷手榴弾”というやつだ。タールの階層で手に入れたフラム鉱石を利用したもので、摂氏三千度の付着する炎を撒き散らす。

絶叫を上げながらサソリモドキはその八本の足を猛然と動かし、ハジメ達に向かって突進した。四本の大バサミがいきなり伸長し大砲のように風を唸らせながらユエを抱えるハジメに迫る。

一本目を“縮地”でかわし、二本目を“空力”で跳躍してかわす。三本目を“豪脚”で蹴り流して体勢を崩しているハジメを、四本目のハサミが襲う。
が、ハジメは、一人ではなく仲間がいる。

城之内はサラマンドラを振り上げ恵理の地霊術によって上から下へと一時的に重力を上げたことにより

ザシユッ！

ハサミの一本を切断することに成功する。

背中のユエに、なるべく負担をかけないように動きハジメは、そのまま空中を跳躍し、サソリモドキの背中部分に降り立った。そして、暴れるサソリモドキの上でなんとかバランスを取りながら、ゴツツと外殻に銃口を押し付けるとゼロ距離でドンナーを撃ち放った。

ズガンツ!!

凄まじい炸裂音が響き、サソリモドキの胴体が衝撃で地面に叩きつけられる。

しかし、直撃を受けた外殻は僅かに傷が付いたくらいでダメージらしいダメージは与えられていない。その事実には歯噛みしながら、ハジメはドンナーを振りかぶり「風爪」を発動するが、ガキツという金属同士がぶつかるような音を響かせただけで、やはり外殻を突破することは敵わなかった。

「あれで壊れねえとかどんだけ硬えんだ!?!」

「攻撃よりも防御が高い…!それなら…克也!ランドスターにこれを!」

と恵理は装備魔法カード、バスターランチャーを呼び出す。

「!そういうことか!やつぱ恵理は使いになるぜ!ランドスターの銃士にバスターランチャーを装備!」

ランドスターの銃士は手持ちの銃からバスターランチャーを装着する。

そして狙いを定めると

BANG!!

サソリもどきへと放たれるとおおバサミ二本が吹き飛ぶ。

すかさず胴体にも撃ち込むと大きく仰け反りながら吹き飛ぶ。

「…凄い！でも…どうして？」

「…そうか！バスターランチャーは攻撃力1000以下のモンスターのみ装備可能なカード。」

ランドスターの銃士の攻撃力は900！

効果は確かダメージ計算時、相手モンスターが攻撃表示なら攻撃力、守備表示なら守備力が2500ポイント以上の場合、装備したモンスターの攻撃力は2500ポイントアップする！トータスでの基準だと耐性だけどあの甲羅の防御力も合わせて2500以上っていう判定になったんだ！」

「恵理ちゃんはそのままで計算してたってことだね！」

「ああ！でも油断すんなよ。まだあいつは倒れてねえからな！」

「ここからが正念場だね。」

バスターランチャーの衝撃で離れたサソリもどきを見てユエは自分を助けてくれる四人を見て決意する。

「…ハジメ…」

「どうしたのユエ？」

「…信じて…」

カプツ チユウウ

とユエはハジメの首筋にカプリと吸い付くように血を吸い始めた。

「ユエちゃん!?!何してるの!?!」

「あれって吸血?」

「何だかわかんねえけど意味もなくやるわけねえからな。それに信じてって言ったんだ。なら俺たちはこいつを食い止めようぜ!」

香織は渋々ながらもサソリもどきに向き合い再び激突する。

「キイシヤアアアア!!」

サソリモドキの咆哮が轟く。どうやらバスターランチャーの攻撃が効いていたようである。

こちらの位置は把握しているようで、残ったハサミを向けて尻尾を使い推進力を得てこちらへ突撃してくる。

避ければ動けないハジメとユエにぶつかると城之内はサラマンドラから拘束して反らすために鎖付きブーメランへと装備し直し、恵理も風霊術で押し返そうとするが

「そろそろかな？」

と香織が言うと

ドシッーン！

とサソリもどきは急に倒れ痙攣するかのようになり胴体を地面に打ち付けた。

「いったい何が!？」

「もしかして香織が?！」

「うん。このサソリもどき機動力もあるからそれを封じないと思つてさつきレッドアイズの風圧の時に麻痺毒をまいて

それから広範囲に方向感覚を麻痺させる作用の菌を毒と一緒にまいて城之内君のサラマンドラの炎で気化した毒と菌を動き回つたサソリもどきが吸い込んで漸く効いてきたつてところかな。」

「やるじゃねえか白崎!！」

「香織も中々強かになつたね!！」

そうしてある程度吸い終わりでどこか熱に浮かされたような表情でユエはペロリと唇を舐める。

その仕草と相まって、幼い容姿なのにどこか妖艶さを感じさせる。どういう訳か、先程までのやつれた感じは微塵もなくツヤツヤと張りのある白磁のような白い肌が戻っていた。

頬は夢見るようなバラ色だ。紅の瞳は暖かな光を薄らと放っていて、その細く小さな手は、そつと撫でるようにハジメの頬に置かれている。

その仕草はとても綺麗で同姓である香織も見惚れるほどであった。

恵理はやつぱり綺麗だなと感慨深く見ていた。

「……………」ちそうさま」

そう言うと、ユエは、おもむろに立ち上がりサソリもどきに向けて片手を掲げた。同時に、その華奢な身からは想像もできない莫大な魔力が噴き上がり、彼女の魔力光なのだろう——黄金色が暗闇を薙ぎ払った。

そして、神秘に彩られたユエは、魔力色と同じ黄金の髪をゆらりゆらりとなびかせながら、一言、呟いた。

「蒼天」

その瞬間、サソリモドキの頭上に直径六、七メートルはありそうな青白い炎の球体が
出来上がる。

その大きさをと魔力の強さを目の当たりにする驚く四人。

そして毒による影響が残りつつも余程熱いのか悲鳴を上げて離脱しようとするサソ
リモドキ。

だが、奈落の底の吸血姫がそれを許さない。ピンつと伸ばされた綺麗な指がタクトの
ように優雅に振られる。青白い炎の球体は指揮者の指示を忠実に実行し、逃げるサソリ
モドキを追いかけ……直撃した。

「グウギイヤアアアアアア!」

サソリモドキがかつてない絶叫を上げる。明らかに苦悶の悲鳴だ。着弾と同時に青
白い閃光が辺りを満たし何も見えなくなる。城之内たちは腕で目を庇いながら、その壮
絶な魔法を唯々呆然と眺めた。

やがて、魔法の効果時間が終わったのか青白い炎が消滅する。跡には、背中の外殻を
赤熱化させ、表面をドロリと融解させて悶え苦しむサソリモドキの姿があった。

あの摂氏三千度の“焼夷手榴弾”でも溶けず、ゼロ距離からレールガンを撃ち込まれ
てもビクともしなかった化け物の防御を僅かにでも破ったユエの魔法を称賛すべきか、
それだけの高温の直撃を受けて表面が溶けただけで済んでいるサソリモドキの耐久力

を褒めるべきか、ハジメとしては悩むところである。

トサリと音がして、ハジメが驚異的な光景から視線を引き剥がし、そちらを見やると、ユエが肩で息をしながら座り込んでいる姿があった。どうやら魔力が枯渇したようだ。

「大丈夫ユエ！」

「ん……最上級……疲れる……信じてくれて……ありがとう」

「良いってことよ！」

「ユエちゃん凄い魔法だったよ！」

「後は僕たちに任せて！」

「ん、頑張つて……」

とサソリもどきは焼け焦げながらも散弾を飛ばそうと尻尾をむけるが

天井から眩い光が目に入る。

そこには口にエネルギーを溜めたレッドアイズの姿が！

「トドメだ！レッドアイズ！黒炎弾！！」

限界まで溜めた黒炎が放たれた。

ドゴオオオオン

サソリもどきへ再び炎弾が着弾する。

「ギシヤアアアアアアアアアア」

断末魔を上げながらサソリもどきは暫く暴れたが徐々にその動きは鈍り

ズズツ…ズゾオン

と倒れた。

「…ふうふう。何とかなつたな。」

「一時はどうなるかと思つたけど倒せて良かったよ。」

「そうだね。ユエちゃんも守れたし一件落着だね！」

「みんなの力とユエのお陰だね。」

と各々言う中ユエはたどたどしい足取りだがゆっくりとレッドアイズに近寄ると、

「やっぱり…伝承に聞いた通り…弱気を助け強気を挫く高潔な姿…聞いた通りの竜人族の姿そのまま…助けてくれて…ありがとう」

グオオオオオ

レッドアイズは頷きながら役目を終えて還る。

名残惜しそうにするユエだが、今度は四人に向き合い

「改めて…信じてくれて…助けてくれてありがとう。」

「俺たちの方こそユエの魔法が有ったから勝てたんだ！」

「そうだね。あのままだったらジリ貧だったもんね。」

「私たちの方こそ助けてくれてありがとう！」

「ユエの魔法 魔力光も綺麗だったし凄いい精密なコントロール、こつちに来てから一番凄かったよ。」

「?こつちつて?」

「ああそれはだな。」

「克也。まずはここを出よう。ユエが、ずっと閉じ込められてたところだからあんまり居たくないだろうし拠点でそれからゆつくり語らえばいいしね。それに香織の毒とかでユエに悪影響がでないとも限らないからね。」

「そうだな。よし行くか!」

無事に封印部屋のサソリもどきを倒した城之内たち。

新たに魔法が得意なユエを仲間に加え、一同は拠点へと戻るのであった。

吸血姫との語り

サソリモドキを倒した城之内達は、サソリモドキとサイクロプスの素材やら肉やらを拠点に持ち帰った。

最初その巨体と相まって物凄く苦勞したのだが、最上級魔法の行使により、へばったユエに今度は香織が血を飲ませると瞬く間に復活し見事な身体強化で怪力を發揮してくれたため、なんとか運び込むことができた。

そんな訳で現在お互いのことを知るため消耗品を補充しながら、香織は新しく手に入った魔物肉を調理し、話し合っていた。

「吸血鬼族は確か300年ぐらい前に滅んだって話しだっけか。つうことはユエって少なくとも三百歳以上なわけか？」

「……マナー違反」

「克也女の子に年の話しはダメなんだからね！」

ユエが非難を込めたジト目で城之内を見る。女性に年齢の話はどの世界でもタブーらしい。

ハジメは記憶を掘り起こす。

三百年前の大規模な戦争のおり吸血鬼族は滅んだとされていたはずだ。実際、ユエも長年、物音一つしない暗闇に居たため時間の感覚はほとんどないそうだが、それくらい経っていてもおかしくないと思える程には長い間封印されていたという。二十歳の時、封印されたというから三百歳ちよいということだ。

「吸血鬼って、皆そんなに長生きするの？」

「……私が特別。『再生』で歳もとらない……」

聞けば十二歳の時、魔力の直接操作や『自動再生』の固有魔法に目覚めてから歳をとっていないらしい。普通の吸血鬼族も血を吸うことで他の種族より長く生きるらしいが、それでも二百年くらいが限度なのだそうだ。

ちなみに、人間族の平均寿命は七十歳、魔人族は百二十歳、亜人族は種族によるらしい。エルフの中には何百年も生きている者がいるとか。

ユエは先祖返りで力に目覚めてから僅か数年で当時最強の一角に数えられていたそう、十七歳の時に吸血鬼族の王位に就いたという。

なるほど、あのサソリモドキの外殻を融解させた魔法を、ほぼノータイムで撃てるのだ。しかも、ほぼ不死身の肉体。行き着く先は『神』か『化け物』か、ということだろう。ユエは後者だったということだ。

欲に目が眩んだ叔父が、ユエを化け物として周囲に浸透させ、大義名分のもと殺そう

としたが、「自動再生」により殺しきれず、やむを得ずあの地下に封印したのだという。ユエ自身、当時は突然の裏切りにショックを受けて、碌に反撃もせず混乱したままならんかの封印術を掛けられ、気がつけば、あの封印部屋にいたらしい。

「胸くそ悪い話しだぜ。目先の欲で大事な家族を裏切るつて。もしそいつにあつたら一発ガツンと話し合いしてやる！」

「まあそうだね。人って何かあると豹変しちゃうから……」

と恵理はユエを後ろから優しく抱きしめながら慈愛に満ちた顔で撫でている。

ユエも恵理からとても純粋な好意を感じるためリラックスしている。

そういった事情もありあのサソリモドキや封印の方法、どうやって奈落に連れられたのか分からないそうさ。もしかしたら帰る方法がと期待したそこまで上手い話しはないかと切り替える。

ユエの力についても話を聞いた。それによると、ユエは全属性に適性があるらしいがユエ曰く、接近戦は苦手らしく、一人だと身体強化で逃げ回りながら魔法を連射するくらいが関の山なのだそうさ。もつとも、その魔法が強力無比なのだから大したハンデになっていないのだが。

ちなみに、無詠唱で魔法を発動できるそうだが、癖で魔法名だけは呟いてしまうらし

い。魔法を補完するイメージを明確にするためになんらかの言動を加える者は少ないので、この辺はユエも例に漏れないようだ。

“自動再生”については、一種の固有魔法に分類できるらしく、魔力が残存している間は、一瞬で塵にでもされない限り死なないそうだ。

逆に言えば、魔力が枯渇した状態で受けた傷は治らないということ。

つまりあの時長年の封印で魔力が枯渇していたユエはサソリモドキの攻撃を受けていればあつさり死んでいたということだ。

「それで……肝心の話なんだけど、ユエはここがどの辺りか分かるかな？ 他に地上への脱出の道とか」

「……わからない。でも……」

ユエにもここが迷宮のどの辺なのかはわからないらしい。申し訳なさそうにしながら、何か知っていることがあるのか話を続ける。

「……この迷宮は反逆者の一人が作ったと言われてる」

「反逆者？」

「反逆者……神代に神に挑んだ神の眷属のこと。……世界を滅ぼそうとしたと伝わってる」

そして反逆者の話を聞くのだが

(ねえ克也。)

(どうした?)

(何だか変な気がしない? 世界を滅ぼそうとした何て言うけどさ、王国の異常なまでの信仰心とかこの世界の歪さを見ると)

(そう言われりやそうだな。こつちの世界でも宗教の話しなんてあるけど反発だってあるし衝突なんてしよつちゆうあるしもしかしたら)

(うん。裏があるかもしれないね。一先ずそのダンジョンの最奥に何かしらあるかもだし結局進むしかないね。)

一段落してサイクロプスのような魔物肉を調理した香織がハジメに食べさせる中ユエは

「……どうして4人はここにいるの?」

ユエには他にも沢山聞きたいことがあった。なぜ、魔力を直接操れるのか。なぜ、固有魔法らしき魔法を複数扱えるのか。

なぜ、魔物の肉を食べて平気なのか。左腕はどうしたのか。そもそもハジメは人間なのか。ハジメが使っている武器は一体なんなのか?

先程の竜人族の姿やは何なのか?

初めてのことなのかユエ自身一人ぼつちの時間が長かったからか様々なことに興味

の尽きない様子であった。

四人はゆっくりと語り聞かせる

ハジメたちが、仲間と共にこの世界に召喚されたことから始まり、無能と呼ばれていたこと、そんな自分を気に掛けてくれる城之内のこと

ベヒモスとの戦いでクラスメイトの誰かに裏切られそれでも城之内を助けたいと奈落に落ちたこと、

ハジメを助けるために王国を飛び出し奈落の底へと飛び込んだこと。

魔物を喰らって身体が変化したこと、

変化した自分を仲間と言ってくれた人との大切な繋がりのこと

爪熊とのケジメをつける戦いと願い

ポーシヨン（ハジメ命名の神水）のこと、故郷の兵器にヒントを得て現代兵器モドキの開発を思いついたことをツラツラと話していると、いつの間にかユエの方からグスツと鼻を吸るような音が聞こえ出した。

「なんだ？」と再び視線を上げてユエを見ると、ハラハラと涙をこぼしている。ギョツとして、ハジメは思わず手を伸ばし、流れ落ちるユエの涙を拭きながら恵理は落ち着かせるかのように頭を撫でる。

「ユエやっぱりどこか痛いところかー！」

「ううん……ぐす……ハジメたち……つらい……私もつらい……」

どうやら、四人のために泣いているらしい。ハジメは少し驚くと、表情を苦笑いに変えてユエの頭を撫でる。

「良いんだ。もうクラスメイトのことは八重樫さんや園部さん……谷口さんぐらいしか気にならないしそれ以外は割りかしどうでもいいんだ。

だって本当に大事なものは側にあるから。今はこんなに変わってしまった僕でも受け入れてくれる大切な人を守りたいんだ。

そんな些事にこだわっても仕方無いから。

ここから出て復讐しに行つて、それでどうすんだつて話だよ。

それより生き残る術を磨くこと

故郷に帰る方法を探すこと

それに全力を注ぎたいな。」

スンスンと鼻を鳴らしながら、撫でられるのが気持ちいいのか猫のように目を細めていたユエが、故郷に帰るといふハジメの言葉にピクリと反応する。

「……帰るの?」

「うん? ……元の世界について……そりゃあ帰りたいさ。」

帰りたいよ。……色々変わってしまったけど

……故郷に……家に帰りたい……」

「……そう」

「ユエ？」

恵理の腕の中でユエは沈んだ表情で顔を俯かせる。

そして、ポツリと呟いた。

「……私にはもう、帰る場所……ない……」

その言葉はとて重かった。

彼女自身国に叔父に裏切られハジメたちの話しから吸血鬼族も滅んでしまっている。

そんな中で出会った四人が帰ってしまえば……

ユエは顔を俯かせる。

「ならよ俺たちと一緒に来りや良いさ！」

「そうだね。もうユエは友達なもの。助けてはい終わりなんてことしないよ。」

「ユエちゃんもおいでよ。私たちの世界と一緒に案内して上げる！」

「もうユエを一人にしないよ。僕たちと一緒にどうかな？」

おずおずと「いいの？」と遠慮がちに尋ねる。しかし、その瞳には隠しようもない期待の色が宿っていた。

「おうよ！戸籍とかその辺は癩だが海馬の野郎かペガサスに言やあ何とかなんだろう」
「まあ社長も異世界の魔法とか見せたりすれば会社をさらに発展できるしね。」

キラキラと輝くユエの瞳を見て四人は微笑む。

今までの無表情が嘘のように、ユエはふわりと花が咲いたように微笑んだ。思わず、見蕩れてしまうハジメと香織。

恵理と城之内もこの顔を曇らせたくないと思笑む。

呆けた自分に気がついて慌てて首を振った。

恥ずかしがるハジメは作業に没頭することにし、香織もその手伝いをする。

今度は恵理がサソリもどきを調理し始めたので今度は城之内の膝の上に乗リユエは興味津々でデュエルモンスターズ覗き込んでいる。

「どうしたんだユエ？」

「カツヤこれは？凄いい色とりどりで綺麗?？」

「こいつはデュエルモンスターズっていつてな。俺たちの世界じゃ子供から老人まで幅広く知れ渡っててな。世界大会もあっているんな奴らと交流だつて深まってデュエルは奥が深いんだぜ。」

「…凄いや?カツヤたちの世界…私もやってみたい！」

と暫く城之内はユエに自分のカードを見せながら自分にとってどれほど助けられたのかをユエに語りユエも城之内の話しを興味深く聞きながら小さなカードに様々なイラストに見惚れていた。

「…カツヤこのカード…」

「ん？ 炎の剣士がどうした？」

「…何だか不思議な感じがする。魔力みたいな似た力？」

「多分だけどデュエルモンスターズの精霊だな。炎の剣士には俺がまだまだ未熟な時から助けられてな、懐かしいぜ。」

「…カツヤたちと一緒にいた竜人族の姿は？」

「もしかしてレッドアイズのことか？」

と城之内はレッドアイズのカードを見せる。

「…カツヤたちの世界にも竜人族がいるの？」

「そうだなあ俺たちの世界は人間しかいねえんじゃないか。俺が知らねえだけでいる可能性はあるけどな。」

「…そうなんだ。レッドアイズ…凄いカツコ良かった！」

「だろ！」

「何だか城之内君とユエちゃん凄い仲良くなってるね。」

「克也も何だかんだ面倒見が良いからね。」

「ユエと城之内君何だかあれだね。親子みたいだね。」

「娘に色んなことを教えるお父さんだね。じゃあ恵理ちゃんはお母さんだね。」

「…お母さん…か…」

「恵理ちゃん？」

一瞬暗い顔をした恵理を香織は心配する。

「何でもないよ。二人ともどんな感じ？」

「うん良い出来だよ。これなら更に更に火力が出るから攻撃力は上がるよ。」

サソリもどきから取れた鉱石であるシユタル鉱石は

魔力との親和性が高く、魔力を込めた分だけ硬度を増す特殊な鉱石なためか強度も抜群でハジメの攻撃のバリエーションが増えた。

ユエはハジメと香織の作業も隣で見つつハジメのする作業を間近で見るとかハジメも照れくさそうに見て更に香織のやっていることも近くで見ると香織も距離感が近いからか時折顔を赤らめたりしていた。

そして恵理がサソリもどきを調理し終えて

「はい！サソリもどきのパエリアだよ！」

「うお！恵理の作るのは何でも旨そうだけぞ！」

「これは中々お目にかかれないね。」

「サソリとかロボスターに近いのかな？」

とハジメは新たに五人分のお皿を錬成するのだが

「ユエ毒抜きはしてあるけど魔物肉大丈夫そう？」

「…ん、平気。それにハジメたちからももうもらってるから」

「ああ血だったね。」

「…うん。ハジメとカオリの血…美味」

「あく僕は魔物肉直接食べたから不味いんじゃない？」

「…熟成の味」

ユエ曰く、何種類もの野菜や肉をじっくりコトコト煮込んだスープのような濃厚で深い味わいらしい。

香織はピリツとした辛みの中にあるまろやかさが癖になるとのこと。

二人の血を交互に吸うと病み付きになりそうとのこと。

舌舐りしながら妖艶な空気を醸し出すのでこういう時、ユエが年上であることを実感してしまうのだが、幼い容姿と相まって、なんとも背徳的な感じがしてしまい落ち着かない事この上ないのだ。

因みにパエリアはあっさりしていてサイクロプスの柔らかかな部分のまるでロースの

ような部分も合わさり美味しく食べユエも満足するのであった。

余談だが城之内の血は今まで飲んだことのないようなまるで何年もスープに味が染み込んだ極上の味とのこと。

惠理は…

「…ん？何だろう？」

「ユエ？」

「エリの血、凄い魔力たつぶりの味…それにレッドアイズたちみたいな力を感じる？」

「ん？どう言うことなんだろうね？」

「まあ何にせよ俺にとって惠理は頼れる半身みたいなもんだぜ！」

「もう克也ったら（ //▽// ）」

こうして5人は親交を深めるのであった。

オルクスの最奥へ

城之内たちはあれからまた階層を降りていた。

辿り着いた階層でまず見えたのは樹海だった。

十メートルを超える木々が鬱蒼うっそうと茂っており、空気はどこか湿っぽい。しかし、以前通った熱帯林の階層と違ってそれほど暑くはないのが救いだらう。

5人が階下への階段を探して探索していると、突然、ズズンツという地響きが響き渡った。何事かと身構える二人の前に現れたのは、巨大な爬虫類を思わせる魔物だ。見た目は完全にテイラノサウルスである。

但し、なぜか頭に一輪の可憐な花を生やしていたが……。

鋭い牙と迸ほとばしる殺氣が議論の余地なくこの魔物の強力を示していたが、ついつつ視線を上に向けると向日葵に似た花がふりふりと動く。かつてないシユールさだった。

「とりあえず倒すか。」

と構えるのだがそれより早く

「『緋槍』」

とユエの手元に現れた炎は渦を巻いて円錐状の槍の形をとり、一直線にテイラノの口内目掛けて飛翔し、あっさり突き刺さって、そのまま貫通。周囲の肉を容赦なく溶かして一瞬で絶命させた。地響きを立てながら横倒しになるテイラノ。

そして、頭の花がポトリと地面に落ちた。

最近、ユエ無双が激しい。最初は城之内やハジメの援護に徹していたはずだが、何故か途中からは我先にと先制攻撃を仕掛け魔物を瞬殺するのだ。

「あゝユエ。そんなに無理しなくて良いんだぞ？」

「…そんなことない。皆の役に立ちたいから。」

「それで無理するのは良くないよ。それにユエが凄いのは四人とも知ってる。」

「ユエちゃん私たちだってユエちゃんを守りたいの。」

「そうだよ。僕たちにもユエを守らせてほしい。」

「…皆…ありがとう」

「しかしこの魔物は何だったんだ？」

「そうだね。何かしら意図があるのかそれともこの花が関係あるのか…」

と話しをしているとまたぞろぞろとテイラノが沸いてくる。

「こんどは四方を囲むかのようだ。」

「さっきので警戒したのかな？ 克也ここだと木々が生い茂ってるからサラマンドラで焼きながら逃げた方がいいかも！」

「そうだな！ よし！」

城之内はサラマンドラを装備するとその雄々しい炎が周りを焼き尽くしていく。

「今のうちに広いところに！」

「ユエちゃん私の背中に乗ってハジメ君は右を私が左を警戒するよ！」

「ありがとう香織！」

「…ん、援護する！」

そうして撃退をしていくのであったが数は減るどころか更に増えていく。

そしてどの個体にも共通しているのが

「あの魔物…頭に生えてる訳じゃなくて…」

「寄生されてるのかな？」

「さっきハジメがあの花を撃ち落としたときは正気ぽかったな」

「と言うことは本体は別にいるね。」

「本体の見つけ方は定番だけど守りの厚い所だと思う。気配感知で多い方に行く方がいいかな？」

「決まりだな！」

とハジメの作戦通りで階層を走る。

四方から迫るラプトルをそれぞれドンナーやサラマンドラで撃退し麻痺毒を風霊術で拡散してラプトル自体の動きを牽制して突き進む。

四方に囲まれたときはユエが氷の最上級魔法「凍獄」で凍らせてそれをサラマンドラで外から焼き尽くして道を切り開く。

ユエは最上級魔法を使った反動もあつたが香織の背中に乗って吸血することにより回復をしていたのだが

「んう♥?ユエちゃん!ちよつと吸いすぎじゃ…」

「…ん 香織の血…癖になる…カプツ」

「ユエは胆が据わってるんだね …何だか香織…色つばいなあ（*・▽・*）」

「…あとでハジメの血も吸いたい…」

「ほら、三人とも気を抜かないの!」

そうして進む内にラプトルが嚴重に行かせまいとする方向に縦割れの洞窟のような場所があり、そこへ何かあつても良いように城之内が先頭に恵理、香織、ユエが入り最後にハジメが錬成で洞窟を塞いだ。

「ふう。漸く一息つけるぜ。」

「重点的に行かせないようにしてたから多分だけど親玉がいるよね。」

「ここからは更に気を引き締めないとな。」

しばらく道なりに進んでみると、やがて大きな広間に出た。広間の奥には更に縦割れの道が続いている。もしかすると階下への階段かもしれない。

ハジメは辺りを探る。「気配感知」には何も反応はないがなんとなく嫌な予感があるので警戒は怠らない。気配感知を誤魔化す魔物など、この迷宮にはわんさかいるのだ。

ハジメ達が部屋の中央までやってきたとき、それは起きた。

全方位から緑色のピンポン玉のようなものが無数に飛んできたのだ。城之内と恵理、ハジメとユエ、香織は一瞬で背中合わせになり、飛来する緑の球を迎撃する。

しかし、その数は優に百を超え、尚、激しく撃ち込まれるのでまず香織が毒と光の障壁の二段構えで防ぎそこにハジメは錬成で石壁を作り出し防ぐことに決めた。

石壁に阻まれ貫くこともできずに潰れていく緑の球。大した威力もなさそうである。ユエの方も問題なく、速度と手数に優れる風系の魔法で迎撃している。

城之内と恵理はまずサラマンドラの炎を火霊術の炎と合わせて恵理が二人の周り火柱で囲い焼き尽くす。

緑の球も落ち着くが唐突に

「……にげて……ハジメ！」

いつの間にかユエの手がハジメに向いていた。ユエの手に風が集束する。本能が激しく警鐘を鳴らすハジメを香織が横抱きに抱え、その場を全力で飛び退いた。刹那、ハジメのいた場所を強力な風の刃が通り過ぎ、背後の石壁を綺麗に両断する。

「ユエ!？」

まさかの攻撃にハジメは驚愕の声を上げ香織も行きなりの事態に戸惑うが、ユエの頭の上にあるものを見て事態を理解する。

そう、ユエの頭の上にも花が咲いていたのだ。それも、ユエに合わせたのか？ と疑いたくなるぐらいよく似合う真っ赤な薔薇が。

「くそっ、さっきの緑玉か!？」

ハジメたちは自身の迂闊さに自分を殴りたくなる衝動をこらえ、ユエの風の刃を回避し続ける。

「ハジメ……香織……うう……」

ユエが無表情を崩し悲痛な表情をする。ラプトルの花を撃つたとき、ラプトルは花を憎々しげに踏みつけていた。あれはつまり、花をつけられ操られている時も意識はあるということだろう。体の自由だけを奪われるようだ。

だが、それなら解放の仕方にも既に知っている。

途中香織がハジメを下ろすとユエの花に照準を合わせてドンナーの引き金を引こうとした。

しかし、ユエを操り、花を庇うような動きをし出したのだ。上下の運動を多用しており、外せばユエの顔を吹き飛ばしてしまうだろう。ならばと、接近し切り落とそうとすると、突然ユエが片方の手を自分の頭に当てるといふ行動に出た。

「不味いな。あれじゃ迂闊に攻撃できねえ。」

「でもこのままじゃユエちゃんがい！」

「ユエを助けて親玉も潰さないとい！」

そうしていると物陰からアルラウネやドリアド等という人間の女と植物が融合したような魔物がハジメ達の前に現れた。

もつとも、神話では美しい女性の姿で敵対しなかったり大切にすれば幸運をもたらすなどという伝承もあるが、目の前のエセアルラウネにはそんな印象皆無である。

確かに、見た目は人間の女なのだが、内面の醜さが溢れているかのように醜悪な顔をしており、無数のツルが触手のようにウネウネとうねっていて実に気味が悪い。その口元は何が楽しいのかニタニタと笑っている。

それはまるであの日にみた醜悪な顔そのもので信じていたものが一瞬で崩れ去った

あの日に見た……

プツン

「くそつ憎々しい顔しやがって!」

「でも本体が出てきたなら何とか注意をそらせば!」

ユエを盾にしながらエセアルラウネは緑の球をまですらハジメに打ち込む。

ハジメは、それをドンナーで打ち払った。球が潰れ、目に見えないがおそらく花を咲かせる胞子が飛び散っているのだろう。

しかし、ユエのようにハジメの頭に花が咲く気配はない。ニタニタ笑いを止め怪訝そうな表情になるエセアルラウネ。ハジメには胞子が効かないようだ。

ハジメの技能には毒耐性があり更には香織の毒の抗体もあるためかハジメたちには毒物が効きづらいのだろう。

すかさずエセアルラウネはユエを操り攻撃を仕掛ける。

ジリ貧になるかと思われたがそれは唐突に終わる。

「…死のマジックボックス発動」

それはマジックなどで使われるようなボックスでエセアルラウネとユエを一つのボックスが覆う。

そして空中に無数の剣が浮かび上がりそして

グサツグサグサツ

と突き刺さる。

「ユエちやああああああん！」

「中村さんどうして!？」

という二人だがもう片方の剣の突き刺さってない方がキイイと開く

「…ハジメ…カオリ?」

と無傷のユエの姿がありすぐさまユエの頭を確認して異常がないか確かめる。

ナデナデ

「…んう…二人とももつと…」

と、いうユエ。

そしてもう片方のボックスが開くと剣が突き刺さり今にも絶命しそうなエセアルラウネが!

「中村さんが使ったのは死のマジックボックスだったんだね。」

「死のマジックボックスって確か恵理ちゃんが持ってたビデオで武藤選手がデュエルで使ってた?」

「そう。対象のモンスターを破壊する効果が確かあつたはず。」

「……………ないと」

「良い…何も言わなくて良いんだ。分かってる。」ポンポン

恵理は城之内の胸の中で感情を爆発させたように泣く。

そうして暫くして精神的に参っていたのか城之内の胸元で静かな寝息が聞こえてきた。

「城之内君中村さんは大丈夫？」

「ああ。色々とおの魔物を見て思い出しちまったんだろうな。今は寝かせてやってくれ。」

「う、うん。あの…城之内君さっきの恵理ちゃんの言葉って…」

「…取り敢えず休める場所へ行くぞ。」

と恵理をお姫様抱っこで抱えて安全なところへ向かう城之内とそれに付いていく三人。

エセアルラウネはハジメがドンナーでトドメを差しました。

暫くして魔物もいなさそうな場所で休む五人

「ここなら大丈夫そうだな。」

「…カツヤ、エリ大丈夫？」

「今はな。」

「城之内君、さっきの恵理ちゃんの言葉って」

「中村さん凄く怯えてたような…」

「…当事者でもねえ俺があんまり言うことじゃねえがそうだな。さっきのことは恵理の過去にあるんだ。」

「…エリの過去？」

「ああ。ハジメや白崎は恵理とは高校からか？」

「うん。私は高校の最初の頃で偶々探し物をしてたときに恵理ちゃんが、協力してくれてそれから」

「僕は休んだときとかノートを貸してもらってその関係かな。」

城之内は三人に自分と恵理の出会いと過去を話し始めた。その内容は世の中で身近で遠く、誰にでも起こりえてしまう悲しい出来事であった。

「あれは俺が最初に恵理に出会ったときか…恵理はよ」

「父親を事故で目の前で亡くして母親から虐待を受けてたんだ。」

絆は深まり新たな高みへと

あれはまだ俺が10才になるかならないかのことだったか
その日は親と喧嘩しちまつてな。

とにかく家にいたくなくて彷徨いてた時にな川の流れてる橋に女の子がずっと川
ばっか見てたんだよ。

その時の俺は川ばっかみて楽しいのかとか思ってたのもあったんだか何だか放つて
おけなくてな、つい声をかけたんだよ。

「なあ川ばっか見て何かおもしろえもんでもあんのか?」

「…君には関係ないよ。あっちいって」

「そう言われてもな…あんまり家にいたくねえしな。」

「えっ?」

その時の城之内はただ何となくでその少女恵理に話しかけたのだが、放っておけな
かったのもあるが暗い顔をしてると本能が察していたのであろう。あつて数分の少女
に身の上話を切り出していた。

「俺の家な父ちゃんがどうしようもなくてな…何か賭け事でいっつも金使つて、母ちや

んが怒っても反省しようとしなくて借金？とかがあるってな。んで父ちゃんが嫌でこうして出てきちまつたんだ。」

「…そう…君は良いよね。僕にはもう頼れる人なんていないのに…」

幼い恵理はその時の城之内に要約して伝えた。

父を亡くしたこと、父を裏切った母、自分を痛めつける母、自分が襲われたことよりも男といられないことに悲しむ母…幼い少女が経験するようなことではないことを直視したというべきだろう。

すなわち、母は自分を愛さない。昔の母になど戻らない。昔の穏やかな姿ではなく、眼前の醜さに溢れた姿こそが、母の本性だったのだ、と。

そう理解した。

だから——恵里は壊れた。

「そうか…悪い俺はお前じゃねえからどんだだけ苦労したかは分からねえ」

「なら僕に構わないで…こんな僕に構ったってつまらないでしょ」

「初めて会ったから俺はお前のことは全然だ。でもよ。お前が優しいやつだったことは分かる。」

「優しくなんて…」

「まあ俺が感じたことだからよ。気にすんな。…なあ明日も会えるか？俺はお前を知り

たい。」

「…君も僕の体目的…？随分と盛んなんだね…」

「ん？いや俺にはよ妹がいてな。妹の友達になつてくれないか？」

「……………」

「気が向いたらまたこつちに来てくれ。」

と言うと城之内は去っていく。

お互い名前を名乗らなかつたが

「…はあ…何だろう…僕の事情を知つても離れないつて…変なの。…今死ぬのも明日死ぬのも変わらないか…」

そうして数日が経ち恵理は母親から逃げるように家を出てまた橋に来ていた。

「…馬鹿みたい。どうせ僕のことなんて忘れてるのに…」

「おーい！」

「！」

「よっ！来てくれたんだな！」

「別に…気が向いたから」

「お兄ちゃん？」

「ああ静香紹介したかったやつだ。えくと？」

「はあ…恵理…中村恵理だよ。」

「俺は城之内克也だ！こつちが妹の静香だ。」

「…！その子目が？」

「お袋が言うには目の病気だつてな。病院から出れなかつたりしててな。今日は調子が良いつて連れてきたんだ。」

「お兄ちゃんと言つてた優しい人なんですね！」

「いや…僕は別に…」

「恵理お姉ちゃん学校つてどんな感じかな…？」

「学校…ね…友だちとか出来れば楽しいんじゃないかな…」

恵理にとつてみれば学校なんて母親から逃げれて時間を潰せるぐらいの認識でしかなかった。誰も話しかけず話しかけもせず暗く時間が過ぎるのを待つだけであった。

「そうなんだね！私ずつと病院にいるからそういうのに憧れるなあ。」

「…友だちがいなきやつまんないもんだよ。」

「ん？俺は恵理を友だちだと思つてるんだが違つたか？」

「…会つて2日なのに友だちつて…馬鹿みたい…」

「まあ俺はそんな頭良くねえからな！でもよこやつて話して一緒にいるならもう友達だろ？」

「…好きにしなよ…」

それから静香と恵理は話しをしてな。こういったことがあったとか色々なことだ。

それから何度か会う内に仲良くなってな。ある時に恵理の母親が虐待をしてたつていうの暴いたのがいて。それで本当の親父さんの妹さん恵理にとっては叔母になるのか…それで恵理を引き取つたんだ。

叔母さんは亡くなった兄貴の忘れ形見の恵理のことを大事にしてな。

周りには愛想の良かった母親を見て大丈夫かと思つていたものの話を聞いて恵理に何度も謝つてた。

恵理はそんな叔母さんに最初は信用出来なかつたり心を開かなかつたが叔母は真摯に受け止めて恵理に向き合い何度もぶつかり合いそれもあつて今では良好な関係になつたそうだ。

住んでるところも親父さんの家の近くだったみたいでそれから暇があれば一緒に居たんだ。

恵理も段々笑うようになってな。

それで小学校が同じでクラスが違ったのを知つたときは驚いたぜ。

昔に比べて雰囲気明るくなったんだが今までの恵理をからかう奴らもいて根倉とか男子に構われてとかで女も恵理をいじめようとしてた時は俺もカツとなって殴り合の喧嘩になっちまってお袋に怒られたな。

中学も同じでそんときに家の両親が離婚してな。

静香とは離れちまってそれでも暇があれば見舞いに行つて恵理も偶に静香の病院にいつて静香と話しをしてくれてたらしいし、恵理には頭が上がりねえ。

ただ友達を作るのはまだまだ恐いみたいだな。

高校なるまでは中々親しい奴らが居なかつたんだが…それから俺の仲間友達の奴らが恵理と会つてな。

打ち解けるのは結構早かつたな。

「それが俺と恵理の出会いだったな。」

「そうなんだね。恵理ちゃん…」

「それでも恵理は前を向こうとしてるんだ。だから恵理に学校でも友達ができたつて聞いて嬉しかったんだ。これからも恵理のことをよろしく頼む！」

「僕たちの方こそ中村さんには助けられたんだ。今度は僕たちが支える番だよ！」

「…ん！エリのこと守る」

「恵理ちゃんには貰いっぱなしでなにもまだ返せてないもん。私にできることで恩返ししていききたいな。」

「三人ともありがとな！」

そうして少し降りた階層で眠る恵理を膝枕して拠点を作り休む一同。

そんな中ハジメは香織と共に階層を巡回し何かあるのか探索していた。

ユエは城之内と恵理を守ると残った。

「特にこの階層は危険なものは無さそうだね。」

「うん…ハジメ君」

「どうしたの？」

「絶対ここから脱出しようね。それで元の世界に帰ったら恵理ちゃんの友だちに会って一緒に遊んだりシヨッピングしたりして恵理ちゃんの楽しい思い出を一杯作りたいね！」

「そうだね！そのためにも入念に準備して備えないと。」

城之内から話を聞いたハジメはよりいっそう気合が入っていた。

僕も／私も香織と中村さんと城之内君そしてユエを守りたい

もつと力を付けないと…

「あれ？あそこ…何かある？」

「香織？何か見つけたの？」

「これなんだけど…他のところと違って人が作ったみたいで人工的な感じがするの。」

その言葉を聞きハジメはお得意の錬成を使い壁に触るとその一部がドロドロに溶け出して小部屋へと通じていてその中央の台座には液体を封じ込めた瓶のようなものが現れた。

「…？何だろうか…」

「何かの液体？赤いから血液？かな。」

この時の二人は知らないことであつたが

大昔シュネー雪原に棲んでいて反逆者と大勢の仲間たちが漸く倒せた超級危険種の生き血。

倒したその生き物のその生き血を飲み、見事に体に適合する事さえ出来たのであれば素材となったその超級危険種のもつ「無の状態から氷を生成し自在に操る能力」を得るというもの。しかし飲んだ時に強烈な破壊衝動に襲われてしまい、相性が合わなければ自我が破壊され発狂してしまうというリスクがある

「うーん…取り敢えず飲んでみようかな。」

キュポンツ！

と香織は己の口に神水を含むと口移しでハジメに飲ませる。

暴れまわるハジメは香織の舌や口を傷付けるがそれでも香織は神水を飲ませる。

ハジメ君…負けないで…ハジメ君…ハジメ君！

そうだ！僕はまだ死ねない…死ぬわけにはいかないんだ！

全部壊したい…何もかもを破壊したい…

この衝動に…呑み込まれて…堪るかあああああ！！！！

痙攣を起こしていたハジメの体の震えが収まっていくな！！！！

「はあ…はあ…はあ…香織？」

「ハジメ君…良かった…良かったよおお」

「ごめん香織…香織のお陰で…戻ってこれた。」

「良かった…ハジメ君！」 ギュウウウウ

「香織…傷付けてゴメン…僕のせいで口の中…」

「ううん。ハジメ君の方が大事だもん。」

「香織口開けて…」

「ハジメく…ンム」

クチュツクチュパクチュツ

「はむっ…んちゅっ…ちゅ…んん…ふはあ」

「香織……香織……！」

「ハジメ君（＊　　▽　　＊）もつと欲しいよお……私の全部ハジメ君にあげる……ハジメ君が欲しいのー！」

「香織……僕も……君の全部が欲しい……ずっと僕の側に……僕の全ては香織と共に」

「ハジメ君（〃▽〃）」

「香織（〃▽〃）」

……それから二時間程で戻ったハジメたち。城之内たちは帰りの遅い二人の無事を喜ぶ。

「南雲君……香織心配掛けてごめんね。」

「ううん！ 恵理ちゃん元気になって良かったよ！」

「……僕の過去克也から聞いたでしょ？ どう思った？」

「過去がどうだろうと中村さんは僕たちの友だちで信頼できる仲間に変わりないよ！」

「うん！ 恵理ちゃんは恵理ちゃんだよ！ 絶対あつちに戻ったらお買い物とか遊びに出掛けようー！ いっぱい一杯楽しく過ごそうー！」

「二人とも……ありがとう！」

スンスン「……二人とも……ナニしてたの？」

「「ギクリっ!？」」

「いやあ何もなかったよ！ねえ香織！」

「そうだよユエちゃん！ハジメ君のハジメ君を飲んだり受け入れたり飲み干したりなんてしてないよ！」

「…二人とも…（ーロー）そういうことか。もうっ！」

「二人が無事で良かったじゃねえか！取り敢えず飯食おうぜ！」

「…香織だけずるい…私もハジメのハジメ欲しい」

「ユエちゃん!？」

「あとは香織の大事なところもなめてみたい」

ジユルリ

「ユエちゃん!?!私のなんてなめても美味しくないよ!?!」

「…ん。そんなことない香織の体液も美味…ハジメのと一緒に味わうから問題ない。」

「あはは…」

こうしてハジメたちの仲は深まり階層を更に潜る。

迷宮突破まであと少しだ！

—————

恵理サイド

…少し振りに克也とあつた時を思い出した。

僕はお母さんにとつて邪魔者でしかなくお父さんの所へいきたくてあの日家を出て川に飛び込もうと思った。

でもそこで克也と出会つて最初は克也に酷いことを言つたし興味はなかつた。

でも話をして不思議な感じで静香ちゃんとも話をして目が見えづらくとも前をみて過ごす静香ちゃんをみてもう少し死ぬのは後でも良いかと思つた。

それから数日後にお母さんが逮捕されて僕はお父さんの妹の叔母さんと会つた、涙を浮かべてたけどそれならどうしてもっと早く助けてくれなかつたのか：叔母さんにも酷いことをいっぱい言つちやつた。

克也はそんな僕の話しを横で静かに聞いて受け止めてくれて頭を撫でてくれて：叔母さんとは何度もぶつかり合つたけどそのお陰か死にたいとは思わなくなつた。

克也と同じ学校だつたつて後で気付いて僕の雰囲気が変わつて家の噂が流れて親無しとか生意気だつて暴力を振るわれそうだつたけど克也は違うクラスでも駆けつけてくれてその時悪口を言つた上級生や同学年も克也は殴り飛ばしちやつて大騒動だつたけど：でも僕はちよつと嬉しかつたんだ。

そういうこともあつて克也と過ごす内に克也のことを好きになつて叔母さんになつたらもつと綺麗になれるのか聞いたら料理とかファッションとか一緒に考えてくれて時が経つて高校生の時に克也が決闘王国に行くつて言つて：でも僕も何か出来たら

と思つて思いきつて船に不法侵入して

そしたらもう二人同じように不法侵入してた男の子と女の子がいてなしくずし的に一緒になつて……

本田さんと杏子の二人も友人を心配してつてことでちよつと意気投合してそれで暫くして克也が海に飛び込んじやつてそれを本田さんと杏子と助けたりして克也の友人だつたつてお互い気付いて……

色んなデュエリストを見た。その人たちの過去も背負う覚悟も……

それからバトルシテイがあつて

あの時は静香ちゃんのことで大変だつたけど克也はしっかりお兄ちゃんらしく励ましてバトルシテイも勝ち上がった。

バトルシツプのニセマリク……リシドさんとのデュエルよきの静香ちゃんにかけた

言葉……

暗闇の中で光を見つけた……勇気つていう光を……か

僕は克也と出会うまでお父さんが死んじやつて何にも希望を見付けられなかつた……でも克也つていう光が僕に生きる勇気を……希望をくれた……

克也……克也……早く克也に会いたい……

.....

「んん……ここは？僕……」

「目、覚めたか惠理？」

「……エリ……良かった」ギユウ

「……ごめんね。心配掛けて」

「……そんなことない。エリは頑張りすぎだから……少し休まないと」

「今はハジメたちが探索してるからもう少し横になつてな」

「うん……克也」

「どうした？」

「頭……撫でて」

「お安いご用だぜ」ナデナデ

「……エリ、大丈夫……！私たちエリから離れない……それにエリに抱きしめてもらうの暖か

くて好き……！」ギユウ

「ユエ……ありがとう」

つ。　　そうして克也に撫でてもらいユエがくつつきながら南雲君たちが帰ってくるのを待つ。

まさか二時間ぐらい帰つてこなくて帰つてきたらどうにも二人宜しくやっていたよ

うで二人には後で説教しないと…

今の僕はとても充実している。

だからこそ元の世界に帰って叔母さんや静香ちゃんを安心させたい…

決意を新たに僕たちはオルクス迷宮を突き進む

最奥のガーディアン

あの後起き上がった恵理はハジメと香織に説教をした。特にハジメはダンジョンにある良くわからないものを口にし死にかけたという。

ダンジョンという未知の場所でそんなことをして無事でいられる保証などどこにもないのだ。

「南雲君…ダンジョンっていうのは男の子にとってロマンかもしれないけどね。命がいくつあっても足りないぐらい警戒してないと！香織も今回は大丈夫だったけど次も大丈夫なんて保証はないから強く引き留めないと！」

「ご、ごめんなさい。」

「そうだよね…もつと注意しなきゃだもんね…」

「起きちゃったことは仕方ないけど今後は気を付けるんだよ。二人が死んじやったら雫や鈴、優花も悲しむだろうし僕たちだって悲しいんだ。」

「うん…」

「この話しはお仕舞い。何より二人とも無事で良かった。」

「取り敢えずさっきのテイラノの肉を採取しておいたから食おうぜ！」

と城之内はまだ残っていたパンと有り合わせの野菜を挟んだハンバーガーのような形にする。

ハムツ「凄い！脂がのっててしかも口の中で溶けてパンと野菜と絡み合って美味しい！」

「…こういうの初めて…色んな食べ物があるんだ…」

「元の世界でのハンバーガーが恋しくなっちゃうね。」

「我ながら良く作れたと思うぜ…旨え」

「英気を養ってこのまま慎重に進もう！」

そして再びオルクス迷宮を突き進む5人

そうして突き進む漸く次の階層を降りれば100層目というところまで来た。

それぞれが節目となるであろう階層に入念な準備を重ねる。

「漸く次で100層目か…」

「それにしても南雲君の手に入れた新しい技能…中々制御が難しいのかな？」

「うーんなんというか合ってないというかしっくり来ないというか…」

ハジメが前回飲み込んだ液体から得た技能、氷血を試しているのだが中々出力が上がりず分かつているのは何もない空間から氷を作り出せることである。

何度か寝て起きたりしているときに確認すると体が覚えていくかのように使えるこ

ともあり不思議がつていたもののあまり気にしないことにした。

「まあその内慣れるだろうさ。今は自信のある技能を信じる方がいいかもな。」

「そうだね。新しい技能は用練習ってことだろうね。」

「……ん！氷の魔法も使えるから何かアドバイス出来る！」

「……ここまで来た城之内たちは一段と慎重にだが同時に集中力も研ぎ澄まされていた。

「百層目……節目になる階層だから何かしら脱出の手掛かりがあるはず」

「そうだね。これから何が起きたとしても僕たちは諦めない」

「ああそうだな……よしっ！行くぜ！」

しばらくして、全ての準備を終えたj5人は、階下へと続く階段へと向かった。

その階層は、無数の強大な柱に支えられた広大な空間だった。柱の一本一本が直径五メートルはあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻きついたような彫刻が彫られている。柱の並びは規則正しく一定間隔で並んでいる。天井までは三十メートルはありそうだ。地面も荒れたところはなく平らで綺麗なものである。どこか荘厳さを感じさせる空間だった。

見惚れながらも先へと慎重に進む。罫などの類いは見受けられず奥へと進むと巨大な扉があった。

全長十メートルはある巨大な両開きの扉が有り、これまた美しい彫刻が彫られてい

る。特に、七角形の頂点に描かれた何らかの文様が印象的だ。

そして、扉の前に行こうと最後の柱の間を越えた。

その瞬間、扉と城之内達の間三十メートル程の空間に巨大な魔法陣が現れた。赤黒い光を放ち、脈打つようにドクンドクンと音を響かせる。

ハジメは、その魔法陣に見覚えがあった。忘れようもない、あの日、ハジメが奈落へと落ちた日に見た自分達を窮地きゆうちに追い込んだトラップと同じものだ。

だが、ベヒモスの魔法陣が直径十メートル位だったのに対して、眼前の魔法陣は三倍の大きさがある上に構築された式もより複雑で精密なものとなっている。

「こいつは……！」

「扉を守る最後の魔物ってことはこの先がゴール……！」

「……ん！何がきても四人と一緒なら負けない！」

「そうだね！皆で帰るんだ！」

「そうだね。雫たちも待つてるんだもの……！帰って安心させないと」

「ああそうだな!!」

魔法陣はより一層輝くと遂に弾けるように光を放った。咄嗟に腕をかざし目を潰されないようにする城之内たち。

光が収まった時、そこに現れたのは……

体長三十メートル、六つの頭と長い首、鋭い牙と赤黒い眼の化け物。例えるなら、神話の怪物ヒュドラだった。

「クルウアアアアン!!」「」

不思議な音色の絶叫をあげながら六対の眼光がハジメ達を射貫く。身の程知らずな侵入者に裁きを与えようというのか、常人ならそれだけで心臓を止めてしまいかもされない壮絶な殺気が城之内達に叩きつけられた。

同時に赤い紋様が刻まれた頭がガパツと口を開き火炎放射を放った。それはもう炎の壁というに相応しい規模である。

城之内と恵理、ハジメ、香織、ユエは同時にその場を左右に飛び退き反撃を開始する。ハジメのドンナーが火を吹き電磁加速された弾丸が超速で赤頭を狙い撃つ。弾丸は狙い変わらず赤頭を吹き飛ばした。

まずは一つとハジメが内心ガツツポーズを決めた時、白い文様の入った頭が「クルウアン!」と叫び、吹き飛んだ赤頭を白い光が包み込んだ。すると、まるで逆再生でもしているかのように赤頭が元に戻った。白頭は回復魔法を使えるらしい。

ハジメに少し遅れて城之内はサラマンドラの炎で緑の文様がある頭を吹き飛ばしたが、同じように白頭の叫びと共に回復してしまった。

「白頭が回復を担ってるのか！」

「なら！白頭を真つ先に潰さないと！」

青い文様の頭が口から散弾のように氷の礫を吐き出し、それを回避しながら5人は白頭を狙う。

ドパンツ！

「『緋槍』！」

「サラマンドラ！」

「風霊術 葵！」

「ポイズンニードル！」

閃光と燃え盛る槍に炎と風による特大の火炎と無数の毒針が白頭に迫る。しかし、直撃かと思われた瞬間、黄色の文様の頭がサツと射線に入りその頭を一瞬で肥大化させた。

そして淡く黄色に輝き全ての攻撃を受け止めてしまった。衝撃と爆炎の後には無傷の黄頭が平然とそこにいてハジメ達を睥睨している。

「ちっ！盾役か。攻撃に盾に回復にバランスのいいことだな！」

ハジメは頭上に向かって『焼夷手榴弾』を投げる。同時にドンナーの最大出力で白頭に連射した。ユエも合わせて『緋槍』を連発する。

城之内は鎖付きブーメランに切り替え白頭を庇う黄頭を捕らえる。

さらに恵理は地霊術で無数の礫を飛ばす。

香織も全員に攻撃補助と防御力を上げる。さらに毒の霧を噴射しヒュドラの視界を狭める。

ユエの“蒼天”なら黄頭を抜いて白頭に届くかもしれないが、最上級を使うと一発でユエは行動不能になる。吸血させれば直ぐに回復するが、その隙を他の頭が許してくれるとは思えなかった。せめて半数は減らさないと最上級は使えない。

黄頭は、ハジメとユエの攻撃を尽く受け止めるようとするが鎖付きブーメランで妨害をし白頭へと殺到するが青頭が庇う。だが、流星に今度は無傷とはいかなかったのかあちこち傷ついていた。

「クルウアン！」

すかさず白頭が青頭を回復させる。全くもって優秀な回復役である。しかし、その直後、白頭の頭上で“焼夷手榴弾”が破裂した。摂氏三千度の燃え盛るタールが撒き散らされる。白頭にも降り注ぎ、その苦痛に悲鳴を上げながら悶えている。

「今がチャンスだ！」

「ここに畳み掛ける！」

と一斉に攻撃をしようとするが

「いやあああああ!!!」

「!? ユエー!」

咄嗟とつさにユエに駆け寄ろうとするが、それを邪魔するように赤頭と緑頭が炎弾と風刃を無数に放ってくる。未だ絶叫を上げるユエに、歯噛みしながら一体何がと考えるハジメ。そして、そういえば黒い文様の頭が未だ何もしていないことを思い出す。

(違う、もし既に何かしているとしたら!)

ハジメは「縮地」と「空力」で必死に攻撃をかわしながら黒頭に向かってドンナーを発砲した。射撃音と共に、ユエをジツと見ていた黒頭が吹き飛ぶ。同時に、ユエがくたりと倒れ込んだ。その顔は遠目に青ざめているのがわかる。そのユエを喰らおうというのか青頭が大口を開けながら長い首を伸ばしユエに迫っていく。

「させない!ポイズンカッター!」

「水霊術プラス風霊術:ウオーターカッター!」

と毒と風の勢いを乗せた水が青頭を吹き飛ばす!

そしてユエを抱えてハジメは柱の隅へとすぐに移動する。

その間城之内と恵理は動き周りながらユエたちへ攻撃がいかないように稲妻の剣の雷を恵理は火霊術の火炎を浴びせる。

「ユエッ!しっかり!」

「ユエちゃん！万天！」

と香織は状態異常回復の魔法を使うと徐々に目の焦点が合ってきた。

パチパチと瞬きしながらユエはハジメと香織の存在を確認するように、その小さな手を伸ばし二人の顔に触れる。それでようやく二人がそこにいると実感したのか安堵の吐息を漏らし目の端に涙を溜め始めた。

「……よかつた……見捨てられたと……また暗闇に一人で……」

「まさか幻覚？」

ユエ曰く、突然、強烈な不安感に襲われ気がつけばハジメに見捨てられて再び封印される光景が頭いっぱい広がっていたという。

そして、何も考えられなくなり恐怖に縛られて動けなくなつたと。そして、ユエにとつてはハジメたちの隣が唯一の居場所だ。

一緒にハジメの故郷に行くという約束がどれほど嬉しかったか。再び一人になるなんて想像もしたくない。

そのため、植えつけられた悪夢はこびりついて離れず、ユエを蝕むしばむ。城之内たちが食い止める中、ハジメは立ち上がるが、ユエは、そんなハジメの服の裾すそを思わず掴んで引き止めてしまった。

「? ……!?!」

ハジメは首を傾げるユエにキスをした。

ほんの少し触れさせるだけのものだが、ユエの反応は劇的だった。マジマジとハジメを見つめる。

ハジメは若干恥ずかしそうに目線を逸らしユエの手を引いて立ち上がらせた。

「ヒュドラを殺して生き残る。そして、地上に出て故郷に帰るんだ。

……皆で」

「そうだよ……ユエちゃん私たちは見捨てない。約束したし何よりユエちゃんのこと私も好きだから……これからも一緒に生きていくだもん」

「カオ……!?! (〃▽〃)」

と香織もまたユエに口づけをする。優しく触れ合うものだったがそれでも自身を思うその顔にユエも釘付けになる。

ユエは未だ呆然とハジメをと香織を見つめていたが、いつかのように無表情を崩しふんわりと綺麗な笑みを浮かべた。

「……んー!」

「ユエ、シユラーゲンを使う。連発できないから援護お願い!」

「………任せて!」

いつもより断然やる気に溢れているユエ。静かな呟くような口調が崩れ覇気に溢れ

た応答だ。先程までの不安が根こそぎ吹き飛んだようである。

「どうやら色々吹っ切れてしまったようだ。普段からのハジメに対する甘えっぷりを思い出し、今後のことを思うと、ちよつと早まったかもしれないと頬が引き攣るハジメ。だが、ヒュドラはリア充爆発しろ！」と言わんばかりに咆哮を上げ、城之内たちからハジメ達のいる場所に炎弾やら風刃やら氷弾やらを撃ち込んできた。

三人は一気に柱の陰を飛び出し、今度こそ反撃に出る。

「『緋槍』！ 『砲皇』！ 『凍雨』！」

矢継ぎ早に引かれた魔法のトリガー。有り得ない速度で魔法が構築され、炎の槍と螺旋に渦巻く真空刃を伴った竜巻と鋭い針のような氷の雨が一齐にヒュドラを襲う。

攻撃直後の隙を狙われ死に体の赤頭、青頭、緑頭の前に黄頭が出ようとするが、白頭の方をハジメが狙っている気がついたのかその場を動かさず、代わりに咆哮を上げる。

「クルウアン！」

すると近くの柱が波打ち、変形して即席の盾となった。どうやらこの黄頭はサソリモドキと同様の技が使えるらしい。もっとも規模は幾分小さいようだが。

ユエの魔法はその石壁に当たると先陣が壁を爆砕し、後続の魔法が三つの頭に直撃した。

「グルウウウウ!!」

悲鳴を上げのたうつ三つの頭。黒頭が、魔法を使った直後のユエを再びその眼に捉え、恐慌の魔法を行使する。

ユエの中に再び不安が湧き上がってくる。しかし、ユエはその不安に押しつぶされる前に、先ほどのハジメと香織のキスを思い出す。すると、体に熱が入ったように気持ちが高揚し、不安を押し流していった。

「……もう効かない!」

「隙あり! アイアングラビレイ!」

と白頭以外の首に重たい重力がのしかかる。

「闘気炎斬剣!」

そして白頭の首が落ちる!

「これで……どうだ!」

とシユラーケンから光の奔流のようなそんな光景を彷彿させるような射出された弾丸は真つ直ぐ周囲の空気を焼きながら黄頭に直撃した。

黄頭もすっかり“金剛”らしき防御をしていたのだが……まるで何もなかったよう

に弾丸は背後の白頭に到達し、そのままやはり何もなかったように貫通して背後の壁を爆砕した。階層全体が地震でも起こしたかのように激しく震動する。

後に残ったのは、頭部が綺麗さっぱり消滅しドロツと融解したように白熱化する断面が見える二つの頭と、周囲を四散させ、どこまで続いているかわからない深い穴の空いた壁だけだった。

一度に半数の頭を消滅させられた残り三つの頭が思わず、ユエの相手を忘れて呆然とハジメの方を見る。ハジメはスタツと地面に着地し、煙を上げているシユラーゲンから排莢した。チンツと葉莢が地面に落ちる音で我に返る三つの頭。ハジメに憎悪を込めた眼光を向けるが、彼等が相対している敵は眼を離していい相手ではなかった。

「天灼」

「水霊術！」

三つの頭の周囲に六つの放電する雷球が取り囲む様に空中を漂ったかと思うと、次の瞬間、それぞれの球体が結びつくように放電を互いに伸ばしてつながり、その中央に巨大な雷球を作り出した。

身体全体に水が浸透し

ズガガガガガガガツ!!

中央の雷球は弾けると六つの雷球で囲まれた範囲内に絶大な威力の雷撃を撒き散ら

した。三つの頭が逃げ出そうとするが、まるで壁でもあるかのように雷球で囲まれた範囲を抜け出せない。天より降り注ぐ神の怒りの如く、轟音と閃光が広大な空間を満たす。

そして、十秒以上続いた最上級魔法に為すすべもなく、三つの頭は断末魔の悲鳴を上げながら遂に消し炭となった。

いつもの如くユエがペタリと座り込む。魔力枯渇で荒い息を吐きながら、無表情ではあるが満足気な光を瞳に宿し、ハジメに向けてサムズアップした。ハジメも頬を緩めながらサムズアップで返す。城之内たちも終わったかと肩の力を抜く。

シユラーゲンを担ぎ直しヒュドラの僅かに残った胴体部分の残骸に背を向けユエの下へ行こうと歩みだした。

「ハジメー！」

ユエの切羽詰まった声が響き渡る。何かと見開かれたユエの視線を辿ると、音もなく七つ目の頭が胴体部分からせり上がり、ハジメを睥睨へいげいしていた。思わず硬直するハジメ。

だが、七つ目の銀色に輝く頭は、ハジメからスつと視線を逸らすとユエをその鋭い眼光で射抜き予備動作もなく極光を放った。先ほどのハジメのシユラーゲンもかくやという極光は瞬く間にユエに迫る。ユエは魔力枯渇で動けない。

「ユエちゃん！」

と香織は咄嗟に前に立ち塞がると

「光絶！天絶！」

と障壁を重ねる。

ハジメは銀頭が視線をユエに逸した瞬間、全身を悪寒に襲われ同時に飛び出していた。

青頭の時の再現か、極光がユエを丸ごと消し飛ばす前に、再び立ち塞がることに成功したハジメ。

城之内も間に立ち

「スケープゴート！」

を展開して

「トライアングルパワー！」

でスケープゴートを強化する。

だが、極光はそれらを飲み込む。

「メエく、メエ」

スケープゴートは最後まで踏ん張るが勢いを殺すことは出来ず直撃は免れたが余波により体を強かに打ちぬかれ吹き飛ばされた。

前にいて庇ったハジメと城之内は所々火傷を負い意識が朦朧としている。

「ハジメ君!!」

「ハジメ!」

「克也!今神水を…!」

と回復の隙を与えないように銀頭は光弾をマシンガンのように発射される。

咄嗟に柱の影へと隠れるが光弾の嵐は次々と殺到する。

神水を二人の火傷へと掛けるが強く身体を叩きつけられたのか意識が朦朧としているハジメと城之内。

「…香織…ユエ、二人をお願い…何とかあれを引き付けるからその間に撤退して…!」

「そんなこと出来ないよ!」

「ん!エリも一緒に…!」

「あれがそれを許してくれるとは思えない…それなら殿して体制を整えた方が良い。…大丈夫四人が安全なところへ行ったら僕も撤退するから…!」

と恵理は返事を待たずにヒュドラへと向かう。

放たれる光弾を地霊術で壁を作り、火霊術で焼き、水霊術と風霊術を織り混ぜていく。しかし攻撃力が足りないせい徐徐に押されていく。

そこへ

「縛光刃！」

「凍雨！」

と光の鎖と氷の雨が降り注ぐ

「二人とも！なんで!？」

「友達を…仲間を見捨てるなんて出来ない！」

「二人とも…ありがとう…」

こうして恵理たちはヒュドラへと挑む。

果たしてどうなるのか…

ハジメと城之内の意識は戻るのか！

次回へ続く

奈落の先の希望を掴み取れ！

ヒュドラの銀頭の織り成す光弾や時折極光が放たれるが光弾はユエが緋槍で撃ち落とし極光は香織の毒と恵理の炎によつて生じた蜃気楼により撃つ場所を誤認させ互角に渡り合っている。

「何とか渡り合つてるけど決定打が足りない……！」

「私の毒もあんまり効いてないみたい……」

「……でもやらないと！」

「……うん！ハジメ君と城之内君を守る！」

「ここで私たちが引いたら克也と南雲君も危ない……やらないと！」

そして何度も攻防を繰り返すしかし魔力だつて無限ではない。

「キャッ！」

「カオリ！」

「ユエ香織をつ！クツ！」

「エリ！」

二人を蹴散らしたヒュドラは自分を殺し得るユエへ光弾と極光を殺到させる。

ユエはわざと光弾にあたりその勢いを利用して極光を回避する。

しかし、体が動かない。直ぐさま動かなければ光弾に蹂躪される。わかっただけで必死にもがくユエだが、体は言うことを聞いてくれない。「自動再生」が遅いのだ。

ユエはいつしか涙を流していた。悔しくて悔しくて仕方ないのだ。自分ではハジメをカツヤを皆を守れないのかと。

銀頭が、倒れ伏すユエに勝利を確信したように一度「クルウアアン！」と叫ぶと光弾を撃ち放った。

光弾がユエに迫る。ユエは眼を閉じなかつた。せめて心は負けるものかとキツと銀頭を睨みつけた。光弾が迫り視界が閃光に満たされる。直撃する。死ぬ。守れなかつたこと、先に逝く事を、ユエはハジメに対し心の中で謝罪しようとした。

刹那……一陣の風が吹いた。

気がつけば、ユエは、自分が抱き上げられ光弾が脇を通り過ぎていくのを見ていた。更にヒュドラの頭が凍りつく。

そして、自分を支える人物を信じられない思いで見上げる。

それは、紛れもなくハジメだった。満身創痕のまま荒い息を吐き、ユエを抱きしめて
いる。

「ごめん三人とも待たせたね……」

場面は戻り

…ここは…僕は確か…ユエや香織を…起きないと…でも身体が…ここで終わるのか
…

…諦めるの？

…えっ？

…ここで倒れるの？それも良いかもね…でも始めに誓ったことを破ることになるわよ。

誓い…そうだ…僕は帰るんだ！

元の世界に戻って香織をユエを幸せにするんだ…

城之内君の隣で一緒に闘うんだ！

こんなところで立ち止まってる暇は…ないんだ！

そうよ。貴方は立たないと…

四人を守る誓いを破ってはいけないわ。

一人でダメなら私も力を貸すわ。

君は…

私は貴方の中で生まれたもうひとつの人格で三人を…今は四人を守るために力を貸す。

パチリ!

ハジメは意識を取り戻し前方を見やると三人がヒュドラと戦っていた。惠理と香織が吹き飛ばされユエが光弾を浴びる。

ハジメは言うこと効かない身体に鞭を打ちユエへ駆け寄る。

「三人とも待たせたね…」

—————

城之内サイド

ここは…俺はたしか

早く戻らねえと

惠理を…守らねえと

皆が頑張ってるのに俺がここでくたばってどうする!

…諦めなきやぜってえに道は開かれる。

俺はあいつらを連れて帰るって八重樫とも約束したんだ!

その俺がこんなところで寝てるわけには行かねえ!

…それでこそ私が選んだ勇者だ!

誰だ?俺を呼ぶ声は…?

あの時とは逆であるな。

眠りに就く私をお前は呼び起こし共に戦い巨悪を撃った。

お前の世界と精霊界どちらにも危機が迫っている。

そのためにもまたお前の力を貸して欲しい。

ああ…力を貸してくれ！

…ハッ！

「俺は…たしか…」

そこには恵理、香織そしてハジメはユエを抱えている光景が見えた。

キーン

「こいつは…ああ俺は知ってる…何度もこいつに助けられたんだ。頼む…あいつらを守るためにもう一度力を貸してくれ！」

「ヘルモスの爪よ!!!」

—————

城之内の目覚める前

ハジメは目覚めたあと頭のなかにスパークが走ったような気がし、ハジメは一つの技能に目覚めた。『天歩』の最終派生技能「瞬光」。知覚機能を拡大し、合わせて『天歩

“の各技能を格段に上昇させる。

ハジメはまた一つ、“壁を超えた”のだ。

この技能でハジメは一瞬でユエの元にたどり着き、ヒュドラの放つ緩やかに飛んでくる光弾をギリギリでかわしているのである。

「縛煌鎖！ハジメ君！」

そして無数の鎖でヒュドラを縛る香織。

そしてハジメは再度極光を放つ

それをハジメは手を地面につけると辺り一面が凍る。

凍りつき更に氷の剣を作りだしヒュドラの放つ極光の軌道を変える。

「これは？もしかして新しい技能が！」

（ハジメ：今は私の方で制御してるけどそれでも身体のダメージはバカに出来ない…短期決戦よ。）

（分かってるよ。フォローお願い…もう一人の僕。）

「…ケホツ：南雲君たちが頑張ってるのに僕だけ寝てられないな。」

恵理は自身の中の魔力に集中する。

すると

漸く私たちの声が聞こえたみたいです！

そうだね。僕たちの声が届く！

あたしらは待つてたんだぜ！

そうだよ…大好きな君の力になれるの待つてた。

共に戦いましょう我等の敬愛するマスターの娘よ。

すると恵理を淡い光が包み込む

「憑依装着…ヒーター！」

やってやるぜ！

「火霊術…紅バースト！」

ヒュドラの苦し紛れの光弾を全て焼き尽くす！

「憑依装着…エリアー！」

傷付いた身体を癒します！

「水霊術…癒しの恵み！」

と広範囲に雨が降る。

敵にとつては動きを阻害するものになり味方には回復をもたらず。

「憑依装着…アウス！」

お呼びだね！キツイのかますよ！

「地霊術…アースグラビドン！」

と天井に重力がかかり瓦礫が次々に落ちてくる。その重さは数トンは下らないだろう。

ヒュドラへと殺到し動きを封じた。

「憑依装着…ウイン！」

さあ行くよ恵理！

「エアリアルバースト！」

風の大砲のようにヒュドラへと殺到し傷を付けていく。

そこへ

「頼んだぜ…ロケット戦士！」

城之内も復帰しロケット戦士を召喚し、

「頼む力を貸してくれ！ヘルモスの爪！」

と城之内は赤い竜を召喚した。

「ヘルモス!? どうして? だってあの時…」

「ロケット戦士とヘルモスの爪を装備合体！」

ピカーン

「これは！」

「ロケットヘルモスキャノン！」

そうしてロケット戦士の力を得たヘルモスは姿をバズーカーのような形態へと姿を変えろ。

「コイツを使えハジメエエエエ！」

と城之内はハジメへと投げろ。

カチャ

「城之内君…うん！」

（城之内君が託してくれた勝機逃さないように！やるわよハジメ！）

しかしハジメの右腕だけでは重心がぐらつき狙いが定まらないが

「ハジメ君は一人じゃない…私たちがいる！」

「…ん！任せて！」

と香織は銃身を持ち安定させユエはもハジメの右側で支えて標準が定まる。

なおも暴れるヒュドラだか、

「三人の邪魔はさせない！力を貸してブリザードプリンセス！」

あの人に似た眼差しの強さ…ええ行きましよう惠理！

そして更に惠理を光が包み込むとそこには身長が城之内と同じくらいになり髪も口ングになった大人化した惠理の姿があつた。

高まった魔力が惠理を相応しい姿へと変化させたのかもしれない

そして

「アイシクルブリザード!」

とヒュドラを一気に凍らせる。

「行くぜ! 悪魔のサイコロ! 悪魔のサイコロで出た目の数分攻撃力と守備力をを分割する!」アニメ効果参照

「サイツ!」コロコロコロコロ

6??

「よしっ! 今だ!」

「二いつつけええええええええ!!!」

ドシユン ドシユン ドシユン!

ヒユユユユユ

ツドガアアアアアア

ロケットヘルモスキャノンから放たれた砲弾はヒュドラへと殺到し全弾命中する。

「……どうだ?」

煙が晴れるとヒュドラは痙攣しそして

ドシーン

と倒れた。

「やったか…ヨツシヤアア…」

「やった倒せ…た…」

「ハジメ君!？」

「ハジメ!？」

「克也!…脈はある…良かった。」

ギイイイイイ

「扉が開いた!？」

「二人を休ませないとね…」

「そうだね。」

と城之内とハジメをそれぞれ担ぎ上げ扉を潜り抜ける。

こうして長かったオルクス迷宮を五人は踏破することに成功したのであった!

解放者の意思

「……こは……？俺は確か」

城之内は懐かしい感触を感じ体に力が入る。

慌てて体を起こすと、城之内は自分が本当にベッドで寝ていることに気がついた。純白のシーツに豪奢ごうしやな天蓋付きの高級感溢れるベッドである。

場所は、吹き抜けのテラスのような場所で一段高い石畳の上にいるようだ。爽やかな風が天蓋と城之内の頬を撫でる。周りは太い柱と薄いカーテンに囲まれている。

建物が併設されたパルテノン神殿の中央にベッドがあるといえばイメージできるだろうか？ 空間全体が久しく見なかつた暖かな光で満たされている。

さつきまで暗い迷宮の中で死闘を演じていたはずなのに、と城之内は混乱する。

しかし自分の左隣に温もりを感じそちらを見ると

スースー

と穏やかに眠る恵理の姿があつた。

「恵理……そうだ……俺はあの蛇もどきをたおしてそれで……気を失つてたのか……」

「……克也……」

「…毎度惠理には迷惑かけてばつかだな。…あん時俺が守りたいって最初に浮かんだのはお前だ…」

いつだってお前は俺の側にいてくれて励ましてくれて…惠理がいねえなんて考えられねえな。

いつもありがとな惠理。こんな俺の側にいてくれて…お前は俺の大切なやつだ…恥ずかしくて起きてるときにや言えねえなこんなこと…ハハハハッ」

カアアアア（／／／▽／／／／）

「…ズルいよ克也…」

「うえっ!? 起きてたのか惠理!?!」

「そんなこと言われたらもっともっと好きになっちゃうよ…」

僕の方こそ…ありがとう克也。

君が僕を見付けてくれて…暗い暗闇に沈んだ僕を引っ張りあげてくれて…僕も克也のこと好き…愛してる!」ギユウ

「おっと…」

「ねえ…克也」

「なんだ惠理」

「あつちに戻ったら…結婚しよ…」

「おう！良いぜ！」

「…即決過ぎない？」

「んなこと言われてもな…俺にとつて恵理は側にいんのが当たり前だし恵理以外考えられねえからな。」

「フフフツありがとう克也…」 チュツ

「恵理…」

「克也…」

そうして見つめ合う二人の距離は縮みあと数センチで唇が重なる

ガチャ

「恵理ちゃん城之内君どう…」

「…エリ、カツヤどう？」

「城之内君起き……!!？」

……………

「な、ななななななななな中村さん!!なんて羨ましい…コホンキスしようとしてるの!!ズルい！」

「落ちていてハジメちゃん！」

「…ん落ちて着く。」

「ん？ハジメ？にしては口調がなんか変わってるような？」
「あはは…ハジメちゃんったら可愛いなあ。」

—————
そして城之内に何があつたのか説明する。

「あの後ね城之内君とハジメ君を扉の奥の場所に運んだらとても大きな部屋が一杯あつたの。それでベッドに寝かせたの。」

「…克也二日も目を覚まさなかつた…心配した」

「ユエも心配かけたな」 ナデナデ

「…ん！」

「ハジメ君は城之内君より目が覚めるのが早くてね。そしたらハジメ君にもう一人の人格…ハジメちゃんも、一緒だったの！」

「成程。もう一人のハジメか」

「うん。私は三人を仲間を守りたいって強い意思とその…（//▽//）城之内君へのその…アイジョウで私が生まれたの。」

「まあそんなこんなでハジメちゃんって私たちは呼んでるの。」

「そういうことか！よろしくな！」

「…城之内君は気持ち悪くないの？だって二重人格だし…その」

「んなもん関係ねえ。どんなハジメだろうがダチ思いの優しい奴なのは変わんねえよ。それにもう一人の自分つてあいつを思い出すしな」

「克也も思ったんだね！僕もだよ。」

（ねっ！言ったでしよ。城之内君なら大丈夫だつて…）

（うん（＃▽＃））

そうして城之内は起き上がり辺りを散策することにした。

広間には人工的な太陽が浮かび更に注目するのは耳に心地良い水の音。

扉の奥のこの部屋はちよつとした球場くらいの大きさがあつたのだが、その部屋の奥の壁は一面が滝になつていた。

天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川に合流して奥の洞窟へと流れ込んでいく。滝の傍特有のマイナスイオン溢れる清涼な風が心地いい。

よく見れば魚も泳いでいるようだ。もしかすると地上の川から魚も一緒に流れ込んでくるのかもしれない。

「ある程度見たんだけど開かない部屋も多かつたの。」

「何かしら仕掛けがあるのかどうなのか？」

そうして更に歩くと石造りの住居が見えた。

全体的に白く石灰のような手触りえ全体的に清潔感があり、エントランスには、温か

みのある光球が天井から突き出す台座の先端に灯っていた。

薄暗いところに長くいたハジメ達には少し眩しいくらいだ。どうやら三階建てらしく、上まで吹き抜けになっている。

開かない部屋の多い一階、二階を見てから五人は三階の奥の部屋に向かった。三階は一部屋しかないようだ。

奥の扉を開けると、そこには直径七、八メートルの今まで見たこともないほど精緻で繊細な魔法陣が部屋の中央の床に刻まれていた。いつそ一つの芸術といってもいいほど見事な幾何学模様である。

しかし、それよりも注目すべきなのは、その魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った人影である。人影は骸だった。既に白骨化しており黒に金の刺繍が施された見事なローブを羽織っている。薄汚れた印象はなく、お化け屋敷などにあるそういうオブジェと言われれば納得してしまいそうだ

「こいつは？」

「もしかしたら叛逆者の一人？」

「にしては何か誰かを待ってるみたい？」

「…この魔法陣何だろう？」

「試しに入ってみよう。」

と男人格に戻っているハジメと香織は足を踏み入れる。

すると……カッと純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

まぶしさに目を閉じる二人。

直後、何かが頭の中に侵入し、まるで走馬灯のように奈落に落ちてからのことが駆け巡った。

やがて光が収まり、目を開けたハジメの目の前には、黒衣の青年が立っていた。

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えはわかるかな？」

話し始めた彼はオスカー・オルクスというらしい。オルクス大迷宮の創造者のようだ。驚きながら彼の話を聞く。

「ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。

だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセージを残したくてね。

このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ。」

そうして始まったオスカーの話は、ハジメが聖教教会で教わった歴史やユエに聞かされた叛逆者の話とは大きく異なった驚愕すべきものだった

狂った神とそれに抗った人々の戦い

道半ばで力尽きてしまった者たちが後世へと希望を託したこと。

「君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。」

君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。

我々が何のために立ち上がったのか。……君に私の力を授ける。

どのような使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。

話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

……

「成程な。この世界の宗教がエヒトつつう奴ばつかなのは可笑しいと思ったがそういうことだったか。」

「そうだね。僕たちの世界と比べて多宗教じゃない理由が合ったわけだね。」

「どうする？ 神殺し？」

「……確かに昔の人の言葉だから律儀に守る必要なんてない……それに僕にとってトータ

スでの思い出は散々なものばかり……」

「ハジメ君……」

「でも、香織と恋人になれてリリアーナ女王やユエに会えた……第一目標は帰ることだけでもし……もしそれに立ち塞がるなら倒そう！」

「だなー！」

「あく、それと何か新しい魔法……神代魔法……の覚えたみたい」

「……ホント？」

信じられないといった表情のユエ。それも仕方ないだろう。

何せ神代魔法とは文字通り神代に使われていた現代では失伝した魔法である。ハジメ達をこの世界に召喚した転移魔法も同じ神代魔法である。

「何かこの床の魔法陣が、神代魔法を使えるように頭を弄る？　みたいな」

「……大丈夫？」

「大丈夫そうだよ。しかもこの魔法……ハジメ君のためにあるような魔法だね。」

「……どんな魔法？」

「えーと、生成魔法っていうみたい。魔法を鉱物に付加して、特殊な性質を持った鉱物を生成出来る魔法だね。」

「それならアーティファクトを沢山作れるね！」

「んじやあ俺たちも入るか。」

と城之内たち三人も入る

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスry……」

するともう一度オスカーが現れる。

「何かビデオみてえな感じだな。」

「でも大昔にこういうのがあったっていうのは凄いことだね。」

「…神代魔法凄い！」

そして最後まで聞き終わりオスカーの亡骸を吊おうと五人で話し合っていると、

ザッザアアアア

「……精霊の加護を持つものよ」

「!? さっきので終わりだったのに続きが！」

「もしかして城之内君たちの持つ精霊の加護が反応した？」

「我々生き残った7人は異界から現れた精霊と共に黒き神……」

太陽を飲み込む漆黒の大蛇と戦う。

しかし、奴は肉体から魂を奪う。何人もの同胞が魂を取られた……

我々も無事で済むかはわからない……

精霊の加護を持つものよ

もし我々が、敗れたその時は

ここにその力になってくれるカードを残す

願わくば漆黒の大蛇を…倒してくれ

同胞の無念を晴らしてくれ…」

「漆黒の大蛇…神だけじゃなくてそんな物騒な相手と戦って…」

「魂を取るってそんなのどうすれば…」

「…肉体の傷なら魔法で治せるけど…魂は…無理」

ハジメ、香織、ユエはそう言う。

「まさか!?漆黒の大蛇って…」

「そうだ…勇者の伴侶よ…この地でかつて我々も戦ったのだ。」

シユン

「じよ、城之内君が二人!?!」

「ヘルモス!じゃあやつぱり」

「うむ、このトータスでもオレイカルコス神の魂を収集していた。我らの世界にも危機が迫ると我ら三人はこの世界で戦い七人の同胞と共に奴らを討たんとした。

深手を与えたがしかし、奴の力は凄まじく我らも童の姿へと変わり六人の同胞も魂を

取られ、我らの世界へと逃れそれを追い我らも元の世界へと戻り戦い眠りに付くことになつた。

そして現代に甦つた奴を勇者と共に倒した。」

「そういうことだったのか……」

「あのくこつちの城之内君に似た人は？」

「勇者の仲間であつたな。我はヘルモス。精霊界より来た者である。」

「精霊つて!? デュエルモンスターズの？」

「……カツヤとエリは……漆黒の大蛇を知ってるの？」

「ああオレイカルコスの子供だ。ユエはともかく二人は知ってるだろ。ソリッドビジョンの暴走やら異常気象があつたの。」

「そうだね。あの時は凄くニュースになつた……でもしかして！」

「そのオレイカルコスの神が引き起こしたことだ。そいつを遊戯や海馬の野郎と一緒に倒したんだ。」

「そうなんだ。じゃあ城之内君は世界を救つたんだね！」

(流石城之内君だわ！)

「それでヘルモスは何でここへ？」

「うむ！ 勇者たちがこの世界へと呼ばれてしまった頃、こちらの世界へ干渉する存在を

察知した。それも見覚えのあるものだ。

特定したのがトータスで、我らと共に歩んだ同胞からもエヒトのことは聞いていた。故にこちらの世界へ侵攻するのも時間の問題と判断した。

しかし、こちらへ来るにも莫大な力を使わなければ開かぬ…通常であれば。」

「もしかして克世の縁を辿って?」

「そうだ。強き心の持ち主であり我らと共に戦った勇者を道しるべに私がここへと来た。」

「そうか…やっぱエヒトは倒さねえとか…ヘルモスまた力を借りることになる。まだまだ未熟だが宜しく頼む!」

「こちらこそ。我は奴に感知されぬよう竜の姿に変わるか探知されぬ結界を使い話すようにする。頼んだぞ。」

と言いヘルモスは姿を消す。

「わりの四人とも俺は…」

「当然! 私たちも戦うよ!」

「…ん! カツヤの力になる!」

「僕も/私も戦うよ!」

「僕は戦うつもりだったけど四人とも相手は曲がりなりにも神だよ?」

「そんなの関係ないよ！それに城之内君は神と対峙しても恐れずに向かってたんだ。それに友達の間になりたいたんだ！」

「皆…ありがとな！」

こうしてオルクス迷宮にてこの世界の真実を知り打倒エヒトを目指す6人。

彼らの進む先には何が待ち受けるか！

続く

温泉での一時…少女は乙女となり華を咲かせる

あの後オスカーの遺言を聞き終わった城之内たちはオスカーの亡骸を弔い簡素であるが墓を建てた。

偉大なる解放者オスカーオルクスここに眠る

そしてオスカーの身に付けていた指輪を拝借し他の開かなかつた場所へと行くとガチャン！

と音を立て開く。

「成程な。指輪が鍵つつうかカードキーみたいになってたつてわけか！」

「克也にしては言い例えだね！」

「確かに不審者とかに荒らされる心配はないだろうしね。」

「でもこんな奥深くへ来る人もいないだろうけどね。」

「…ん！そうかも」

そして書齋にて何かしら神代魔法の手懸かりがないかと探すと

「あつた！これは…？」

それはオスカーの残した手記でその内の一節に、他の六人の迷宮に関することが書か

れていた。

「……つまり、あれか？　他の迷宮も攻略すると、創設者の神代魔法が手に入るとい
とか？」

「……かも」

手記によれば、オスカーと同様に六人の「解放者」達も迷宮の最深部で攻略者に神代魔法を教授する用意をしているようだ。生憎とどんな魔法かまでは書かれていなかったが……

「……帰る方法見つかるかも」

ユエの言う通り、その可能性は十分にあるだろう。実際、召喚魔法という世界を越える転移魔法は神代魔法なのだから。

「決まりだな！　他の迷宮を踏破して神代魔法を手に入れる。そして俺たちの世界へ帰還する方法も何か見つかるかも知れねえな！」

「そうだね！」

それからしばらく探したが、正確な迷宮の場所を示すような資料は発見できなかった。現在、確認されているグリユーエン大砂漠の火山、ハルツィナ樹海、目星をつけられているライセン大峽谷、シユネー雪原の氷雪洞窟辺りから調べていくしかないだろう。

「……ねえ城之内君提案なんだけどしばらくここに留まらない？さつきと地上に出たいのは山々なんだけど」

「……せつかく学べるものも多いし、ここは拠点としては最高だ。他の迷宮攻略のことを考えてもここで可能な限り準備しておきたい。良いかな？」

「確かに準備は必要だな！デュエルだつて万全のデツキを構築して準備するのが一番だからな。」

「僕も賛成かな。」

「私も！」

「……ハジメたちと一緒にならどこでもいい」

そして、五人はここで可能な限りの鍛錬と装備の充実を図ることになった。

幸い、鉱石類といった錬成に必要なものが揃っていたので新しい武器や移動手段を確立させることは充分可能である。

ちやぼん…

城之内は久しぶりに温泉へとは入り身体の疲れを癒していた。

「ふう…何だかこつちに來てから色んなことがあつたな…トータスのこと解放者のこと」

…ああごちゃごちゃ考えてたって仕方ねえ！俺に出来ることをやるしかねえ！俺は弱え！だけど自分の周りぐれえ守れるようにしねえと…」

「うん、城之内君なら出来るよ…だって私も僕も君に助けられたんだから」

「うおお!?ハジメつてもう一人の方か!?!」

といつの間にか隣に入ってきていた女人格のハジメに驚く城之内

「ハジメに言つてちよつと変わつてもらつたの…お礼も言いたかつたしこうやつて話したいと思つて…中村さんにも許可は取つたから大丈夫。」

「そ、そうか…」

と言いながらハジメを見る。

そこには魔物を食べた影響か胸が大きくなり、女としても色気が出ていて、赤黒い線がはいり左腕のない姿…

城之内はハジメを…いやハジメの左腕を見て

(俺がもつと早く助けにいつてりや…ハジメのやつは)

「ううん。そんなことないよ。城之内君は私を助けてくれた。もし四人がいなかったら私たちは人を止めてたかもしれない…でも城之内君の決意が…四人の思いが私たちを引き留めてくれた。」

「俺分かりやすいか?」

「なんとなくだけどね…それに私たちずつと親友つていなくて友達になっても長続きしなくてそれで両親の仕事の手伝いをしてたの…」

今はちよつと逃げてたのかもって思う。でも城之内君のデュエルを見て凄く目を引かれたの。

それで人を惹き付けることをしたいって…トータスなんて私たちからすれば良い思い出もないし急に連れてこられて無能って言われて…

でも城之内君のこと、香織、八重樫さん、園部さん、谷口さん、ユエやリリアーナ女王のことをもつと知れたのだけは良かったと思う。」

「ハジメ…」

「ありがとう城之内君…こんな私たちを受け入れてくれて…」ギユウ

と城之内に抱きつく女ハジメ。右腕で抱きつくハジメを優しく抱きしめ返す城之内。

「んなこたねえよ。ハジメは仲間だ。俺よりも頭が良くて頼りになって助けられたんだ。俺の方こそありがとな！」

抱き付いた身体は温泉の熱さとは別に熱を帯び、心臓は早鐘を打ち自分でもビツクリするほどドキドキしている。

顔も真っ赤でそれはのぼせてしまうといったことではなく恥ずかしい感情もあり思わず鼻血が出そうな位な

ハジメであつた。

（わっわあー！！！！どどどどどど、どうしよう!?感極まっちゃって抱きついちゃったけど迷惑じゃないかな…!）

それにしても城之内君の胸凄く逞しくて意外に鍛えてて…腹筋も硬い…このまま腕の中で安心して寝ちやいそう…もういつそのことベッドに

…ダ、ダメダメ!城之内君には中村さんがいるんだからダメだよ!うううど、どうすれば良いのハジメエエ)

（まあまあ落ち着いてもう一人の僕。そういう時は深呼吸して冷静になると良いよ。城之内君だって満更でもない筈だろうしね。）

（う、うん…スーハー、城之内君の男の子の匂い…す、すごい…）

（落ち着くどころかなんか悪化しちやつてるなあ。まあトータスならもう一人の僕の身

体を作れるかもだしそれも探そうかな：城之内君といたいのは僕も同じだしね。」

敢えて言うとはジメたち二人が城之内へと抱くものは男人格は友愛であり友として横に立ちたいと思い、女人格のハジメは心愛で自分も恵理のように城之内の側にずっといたいと思つている。

「ハジメ大丈夫か？なんか顔赤いがのぼせてんなら一回出た方が良いんじゃない？」

「だ、だいひよぶだよ……」

「むっふっふくええ身体してますなあ〜ハジメちゃんはあ」

ムギユウ

「へえっ？な、中村さん!?あう〜」

「いやあく何て言うか庇護欲をそそられるとか物凄く可愛いよ！ほれえここが良いんでしょ〜」

「ひゃあ!?な、中村さん、だ、ダメえ……」

「恵理って呼んでくれないと止めてあげない」

「え、恵理さん……」

「なあに？克也の身体に興奮しちゃった？」

「!?ご、ごめんなさい！その……」

「フフフ、大丈夫、ハジメちゃんも克也のこと好きになつたんでしょ？僕は歓迎するよ。」

「えっ！…良いの？」

「ハジメちゃん、は克也の魅力を知って惹かれたんでしょ。克也のことを好きになつてくれる人に悪い人はいないし…それにハジメちゃんなら私も大歓迎だから。」

「惠理さん…ありがとう！」

「どういたしまして」 ナデナデ

とハジメを後ろから抱きしめて頭を撫でる惠理。

「仲が深まったみたいで良かったぜ。」

「…ん！」

「そうだね！それにしても惠理ちゃんだけズルいよ！私もハジメちゃんに抱きつく！」

と前に抱きつく暴走突撃娘。

「……………うおお！?ユエたちもはいつてきたのかよ!?!…お、俺は先に出るぞ！」バシヤアア

と流星に出た方が良いと立ち上がる城之内。

「…カツヤと一緒に…入りたい。色々話したい！」

と無垢な瞳を向けるユエと

「ハジメちゃんももうハジメ君もハジメちゃんもどっち愛してるよ♥？」

「香織…ありがとう…でもその…あんまり胸は揉まないで？」

「ハジメちゃんたちの身体が柔らかくて安心するのがいけないんだよ！もう愛しくて

可愛い?？」

「そうだね!なんだかほっとけないっていうかねえ!」

と盛り上がる二人。

「…そういやあもう一人のハジメにも名前があつた方が良いよな?」

「それは良いね!」

「…ん!名前は重要…もう一人のハジメにも付けるべき!」

「そうだね!」

(僕とはまた違う個人の人格だから良い考えだと思うよ!)

「皆…ありがとう…」

と照れながら顔を赤らめるハジメちゃん。

「そうだとしたらどうという名前が良いかな?」

「うーんそうだな…」

と考える中で

「それなら!レイカってどうだ?ハジメつつう始まりから生まれた新しい始まりのゼロで華みてえ綺麗な笑顔から取ったんだけどどうだ?」

「レイカ…南雲レイカ…城之内君…もう一回呼んでくれる?」

「レイカ。」

「うん…うん！ありがとう城之内君！」

バシヤアと勢い良く城之内の胸へと飛び込むハジメちゃん改めてレイカ

「レイカちゃん嬉しそうだね！」

「うん！レイカちゃんもハジメ君も嬉しそうで良かった！」

「…レイカもハジメもカオリも私は好き…」

「ユエちゃん」

と抱きつく香織。

……そうして一時間ばかり温泉に入っていた五人はハジメがのぼせてしまったので
出ることになった。

精霊たちとの語りいと、恵理の出生の秘密

「……レイカ、どうだ？ 気持ちいいか？」

「んん、凄いく気持ちいいよお」

「……そうか！ じゃあ、こっちは？」

「あ、それもいいな」

「ほれこつちもやるぞ！ まだまだ硬いからな。何回もやって柔らかくしねえとな」

「城之内君：優しくしてね……」

「やり始めは硬いからな。定期的にやらないとにぶっちゃうしな！」

「うん……城之内君になら何されたって構わないもん……私の全部を預けられるよ。」

現在、城之内はレイカのマッサージ中である。エロいことはしていない。何故、マッサージしているかという点、それはハジメの左腕が原因だ。ハジメの左腕に付けられた義手と体が馴染むように定期的にマッサージしているのである。

この義手はアーティファクトであり、魔力の直接操作で本物の腕と同じように動かすことができる。擬似的な神経機構が備わっており魔力を通すことで触った感触もきち

んと脳に伝わる様に出来ている。

また、銀色の光沢を放ち黒い線が幾本も走っており、所々に魔法陣や何らかの文様が刻まれている。

実際、多数のギミックが仕込まれており、工房の宝物庫にあったオスカー作の義手にハジメのオリジナル要素を加えて作り出したものだ。

生成魔法により創り出した特殊な鉱石を山ほど使っており、世に出れば間違いなく国宝級のアーティファクトとして厳重に保管されるだろう逸品である。

もつとも、魔力の直接操作ができないと全く動かせないので常人には使い道がないだろうが……

「こうやって身体をほぐして柔らかくしていると多少無理な動きをしても平気になる気がするね。」

「それでも無茶、油断はしない方がいいぞ。何事も身体が資本になるからな。」

「うん！ そうだね！ それじゃ代わるね、」

「んん… ありがとう城之内君おかげで身体が軽くなったみたいだよ。」

「そいつは良かったぜ。まああとはその義手の軽量化をもつとしてえな」

「それは追々やっていこうと思うよ。それにしてもここで準備をしてもう2ヶ月になるんだね。」

「ああ大分準備は出来たな。にしたって色々造ったもんだよな。」

「そうだね。魔力駆動二輪と四輪、シユラーゲンの改造色々造ったもんね。」

さらに電磁加速式機関砲：メツエライを開発した。口径三十ミリ、回転式六砲身で毎分一万二千発という化物だ。

銃身の素材には生成魔法で創作した冷却効果のある鉱石を使っているが、それでも連続で五分しか使用できない。しかしレイカが使う場合は瞬間的に冷却できるためか10分は稼働できることは確認できた。

ロケット&ミサイルランチャー：オルカンも開発した。面での攻撃に使えて、ドナーの対となるリボルバー式電磁加速銃：シユラークも開発された。

これは他の四人にも渡しており皆一様に射撃の腕が上がることになった。

そして技能の確認をしていて発見したこともあった。

氷血の技能はハジメも使えるものの細かい操作といったことは苦手で主に地面から錬成の要領で氷を造りだし足止めして魔物を倒すといった形だ。

逆にレイカは細かい操作や物質を作れて氷の弾丸や空気中の水分からあらゆる武器や果てにゴーレムも作れるようになっていた。

反面、纏雷の操作は少し苦手なためかハジメよりは銃での攻撃の威力が下がるといったこともある。

威力はハジメ、多彩な技はレイカと上手い具合に役割が噛み合っている。

そして神水であるが、遂に神結晶が蓄えた魔力を枯渇させたため、試験管型保管容器十二本分、恵理が水筒に入れておいた分、城之内が瓶に保管していた二十本程でラストになってしまった。

原作よりも人数が多く、消費も少なかったためかそこまで神水が減ることはなかったようである。

枯渇した神結晶に再び魔力を込めてみたのだが、神水は抽出できなかった。やはり長い年月をかけて濃縮でもしないといけないのかもしれない。

枯渇した神結晶をハジメと城之内は神結晶の膨大な魔力を内包するという特性を利用し、一部を錬成でネットワークスやイヤリング、指輪などのアクセサリーに加工した。

更にハジメはコンタクトレンズのように眼球を覆うような形に錬成して生成魔法を使い、神結晶に、“魔力感知”“先読”を付与することで通常とは異なる特殊な視界を得ることができる魔眼のようなものを創ることに成功した。

これに義手に使われていた擬似神経の仕組みを取り込むことで、魔眼が捉えた映像を脳に送ることができるようになったのだ。

魔眼では、通常の視界の他に魔力の流れや強弱、属性を色で認識できるようになった上、発動した魔法の核が見えるようになった。

この魔眼により、相手がどんな魔法を、どれくらいの威力で放つかを事前に知ることができる上、発動されても核を撃ち抜くことで魔法を破壊することができるようになった。

ただし、核を狙い撃つのは針の穴を通すような精密射撃が必要ではあるが。

因みに、この魔眼、神結晶を使用しているだけあって常に薄ぼんやりとはあるが青白い光を放っている。

通常の視界も確保したいと右目だけに入れるとハジメの右目が常に光るのである。

というわけで城之内は何故か工房内にあったメガネをハジメ専用に造りだし、神結晶の光だけを押しさえる一品を作り出した。

これにハジメは勿論、レイカも城之内からの贈り物ととても舞い上がっていた。因みにメガネのカラーリングもハジメだと黒、レイカは水色に変化する仕様にしたという。

それと途中城之内は恵理に指のサイズを確認したりしていた。

そして、それをそれぞれ三人へと贈ったのだ。ユエは強力な魔法を行使できるが、最上級魔法等は魔力消費が激しく、一発で魔力枯渇に追い込まれる。香織は回復役でもあるので魔力が充分であれば皆を癒せる。恵理は霊術や支援をするので必要であった。

これを電池のように外部に魔力をストックしておけば、最上級魔法でも連発出来るし、魔力枯渇で動けなくなるということもなくなる。

そう思って、ハジメは香織とユエに「魔晶石シリーズ」と名付けたアクセサリー、一式を贈り城之内も恵理へと贈った。

そのときの反応は

「ありがとうハジメ君！結婚指輪大事にするね！」

「…ん、香織とハジメとお揃い…嬉しい！」

「……なんかちよつと恥ずかしい…」

と恵理は顔を赤くし、

「まああれだ…魔力のこともだけどよ…先に渡しとこうと思ってな。俺なりの決意だ！

受け取ってくれ。」

「…克也に付けて欲しいな…」

と言い左手の薬指を差し出す恵理。

「おう！良いぜ！」

とすんなり指輪をはめる城之内。

「……何か城之内君と恵理ちゃん熟練の夫婦みたいだね」

「…仲良し。二人ともお似合い！」

「そうだね…二人とも固い結束で結ばれてるね。」

(レイカも頑張らないとね！)

(うん！恵理さんと香織から料理は習ってるし頑張るよ！)

「おうおう！仲良しで何よりだぜ！二人とも！」

「こらヒータ、折角の雰囲気壊しちゃダメでしょ！」

「まあ良いじゃんかエリア：僕たち皆、恵理の幸せを願ってるんだから。」

「全く：アウスつてば、確かにそうだけどね、克也さんなら幸せにしてくれると私たちは信じてますから…」

「そうですね…恵理に、素敵な伴侶が出来てマスターもお喜びになってらっしゃることです。」

「も、もう皆してからかって〜！」

「まあ良いじゃねえか！皆恵理を心配してんだ。」

お分かりの通り四霊使いの四人とブリザード・プリンセスも恵理と城之内の仲を祝福している。

あの温泉の後に恵理から紹介すると言われ、顔合わせをしていた四人。

「あたしはヒータだ！火霊術を使う凄腕な術使いだぜ！」

「皆様初めまして。私はエリア。主に水霊術を納めております。」

「僕はアウス。地霊術が使えて重力系のことも出来るから大地のことなら任せて！」

「私はウイン。風霊術が使えます。雷系の霊術も使えますので宜しく。」

「最後は私ですね。ブリザード・プリンセス、氷のことなら私にお任せください。」

「わあ凄いい！皆デュエルモンスターズの精霊なんだ！」

「…凄い。魔法の力肌で感じられる…これが精霊…！」

「中村さんも城之内君と同じ力に目覚めたってことだね！」

「そいつは違うぜ！元々恵理はあたしらの力は使えてたんだ」

「どういうことだよ？」

「恵理の過去は知ってますね…私たちはマスター…恵理様のお父上の精霊でした。」

「恵理の親父さんの!？」

「そう。実はねマスターは人と精霊のハーフだったんだ。」

「まじか!？」

「そう。マスターはある人との間に出来て僕たちとも親交が深かったんだ。それから知ってる通り恵理が生まれて僕たちのことも認識出来て皆して自分の霊術を教えてたんだ。」

「しかし…マスターは…不慮の事故で…恵理も心を閉ざしてしまい私たちとのことも忘れてしまいました。恵理が一番辛かったときに…何も私たちは出来ませんでした。」

「あんのクソ女！何度焼き付くしてやろうかと思つたか！」

「ヒータ！」

「…悪い…エリア」

「しかし恵理はちゃんと成長してくれました…それもこれも貴方のおかげです。克也殿」

「俺か？」

「ええ貴方が恵理を見守つてくださつたおかげです。亡きマスターに代わりお礼を言わせてください。」

「俺は俺に出来ることをしただけだ。感謝してもらいたくてやった訳じゃねえさ。」

「それでもです。ありがとう克也殿」

「おう！恵理の伴侶！」

「なんだ！」

「恵理のこと悲しませたらヤキ入れるかな！覚悟しとけ！」

「ヒータつたら…でも恵理様を悲しませることは許しませんよ。克也様」

「今までのことずつと見てたから君のことは知ってる。恵理のこと幸せにしてね。」

「克也さん。無茶も程ほどにですよ。恵理も貴方のことを心配してるし、時にこちらもハラハラするときがあるんですから。」

「克也殿…伝説の3竜に認められ、神にも立ち向かったその勇氣…どうか恵理のことを宜しくお願い致します。」

「ああ！勿論だぜ！恵理は大切なやつだ！絶対に幸せにする！」

「か、克也…」プシュー

と顔を真っ赤にした恵理。

「…あれ？ということとはもしかして恵理ちゃんは精霊とのクォーター？つてことになるのかな？」

「…そつか！恵理から精霊の力感じたのそういうことだった。」

「霊術も元から素養があったってことだね。」

—————

ということがあった。

ヒータは恵理の伴侶で意外に気が合うのか城之内と意気投合し火霊術を教えたりしていた。

エリアは回復魔法や浄化することが得意で香織に水霊術を教えアウスはハジメに錬成から錬金術の技を教えて、原材料の構成元素や特性を理解したうえで物質を分解し、適した構築式を用いて再構築するという三段階を経た錬金術を覚えたハジメ。

ウインもまた風霊術を、ユエへと伝授しユエからトータスの魔法を習い修練していた。

ブリザード・プリンセスは恵理から雪姫という名前で呼ばれるようになり生前のマスターと同じ呼び方に感極まつて恵理を抱きしめたりもあつたがレイカへと氷の魔法を教え、意外に武闘派であつたため一通りの武術の動きを伝授した。

「それにしても雫ちゃんたち元気かな？」

「この前聞いた感じだと順調に進んでるみたいだし元気じゃねえか？」

「そうだね。八重樫さんにも心配掛けちゃつたから会えたら良いね。」

「大丈夫だよ南雲君！鈴も相変わらず元気みたいだし王宮ならリリイめいるからね！」

「そうだな！」

迷宮で滞在すると決めて数日後に雫たちへと連絡を取り無事に繋がりに報告をした城内之内

事情を話し、暫くは他の場所の迷宮を目指すと報告した。

それから十日後、遂に五人は地上へ出る。

三階の魔法陣を起動させながら、静かな声ハジメは告げる。

「皆…僕たちの武器や僕たちの力は、地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っていると
いうことではないと思う」

「まあ王国上層部は特にそうかもしれないね…」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大
きく」

「確かに可能性は高いかもしれないね。」

「教会や国だけならまだしも、バツクの神を自称する狂人共も敵対するかもしれない。」

「…ん」

「世界を敵にまわすかもしれないヤバイ旅だ。命がいくつあっても足りないぐらいな」

「今更だろ！それに俺たちは絶対に戻る！誰一人欠けることなくな！」

城之内の言葉に思わず苦笑いするハジメ。そして真っ直ぐ自分を見つめてくるユエのふわふわな髪を優しく撫でる。気持ちよさそうに目を細めるユエに、ハジメは一呼吸を置くと、キラキラと輝く紅眼を見つめ返す。

「さあ！他の大迷宮目指して出発だ！」

こうして五人はオルクス迷宮より旅立つ。

待ち受けるものは様々であるが五人の力をあわせればどんな困難にも立ち向かえるであろう。

ライセン大迷宮編

孤高の決闘者 トータスへ降り立つ

「ここは空高く人のいない暗闇

そう宇宙である。

それはデュエルの発展を成すために最後の実験を行おうとしていた。

「兄さま本当に行くの？」

「ああ……これが完成すれば新たなデュエルの幕開けだ。」

「でもその試作機のテストはあまりにも危険だよ！」

「次元領域エミュレーターがどれほど危険なシステムなのか分からない！」

「……木馬……後は任せろぞ」

「兄さま必ず帰ってきて！」

かつて神を操り白き竜と自らの道^{ロード}を切り開かんと闘い生涯の宿敵に再び会うべく己の道を行く決闘者

「デュエルディメンションシステム！作動！」

ドツドドド シュユユユユン

宇宙エレベーターに沿いその機体は打ち出された。

「待っている遊戯…勝ち逃げなど許さん…必ず貴様に味会わされた屈辱を晴らす！」

PPPPPPPPPPPPPP

エラーエラーエラー

「なに!? クツ! まだだ! 俺は諦めんぞ!」

「ブルーアイズよ! 今再び我が野望^{ロスト}を行かん!」

シュユユユユ

そうして彼は光と共に世界からロストした。

—————

ここはトータスのハルツィナ樹海

その中でもハウリアと名乗る兎人族達が数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。

兎人族は、聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べればスペックは低いらしく、突出したものが無いので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強いらしい。

性格は総じて温厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深

い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なった、可愛らしさがあるので、帝国などに捕まり奴隷にされたときは愛玩用として人気の商品となる。

暮らしていたと言うのもつい最近、族長の娘が亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操るすべと、とある固有魔法まで使えたのが

樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばれてしまった。

しかしハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出たのだ。宛もなく北の山脈を目指すしかない彼ら一族。

「ゴメンなさい父様…私のせいで…私…私」

「泣くなシア。我等は家族なのだ。家族が殺されるのを黙って見ていることなど出らん。」

「そうよシア…貴女は私たちの大切な娘…娘を守るのが親の務めだもの…ケホツケホツ」

「母様…無理はしないでください…最近では体調も良くないです…」

「平気よ。シア…」

「でも…これからどうすれば…」

ハウリア族の長カムは考える。

あのままフェアベルゲンにいても一族は殺されていたであろう。

しかし、これから先例え北の山脈へ辿り着けたとしても魔物と戦う術など持っていない。

そもそも北の山脈へ行けるのかも分らないのだ。

途中、帝国兵に見つかれば奴隷に：最悪殺されてしまう。

身体の弱い妻や子供たちは捕まり帝国の慰め物にされるかもしれない

族長としての立場と妻と娘を守らなければと言う使命、一族の運命

それらをカムは背負い北の山脈へと足を進める。

例えその先に絶望しかないとしても：

そんな彼らの側で

ヒュユユユユユ ドオオオオオオン

と爆発音が聞こえた。

「あれは?! いったい何が?」

「父様…どうしますか?」

「…フム…行ってみよう。何かあったのかもしれない。」

と彼ら一族はその音の方へと進む。

彼らは優しい…いや優しすぎるのだ。魔力を持ったシア一人のために一族全員が狂奔するぐらいなのだ。城之内たちの世界でなら生き辛くとも何とかなっただであろう。

しかしここは魔物が出現し平和の隣に死が待ち同じ亜人でも敵となるトータス。だからだろうか？

彼らはその先で出会う。

「人間！で、でも怪我してる！」

「…気を失っているようですね…」

「父様…私」

「シアよ。お前のしたいようにすれば良いのだ。それに私も同じ思いだ。」

「は、はい!! ?このキューブ何だろうか？」

そうして良く分からない物に乗った人間の男を介抱することにしたハウリア族。

トータスにて孤高の決闘者と心優しいハウリア族が出会った。

それがハウリア族全体の未来を変える転機となるのは今はまだ誰も知らないことであつた。

ハウリアは白き龍の威光を垣間見る

あれからシアたちは助けた人間を介抱するため葉っぱなどの柔らかい簡素なベッドを作り寝かせた。

「それにしてもいったいこの人間は？こんな未来見たことないですう」

「シアでも見えないとは……」

「彼は何者なのかしら……コホッ」

「モナ無理をするでない。お前も休んでおくのだ」

他のハウリアも辺りを警戒するものの興味はあるようでその人間を見ていた。

—————

「……うっ……ここは？」

「！目が覚めたんですね！」

「っ！」

「良かったです！物凄く大きい音がして行ったら良く分からない物から貴方が出てきて

……

「そうだ……俺は……！小娘、アテムもしくは遊戯という男を知っているか？」

「アテム？遊戯？すみません、私は知らないですね。私たち一族はハルツイナ樹海のフェアベルゲンという国にいたので他の国のことは…」

「…冥界ではないのか…」

「私はシア・ハウリアと言います！人間さんは？」

「…海馬瀬人だ。」

「海馬さんですね！」

「小娘、俺の乗っていた機械はどこにある？」

「えっと何だかバチバチ音を立ててて、壊れちゃってるかもです。」

「…なんだと！」

（くつまさか壊れるとは…しかも冥界ではないだと？）

「あの海馬さん…これ」

とシアはその物体次元領域エミュレーターを海馬へ手渡す。

「海馬さんのですよね？何だか置いておいてはいけないと思って」

「…礼をいう。」

と海馬は立ち上がる。

「海馬さん？」

「まずはあの装置の状態を見なければ…小娘案内しろ」

「は、はい！」

そうしてシアは海馬を案内する。

プスツプス

海馬の乗っていたシャトルは見事に壊れていた。内部の回路には異常は見受けられず外装、ハッチ部分は完全に壊れていて良くこれで無事だったと言わざるを得ない。

「おお目を覚ましたのですね」

「…貴様は？」

「私はカム。シアの父でハウリア族の長です。」

「…何かの遊技か何かでもやってるのか？」

と海馬は頭に付いた耳を見て思わず呟く

「もしや獣人を見るのは初めてですか？ここトータスでは獣人は珍しくないのですが…」

（伊達や酔狂で言っているわけではなさそうだな…今は情報を集めるのが先決か）

「トータスとはこの世界のことか？知っている限りで良い。話せ。」

そしてカムよりトータスのことを教えられる海馬。

人間の国ハイリヒ王国、軍事国家の帝国、魔人族と呼ばれるものたちに人族などに迫

害される亜人たち

「ふうん、成る程な。どの世界でもやっていることは同じか…虫酸が走る。」

「貴方はどこか他の人族と違うようですね。」

「当然だ。この俺がそこらの凡夫と同じなど片腹痛いわ。」

この男アテムに会うために無重力空間が必要だと判明すると宇宙エレベーターを作り上げ、冥界のアテムに会うために次元を越えるのだからスケールが違う。

「ケホツ…目が覚めたんですね…」

「母様まだ寝てないと…」

「…病気か？」

「昔から身体が弱く近頃は咳も止まらず悪化して…」

「私のせいで…国も追われて…」

「小娘が？」

「シアは我々ハウリア族…いえ亜人からしても特殊なのです。本来亜人は魔力を持ちません。しかしシアは魔力を持って生まれたのです。」

この16年シアのことを隠し生きてきました。しかし、それもフェアベルゲンにバレてしまいました。」

「だが極論その小娘の身柄を渡せば貴様らは助かったのではないか？貴様は長、上に

立つものだ。時には冷徹に判断を下さねばならん。」

それはKCの社長として、上にたつ海馬だからこそ説得力があった。

「確かにそうでしょう。長としては失格です。しかしシアは娘で家族なのです…見捨てられるわけがありません。」

「…」

海馬とて様々な人間にこれまで会ってきた。その中でも善良なものたちにもあったことはあった。しかしハウリア族程、底抜けなお人好しには出会ったことはなかった。

「一時の判断で一族全体の首を絞めることになるぞ。」

「例えそうなったとしても私は…私たちはあの時の選択に後悔はありません。」

「長…大変です！ハイペリアが！」

幼い子供たちを庇い合うハウリアたちの上空に姿は俗に言うワイバーンというやつが一番近い。体長は三〜五メートル程で、鋭い爪と牙、モーニングスターのように先端が膨らみ刺がついている長い尻尾を持っている。

ライセン大峡谷に生息し雑食で獲物を狩る魔物であり、

そこを通るハウリアたちは格好の獲物であった。

ハイペリアは兎人族の上空を旋回しながら獲物の品定めでもしているようだ。

そのハイペリアの一匹が遂に行動を起こした。大きな岩と岩の間に隠れていた兎人

族の下へ急降下すると空中で一回転し遠心力のたつぷり乗った尻尾で岩を殴りつけた。轟音と共に岩が粉碎され、兎人族が悲鳴と共に這い出してくる。

狙われたのは二人の兎人族。ハイペリアの一撃で腰が抜けたのか動けない小さな子供に男性の兎人族が覆いかぶさって庇おうとしている。

そしてハイペリアは口を開け周りの兎人族がその様子を見て瞳に絶望を浮かべた。誰もが次の瞬間には二人の家族が無残にもハイペリアの餌になるところを想像しただろう。しかし、

「攻撃の無力化発動！」

ギイイーン

とハイペリアはそれ以上先に進むことが出来ずにいた。

そして声がした方向を見る。

「本来助ける義理などないが借りを作るのは俺の性にあわん。所詮は獣畜生…取るに足りん。」

「か、海馬さん逃げましょう！ハイペリアは狂暴な魔物です！敵うはずが！」

「狼狽えるな！」

「はいいいいい！」

「小娘、貴様は自分のせいで一族を危険に晒したと思っっているな。」

「は、はい…私が素直に捕まってれば…」

「弱者に選択権などない！何時如何なる時も勝者にしか道は開かれん。貴様は未来が見えると言ったな。」

「はい…大体の未来は見えます…それで…」

「それがどうした！オレは未来などに導かれはしない！オレの踏み印したロード！それが未来となるのだ！」

「！」

そうしてる中で痺れを切らしハイペリアは海馬とシアの方へと矛を向ける。

「その照準を俺に向けたと言うことは貴様らは俺の道を塞ぐ障害…引導を渡してくれるわ！」

ギイアアアアアアアアアア

「うおおおおおおお」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

海馬の闘志がオーラとなり可視化される。デュエルディスクの自我増幅機能も合わせりまるで大気を揺らすようだ。

「目覚めよ…我がデツキに宿りし蒼き炎の化身…！今こそその姿を現せ…ブルーアイズホワイトドラゴン！」

そして現れるは白き龍。

海馬の魂のカードと言える最強の僕。

その姿は敵に絶望を味方に希望を与えるものであった。

「…綺麗…」

その姿を間近で見っていたシアはその姿に見惚れていた。

ハイペリアはそれでも海馬へ突っ込む。

「行けブルーアイズ！滅びの爆裂疾風弾！」

ブルーアイズは咆哮とともにブレスを放つ！

それだけで間近に迫るハイペリアと射線上にいた個体を含め殲滅された。

「さらにXヘッドキャノン召喚！」

肩にキャノン砲を搭載したXヘッドキャノンは照準をあわせ

「撃ち落とせ！」

残るハイペリアの翼を貫通し地に落とす。

「ふうん…肩慣らしにもならんわ…」

「す、凄いです！あんなに一杯いたハイペリアをやっつけましたあ！」

「借りは返した何処へでも行くが良い。」

「海馬殿…お願いがあります…」

「なんだ」

「我らハウリアを仲間に加えてください！」

「断る…何故そんなことをせねばならん。」

「我等は弱い…戦鬪になれば我等になす術はありません。ここを出て北の山脈へ行く途中に帝国兵に会えば大勢が死ぬでしょう。」

「ならばどうする？戦わずしてここで朽ちるか？」

「我々だつて死にたくはない…しかし戦う術を知らず育ちました。隠密や聴覚は優れています。鍛えて各地へと派遣すれば…」

とカムがいうと次々と頭を下げ一族全員が頭を下げる。

(…聴覚と隠密…この世界から冥界へ向かうためにも情報は多ければ多いほど動きやすくなる。鍛えて各地へと派遣すれば…)

「…俺は仲間などいらん。」

「海馬さん!？」

「だが貴様らが部下になると言うのなら好きにしろ。だが付いてこれん者は容赦なく追いていく。」

「海馬さん…ありがとうございます。ごさいますしゆゆゆう!!」

と抱きつくシア。

「ええい離さんか鬱陶しい！」

「海馬さんはなんと言うか上に立つ長のようですね。」

「貴様らは風に言えば大規模な組織を束ねる社長：長をしているからな。」

「そうだったんですね。ケホツケホツケホツ」

「まずは安全を確保しろ：それから戦う術を教えてやる。KCトータス支部の社員ども！このオレが教えるのだ。泣き言は聞かん！」

「はい！社長！」

こうしてハウリア族を部下にした海馬。

冥界へと至るために情報を集めるべく教育をしていくのであった。

覚醒の女武者!恋心は留まることを知らず何処までも!

時は城之内たちがオルクス最深部へ辿り着いた時

城之内たちがハジメを救出しに向かい一月程経った。

光輝達勇者一行は、再びオルクス大迷宮にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティート、小悪党組、それに永山重吾という大柄な柔道部の男子生徒が率いる男女五人のパーティードだけだった。

理由は簡単だ。話題には出さなくとも、ハジメの死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。「戦いの果ての死」というものを強く実感させられてしまい、まともに戦闘などできなくなったのだ。一種のトラウマというやつである。

当然、聖教会関係者はいい顔をしなかった。実戦を繰り返して、時が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促してくる。

しかし、それに猛然と抗議した者がいた。愛子先生だ。

愛子は当時遠征には参加していなかった。

作農師という特殊かつ激レアな天職のため、実戦訓練するよりも、教会側としては農地開拓の方に力を入れて欲しかったのである。愛子がいれば、糧食問題は解決してしま

う可能性が限りなく高いからだ。

そしてその愛子の抗議で彼女との関係悪化を避けたい教会は無理に戦いに参加させるようなことはなかった。

光輝は香織が城之内と共に行くことを事後承諾させたことが気に入らないよう香織の心配をするばかり。

檜山は寝ると悪夢を見ると戦いへのめり込むしかなく仕方なく参加していた。

「…城之内君たち無事かしら…無理してないかしら…」

「シズシズ大丈夫だって！エリリンだっているしカツヤンが守ってくれるって。」

「鈴…そうね…今は信じるしかないものね。」

そうして65層へと辿り着く一行。

あの時の光景が甦る。

下を見れば果てしない闇が広がっている。

（城之内君からの連絡はここ辺りで途切れてた…この下に三人は…南雲くんは…）

「雫！君の友だち思いなところ俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！前へ進むんだ。きつと、南雲もそれを望んでる。この先にいる香織の目も覚まさせて連れて帰るんだ！」

「ちよつと、光輝君……」

「谷口さんは黙っていてくれ! 例え厳しくても、幼馴染である俺が言わないといけないんだ。……雫、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせない。雫を悲しませたりしないし、香織だって連れ戻すと約束するよ」

「はあく……そうね。」

「そうか、わかってくれたか!」

(言葉ではなんとだつて言えるわ……光輝はいつもそう……口先だけで人の善性しか見ようとしない……あの時だつて……そう。)

私が虐められて……助けてほしかったのに……でもあの時……他のクラスで女の子に悪口を言つてた上級生たちを同学年の子が殴り飛ばしてそれで

その話題で持ちきりになって……イジメも止んだ。

……城之内君は違つたなあ……理不尽なことを許さず弱気を助け、私の夢も笑わないで真剣に聞いてくれた……恵理、香織を守ると言つて南雲君を見つけて行動を起こした。)

「シズシズ……本当に大丈夫?」

「ええ、大丈夫よ。いつものことだもの……それに城之内君たちだつて今も探してるもの私も強くないと……」

「気を引き締めろ！　このマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」
付き添いのメルド団長の声が響く。光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。

しばらく進んでいると、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感は的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつきりと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないのかよ!？」

龍太郎も驚愕をあらわにして叫ぶ。それに応えたのは、険しい表情をしながらも冷静な声音のメルド団長だ。

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ！　退路の確保を忘れるな!？」

そう言うメルドの前に雫が先陣を切るようにベヒモスへと向かう

「全てを切り裂く至上の一閃　『絶断』!？」

雫の抜刀術がベヒモスの角に直撃する。魔法によって切れ味を増したアーティファクトの剣が半ばまで食い込むが切断するには至らない。

「任せろ! 粉碎せよ、破碎せよ、爆砕せよ 〃豪撃〃!」

メルド団長が飛び込み、半ばまで刺さった雫の剣の上から自らの騎士剣を叩きつけた。魔法で剣速を上げると同時に腕力をも強化した鋭く重い一撃が雫の剣を押し込むように衝撃を与える。

そこから龍太郎や光輝もダメージを与えていく。

(私は…弱い…クラスメイト一人守れず親友の心を守れなかった。南雲くんのことだつて死んでしまっていると思う自分がいる。でも…城之内君は信じて言った。もう二度と友達を失わないために!力を振るう!)

(その先に絶望しかなくともか?)

(えっ?)

(力を振るい血を流し戦う。だがその血にまみれた姿に離れてく者、拒絶する者、恐怖を抱く者が多くいる。汝はそれでも力を振るうか?)

(そう…ね。私は邪魔者だつて…周りに虐められたことがある…それで私は信じてたものに裏切られた…正直今だつて南雲くんや城之内君に放たれた魔法がいたい誰が撃つたのかは分からない…本当に背中を預けて良いのか不安だわ…でも)

(…)

(でも親友が頑張ってるのに私がこんなところで挫けてたら笑われちゃうわ。それに…)

雫は思い出す。訓練で城之内と話しをしたときのことを

「もし…もしもね、私がイジメられてたらさつき言つたように守つてくれる?」

それは雫が昔に受けた女らしくない、男女、あんたつておんなだったの?といった酷いイジメのトラウマ

「ああ!守つてやる!友達を守るつてこの城之内克也様は決めてんだ!」

(ただ守られるだけで待つてるのは嫌よ!私は八重樫雫…白崎香織、中村恵理の親友で城之内君の友だちよ!例え拒絶されたつて私は私の本当に大事なものを守る!)

(その決意…その心意気…我が力を貸すに値する…ならば我は汝の剣となろう。この力存分に使うが良い。)

(もしかして貴方は!?)

一瞬立ち止まった雫は先程の問答が夢だったかと感じたがその身に宿る大きな力から夢ではなかったと判断する。

「お願い…力を貸して大將軍…紫炎!」

その瞬間雫が光に包まれるとそこには動きやすい軽装な甲冑姿でその手に持つ剣が

刀へと変化した彼女の姿が!

「シズシズが侍になっちゃった!?!」

「すつげえな!昔の戦国の侍の甲冑か!」

「雫?」

そう言い合う者たちを尻目に雫は角の折れたベヒモスが跳躍し、赤熱化した頭部を下に向けて隕石のように落下した。

それを

「防御輪!」

とマジックカード防御輪を展開し受け止め返す刀でベヒモスのもう片方の角を斬りつける。

ザシュツ!

と今度は薄いバターを切るような軽い感触で切断した。

「身体が軽い…それにやっぱり刀の方が合ってるわね。」

そして怯んだベヒモスへ

「疾風!凶殺陣…行くわよ!」

と雫は音を置き去りに凄まじい早さで動き何度も斬りつけるそして

「居合い…一刀紫炎…」

と居合いの要領で抜き放つ。居合いの摩擦で発生したのか剣に爆炎が発生しズバツ

とベヒモスは断末魔をあげることすら赦されず一刀両断された。

うおおおおおおお！

とクラスメイトたちの歓声が響く。

あの時倒せなかったベヒモスを倒したのだ。着実に進歩してると感じことであろう。

そして雫も元の姿へと戻る。

「シズシズ…スツゴい格好良かったよ！それに侍っていうか武将みたいな迫力が全身から溢れてたよ！」

「ありがとう鈴。私も無我夢中でね。」

「流石雫だ！俺も負けてられないな！」

「光輝…」

「それにこれで、南雲も浮かばれるな。自分を突き落とした魔物を自分が守ったクラスメイトが討伐したんだから」

「…ホント嫌になるわね…」

「シズシズ？」

「なんでもないわ。」

こうして人族の最高到達層をクリアした勇者一行。
そしてこの事を王国へ報告するために一度戻ることになった。

夜

王国では勇者一行がベヒモスを倒したと、人族の最高到達層の更新に宴が開かれた。

光輝は勇者として様々な貴族から声をかけられ他の者たちもちやほやされていたりした。

雫は食事を取ると疲れを取るために部屋へ戻ると言いそのまま宴から抜けた。

「はあ…宴って…確かに凄いことなんでしようけど…クラスメイトが亡くなってるかもしれないのに騒げるなんて…浮かれてるわ。」

城之内君たち大丈夫かしら…」

「雫?どうなさいましたか?」

「リリイ!抜け出して良かったの?」

「ええ宴より雫と、いる方が楽しいですから!」

「ありがとう。」

と二人は部屋に入ると

「シズシズ！リリイ！遅いよお！待ちくたびれたんだからね！」

「鈴…なんで貴女ここに居るの？自分の部屋で休んだら良いのに。」

「えへへ〜シズシズを励ましに来たのです！カツヤンが居なくなつて寂しそうですから。」

「そうね。何だかんだ言つて恵理も香織も付いていっっちゃつたし…」

「…三人とも無事かな…」

「きつと無事よ。三人は南雲くんを連れて帰つてきてくれるわ。」

「そうですね。私たちに出来ることは信じてくださいね！」

P i P i P i P i P i P i

「ん？あれ!?シズシズ！端末鳴つてるよ！」

「!!もしかして！もしもし！」

と端末を手に取ると

や……し

やえ……し

「八重樫！おーい八重樫！」

「城之内君！無事なのね！」

「おっ！漸く繋がった！ああ無事だ！」

「克也さん!良かった!」

「その声姫さんか!」

「鈴もいるよ!カツヤン!」

「おお谷口か!」

「城之内君…南雲くんは…南雲くんはどうなの?」

それはいつか聞かなければならない問題。

「ああ!見付けたぜ!」

「!!ほんとうに!!本当なの!」

「ああ無事…とは言えないけど生きてるぜ。」

「雫ちゃん!」

「香織!」

「雫ちゃん。ハジメ君見付けたよ!生きてたんだよ!」

「良かった…」

クラスメイトの無事を喜ぶ

「八重樫さん…」

「南雲くん!…ごめんなさい…あの時もつと私たちが確りしてたら…」

「ううん…そんなことないよ。あの時の選択に僕は後悔はしてないよ。こちらこそあり

がとう。生きてることを信じてくれて。」

「南雲くん無事で良かった〜」

「その声…鈴だね。全く泣き虫なんだから」

「エリリン〜良かった〜心配したんだよ！」

「ありがとう鈴。鈴も、無事で良かったよ。」

そして城之内たちと話す三人。

途中遮音結界を鈴が張り近況を話す。

オルクス迷宮には更に深い階層があったこと。

ベヒモスなんて目じやないぐらいに強力な魔物。

そしてこの世界の神エヒトと反逆者として伝わっていた解放者のこと。

「…まさか…エヒト様がそんなことを…でもそれなら辻褃が合う…亜人を阻害しこの世

界で一番影響力があるエヒト様の意思ひとつで戦争が起こる…」

「リリイはこつちの人だから余計信じられないわよね。」

「じゃあ鈴たち帰れないの…」

と不安そうに言う鈴に

「でも、解放者の残した神代魔法になにか帰還の方法があるかもしれない。」

「それで俺たちは残りの迷宮を探そうと思う。」

悪い姫さん。

戻るのが遅くなつちまうかもしれないねえ。」

「良いのです克也殿。帰還の方法を探す方が大事です!」

「サンキューな!」

「城之内君二人を守ってくれて…南雲くんを見付けてくれてありがとう」

「八重樫と約束したからな!絶対に連れて帰るつて!」

「…雫」

「ん?」

「雫って呼んでほしい。」

「?おう!雫!」

「…あ、ありがとう」

と音声だけなのだが雫は顔を真っ赤にしていた。

「暫くは解放者の、住み家で鍛えて準備をする!」

「分かったわ…克也君…」

「おう!」

「私も強くなるから…貴方に置いてかれないように…隣に立てるように…だから生きて戻ってきて。」

「勿論だぜ！漢城之内！約束は守るぜ！」

そうして通話は切れる。

「シズシズ顔赤い！もしかして〜カツヤンに惚れちゃった？」

「雫も隅におけませんね！」

「惚れたじゃないわよ……ますます惚れたのよ」ボソツ

と小さい声で最後眩く。

「じゃあ女子会だね！さっきの宴で甘いの持ってきたから今日は夜まで語ろう！」

「良いですね！私こういうのは初めてです！」

「もう二人とも……まあこういう日も偶にはいいかしら……」

ああそっか……私……恋してたんだ。

友だち思いで何事も一生懸命で誰かの側で寄り添ってくれる……克也くんのこと……

私の夢を心から応援してくれた……克也君のこと……

会いたいなあ。

彼には恵理がいるから隣に立つことは出来ないかもしれない。

でもこの気持ちを伝えないままにするなんて私には出来そうもない。

だから

「覚悟してね克也君……私を惚れさせたんだから……私の王子様……」

再会したときはこの気持ち伝えよう。

侍少女は離れたところにいる思い人を浮かべながら微笑む。

その日から雫は更に剣に打ち込みそれだけでなく化粧やダンスの練習、女の子らしい格好の指南を親友となったリリアーナに教わるのであった。

そんな彼女の一時な思いが技能に現れ

憧憬一途（リアリス・フレーゼ）が追加されていた。

ライセン大峽谷へ　ウサ耳少女との邂逅

魔法陣の光に満たされた視界、何も見えなくとも空気が変わったことは実感した。奈落の底の澱よどんだ空気とは明らかに異なる、どこか新鮮さを感じる空気に5人の頬が緩む。

やがて光が収まり目を開けた城之内たちの視界に写ったものは……

洞窟だった。

「なんだ外じゃねえのか」

魔法陣の向こうは地上だと無条件に信じていた城之内は、代わり映えない光景に思わず半眼になってツツコミを入れてしまった。正直、めちやくちやガツカリだった。

そんな城之内の服の裾をクイクイと引つ張るユエ。何だ？と顔を向けてくる城之内にユエは自分の推測を話す。慰めるように。

「……秘密の通路……隠すのが普通」

「あ、ああ！そうか！確かにな。反逆者の住処への直通の道が隠されていないわけねえ

か」

「簡単に見付かったら不味いからね。」

そんな簡単なことにも頭が回らないとは、どうやら自分は相当浮かれていたらしいと恥じる城之内。頭をカリカリと掻きながら気を取り直す。緑光石の輝きもなく、真つ暗な洞窟ではあるが、城之内たちは暗闇を問題としないので道なりに進むことにした。

途中、幾つか封印が施された扉やトラップがあつたが、オルクスの指輪が反応して早く勝手に解除されていった。指輪はドンナーの弾補充などすることを踏まえてハジメが持つことになった。

一応警戒していたのだが、拍子抜けするほど何事もなく洞窟内を進み、遂に光を見つけた。外の光だ。城之内たちにとっては数ヶ月、ユエに至つては三百年間、求めてやまなかつた光。

5人はは、それを見つけた瞬間、思わず立ち止まりお互いに顔を見合わせた。それから互いにニツと笑みを浮かべ、同時に求めた光に向かつて駆け出した。

地上の人間にとつて、そこは地獄にして処刑場だ。断崖の下はほとんど魔法が使えず、にもかかわらず多数の強力にして凶悪な魔物が生息する。深さの平均は一・二キロメートル、幅は九百メートルから最大八キロメートル、西の「グリュウエン大砂漠」か

ら東の「ハルツィナ樹海」まで大陸を南北に分断するその大地の傷跡を、人々はこう呼ぶ。

【ライセン大峡谷】

「…漸く戻ってきたんだな」

「そうだね。でもここから始まるんだ。」

「大丈夫！ 私たちなら乗り越えられるよ！」

「そうだね。最愛の人と一緒になら行けるね！」

「…頑張る！」

そう話す五人に魔物が群がる。

「さてと迷宮とどっちが強いかな？」

「うっし！ やるか！」

「ここって確か魔法が分解されるんだっけ？」

「…ん！ 分解される前に放てば良い…！」

しかしユエ曰くいつもの10倍近い魔力効率になるそうである。

初級魔法を撃つのに上級魔法クラスの魔力を消費する。

ライセン大峡谷で魔法が使えない理由は、発動した魔法に込められた魔力が分解され散らされてしまうからである。

「大丈夫！ここは任せて！」

「おっ！どうも身体強化みたいな内部に作用するのは平気そうだ！」

「じゃあ克也お願いね。」

「任せな！」

と城之内はハジメが作っていた丈夫なサラマンドラに似た剣を持ちながら突撃する。

パアン！

ザン！

瞬く間に魔物たちは全滅した。

「なんつうかあれだな。オルクスのがずっと強かった気がするな。」

「やっぱり大迷宮って言うぐらいだからね。地上の魔物と比べたらねえ。」

「ひとまずは安全マージンは取れてるかもね。」

「それよりこの絶壁、登ろうと思えば登れるだろうが……どうする皆？」

「ライセン大峡谷と言えば、七大迷宮があると考えられている場所だし、せつかくだから樹海側に向けて探索でもしながら進もう。」

「……なぜ、樹海側？」

「峡谷抜けて、いきなり砂漠横断とか嫌でしょ？樹海側なら、町にも近そうだしそこで情報収集出来そうだしね。」

「……確かに」

「それにねユエちゃんに合う服とか色々と買いたいしね！ハジメ君とユエちゃんとお出掛けしたいもん」

「そうだね。僕も克也と色々と見たいしそうしよつか！」

「ん！カオリとハジメと一緒に嬉しい」

「さてとじゃあ早いところ行くか！」

と魔力駆動二輪を宝物庫から二台出す。

一台にはサイドカーも付いている。

地球のガソリンタイプと違って燃焼を利用してはいるわけではなく、魔力の直接操作によつて直接車輪関係の機構を動かしているので、非常にエコで駆動音は電気自動車のように静かである。

ハジメとしてはエンジン音がある方がロマンがあると思ったのだが、エンジン構造などごく単純な仕組みしか知らないので再現できなかった。ちなみに速度調整は魔力量次第である。

まあ、ただでさえ、ライセン大峽谷では魔力効率が最悪に悪いので、あまり長時間は使えないだろうが。

サイドカーの方にハジメは颯爽と乗り込み香織はユエを抱えてサイドカーの方へ

乗る。

城之内もこれまた乗り込み恵理は城之内の後ろに乗り腰にしがみつく。端から見ると美人ライダーとイケメンライダーのバイクデートに見える。

そうして走りながら迫る魔物に対してハジメはドンナーで城之内は荒々しくも的確なハンドドル捌きでかわして恵理がハジメ印のドンナーで撃ち抜いていく。

しばらく魔力駆動二輪を走らせていると、それほど遠くない場所で魔物の咆哮が聞こえてきた。中々の威圧である。少なくとも今まで相対した谷底の魔物とは一線を画すようだ。もう三十秒もしない内に会敵するだろう。

魔力駆動二輪を走らせ突き出した崖を回り込むと、その向こう側に大型の魔物が現れた。かつて見たテイラノモドキに似ているが頭が二つある。双頭のテイラノサウルスモドキだ。

だが、真に注目すべきは双頭テイラノではなく、その足元をびよんぴよんと跳ね回りながら必死で避けつつ逃げ惑うウサミミを生やした少女だろう。

「……兎人族？」

「あれ？でも確かフェアベルゲンっていう亜人の国にいたんじゃあ？」

「なんでこんなところに？兎人族って谷底に住処なのかな？」

「……聞いたことない」

「じゃあ、あれか？ 犯罪者として落とされたとか？ 昔の処刑の方法としてあったよな？」
「……悪ウサギ？」

そして、再び双頭テイラノが爪を振り隠れた岩ごと吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がると、その勢いを殺さず猛然と逃げ出した。

「流石にやべえか！」

「詮索は後だね！」

と香織はハジメに作ってもらったドンナーとはまた違う、フィルマメントボーゲンと名を付けた弓を取り出す。

香織専用武器で弓自体に魔石を複数ストックする機能を付け更に香織の毒魔法を一点に集中させ当たった瞬間に炸裂する仕様により従来よりも毒の廻りが速くなった。

魔石はユエが各々属性ごとに魔力を込めたお陰か中級魔法並の威力が出る仕様となっている。

ハジメも空かさずドンナーで双頭の片方を狙撃し、香織も毒魔法がこもった矢を何本も放つ。

ドガン

ピクピクピク

と片方は頭がもげもう片方は毒の廻りが早くあつという間に動かなくなった。

「その兎さん？大丈夫だった？」

「怪我は…特にはしてねえ見てえだな。」

「あ、ありがとうございます…ダイヘドアがあんなに簡単に…まるで社長みたいですう
！……………やつと会えました！」

「それよりもどうしてこんなところに？」

「普通は樹海にいるはずの兎人族がいるのは可笑しいしね？」

「助けていただきありがとうございます！」

私はシア・ハウリア

兎人族の長の娘です！凶々しいのは承知しています。

でも…お願いします！私の…私の母様を助けてください…私はどうなっても良いで
す…何でもします。だから母様を…」グスツ

と少女シアは泣きながらもまつすくな願いを口にしたのであった。

「えつと？顔を上げて…シアさん。」

「ほら、そんなに泣いたら可愛い顔が赤くなっちゃうよ。」フキフキ

とシアの涙を拭く香織。

「しかし助けてくれつつつても何かに襲われてるのか？」

「うーん。シアさんのお母さんを助けてつてことは何かしら怪我をしたのかそれとも病気がつてところかな？」

「はい…母様は昔から身体が弱くて…社長がいうには免疫力を作る力が弱いつて…最近では体調も良くなって。」

「ねえシアさんさっきのやつと会えたつてどういうこと？僕たちに出会うことが分かつてみたいだけど？」

「え？ あ、はい。『未来視』といいまして、仮定した未来が見えます。」

もしこれを選択したら、その先どうなるか？みたいな

あと、危険が迫っているときは勝手に見えたりします。まあ、見えた未来が絶対というわけではないですけど…大体その通りになることが多くて…

でも社長が言っていました！未来は導かれるものじゃなくて自分で掴むものだって。」

「もしかして…未来視で見えたのは…！」

「…母が亡くなる未来でした。」

私はそんなこと絶対にお断りですう…

だから私に出来ることを…未来視を母様を助けられる方を見るために限界まで使つて…」

「それが私たちだったつてことなんだね。」

「はい……」

「…ハジメどうする？」

「シアさん…僕たちは君のお母さんを助けられるかは分からないけど最善は尽くす。その代わりに樹海の案内をお願いしたいんだ。」

「ハジメさん…！はいっ！宜しくお願いします！」

「ごめん城之内君。勝手に決めて」

「いや、お前は間違っちゃいねえさ！俺もシアをたすけてえって思ったしな。」

「言葉で言うのは簡単だけど行動出来る人は少ない…シアさんの助けたいって気持ちは本物だね。」

「宜しくねシアさん！私は白崎香織だよ！」

「南雲ハジメ宜しくね」

「…ユエ」

「城之内克也だぜ！」

「中村恵理だよ！近々城之内恵理になるけどね。」

「香織さんに、ハジメさん、ユエちゃん、克也さん、恵理さんですね！」

「…さんを付けるデコウサギ」

「ふえ!？」

ユエらしからぬ命令口調に戸惑うシアは、ユエの外見から年下と思っているらしく、ユエが吸血鬼族で遙に年上と知ると土下座する勢いで謝罪した。

どうもユエは、シアが気に食わないらしい。何故かは分からないが……。例え、ユエの視線がシアの体の一部を憎々しげに睨んでいたとしても、理由は定かではないのだ！
「もうユエちゃんダメだよ。誰にだって間違いはあるんだから」

とユエの頭を優しく撫でる香織

「…だって…」

「？」

「…ハジメと香織に構われててズルい」

「ふふ…大丈夫だよユエちゃんだって可愛いよ」

「…ん」

と香織に後ろから抱きしめられ、満悦なユエ。

「じゃあ善は急げと言うし行こうか！」

と再び魔力駆動二輪に乗り込む

（…ねえハジメ。）

（ん？どうしたのレイカ？）

（洞窟を出る前に城之内君からもらったバック開けてみて。）

(?・今じゃないとダメ?)

(うん。何か開けた方がいい気がするの……何て言うか勘?)

(レイカがそういうなら開けてみるかな。)

と魔導二輪に跨がりながら城之内からのバックを開けるハジメ。

「ハジメさん? どうされたんですか?」

「……いや何でもないよ。じゃあシアさんは僕の後ろに乗ってね。」

「はい!」

ハジメは手早くカードを保護フィルムに入れてポケットへ入れる。

こうして城之内たちは兎人族の娘シアと出会い彼女の母親の元へと向かうのであった。

……余談であるがそのハジメの横では青い髪の少女がふよふよと浮き付いてくるのであった。

孤高の決闘者と炎の決闘者の邂逅

そうしてハジメたちは魔力駆動二輪を一気に加速させ出発した。悪路をもともせず爆走する乗り物に、シアがハジメの肩越しに

「きやあああ〜！はやいですう〜」と悲鳴を上げた。

地面も壁も流れるように後ろへ飛んでいく。

谷底では有り得ない速度に目を瞑ってギョツとハジメにしがみついていたシアも、しばらくして慣れてきたのか、次第に興奮して来たようだ。ハジメがカーブを曲がったり、大きめの岩を避けたりする度にきやっきやっ騒いでいる。

そんな楽しそうにし、自身の身体を密着させるシアにハジメは胸の高鳴りを誤魔化すように道中、魔力駆動二輪の事や各々魔法を使える理由、ハジメの武器がアーティファクトみたいなものだとは簡潔に説明した。すると、シアは目を見開いて驚愕を表にした。

「え、それじゃあ、皆さんも魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると……」

「うん、そうなるね」

「……………」

「そうなるかな」

しばらく呆然としていたシアだったが、突然、何かを堪える様にハジメの肩に顔を埋めた。そして、何故か泣きべそをかき始めた。

「ど、どうしたの？何処かぶついたり？」

「……手遅れ？」

「ユエちゃんそんなこと言ったらダメだよ。シアさんなりに頑張って疲れちゃったんじゃないかな？」

「手遅れって何ですか！ 手遅れって！ 私は至って正常です！ ……ただ、一人じゃなかったんだなっと思ったら……何だか嬉しくなってしまうて……」

「[[「……………」」」

どうやら魔物と同じ性質や能力を有するという事、この世界で自分があまりに特異な存在である事に孤独を感じていたようだ。

家族だと言って十六年もの間危険を背負ってくれた一族、シアのために故郷である樹海までも捨てて共にいてくれる家族、きつと多くの愛情を感じていたはずだ。それでも、いや、だからこそ、他とは異なる自分、に余計孤独を感じていたのかもしれない。

シアの言葉に、ユエは思うところがあるのか考え込むように押し黙ってしまった。い

つもの無表情がより色を失っている様に見える。

ハジメには何となく、今ユエが感じているものが分かった。おそらく、ユエは自分とシアの境遇を重ねているのではないだろうか。共に、魔力の直接操作や固有魔法という異質な力を持ち、その時代において“同胞”というべき存在は居なかった。

だが、ユエとシアでは決定的な違いがある。ユエには愛してくれる家族が居なかったのに対して、シアにはいるということだ。それがユエに、嫉妬とまではいかないまでも複雑な心情を抱かせているのだろう。しかも、シアから見れば、結局、その“同胞”とすら出会うことができたのだ。中々に恵まれた境遇とも言える。

そんなユエの頭を香織はポンポンと撫でた。

「ユエちゃん……昔はそうだったかもしれない……でも今はハジメ君、私、城之内君に恵理ちゃんもいる……だから辛いことがあつたら頼ってね。」

「……ん、ありがとう。カオリ……」

とユエは香織と向き合うように身体を密着させると

「カプ チユウ」

「ユエちゃん!?!急にどうしたの!?!」

「……はむっ……んちゅっ……ちゅ……んん〜」

「んん！」

「ぷはあ…カオリく…大好き」

「あわわわわ!? な、なんていうか、妖絶ですう!!」

「シアさん!? そんなに揺らさないでバランス崩すと危ないから！」

嬉しくて香織から吸血するユエを見て興奮するシア

そしてぐわんぐわんとハジメの肩を揺らすのでハジメもハンドル操作を誤らないようにしっかりと握る。

一方の城之内たちは

「うおおおおおおお!!」

「克也頑張つて！ほらそこも来るよ！」パン！

「伴侶！次は右だ！」

「左もきてますよ！」

「地面はこつちで錬成するから運転に集中してね！」

「風霊術で吹き飛ばせるだけ吹き飛ばします！」

「氷よ！」

魔物たちが押し寄せる中で城之内は上手くかわして恵理が狙撃してヒータとエリアは城之内に危険を知らせ、アウスは魔導二輪のタイヤから錬成して悪路でも走り抜け

れるようにサポートし、ワインと雪姫ことブリザードプリンセスも自身の霊術で魔物を蹴散らす。

ハジメたちが話し込んでる間出来るだけ露払いをしている城之内たち。

しかしそれにしても数が多い。既に数十は倒したがまだまだ増える。

まるで何かから逃げるように。

「にしたってこの数は多すぎんだろ！」

「シアさんがいる分南雲君たちの方は小回りが効かないからこつちで受け持たないとな
！」

そうして走ること数十分

漸く拓けた場所へと出てきた。

そこは平地のようになってるものの簡素なテントが組み立てられ側には何処からか引いてきた水源まであった。

「()は…」

「生活感があつて魔物の影すらないね」

「私たちハウリアも最初もうダメかと思つてました。でも社長が来てから色んなことを教わつてこうやって、てんと?というものを作つてある程度の水源や薬草や魚といったものも手に入るので生活出来てるんです！」

「その社長つつうのはすげえんだな！」

「はいっ！社長は白い龍を従えて言葉は厳しいですけど何だかんだ私たちを鍛えてくれるのでとても感謝してるのです！」

「シア！ 無事だったのか！」

「父様！」

そしてテントから出て真っ先に声をかけてきたのは、濃紺の短髪にウサミミを生やした初老の男性だった。

「にしても魔物がいないのはなんでだろうね？」

「その社長っていう人が何かしてるのかな？」

「…不思議…」

「うーん白い龍に社長…」

「なあ恵理物凄く知り合い感があるんだが気のせいかな？」

「克也気のせいじゃないの？だって社長がトータスにいるわけないと思うよ。」

そしてその間に、シアと父様と呼ばれた兎人族の話が終わったようで、互いの無事を喜んだ後、ハジメの方へ向き直った。

「ハジメ殿で宜しいか？ 私は、カム。シアの父にしてハウリアの族長をしております。」

「この度はシアがご迷惑をお掛け致しました。シアはこれだと決めると一直線に進んでしまうので……」

「いえ乗りかかった船ですしシアさんの誰かのために動ける姿勢を見て僕たちも力を貸したいと思つたんです。それより、随分あっさり信用するんですね。亜人は人間族にはいい感情を持つていないはずなのに……」

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから……」

その言葉にハジメや城之内たちは感心半分呆れ半分だった。一人の女の子のために一族ごと故郷を出て行くくらいだから情の深い一族だとは思っていたが、初対面の人間族相手にあっさり信頼を向けるとは警戒心が薄すぎる。というか人がいいにも程があるというものだろう。

「それに人間族の中にも偏見を持たず接してくれる方を知っておりますからな。」

「ハジメさん！香織さん！母様を見てください！」

「それよりシアよ。」

「何ですか父様！」

「社長に黙って出ていってしまったであろう？まずは言うことがあるのではないか？」

ハッとするシア。そして

「あ、あの父様？一緒に謝ってくれたりは？」

ブンブン

「あら？シアちゃん社長探してたわよ。それはもうカンカンにね。」

「ラナさん！」

「シアちゃん骨は拾って挙げるわ。」

「ミナさんまで！」

「シア姉ちゃん頑張れ！」

「シアお姉ちゃんファイト！」

「パル君にネアちゃんも！あの…助けてくれたりは？」

「」「辞めて怒られて」「」

「そ、そんな〜」

「ほう…元気が有り余ってるようだな小娘。」

「じゃ、社長!？」

「貴様には普段の10倍のメニューをやらせてやろう。」

「あ、あの…謝ったら許してくれたりは？」

「貴様にそんな権利があるとでも？」

「死にたくなあい！死にたくなあい！助けてくださ〜いハジメさん香織さんユエさ〜」

ん」

「いやあ黙って来て心配させたんでしょ反省はしないとね。」

「流石に底いきれないかな？」

「…ん、自業自得。諦めて」

「そんなく鬼く悪魔くハジメさんと香織さんの女たらしく」

「ほう？ 威勢が良いな。20倍に増やすか」

「ヒイイーイーいつもスパルタですう。社長手加減してくださいあ〜い。」

「つべこべ言う暇があるならさっさとやらんか!!!」

「ご、こめんさな〜イーい！」

とシアは言われるがままに近くの大岩へ向かうと

「よいしょつと！1、2、3」

と大岩を背負いながらスクワットを始めた。

「シア姉ちゃん手伝うよ！」

「私も！」

とパルとネアという兎人族の少年少女はシアの担ぐ大岩に飛び乗る。

「ちよつ!?!二人とも!?!」

「あらあらじゃあ私も」

「ラナさんたちまで!? ううううううお、重いですう〜」

「シアちゃん夕飯は豪華にしてあげるから頑張つて!」

「ふん…バカ娘が」

「社長…シアはその、」

「言わんで良い。母親の容態が気になり身が入ってないのは知っている。だが」

と振り向く社長

「…嘘っ!? どうして?」

「ハアアアアアアアア!? 海馬あー…!?!?!」

「…まさか凡骨の幻覚まで見えるとは…俺もヤキがまわったか…」

「海馬てめえええ! 俺は幻覚じゃねえ!」

「…えっ!? まさかあのKCの社長の海馬さん!?」

「本物!?!」

「…誰?」

「ユエ、あの人は海馬瀬人っていつて僕たちの世界では知らない人はいない有名人でカードの貴公子って呼ばれてたりするんだ。デュエルモンスターズが人気なのも海馬さんが牽引してるのもあるんだ!」

「…デュエルモンスターズの! 凄い!」

とキラキラした目でユエは海馬を見る。

「克也抑えて抑えて」

「女連れとは随分と府抜けたか：凡骨も落ちたものだな。」

「てめえ！俺のことはなんと言おうが構わねえが恵理をバカにすんじゃねえ！つうか恵理のことを知ってるだろが！」

「フウン。貴様のようなやつは知らんな。」

何処か噛み合っていない二人の決闘者。

「あのーひとまず落ち着けるとところで話し合いませんか？それと私治療師なのでシアさんのお母さんの容態も診れます。」

「社長……」

「カム案内してやれ。話しはそれからだ。それに俺の知る凡骨よりも何か違うのは分かる。その違いも知らねばならん。」

とカムは香織たちを案内するのであった。

こうして孤高の決闘者と炎の凡骨決闘者は邂逅した。

果たしてこの出会いがもたらすものとは？

二つの世界の違い

カムに案内されるままにハジメたちは一際大きいテントへと向かった。

テントに入るとそこにはうさ耳のシアに似た女性が寝ていた。

「昔から身体が弱くシアを産んである程度は体調も良かったのです。しかし…フェアベルゲンを離れる前から悪化し…」

「…んう…あなた？」

「モナ…今は横になってなさい」

と起き上がるうとしたモナを制止するカム

「あら…そちらの方々は？」

と言うので簡単に自己紹介をする一同。

「シアが…娘がご迷惑をお掛けしました。」

「いえ誰かのために動ける優しい人でご両親の育て方が良かったのだと思います。」

「モナさん身体に触れさせてもらいますね。」

と香織は浸透看破を行使用する。これは、魔力を相手に浸透させることで対象の状態を診察し、その結果を自らのステータスプレートに表示する技能である。片手に自分のス

テータスプレートを持って診察用の魔法を使用する。

「……、これって……」

「……貸してみろ。」

と海馬は香織のステータスプレートを借り受けその結果を見る

状態 免疫不全 肺炎 結核末期

症状 運動機能の低下 呼吸機能の低下

原因 先天性免疫不全症

「……やはりか」

「香織殿……妻は」

「……………」

「……カオリ？」

何処か言いづらい雰囲気ですり込み香織を心配するユエを尻目に海馬は

「カムはつきり言う。覚悟はしておけ。」

「!!……そう……ですか……」

「なあどうということなんだ！」

「喚くな凡骨。……先は長くないと言うことだ。」

「結核ってしかも相当進行してることとは……」

「そこに免疫不全だ。複数の感染症にかかっていたとしても不思議ではない。」

「香織神水でどうにかならない？」

「…確かに結核とかなら治ると思うけど…でも免疫不全は治せない。身体が免疫不全の状態が普通って認識してしまうからまた病気に…何度も繰り返し返せばそれこそシヨック死しちゃう…」

「くそっ！どうにかなんねえのかよ」

「克也殿…モナのためにありがとうございます。…いつかこんな日が来るのではと覚悟はしております。」

「でもよ！」

「凡骨！下手な優しさ甘さは時として傷付けるだけでしかない。」

「海馬…」

「俺は戻る。カム貴様は暫く訓練はなしだ。この意味分かるな」

「社長…ありがとうございます」

と海馬はその場を後にする。

それに付いて城之内たちもテントを出る。

そして誰もが言葉を発しない中で海馬専用のテントの前に簡易的な椅子が設けられていた。

「貴様ら全員の事情など知ったことではないが部下の容態をみたこと礼を言う。」

「いえ！私はただシアさんに頼まれて！」

「礼は受け取つときな。海馬がんなこというなんて天変地異が起こるぐらい珍しいからな！」

「ふうん：凡骨に何をいわれようが所詮は負け犬の遠吠え程度のこと」

「海馬でめえええ」

「はい抑えて克也！社長のこれはいつものことですよ！今は状況確認しないと」

「そ、そうだったな。悪い恵理」

「中々状況を読めるものだ。さっさと話せ」

と海馬へトータスへ来た経緯、大迷宮とよばれる場所、神代魔法に解放者のことを話す。

「で、俺たちは残りの神代魔法を探してるとってわけよ。」

「帰還の方法か……」

「社長はどうしてここにいるの？それに僕たちの知ってる社長と比べて何というか違和感が？」

「なに言ってるんだ恵理？海馬は海馬だろ？」

「まず社長のデュエルディスク。僕たちの持つてるのよりもハイテクになってるのが見

受けられること。

カードがセットされてなくて多分だけどディスク事態にデータ化してるような気がする

なにより僕たちの知ってる社長でもまだここまでハイテクなデュエルディスクは作れてなかった。」

「ふうん…小娘名は何と言う。」

「中村恵理だよ。」

「中村。貴様はそこらの凡夫とは違うようだな。」

と言い懐から紙とペンを取り出す。

「まず貴様らのいた世界これを仮にAとする。世界とは過去、現在、未来と真つ直ぐに一直線になるものが殆どだ。しかし次元を越えトータスという全く関わりのないXという世界線へと連れ込まれた。」

「異世界転移ということですね。」

「もしくは次元移動というべきだ。そして俺もまた次元を越えようとしたしかし何の因果かトータスへと降り立った。」

「…もしかしてハジメたちとは違う世界？」

「そういうことかもね。」

「俺が中村のように有能なものを覚えていないというのならばそうであろう。」

「じゃあ俺たちの知ってる世界線とちよつと違う歩みの海馬ってことか」

「…凡骨の割には上出来だ。」

「なら照合していこう。そこら辺は克也のが分かるかな？」

「最初はあれか。海馬と遊戯の最初のデュエル。あの時はエクゾディアで海馬を倒してたな。」

「エクゾディアだって!？」

「ハジメ君エクゾディアって？」

「誰も揃えたがないって噂まである凄いカードなんだ。確か5種類のパーツを揃えるとデュエルに勝つって感じだったかな。」

「そこは変わらんか…凡骨の世界でもDEATHはあったか」

「? DEATHって何だ? んなもんやった覚えがねえぜ」

「なる程な。デュエルだけだったか。続ける。」

「その後は決闘王国だな。海馬も途中から来たし何だかんだペガサスは遊戯が倒したぜ。」

「当然だ。俺に勝つぐらいだ。それぐらいは凡骨の世界でもやらねばな。俺直々に引導を渡せんかったのは業腹だが。」

「ん？ペガサスは生きてるぜ！んな死んだようなこと言わないでくれよ」

「こちらの世界ではペガサスは何者かに殺害されている。それにもないインダストリアル・イリユージョン社は経営も悪化し最盛期に比べ衰退している。」

「マジかよ！一体だれが!？」

「過ぎたことだ。次はバトルシティか。」

「ああグールズのことや神のカードの争奪戦だったな。8人残ってアルカトラスに向かったんだがそこでコンピュータに移植された海馬剛三郎がバトルシップごと乗っ取りやがって大変だったぜ。」

「あの時は間一髪だったね。まさか軍事衛星をハッキングしてミサイルが発射されるなんてね。」

「…何！奴が生きてるだと!」

「…まあ俺にはそこんところ分かんねえから気にしないがよお。」

「ふうん。こちらでは投身自殺しているから問題などない。奴に割く時間などない。」

「んでアルカトラスでバトルシティの準決勝と決勝やってお前がアルカトラス爆破しやがって。こちらら救護ヘリがきてなきやお陀仏だったんだぞ！オマケにブルーアイズのジェット機でそのままアメリカいつちまうし」

「そこも変わらさずか…」

「で、石盤に三枚の神のカードを掲げたら何かに弾かれて、んだその夜にドーマの三銃士つつうのに神のカードが奪われてオレイカルコスの神つつうのと戦って世界救ってアメリカでKC主催のKCグランプリやったりしたぜ。」

「そんなものは知らんな。」

「で記憶の世界でアテムと一緒にゾークつつう奴と戦ったぜ。海馬の奴もそこにいたからな。」

「なんだと!？」

「で、そのままの流れで戦いの儀を見届けた。これぐらいか。」

「…っ!」

「社長?」

「…貴様の世界の俺は納得をしたというのか…」

「…ああ。あいつなりに納得出来るもんを自分の中で出したみたいだぜ。」

「戦いの儀の場面に俺は立ち会ってなどいない。だからこそ俺は奴に引導を渡すため冥界へ至ろうとし、ここにいます。」

「…そうか。海馬、木馬の所へ戻るつもりはあるんだよな。」

「当然のことだ。」

「なら、なにも言わねえ。」

「貴様に言われることなど何も無い。」

「けどよ、アテムの奴に会うなら当然勝つためのパターンとか組み上げてるだろ。」

「奴が俺の想像を越えることなど容易い。ならば俺の万全のデッキで叩きのめすだけの
こと。」

「何処の世界の社長も王様を倒したい気持ちは同じなんだね。」

「ねえ恵理ちゃん？王様って？」

「それにアテムって遊戯さんと関係があるの？」

「そうだね。僕は色々和王様に教えられた。仲間の大切さ、結束という形、遊戯君からは
優しさを。僕にとって掛け替えのないものなんだ。」

「アテムのことを語ると長くなるな。」

そして簡易テントを借り受け泊まることにした城之内たち。

その夜アテムのこと遊戯のことを語る城之内と恵理の二人。

ハジメもレイカも自分達のことを受け入れてくれた理由に納得するのであった。

ハウリアたちとのまつたりLIFE

シアに連れられハウリアと海馬に出会った城之内たちは数日滞在をすることにした。

その間ハジメはハウリア族へ武器の精製、道中の魔物を持つてきては加工したりその加工技術を手先の器用なハウリアたちへ教えていた。

時々レイカへ変わりながら休憩しレイカはより早く氷血の技能になれるために氷の彫刻や氷の滑り台や作ったたり雪姫に氷魔法を教わりながら子供たちと遊んでいる。

香織は合間にモナの検診をし、ハジメの仕留めた魔物を神秘の中華鍋を使い毒素を抜き、さばいたり毒のバリエーションを増やしたり菌操作による発酵で醤油や味噌などを作り出したりしていた。

だからなのかハウリア族全員何かしらの固有技能に目覚めたり中には魔力操作を覚えたりする者もおり魔力に関して是最も精通しているユエが各々見ては創意工夫して生活している。

そして城之内と恵理は

「凡骨そこではないと何度言えば気が済む！その回路はこつちだ。」

「一々細けえよ！さっきのと同じやつだろ！」

「だから貴様は凡骨なのだ！先程のは次元エネルギーを検知する回路、こちらはエネルギー放出、外郭を補強し次元を越える際の衝撃を緩和するものだ！」

「専門的過ぎて分かるか！」

「まあ社長も克也も落ち着いて。これもオルクスで取れた鉱石で補強したから今度は壊れないと思うよ。」

二人は海馬主導で海馬の乗っていたシャツルの修理をしていた。

「つたく海馬の野郎人使いが荒れえつての。」

「でも社長の使ってる自我増幅機能を克也のと僕のに取り付けてくれたんだがらその分は働かないとね。」

ハウリアでの一夜後、海馬が歩く姿をみたハジメや城之内たちが付いていつてみると壊れたシャツルがあり、海馬があまりここを離れようとしない理由を知った一同。

ハジメは善意からシャツルの修理を申し出るものの施しなど受けんと海馬は一人修理を始めるのを見て城之内はシャツルを直す代わりに一つ申し出た。

「なあ海馬それならよ。シャツルを直す代わりに頼みがある。ハジメの左腕の義手を見てやつてくれねえか？腕の接続部も時々痛むみてえだし右腕と比べて重量に差がある。それに幻肢痛もある。」

「ふうん、凡骨昨日も言ったが俺は貴様らの事情など知ったことではない。」

「こつちはトータスで最高硬度の鉱石をお前のシャトルに加工してやる。そうすりや今度は壊れずにアテムのところに行ける確率は上がる。お前にとつても悪い話しじゃねえだろ。」

「ふうん、凡骨貴様はどの世界でも相変わらずか。貴様は己の為に戦えんのか！他者に戦う理由を求めるなど言語道断！どんな決闘者でもその胸の内に秘めるのは己のことだ！」

「…確かに海馬の言うことに一理あんのは分かる。俺だって決闘者だ。プライドだってある。だが俺が今まで戦績を出せてた大半は静香の…妹のためにつてのがある。」

それに俺の真の決闘者になりてえつてのは果てしない道のりで先行きが見えねえ。本当に近づいてるのかなんてわかりやしねえ。」

「ならば…」

「でもよ。どんなに挫折しようが道を踏み外そうが俺は前を向き続ける。じゃねえと未だに辿り着けねえじゃねえか！」

「城之内君…」

「俺は一人じゃねえ。仲間がいる。」

仲間のためなら俺はプライドなんていくらでも捨ててやる。

本当に大切なもんは見えねえけど見えるもの。友情つつう結束だ。

それは遊戯を見てきたお前なら分かるだろ。」

「結束などくだらん。」

「海馬！」

「と以前の俺ならばそう言ったであろう。奴は…遊戯はその力でこれまでどんな相手にも勝ってきた。無論この俺からも。」

「社長…」

「良いだろう。貴様をこき使ってやる。精々この俺の役にたつことだ。」

「なあにい海馬でめえく折角手伝ってやろうつてのに何様だ！」

「さっさとしろ凡骨！」

ということがあり今に至る。

更に自我増幅機能の搭載された海馬の次世代型デュエルディスクから召喚されるモンスターなどはライセンの影響を受けにくいようである。普通に顕現できている。

因みに周りに魔物が寄ってこないのは安全地帯のカードと威嚇する咆哮のお陰らしい。城之内たちが来るときに魔物が逃げるかのように動いていたのはこのためであった。

話しを聞いた恵理やハジメたちは気付いていない城之内には何も言わないことにした。

「今日のところはこんなものだろう。」

「大分形にはなつたけどまだまだエネルギーの問題があるね。」

「ふうん。それは魔力を代わりにすれば何とでもなるだろう。」

「ハジメの奴も協力してるから直りそうだな。」

「錬成師というのは中々良いものだ、これならば我が社でも生きていけるだろう。」

「お前直々に勧誘するって見たことねえぜ。」

「南雲と氷娘のセットならば即戦力だろう。貴様らも帰還の方法を考えるのは良いがその後を考えるべきだろう。」

「この世界の力は異端だ。欲しがるものなど星の数はいる。」

「そうだね、その時はペガサスさんか社長を頼るよ。」

「あの二人なら何とかなるさ。ユエの戸籍も作ってもらえば良いしな！」

「ペガサスってあのインダストリアル・イリユージョン社の会長！」

「私でも聞いたことある！凄腕のデザイナーが集まるって噂だよね！」

「そうなんだが、あくペガサスがちよつとクセがスゴいつつうか？」

「ペガサスさん自分で作ったトゥーンをデュエルで使うしコミカルというかね。」

「ふうん、奴ならば戸籍の一つや二つどうとでもなる。それほど業界に顔が利くからな。」

「みなさくくん！夕食出来ましたよ！」

「おっ！飯みてえだな！海馬も行くぞ！腹が減ってはなんとやらってな！」

「俺の口に合うか見定めてやろう」

「香織も料理上手ですから期待してください！」

そうして夕食にはハウリアの取ってきた野菜をこれでもかと思ひ小麦粉とハジメの倒した魔物に牛乳のような物を出せるのがおりそれを代用し更にコンソメなどを入れてシチューを作り出した。

さらにオルクス迷宮で保管されていた大量の小麦粉から香織が発酵させて作り出したイースト菌でバケツトから魔物肉を使ったチキンカツサンドから野菜パンにコロツケパンやらフランスパンを沢山作った。

技能を大分使いこなせるようになり応用が効くようになったことで戦略から日常生活でも活躍する香織に惚れ直すハジメとユエであった。

出来上がり思い思いに食すハウリア族。

「ほう…中々に強かだと誉めてやろう白崎。」

「うん！栄養たっぷりで美味しいね！」

「モグモグ ゴクン うめえええ！サクツとした衣にパンに染み込んだこのソースの旨み！いくらでも食えるぜ！ゴクン ムグツ、！」

「もう克也ったら喉つまらせて！はい！みず！」

「ゴクン！プハア 悪い恵理助かつたぜ！」

「…このスープ…何種類も味が混ざってるの…一つ一つが絶妙に合わさって何倍にも美味しさが膨れ上がってる…こんな美味い食べ物したことない」

「いくらでもあるからお代わりしてね！」

「…ありがとうカオリ！」

「ユエ、パンをシチューに浸すとシチューの味と合わさってさらに美味しいよ。」

「…モグモグ …美味しい！ハジメたちの世界の料理皆こんなに美味しいの？」

「まあ僕たちの国、日本は食に関しては妥協しないから美味しい料理は日夜開発されてるんだ。」

「こいつは旨いな！おっ！伴侶！それなんだ？」

「こいつはピザってんだ！ピザ釜を作ったから薄く伸ばした生地に神秘の中華鍋でさつと焼いた肉と野菜を盛り付けてそこからまた焼いたんだぜ！」

「一口もくらい！ハムツ…うまつ！なんだこれ！こんな食べ物があんのか！」

と他の種類にも手を伸ばしシチューも味わうヒータ

「克也様一口頂きますね！…わあ凄い！焼いた何種類もの野菜に香ばしいチーズも合わ

さつて濃厚な味になってます！」

エリアは野菜の甘味とチーズの味の虜になりながら更に食べ進める。

「僕も頂くね！これは……！肉の旨みとチーズのトロリとした感触が堪らなく食欲を刺激するね！」

料理は魔法と同じと思いながらも一つにも手を付けるアウス

「私も頂きます！ん〜！美味しいです！昔を思い出します……父さん、姉さんと一緒に食べた優しい味わい……」

とウインは昔を思い出して亡き父親と姉との思い出に浸る

「私も頂きますね。ハムツ……うん！美味しいですね！料理上手な克也殿でしたら恵理を任せられますね！」

と将来的な感想も言いながらトマトと魔物肉の味わいを楽しむ雪姫

「まずまずと言ってやろう。この俺の舌には些か役不足ではあるが凡骨にしては上出来だ。」

「つて文句言いながらめつちや食ってるじゃねえか!？」

「ハジメさ〜ん！シチューのお代わりどうですか〜！」

「ありがとうシアさん。貰うよ。」

「はぁーい！」 タウンタウン

と跳び跳ねるシアの揺れるその2つから目をさっと反らすハジメ。

ボソツ「…駄肉うさぎ…」

「な!?何てことを言うのですかユエさん!あつ!もしかしてハジメさんに妬いてるんですね!そりゃあこんな絶世の「残念」美少女な私にですね!ってユエさん!残念ってなんでしょうか!」

「…セトに怒られてる。」

「ギクツ!」

「手を煩わせてるし色々残念。」

「うっ!?!」

「…でも家族思いなのは高評価。これからも精進する」

「ユ、ユエさくん!」

「あはは、二人とも仲良くなってるみたいで良かった。」

「シアは物怖じせずにくるからユエも何だかんだ面倒みてるしな。」

「良いコンビだね!」

「そうだね。」

（ハジメ、ハジメ。そっちのマルゲリータみたいなのも取って!あとチーズたつぷりのサラダハラミも!）

(わかったよ。)

「うん！美味しい！流石城之内君！」

「レイカも喜んでるみたいで作った甲斐があるぜ！」

「残りが少ないぞ！すぐにピザの用意をしろ凡骨！」

「おうよ！この炎のデュエリスト兼料理人、城之内克也様に不可能はないぜ！」

とどんどんピザを、焼いていく城之内。

途中ハジメから変わって貰いピザを楽しむレイカも交えながら夕食の時間は過ぎていくのであった。

—————

おお…この料理チーズが伸びて面白いし肉の味がしっかりしてる…

こっちのパンも初めてだ！

うん！あと少し…何かがあれば治せる…

ハジメって人の話しか聞くと魔物肉を直接食べれば肉体が変質して耐えられなくて死んじゃうけど…でも上手く利用すれば健康的な身体に出来る。

シャイニートのところの魔法薬で免疫を上げられれば…

改良は加えたから大丈夫な筈。

ギルドの威信に掛けて治してみせる！

私の硝子細工を心から誉めてくれた人は久し振りだから頑張るぞ！

と陰ながら城之内のピザを食べる少女。

果たして彼女は何者なのか

そんな彼女の足元には城之内が落としていた神水の小瓶が転がっていたのであった。

未来を視る少女は錬成師へ愛を叫ぶ

ハウリアたちとの交流を深めていく城之内たちは数日後に出立しようとしていた。

薬膳料理をベースに回復魔法を連日行使しモナの治療を続ける香織であったが後は海馬に引き継ぐこととなった。幸いにも体調は良くなりつつあり、数カ月は家族との時間を過ごせるだろうとのこと……

ハウリアたちはモナのことを見守りその後社長と別に各地へと散らばり情報を得るつもりのものであった。

隠密など戦闘のいろはは各々のゴブリン部隊から教わり彼らも合格ラインまであと少しとのこと。

さらに魔物肉によるステータスアップで全員軒並み伸びそこらの魔物であれば余裕を持ち倒せるようになっていた。

あとは臆病な所と優しすぎる性格をどうするかである。

その夜ハジメは温泉へ浸かっていた。

天然温泉で今の時間帯は社長に言っただけ貸しきりにしてもらった。

自身の身体のことをあまり知られないようにしていた。

だからかハウリア族はハジメを僕っ娘な格好いい女の人と認識していた。

「はあ…良いお湯だ…」

（ハジメどうしたの？）

（レイカ…その、ハウリアたちは僕たちに心を開いてくれたけど僕は隠し事してるからちよつとね。）

（…そうね。皆が皆城之内君や海馬さんみたいじゃないだろうし…）
（難しいね…）

と入っているとお湯から出て身体を洗っていると

「ふへえ〜疲れましたです〜。温泉に入って身体を休めない」と

.....

「シアさん!？」

「あれ？ハジメさんも今からですか！背中流しますね！」

「えつとね」

「遠慮しないでください！女同士裸の付き合いという交流を……」

というシアの目線はハジメの下の部分を向いていた。

そこには女性にない立派な…

「し、シアさんのエッチ！スケベ！」

「ちよっ!?!人聞きの悪いことを言わないでください!?!というかそれは私のセリフですう!?!」

と一悶着あったものの一先ず温泉に浸かることにした二人。

「……………」

「……………」

「き、気まずい……」

「え〜とハジメさん?そのつかぬことを聞くのですが一体?」

「そうだね。いつまでも隠せることじゃないし話すよ。」

とハジメは自分が本当は男で奈落に落ちた際に魔物肉をそのまま食べたことによる副作用でこの姿になったこと。

そして自分とはまた違う人格もあるということ。

シアへ話し終わるハジメ。

「黙っててごめん……こんな身体気持ち悪……」

「グスン……ハジメぎくん、辛かったですよね。でも香織さんやユエさん、克也さん、恵理さんも一緒にいますし、私も何があっても味方ですう〜」

と半泣きでハジメへ話すシア。

「お、落ち着いてシアさん!?!」

「ハジメさんはなにも悪くないです！それに一生懸命に私たちのために防具を作って頂いたり至れり尽くせりです！それにハジメさんはハジメさんです！私たちにとって恩人な方です！」

「…ありがとうございます。」

「あつ！そのもう一人の方のお名前も聞いて良いですか？」

「レイカよ。宜しくねシア。ハウリア族の優しさは遺伝なのかしらね。」

「おお！瞳の色がちよつと水色に！レイカさん宜しくお願いします！」

とシアはそのまま抱きつく。

その豊満な胸の柔らかさから伝わる暖かさに頬が赤くなるハジメ。

「シアさん…その当たってるから」

「ふふふ！当てるんですよ。ハジメさんのハジメさん凄いです…私で興奮してくれたんですね！それにハジメさんを見たときから私胸がキュンとしまして…その…ひ、一目惚れました！」

「へえ!?!」

「一緒に過ごす内にハジメさんの優しさや香織さんの母性というか見守りとか凄くて…香織さんとそういう仲なのは承知しています！でも私も一緒にになりたいです！」

「で、でも僕はこんな身体だし化物みたいで…」

「うん！シアさんはまっすぐだね。ハジメ君を好きになつてくれる人が増えるのは嬉しいな。」

「はえ？あ、あの…怒らないんですか？」

「？どうして？」

「だ、だって」

「同じ人を好きになるって素敵なことだと思う。私はねハジメ君のこと大切にしてくれるそんな素敵な人ならその人も愛せると思うの。」

「香織さん…」

「だから宜しくね。シアさん！」

「香織さくん！ありがとうございませううう！」

と香織を抱きつくシアを優しく撫でる香織。

「…むう…いいなあ…」

「さてじゃあ…」

と香織はハジメに近寄り

「今日は一杯愛し合おうねハジメ君！ユエちゃんとシアさんも混ぜて…ね！」

「あはは、お手柔らかに」

そして温泉からでたハジメたちは使わさせて貰つてゐるテントへ戻りそのまま朝まで

過ごすことに。

一つ言えるのは意外にシアの性欲が凄くハジメと香織、ユエの三人に愛されてもまだまだいけたとは本人の談であったとのこと。

こう甘えてくる仕草にグツときたと吸血姫は供述している。

うさ耳の触り心地は良くいつまでも撫でられるとハジメとレイカは言う。

普段から頑張ってる人を甘やかすのは中々良い気持ちで母性本能をくすぐられたと香織は言う。

—————

そんな日から数日したある夜更け

モナの眠るテントへと忍び込む少女の姿が…

「よおし…何とか出来たく徹夜するなんて久し振りだから身体が凝っちゃうよ…でもその甲斐もあって」

と自作した透明な硝子容器にはいった魔法薬を見て言う少女。

「にしても食べ物食べたときに落ちてたあの容器の水…調べたら万病に効くエリクサーみたいなやつだっただなんてね。

誰が保管してたか知らないけどちゃんと管理しないと！まあでもそのお陰でこれが出来たしまあ良いかな？」

そして何時も通りうさ耳少女：シアが母親と話し終えるのを待つ。

シアはハジメと共に歩みたいこと。

大迷宮を探せばモナを治すことの出来る魔法が見つかるかもしれないこと

だから必ず帰ってくるから待つてほしいことを約束し、シアは自分のテントへと戻る。

幼女がモナの前にいたことに気付かずに：

「待たせちゃってごめんなさいね。」

「いいよ。娘との会話は大事なことだよ。私も弟子がいるけど会話が弾んだり技術を継承したいく様子なんか嬉しいことだからね。」

「今日はどうしたんですか？」

「ふふつ遂に完成したんだ！どんな体質でも健康的にかつ副作用もないウルトラ級の魔法薬！名前はまだない！」

「？名前はないの？」

「いや〜これといったのがないからもう名前はまだないってしちゃった。大丈夫！効果は優れもの！飲んで一晩すればあら不思議！健康的になってるのさ！」

「でもこれ高いんじゃない？」

「な〜くに心配ご無用！私の手持ちとこつちで取ったやつだから実質タダだからね！」

「ありがとう…こんなに良くしてもらって悪いわね。」

「私の硝子細工を心から誉めてくれたんだものこれぐらいさせてよ。それに魔法の依頼承ろうって言ったでしょ。これでも私は大魔女なんだからね！」

「ふふ、凄いわね」ナデナデ

と幼女を撫でるモナ。

「早く元気になりなよ。」

「そうね。シアに心配掛けられないわ。」

とモナは一息に飲み込む。

「すぐ寝られるように睡眠機能も付与したからぐっすり寝れるはず…って寝てるね。」

とモナは容器を置くとすぐに眠っているのであった。

「ふああああああ…私も眠いや…」

とふらふらとテントを出るとそのまま倒れそうになるものの気合いで歩いてると一つのテントに辿り着いた。

「…んうく？何か感じる？」

と入るとそこはハジメの眠るテントであった。

「あの娘みたいに温かい…感覚…」

ふらふらとハジメに近付くとそのまま正面から抱き付き

「スピー」

と眠ってしまったのであった。

翌朝

「さあーと！朝飯の時間だぜ！」

「克也張り切ってるね！」

「そりゃあラーメンの具材が取れたんだ！作りたくなるし腹が減ってはなんとやらだぜ
！」

「朝から騒がしい奴だ。」

「社長機械の方は？」

「あらかた修理は出来た。あとは俺一人で充分だ。」

「そっか！」

「それにしてもハジメたち遅いな？」

「まあ昨日もお楽しみだったみたいだからね。ユエが遮音結界を張ってるから大丈夫み
たいだけどね。」

と話しをしていると

「は、は、ハジメ君がママになってるううううううううううううううううう!?!」

「はっ?」

「嬉しい。凡骨様子を見てこい!」

「言われなくてもいくぜ!」

と城之内と恵理はハジメたちの方へむかうとそこには

香織がハジメの肩を揺らし事情を聞こうとしユエとシアは幼女の方を観察している様子であった。

幼女の正体はハジメとレイカの精霊!?

前回から少し遡り

香織は何時も通り早起きをしユエと話しをしたり交流を深めつい最近ではシアも加わりガールズトークを楽しんでいた。

そしてハジメのテントへ行き起こそうとしていた。

「ハジメ君?朝だよ!今日も一日……………」

「…?カオリ?どうしたの?」

「香織さん急に止まってどうしたんです?」

香織が見たのは

何時も通り寝ているハジメが幼女を抱きしめて寝ていたのだ!

「…んう…かおりい…?おはよお〜」

ハジメたちは早めに目覚めた方が身体を動かすようにしていてハジメは深夜まで作業してはどうやら疲れているようでレイカが起きてきた。

「……………あれ?この娘…何処かで見覚えが?」

「むにやむにや…」

とレイカは幼女の頭を撫でると気持ち良さそうにくつつく幼女。

「は…は…」

「…? くしゃみ?」

「ハジメ君がママになつてるうううううううううう!」

「なっ!?! 何言つてるの香織!?!」

「どういうこと? いつ産んだの? 誰の子なの? 私? ユエちゃん? シアさん? それともまさか城之内君!?!」

「お、落ちて着いて香織…」

「私は落ちて着いてるよ! 誰の子なの? 大丈夫! ちゃんと認知するから! 皆で育てよう

!」グワングワン

とレイカの肩をグワングワン揺らし興奮する香織。

「ユエさん、ユエさん 修羅場ですよ!」

「…修羅場というか子育て談義?」

とユエとシアは幼女の様子を見る。

スピーと穏やかに眠り続けるのを観察していると

「朝から一体何があつたんだ? すぐえ響いてたぞ?」

「香織? あんまり迷惑かけちゃ駄目だよ?」

「!カツヤおはよう!」

「おう!おはよう、ユエは朝から元気だな。」

とわしやわしやと頭を撫でる城之内と満更でもないユエ

「シアさん何があつたの?」

「実は私たちも良く分かつてなくて、ハジメさんを起こしにきたら女の子と一緒に寝て香織さんが暴走したんです。」

「おう恵理どうしたんだ? 伴侶も朝飯作るんじゃないか?」

「恵理様? 何かありましたか?」

と心配したヒータとエリアも顔を覗かせると

「……あん? そっちの奴……何処かで見たような……」

「ちよつ!?!ど、どうして? この人がここにいるのですか!?!」

「エリアの知り合いなの?」

「知り合いというか私たち魔法使いの間では知らない精霊は殆どいないほど有名な精霊です!」

「ふああああああ……うるさいなあああ気持ち良く寝てたのに……アルルみたいに温かくて安心するの……」

「起こしてすみませんがでもどうして貴女がここにいるのですか?」

「人々の依頼を魔法で解決する魔法技術集団の長でかのエンディミオンとラメイソンのどちらとも懇意にしている工房の魔女たちの中でも最高位の大魔女」

「ウィッチクラフトマスターヴェール」

「んうく……誰かと思えば霊使いの火と水の使い手？杖の心地はどう？シユミレッタがかなり気合いを入れて作ってたけど？」

「おう！すげえ使いやすいぜ！自分の手足みたいに動くし最高だ！」

「ええ他の子達も良く馴染むって言っていました。」

「そうかそうか、弟子の成長は嬉しいものだね。」

「ちよつと待ってくれる？その人も精霊なの？」

「そうだよ」

「取り敢えず香織を落ち着かせないとね。こら！香織！レイカちゃん困ってるでしょ！いい加減にしなさい！」

とバチコンと良い音を立て香織はうずくまる。

「あうくい、痛いよ恵理ちゃん」

「暴走する香織が悪いよ。話しを聞かないと」

クウくく

とお腹の音が流れる。

「ここ数日何も食べないで作業してたからお腹空いた〜」

「おう！なら話しは飯の後だな！皆待つてるし早くいこうぜ！」

「遅いぞ！この俺を待たせるとは良い度胸だ。」

「悪かったって、お前の分は豪華にしてやるからそれで勘弁してくれ」

「さつてと早速作りますか！」

と恵理と城之内は昨日から仕込みをしておいたラーメンの生地を取り出し薄く伸ばしていく。

他のハウリアたちも手伝い進めていくうちに包丁で丁寧と同じ大きさに切っていく。

「…カツヤこんな感じ？」

「ん？おお初めての割には上手いな！あとユエ左手はこうやって猫の手みたいに握った方が手を切ることもないからな。」

「…多少の傷は治るから大丈夫」

「それでもよ。ユエには傷付いてほしくはないぜ。無駄に怪我をしないようにしてくれ」

「…ん！分かった。」

と城之内はユエの後ろで包丁の持ち方と握り方を教えてユエも素直にそれを真似て

作る。

「香織さん、香織さん。ユエさんと克也さんなんか親子みたいに見えますう」

「城之内君面倒見が良いし、将来良い旦那さんになるよ。ね、恵理ちゃん！」

「そりやあく也だもん！当然のことだよ！」

「いいなあ、城之内君とユエ：私も手取り足取り教えてもらいたい。」

「凄い良い匂い、この間食べたチーズのつたパンも美味しかったし楽しみだなあ」

「ピザの時ヴェールはいたの？」

「うん！チーズの香ばしい匂いがして食べたらすっごい濃厚で美味しかった。」

「そうなんだね。」

とレイカはヴェールと共にスープを作っていた。

三日三晩煮込んだ猪のような魔物肉を神秘の中華鍋で炒めて臭みと毒素を抜いてそこに胡椒から少量の醤油を足して濃厚な醤油ベースの豚骨スープが出来た。

他にも味噌、醤油、魚介風、塩、ほんのりピリ辛なトマトスープといった多種多様のスープを作っていく。

そして作り終え、モナも含めたハウリアたち全員へと行き渡ったことを確認して朝食を取る。

「ズルズルズル……ゴクン……美味しかったです！この味噌の濃厚な味に細い麺が合わさって

「どんどん食べられますう！」

「本当ね…それにこのお野菜にも味が染み込んで口のなかで麺と合わさって何倍にも美味しさが上がるわ」

「チュルチュルチュル…美味…！私はこつちのトマトスープが良い！酸味が効いて後からくるちよつとした辛さも癖になる！」

「…ふうん、魚から取れたDHAの豊富な栄養素と後からくる強い出汁の味付け…朝のことはこれで不問にしてやる。」

とシアとモナは味噌ラーメン、ユエはトマトスープ麺、海馬は魚介つけ麺でトツピングなど他よりも豪華になっているラーメンを堪能する。

「香織が味噌も作れるようになったからバリエーションが増えたよ！」

「流石香織だね。凄く美味しいわ。」

（レイカ後で豚骨の方もお願い！）

（分かってるわ！）

「ズルズルズルズルズル…ゴクン！やっぱラーメンは最高だぜ！俺はバリバリの醤油ラーメンだな！」

「うん！麺が確りしてて味も染み込んでるから美味しいね！私は塩豚骨かな？」

と恵理は豚骨、レイカは塩を頼み更に豚骨をハジメは食べるように城之内は醤油、香

織は塩豚骨を食べていた。

「クウくうめえな！栄養が身体に行き渡るぜ！」

「自然豊かな味が口に広がりますね！」

「人間界は食も豊かだね！こういうところは勉強になるね。」

「チュルチュルチュル：美味しいです！おかわりを！」

「ワインも気に入ったみたいですね。チュルチュル：醤油ベースの豚骨のつけ麺も中々ですね。」

「ズルズルズルズルズルズルズルズルズルズル：ゴクンいくらでも食べれるね！よし全部の味を食べ尽くす！」

各々が食事を楽ししみ朝食の後片付けをし終わり漸く話しを再開する。

「お腹も膨れたしさっきの続きだね。」

「私がある理由だったね。それは…」

「それは？」

とギルドの長がここにいる理由を考える中やはり精霊界の危機にいち早く気付いてと思う全員だが

「エンデイミオンとラメイソンの依頼の量がとんでもなく気分転換しようと思つて私のカードの力を感じたから道具一式もつてカードに転移してこつちに来たんだよ。」

と堂々とサボりをしに来たというヴェール

「カードつてもしかして！」

とハジメは保護フィルムに入れたカードを見るとヴェールのイラストが出ていた。

「それでハジメに付いていつてね。一人寂しそうなモナに私の硝子細工を見せたりして話しをしたりしたんだ。

純粹に私の硝子細工を誉めてくれてね。やつぱりそういうのって嬉しいからモナの病気を治そうと頑張つてつい先日完成したんだ！

徹夜続きで眠くてふらふらしてたらハジメがいて抱き心地が良くて気付いたら寝てたんだよ。」

「も、もしかして母様が凄い元気なのは！」

「完治したからだと思うよ。二、三日様子を見て大丈夫なら平気だよ。」

「モナさん失礼しますね。」

と香織は調べると異常なしと出た。

「すごい！本当に治ってる！」

「いやあ手持ちのドーピング薬にゴブリンの秘薬と魔物肉の体質変化に目を付けてその部分だけ再現してエリクサーも入れて小規模な破壊と再生で身体も丈夫になつてるよ。」

「ど、ドーピングって!?あのシャイニートマジシャンが作った効果は絶大だけど副作用のある!？」

「そこら辺はなくしたから平気だよ。」

「あ、ありがとうございます!母を助けていただきありがとうございます!」

「よかったねシアさん。」

「はいです!」

「ヴェール殿妻を治していただきありがとうございます。妻とこれからも生きられる時間を大切にします!」

「良いよ良いよウィッチクラフトが承った依頼だしこういう一家団欒は私も好きだからね。」

「ヴェールちゃんがここに来たのもハジメ君について来たからってことはシアさんの行動は間違ってたってことだね!」

「:それにしても内封する魔力がとんでもない。精霊って皆そうなの?」

「それは生きてる内に色んなことを経験するからね。私は硝子細工の加工が主だけどそれ以外だって一流に出来るんだよ。」

「話しは済んだか?ならば準備をする。」

「準備って何のだよ?」

「ここを出る。そしてフェアベルゲンへ行き大迷宮を攻略する。さらにフェアベルゲンを拠点に各地の迷宮の在処と情報を仕入れる。」

「しかし！我らは故郷を追われて」

「それがどうした！それは貴様らに戦う意志がなかったからだ！お前たちはここで何を学び何を得た！理不尽に奪われる側にいつまで立つつもりだ！俺はそんな腑抜けを雇った覚えなどないわ！」

「社長：そうですね。我等は理不尽に抗うために社長から学んだのだ。」

「そうだ！ならばやることはなんだ？」

「国を見返し我等を認めさせます。」

「長！社長！我等も付いていきます！」

「ならば準備せよ！目標はフェアベルゲンだ！全速前進だ!!」

「「「「「おおおおおおお！」」」」」

「：凄い統率力：セトが昔にいたら国を纏め上げる王だったかも」

「流石KC社長だね。」

「会社を纏め上げるカリスマつつうのはずば抜けてやがるな。」

「ふああ：まだ眠いや：お休み〜」

「ヴェール!？」

「ヴェールちゃんすっかりハジメ君とレイカちゃんに懐いてるね。」
こうして一行はハウリアと共にフェアベルゲンを目指したのであった。

帝国兵を待ち受ける運命　それは……

そうして二日程して海馬たちはライセンを出る準備を整えた。

テント系の物は持ち運びしやすいように折り畳みになっていて子供でも背負いやすいようになっていた。

「まずは樹海を目指す。そんなでもって大迷宮を探すで良いんだろ？」

「そうだ。その道中襲いくる有象無象はなき払う。それだけだ。」

「ハウリアの人たち最初に会ったときより顔付きが変わったね。」

「やっぱり自信を持てたからじゃないかな？それに海馬さんのカリスマもあるから気持ちも落ち着いてるし……」

「……ん、皆強くなってる！」

そして一行は、ライセンから抜ける階段に差し掛かろうとした。

「長！社長！この先に帝国兵がいます。数は……30程です。」

と技能、動物会話を会得した女性ハウリア、ミナは報告する。

彼女は動物と会話したり動物の視点を借り受けられ鳥の視野をかり帝国兵がいるこ

とを察知した。

「なる程な…カム！」

「はっ！」

「人間が一番油断しやすいのはいつだと思う？」

「睡眠時、または食事時かと思います。」

「概ね正解だ。厳密には集中力がなくなるときも当てはまる。」

「…帝国兵は食事時で各自ゆつたりとしているようです。」

「ならば好都合。全て捕まえ有益な情報を得る。」

「社長！長！私たちに行かせてください！」

と各々擬態の技能を習得した5名のハウリアが立候補する。

擬態はその名の通りあらゆる物に擬態することが出来る。

難点としてはかなり集中力を要し、彼らも最初は数分しかもたなかったが訓練をしたこと、魔物肉を食べたことで上がったステータスにより今では半日ほど人に擬態してもバレないようになっていた。

「それならこの無味無臭の睡眠薬が使えるかな？」

と香織は彼らへと渡す。

隠密が得意な彼らはゴブリン部隊から更に教わり城之内たち程でなければ見つけら

れないぐらいの気配を殺せるようになった。

彼らは自然と同化するよう先に帝国兵の方へ行き違和感なく混じる。

注ぎますね…

おう！わりいな…にしたって隊長も人がわりいぜ…

大峽谷に逃げ込んだハウリアどもを待ち伏せなんてよ。まあ捕まえりや給料だって増えるし宴だがよ。何人かは戦利品でもらえりや困らねえしよ。

その言葉を聞きシアが自分等ハウリアを守ってくれた事実を再確認し、そして帝国兵の醜さを目の当たりにする彼らは心のなかでは激情に駆られそうになるがそれでも仲間を家族を思いそつと蓋をする。

そうして全ての帝国兵へ睡眠薬を飲ませたことを確認し…

んだか眠くなってきやかかって……………

眠ったのを確認した。

長…完了しました。

ウム…5人とも辛い役割をさせてしまった…ありがとうございます。

いえ…改めて社長や城之内殿たちと会えて良かったと思います。

と優れた聴力で確認をお互いがする。

「社長。オールクリアです。」

「行くぞ。」

と海馬が先頭をきり歩いていく。

「ハジメさん…大丈夫ですか？同じ人族と敵対して…その」

「そうだね…敵対するぐらいなら平気だよ。でもいざ殺すとなると…どうなのかな…」

「そうだな…魔物を殺すとはまた違うし出来れば…な。」

「でも覚悟はした方がいいよ。そうじゃないとこの世界で生きていけない。」

(…いざとなれば私が…)

(あの克也さん 香織さん)

(どうした?)

(シアさん?)

(克也さんはユエさんの…香織さんはハジメさんの側にいてください。)

(もしかして何か見えたの?)

(はい…三通りぐらい見えて…一つはハジメさん…厳密にはレイカさんが帝国兵を氷で串刺しにして殺害する未来、

もう一つはユエさんが魔法で大峽谷から突き落として落下死させる未来。もう一つ

は社長なんですが多分社長のがマシな未来です。なので二人のことは見ていてあげてください。」

とシアは城之内と香織へと話す。

(任せてくれ！)

(うん！ハジメ君とレイカちゃんの心は私が守る！)

そして、遂に階段を上りきり、ハジメ達はライセン大峽谷からの脱出を果たす。

登りきった崖の上、そこにはぐっすり眠る帝国兵たちがいる。

「まずは身動きのできないようにしろ。そしてその後起こし尋問だ。」

と全員を縄で縛り上げ何かを巻き付けて気付け薬で一人ずつ起こす。

目を覚ました帝国兵の小隊長は

ハウリア族を見て

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだがなあ〜こりゃあ、いい土産ができそうだ」

と呑気に喋る。

自分達が誰の前にいるかも知らずに。

「帝国の内情から諸々全て話してもらおうか。」

「はっ！俺たちが誰か知らねえのか？帝国の精鋭部隊だぞ。さつさと」

カチッ

という音がし帝国兵の一人の首が落ちた……

「もう一度だけ言おう。帝国の内情から諸々全て話してもらおうか」

「ふ、ふざける」

カチッ

また帝国兵の首が落ちた。

「ヒッ!?!」

「三度は言わん。話せ。でなければここで死ぬか?」

「は、話す! 話すから止めてくれえ」

そして素直に話し始める小隊長と呼ばれた男。

帝国が実力至上主義なこと。

亜人たちは皆奴隷として貴族から一般的な労働力として働かされていること。そしてハウリア族の仲間も捕まっていること。

牢の構造から何まで全て喋る。

「話せることは話した! だから……」

「貴様らはここで待ち伏せていたと言ったが何をするつもりだった?」

「兎人族を奴隷に金儲けを……使えないのは憂さ晴らしに……」

プチツと切れる音と共にハジメは否レイカは空気中の水分を氷に変え男目掛けて振るう。

ガシツと城之内が腕を弾いたことで小隊長の首スレスレで突き刺さる。

「何するの城之内君……」

「落ちてけレイカ。」

「落ちていてるよ？ 生かしておいたってまた同じことをする。ならここで……」

「別にこいつらがどうなるうがどうだっていい……でもよ。レイカ……お前は殺したやつのこと背負えるか？」

「何を言ってる……」

「殺すってことはよそいつの人生を終わらせるってことだ。そいつが歩むはずだった人生を俺らが終わらせるんだ。」

レイカ……こつちでは命のやり取りが普通かも知れねえ。でも俺らは帰るんだろ？ これから先も俺たちは生きてくんた。日常に戻ってから邪魔するから気に食わないから殺すなんてあつちやいけねえ。

絶対なんて言葉はねえかもしれないねえ。もしこの先そうなつちまったら俺も一緒に背負う。」

「城之内君……」

「それにこいつら殺したら同類になっちまうしな。」

「ありがとう……」

「ふうん、俺には関係ないことだ。」

と言うともう一度スイッチを押すと

「うわあああああ!?!な、なんだこりやあああああ」

「貴様が今まで殺した屍の数だ。因果応報だ。」

「い、いやだあああああ」

と小隊長は断末魔を上げ気絶した。

「それにしたって海馬：ソリツドビジョン進化しすぎじゃねえか？」
「ふうん。これぐらいということはないプログラムで予め投影した立体映像をそれ

らしく見せたに過ぎん。」

「…凄い…魔法を使つてないのに魔法みたいな感じ!」

「行き過ぎた科学は魔法と同列になるっていうからね。それにしてもリアルだね。」

「つうかさっきのやつ俺たちはソリッドビジョンだつて分かつてるが相手からしたらホントに起きてるみたいに見えるから混乱するよな。」

「これは…凄いね。色々な作品を作つてきたけどこのそりつどびじょん?はその上をいくね。家で買いたいくらいだね。」

「確かに精霊界では目にはすることはないですね。私たちは恵理を通じて知つてはいました。たがやはり凄い技術です。」

「ほえ、凄いんですね!社長流石ですう!」

「さて白崎…」

「任せてください!」

と香織は帝国兵へ近付き全員に菌を入れる。

実は帝国兵たちは死んでおらずそのまま眠らせており小隊長のみ起こし海馬の小型ソリッドビジョンシステムで帝国兵に似せた物をスイッチを押すごとに首が取れるようにしていただけであつた。

最後のは恵理の降霊術でその辺の魔物の残留思念を呼び寄せただけであつた。

そして香織は奈落のエセアルラウネのやっていたことを菌でやっている。その効力は海馬の命令は絶対であること。ハウリアたちへ調べた情報は全て渡すこと。ハウリアたちの部下であること。

と念入りに刷り込む。

「これで良からう。先を急ぐ。」

「社長……我々は……」

「貴様らが帝国兵を好かんことなど知っている。だが利用できるものは利用し尽くせ。例えそれが不倶戴天の敵であろうとお前たちの悲願の為に。」

「ハッ！」

とハウリア全員が海馬に追隨する。

「城之内君……その……まだ不安だから抱きしめてほしいな……なんて」

「おう！良いぜ！」

ととうとうなりレイカを抱きしめて落ち着かせる城之内。

「おお香織さん香織さん！レイカさんが雌の顔になってますう」

「レイカちゃん隠してるっぽいけど城之内君のこと好きだからね。」

「……ん！カツヤ、エリ以外の好意 鈍感。」

「皆知ってるけど克也は気付いてないっぽいからね。」

と話してる側でヴェールは二人に近付くと

「どうううえきてるうううう」

と巻き舌で言う。

「ヴェ!?ヴェール!なに言ってるの!」

「何って…:…なにの話し?」

「まあ怒るなつてレイカ。」

「もうっ!」

(ふふ…:レイカも元に戻ったみたいだね。一時はどうなるかとヒヤヒヤしたよ。それだけレイカもハウリアを大事に思ってるってことだね。)

こうして帝国兵を退けた城之内たち。

いよいよ次回は樹海へと進んでいくのであった。

ハルツイナ樹海到着

それから数時間して、遂に一行は「ハルツイナ樹海」と平原の境界に到着した。樹海の外から見る限り、ただの鬱蒼とした森にしか見えないのだが、一度中に入ると直ぐさま霧に覆われるらしい。

「それでは、社長、城之内殿たち皆様、中に入ったら決して我らから離れないで下さい。社長を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですからな。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」

「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだしな。」

カムが、城之内に対して樹海での注意と行き先の確認をする。カムが言った「大樹」とは、「ハルツイナ樹海」の最深部にある巨大な一本樹木で、亜人達には「大樹ウーア・アルト」と呼ばれており、神聖な場所として滅多に近づくものはいないらしい。峡谷脱出時にカムから聞いた話だ。

当初、城之内たちは「ハルツイナ樹海」そのものが大迷宮かと思っていたのだが、よく考えれば、それなら奈落の底の魔物と同レベルの魔物が彷徨っている魔境ということ

になり、とても亜人達が住める場所ではなくなってしまう。なので、「オルクス大迷宮」のように真の迷宮の入口が何処かにあるのだらうと推測した。そして、カムから聞いた「大樹」が怪しいと踏んだのである。

カムは、城之内たちの言葉に頷くと、周囲の兎人族に合図をしてハジメ達の周りを固めた。

「皆様、できる限り気配は消してもらえますかな。」

大樹は神聖な場所とされておりますから、あまり近づくものはおりませんが特別禁止されているわけでもないのでフェアベルゲンや

他の集落の者達と遭遇してしまうかも知れません。我々は一応お尋ね者なので大迷宮へ行かれる皆様の邪魔になるかも知れず厄介です」

「ああ、分かっているぜ。俺たちはある程度、隠密行動はできるから大丈夫だ。」

城之内たちはそう言うので「気配遮断」を使う。ユエも、奈落で培った方法で気配を薄くした。

「ツ!! これは、また……皆様、できればユエ殿くらいにしてもらえますかな?」

「ん?……こんなもんか?」

「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては

我々でも見失いかねませんか。

我々も鍛練しとりますが流石ですな！」

元々、兎人族は全体的にスペックが低い分、聴覚による索敵や気配を断つ隠密行動に秀でている。地上にいながら、奈落で鍛えたユエと同レベルと言えば、その優秀さが分かるだろうか。

達人級といえる消し方とゴブリン部隊に鍛えられているのだ。

しかし、城之内たちの「気配遮断」は更にその上を行く。普通の場所なら、一度認識すればそうそう見失うことはないが、樹海の中では、兎人族の索敵能力を以てしても見失いかねないハイレベルなものだった。

カムは、人間族でありながら自分達の唯一の強みを凌駕され、もはや苦笑いだ。隣では、何故かユエが自慢げに胸を張っている。シアは、どこか複雑そうだった。まだまだハジメやレイカの言う実力差は埋まってないことを感じた。

「ふうん、凡骨にしては中々といったところか。」

と海馬も自然と同化……いや海馬の鬨気が周りを包み込むような周りを己と合わせさせるような海馬らしいやり方である。

しばらく、道ならぬ道を突き進む。直ぐに濃い霧が発生し視界を塞いでくる。しかし、カムの足取りに迷いは全くなかった。現在位置も方角も完全に把握しているよう

だ。理由は分かっているが、亜人族は、亜人族であるというだけで、樹海の中でも正確に現在地も方角も把握できるらしい。

「ふうん成る程な。亜人族特有の帰巢本能と土地勘と先祖代々からの土地勘がなせる技といったところか。」

順調に進んでいると、突然カム達が立ち止まり、周囲を警戒し始めた。魔物の気配だ。当然、全員感知している。どうやら複数匹の魔物に囲まれているようだ。樹海に入るに当たって、ハジメが貸し与えたナイフ類を構える兎人族達。彼等は本来なら、その優秀な隠密能力で逃走を図るのだそうだが、今回はそういうわけには行かない。皆、一様に緊張の表情を浮かべている。

「ウィツチクラフト特性サイレンクワガタ〜」

と緊張感の欠片もない声でヴェールが取り出したのは…クワガタのような機械であつた。

「ヴェール！ふざけてる場合じゃないでしょ！」

「真面目だよ。これはスイッチを入れると不思議なことに…」

とスイッチを入れると超低周音が鳴り渡り魔物たちが一目散に逃げていった。

「ここに来るまでに魔物の体内器官は調べたから魔物にとって不快になる音を低周波で

流して余りの不快さに逃げ出すんだ！」

「凄げえな。戦わずに追い払うなんて。」

「こういう戦い方もあるんだね。」

「あれだね！モスキート音と同じようなやつかな？」

「無駄な動きはしないで戦闘は最小限にした方が早く着けるからね。」

「ヴェールごめんなさい。貴女は真面目にやっつてたのに誤解して……」

「それならレイカおんぶして、それで許してあげる。」

と言うのでレイカがヴェールをおんぶする。

そして道中出现する魔物をハウリアが人数の利点を活かして倒しては宝物庫へとレイカが収納していく。

後程加工をしてハウリア族の衣装や武装を整えるためである。

しかし、樹海に入って数時間が過ぎた頃、今までにない無数の気配に囲まれ、城之内達は歩みを止める。数も殺気も、連携の練度も、今までの魔物とは比べ物にならない。カム達は忙しくウサミミを動かし索敵をしている。

そして、何かを掴んだのか苦虫を噛み潰したような表情を見せた。シアに至っては、その顔を青ざめさせている。

ハジメとユエも相手の正体に気がつき、面倒そうな表情になった。

その相手の正体は……

「お前達……何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人だった。

樹海の中で人間族と亜人族が共に歩いている。

その有り得ない光景に、目の前の虎の亜人と思しき人物はカム達に裏切り者を見るような眼差しを向けた。その手には両刃の剣が抜身の状態で握られている。周囲にも数十人の亜人が殺気を滾らせながら包囲網を敷いているようだ。

「我は兎人族、ハウリアの族長のカム・ハウリアである。」

そして虎の亜人の視線がシアを捉え、その眼が大きく見開かれる。

「白い髪の兎人族……だと？ ……貴様ら……報告のあったハウリア族か

亜人族の面汚し共め！

長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！ 反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！

全員この場で処刑する！ 総員かッ!？」

カキーン……

虎の亜人が問答無用で攻撃命令を下そうとしたその瞬間、ハジメ……正確にはレイカの

腕が跳ね上がり、彼らの周りが一瞬で凍り付く。

理解不能な攻撃に凍りつく虎の亜人のいや彼らの身体を寒さが包む。

そこに、気負った様子もないのに途轍もない圧力を伴ったレイカの声が響いた。威圧”という魔力を直接放出することで相手に物理的な圧力を加える固有魔法である。

「今の攻撃は威嚇。」

周囲を囲んでいるヤツらも全て把握している。

貴方たちがいる場所は、既に私のキルゾーンよ。

下手に動かない方がよいよ。」

「な、なっ……詠唱がっ……」

詠唱もなく、一瞬の内に周りを凍らせる魔法と威圧感。さらに不思議な筒を持つ未知の存在に思わず吃る虎の亜人。それを証明するように、ハジメは自然な動作でシユラークを抜きピタリと、とある方向へ銃口を向けた。その先には、奇しくも虎の亜人の腹心の部下がいる場所だった。霧の向こう側で動揺している気配がする。

「殺るといふのなら容赦はしないわ。ハウリアの命は私が保障しているから……ただの一人でも生き残れるなどと思わないほうが良い。」

威圧感の他にレイカが殺意を放ち始める。あまりに濃厚なそれを真正面から叩きつ

けられている虎の亜人は冷や汗を大量に流しながら、ヘタをすれば恐慌に陥って意味もなく喚いてしまいそうな自分を必死に押さえ込んだ。

まるで自分たちの身体ではないように震えが止まらない。

自らのDNAが絶対に敵対してはいけないと警告しているようだ。

（冗談だろ！　こんな、こんなものが人間だということのか！　まるつきり化物じゃないか！）

恐怖心に負けないように内心で盛大に喚く虎の亜人など知ったことかというように、レイカがドンナー・シユラークを構えたまま、言葉を続ける。

「けど、この場を引くというのなら追いもしない。敵でないなら殺す理由もないわ。さあ、選びなさい。敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか」

虎の亜人は確信した。攻撃命令を下した瞬間、先程の閃光が一瞬で自分達を蹂躪することを。その場合、万に一つも生き残れる可能性はないということ。

虎の亜人は、フェアベルゲンの第二警備隊長だった。フェアベルゲンと周辺の集落間における警備が主な仕事で、魔物や侵入者から同胞を守るというこの仕事に誇りと覚悟を持っていた。その為、例えば部下共々全滅を確信していても安易に引くことなど出来

なかった。

「……その前に、一つ聞きたい」

虎の亜人は掠れそうになる声に必死で力を込めてレイカに尋ねた。レイカは視線で話を促した。

「……何が目的だ？」

端的な質問。しかし、返答次第では、ここを死地と定めて身命を賭す覚悟があると言外に込めた覚悟の質問だ。虎の亜人は、フェアベルゲンや集落の亜人達を傷つけるつもりなら、自分達が引くことは有り得ないと不退転の意志を眼に込めて気丈にレイカを睨みつけた。

「樹海の深部、大樹の下へ行きたいのよ」

「大樹の下へ……だと？ 何のために？」

てつきり亜人を奴隷にするため等という自分達を害する目的なのかと思っていたら、神聖視はされているもの的大して重要視はされていない。大樹が目的と言われ若干困惑する虎の亜人。大樹は、亜人達にしてみれば、言わば樹海の名所のような場所に過ぎないのだ。

「そこに、本当の大迷宮への入口があるかもしれないから。私達は七大迷宮の攻略を指して旅をしている。ハウリアとは道中会って意気投合して彼らに案内を依頼したの。」

「本当の迷宮？ 何を言っている？ 七大迷宮とは、この樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「いや、それはおかしい」

「なんだと？」

妙に自信のあるハジメの断言に虎の亜人は訝しそうに問い返した。

「大迷宮というには、ここの魔物は弱すぎるのよ。」

「弱い？」

「そう。大迷宮の魔物は、どいつもこいつも化物揃い。少なくとも「オルクス大迷宮」の奈落はそうだった。それにね……」

「なんだ？」

「大迷宮は解放者達が残した試練で、希望なのよ。亜人族は簡単に深部へ行けるんですよ？ それじゃあ、試練になってない。だから、樹海自体が大迷宮ってのはおかしいだよ」

「……」

レイカの話聞き終わり、虎の亜人は困惑を隠せなかった。レイカの言っていることが分からないからだ。樹海の魔物を弱いと断じること、【オルクス大迷宮】の奈落というのも、解放者とやらも、迷宮の試練とやらも……聞き覚えのないことばかりだ。普段なら、「戯言」と切つて捨てていただろう。

だがしかし、今、この場において、レイカが適当なことを言う意味はないのだ。圧倒的に優位に立っているのはレイカの方であり、言い訳など必要ないのだから。しかも、妙に確信に満ちていて言葉に力がある。

本当に亜人やフェアベルゲンには興味がなく大樹自体が目的なら、部下の命を無意味に散らすより、さっさと目的を果たさせて立ち去つてもらうほうがいい。

虎の亜人は、そこまで瞬時に判断した。しかし、レイカのような驚異を自分の一存で野放しにするわけには行かない。さらにまだ他の人間たちも力を隠している可能性だつてある。この件は、完全に自分の手に余るということも理解している。その為、虎の亜人はレイカに提案した。

「……お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

その言葉に、周囲の亜人達が動揺する気配が広がった。樹海の中で、侵入して来た人間族を見逃すということが異例だからだろう。

「ほう。指揮官としてそれなりに優秀であるか。」

「だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

冷や汗を流しながら、それでも強い意志を瞳に宿して睨み付けてくる虎の亜人の言葉に、レイカたちは少し考え込む。

虎の亜人からすれば限界ギリギリの譲歩なのだろう。樹海に侵入した他種族は問答無用で処刑されると聞く。今も、本当はレイカ達を処断したくて仕方ないはずだ。だが、そうすれば間違いなく部下の命を失う。それを避け、かつ、レイカという危険を野放しにしないためのギリギリの提案。

海馬はこの状況で中々理性的な判断ができるヤツだと、少し感心した。そして、今、この場で彼等を殲滅して突き進むメリットと、フェアベルゲンに完全包囲される危険を犯しても彼等の許可を得るメリットを天秤に掛けて……後者を選択した。

大樹が大迷宮の入口でない場合、更に探索をしなければならぬ。そうすると、フェアベルゲンの許可があった方が都合がいい。もちろん、結局敵対する可能性は大きい。が、しなくて済む道があるならそれに越したことはない。人道的判断ではなく、単に殲

滅しながらの探索はひどく面倒そうだからだ。

「……良からう。さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝える！」

「無論だ。ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝える！」

「了解！」

虎の巫人の言葉と共に、気配が一つ遠ざかっていった。レイカは、それを確認するとスつと構えていたドンナー・シユラークを太もものホルスターに納めて、威圧を解いた。空気が一気に弛緩する。

それに、ホツとすると共に、あつさり警戒を解いたハジメに訝しそうな眼差しを向ける虎の巫人。中には、「今なら！」と臨戦態勢に入っている巫人もいるようだ。その視線の意味に気が付いたが海馬は不敵に笑った。

「お前等が攻撃するより、此方の攻撃の方が早い……試すか？」

「……いや。だが、下手な動きはするなよ。我らも動かざるを得ない」

「無論だ」

包囲はそのままだが、ようやく一段落着いたと分かり、カム達にもホツと安堵の吐息が漏れた。だが、彼等に向けられる視線は、ハジメに向けられるものより厳しいものが

あり居心地は相当悪そうである。

「もうレイカちゃんつたら無茶して！」

「…でもカツコよかった！」

「レイカさくんありがとうございますう〜」

（レイカ今度は暴走しなかったね。）

（だって城之内君に言われたもの。彼らは彼等なりに仕事を全うしてるだけなのもあるから。）

「さてとひとまずは大丈夫そうだな。」

「そうだね。今の内にカードを確認しとこうかな？」

と恵理は自分のカードを整理し始める。

「…恵理のカード…見ても良い？」

「うん良いよ。」

と恵理は椅子を宝物庫から出してもらいユエを膝に座らせカードを確認する。

「凡骨。今のうちにあれを作っておけ。」

「そうするか！」

と海馬から依頼されていたある武器を作成していた。

各々が時間を待つ間に思い思いに過ごす。

こうしてフェアベルゲンへと入った城之内たち。長老たちの判断を待つことになるのであった。

自然豊かな町並み フェアベルゲン

そうして思い思いの時間を過ごす内に霧の奥からは、数人の新たな亜人達が現れた。彼等の中央にいる初老の男が特に目を引く。流れる美しい金髪に深い知性を備える碧眼その身は細く、吹けば飛んで行きそうな軽さを感じさせる。

威厳に満ちた容貌は、幾分シワが刻まれているものの、逆にそれがアクセントとなつて美しさを引き上げていた。

何より特徴的なのが、その尖った長耳だ。彼は、森人族いわゆるエルフなのだろう。彼が「長老」と呼ばれる存在なのだろうと城之内たちは推測した。その推測は、当たりのようだ。

「ふむ、お前さんたちが問題の人間族かね？ 名は何という？」

各々名乗りをあげる彼等に彼も名乗る。

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預かせてもらっている。

さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。『解放者』とは何処で知った？」

「？オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」

目的などではなく、解放者の単語に興味を示すアルフレリックに訝しみながら返答する城之内。一方、アルフレリックの方も表情には出さないものの内心は驚愕していた。なぜなら、解放者という単語と、その一人が「オスカー・オルクス」という名であることは、長老達と極僅かな側近しか知らない事だからだ。

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないが……証明できるか？」

あるいは亜人族の上層に情報を漏らしている者がいる可能性を考えて、彼らに尋ねるアルフレリック。城之内たちは難しい表情をする。証明しろと言われても、すぐ示せるものは自身の強さくらいだ。首を捻る中でユエが提案する。

「……ハジメ、魔石とかオルクスの遺品は？」

「ああ！それなら……」

ポンと手を叩き、「宝物庫」から地上の魔物では有り得ないほどの質を誇る魔石をいくつか取り出し、アルフレリックに渡す。

「こ、これは……こんな純度の魔石、見たことがないぞ……」

アルフレリックも内心驚いていてたが、隣の虎の亜人が驚愕の面持ちで思わず声を上げた。

「後は、これ。一応、オルクスが付けていた指輪なんだけど……」

そうやって、見せたのはオルクスの指輪だ。アルフレリックは、その指輪に刻まれた紋章を見て目を見開いた。そして、気持ち落ち付かせるようにゆっくり息を吐く。

「なるほど……確かに、お前さんはオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よかろう。取り敢えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」

アルフレリックの言葉に、周囲の亜人族達だけでなく、カム達ハウリアも驚愕の表情を浮かべた。虎の亜人を筆頭に、猛烈に抗議の声があがる。それも当然だろう。かつて、フェアベルゲンに人間族が招かれたことなど無かったのだから。

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持っているのでな。それが、長老の座に就いた者のみ伝えられる掟の一つなのだ」

アルフレリックが厳しい表情で周囲の亜人達を宥める。しかし滞在とはどういうことなのかと城之内は問う。

「どういうことだ？俺たちは大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はない。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらうんだが？」

「いや、お前さん。それは無理だ」

「なんだと？」

あくまで邪魔する気か？と海馬は言うが、むしろアルフレリックの方が困惑したよう

に返した。

「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族なら誰でも知っているはずだが……」

アルフレリックは、「今すぐ行つてどうする気だ?」と城之内たちを見たあと、案内役のカムを見た。城之内たちは聞かされた事実にはポカンとした後、アルフレリックと同じようにカムを見た。海馬の形相は凄いことになっていてそれを見たカムはと言えば……

「あつ」

まさに、今思い出したという表情をしていた。海馬の額に青筋が浮かぶ。

「カム?」

「あつ、いや、その何といいますか……訓練や妻のことで色々舞い上がっていたというか、つい忘れていたといえますか……」

しどろもどろになって必死に言い訳するカムだったが地面に手を付き頭を下げる。いわゆる土下座だ。

「じゃ、社長! 申し訳ございません! 私の不手際です! どうか罰はこのカムだけに!」

「長! 何を言うのですか!」

「私たちも忘れていたようなもの罰なら我々にも！」

「社長！」

「社長！」

「ふうん。そこまで言うのなら仕方ない。貴様ら全員俺の考案した訓練の三倍をやつてもらおうとしよう。そのバカ娘は慣れているだろうから20倍だ。」

「ヴェツ!?しやしやしや社長!?!どうして私だけそんなにあるんですか!!この間の十倍でもきつかったのに二十倍つて!?!せ、せめて十五倍で」

「ほう?この俺に意見をするとは…成る程余程力が有り余つてると見える。ならば三十倍にして」

「わあうれしいなー、しやしちょうのくんれんはー」

と棒読みで、言うシア。

「シア…ドンマイ」

「…ん、頑張れ。」

「大丈夫だよシアちゃん疲れても癒してあげるからね。」

「うわくん!香織さくん!」

と香織の胸に飛び込むシア。

そんなシアの頭を撫で落ち着かせ時折耳も触りながら癒す香織。

「ふふ、シアったら私以外でも甘えられる人が出来たのね。良かったわ。」
「うむ。少し見ない内に大きくなるものだなモナ。」

「……………」
「ジー」

とシアを、いや正確には香織に抱き付くシアを羨ましそうに見るユエ。

「ユエも何かあつたら頼つてね。僕もレイカも力になるから。」

「ん！ハジメ…レイカもありがとう。」

とハジメに抱き付くユエ。

「それなら一度フェアベルゲンに行くしかないね。」

「だな。このままじゃ進めなさそうだしそれに海馬もそつちに用事があるんだろ？」

「無論だ。初めからそのつもりだ。」

と海馬はそう言い、アルフレリックたちが案内するままに歩みをフェアベルゲンへと向ける。

そうしてしばらく歩いてみると、突如、霧が晴れた場所に出た。晴れたといつても全ての霧が無くなったのではなく、一本真つ直ぐな道が出来ているだけで、まるで霧のトンネルのような場所だ。よく見れば、道の端に誘導灯のように青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋められている。そこを境界線に霧の侵入を防いでいるようだ。

鍊成師でもあるハジメが興味深く青い結晶を見ていることに気が付いたのかアルフレリックが解説を買って出てくれた。

「あれは、フェアドレン水晶というものだ。あれの周囲には、何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落も、この水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は“比較的”という程度だが」

「なるほど。四六時中霧の中じゃあ気も滅入るだろうし、視界の悪い中だと作業も進まないから住んでる場所くらい霧は晴らしたいと思うね。」

「どうやら樹海の中であつても街の中は霧がないようだ。十日は樹海の中にいなければならなかつたので朗報である。海馬も霧が鬱陶しそうだったので、二人の会話を聞いて安心すると共にハウリアをいかに鍛えるか頭を働かせる。」

「そうこうしている内に、眼前に巨大な門が見えてきた。太い樹と樹が絡み合つてアーチを作つており、其処に木製の十メートルはある両開きの扉が鎮座していた。天然の樹で作られた防壁は高さが最低でも三十メートルはありそうだ。亜人の“国”というに相応しい威容を感じる。」

「ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、ゴゴゴと重そうな音を立てて門が僅かに開いた。周囲の樹の上から、城之内達に視線が突き刺さっているのがわかる。」

「人間が招かれているという事実、に動揺を隠せないようだ。アルフレリックがいなけ

れば、ギルがいても一悶着あつたかもしれない。おそらく、その辺りも予測して長老自ら出てきたのだろう。

門をくぐると、そこは別世界だった。直径数十メートル級の巨大な樹が乱立しており、その樹の中に住居があるようで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。

人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成している。樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるようだ。

樹の高さはどれも二十階くらいありそうである。そんな綺麗な光景を目の当たりにした城之内たちは見入っていた。

ゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリツクが正気に戻してくれたようだ

アルフレリツクの表情が嬉しげに緩んでいる。周囲の亜人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。城之内たちは、そんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛した。「すげえな。こんな綺麗な街を見たのは始めてだぜ。空気も美しい。自然と共に生きてきたつてのが分かるぜ。」

「僕たちの町はビルとか自然とは程遠いものばかりだからこういうのは新鮮だね。」

「あの空中水路とても計算し尽くされた構造だね。それに風景と共に自然を豊かに使った町の構造は素晴らしいね。」

「私たちの町とは違う凄く綺麗な所だね。」

「ん……綺麗」

「ふん。これぐらい国として成立するのならば当然なこと。人がいかに自然を淘汰してきたことが目につくものだ。」

「海馬、お前つてやつは素直に誉めるぐらいして良いだろ。」

掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていなかったのか少し驚いた様子の亜人達。だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。

「なんつうかあたしらの里に似てるな！」

「そうですね。私達も懐かしい気持ちになりますね。」

「土の状態も良い……作物もしっかり育ちそうだね。」

「……生まれ故郷ととても似てます……今頃どうしてるでしょうか。里を抜けた私が言えたことではないでしょうけども……」

「ワイン……大丈夫です。あまり思い詰めてはいけませんよ。」

と言う中でシアはハジメと香織へ

「ハジメさん！香織さん！凄いでしよう私たちの故郷は！」

「うん。凄いよ。僕たちの世界とは大違いだね。シアみたいに素直に育つ娘が多いのが分かるね。」

「そうだね。シアさんの故郷を見れて満足だね！」

とハジメと香織はシアの耳を両サイドから撫でる。

「お二人ともくすぐったいですう〜」

ムツ ガシツツ！

「ひよわああああ!?!」

「この胸か…ハジメとカオリを誑かすのはこの胸か…ハレンチウサギめ。」

「ユ、ユエさん!?!だ、ダメエそんなに強く揉まないでください〜」

とユエは二人に構われているシアに嫉妬し両手でその豊満な胸を鷲掴みにするのであった。

こうして城之内たちは、フェアベルゲンの住人に好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった。

その間もヴェールはハジメの背中に背負われ寝ていた。

こうして少しトラブルが、あったもののフェアベルゲンへと迎え入れられた城之内たち。果たして話し合いはどうなることやら

ハウリアの長の漢道 上に立つ者の偉大さ

「……なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か…」

現在、城之内たちはアルフレリックと向かい合って話をしていた。内容はオスカー・オルクスに聞いた「解放者」のことや神代魔法のこと

自分が異世界の人間であり七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしれないこと等だ。

アルフレリックは、この世界の神の話を聞いても顔色を変えたりはしなかった。

不思議に思つてハジメが尋ねると、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」という答えが返つてきた。神が狂つていようがいまいが、亜人族の現状は変わらないということらしい。

聖教教会の権威もないこの場所では信仰心もないようだ。あるとすれば自然への感謝の念だという。

そうして話をしてると下で何やら騒がしくなっている。

下では海馬とハウリアたちが待機していた。何かあったのであろう。

城之内たちが階段から降りてくると、ハウリアたちと他の部族たちが睨み合っている。

た。降りてきた彼等に他の部族たちは一斉に鋭い視線を送った。熊の巫人が剣呑さを声に乗せて発言する。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？ こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

「ふうん。獣畜生にも劣るこんなやつが長の一人だとは……片腹痛いわ！」

必死に激情を抑えているのだろう。拳を握りわなわなと震えている。やはり、巫人族にとつて人間族は不倶戴天の敵なのだ。しかも、忌み子と彼女を匿った罪があるハウリア族まで招き入れた。熊の巫人だけでなく他の巫人達もアルフレリックを睨んでいる。

しかし、アルフレリックはどこ吹く風といった様子だ。

「なに、口伝に従つたまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！ そんなもの眉唾物ではないか！ フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧共が資格者だとも言うのか！ 敵対してはならない強者

だと!」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリック。

やはり年齢層的にも掟の重要度は変わるようである。

熊の亜人は信じられないという表情でアルフレリックを、そしてハジメを睨む。

「……ならば、今、この場で試してやろう!」

いきり立った熊の亜人が突如、ハジメに向かって突進した。あまりに突然のことで周囲は反応できていない。アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていないのか、驚愕に目を見開いている。

そして、一瞬で間合いを詰め、身長二メートル半はある脂肪と筋肉の塊の様な男の豪腕が、ハジメに向かって振り下ろされた。

亜人の中でも、熊人族は特に耐久力と腕力に優れた種族だ。その豪腕は、一撃で野太い樹をへし折る程で、種族代表ともなれば他と一線を画す破壊力を持っている。

ズドンッ!

しかし衝撃音と共に振り下ろされた拳はその間に入ったカムがその身体で受け止めた。

「カムさん!?!」

「ふん！ハウリアが人間を庇うとはそこまで落ちぶれたか！何とか言ったらどうだ！最も俺の拳を受けて何も言えないだろうが。」

「……………いな」

「なんだ…」

「軽いなど言ったのだ。」

カムの迫力に熊の亜人族並びに他の部族は思わず息を呑んだ。

「貴殿の放った一撃には何の思いも込められておらぬ。そんな一撃社長の重みのある拳に比べたら天と地程の差がある。」

貴殿の一撃は、ただ相手を倒すことしか考えていない。

だから、重さが宿らない。

私は空手という社長の世界の武術を学んだ。

空手は心を養う。

人を打つ、ということは自らも打たれることを知る、ということだ。

自らの一撃が相手に何を及ぼすか、

どれだけの痛みや悲しみを与えるかを知った時。

……人は打つ意味と、打たれるということを知るのだ。

……だから、それに至らない貴様の一撃には重みが宿らない。

……人を打つ意味のわからない貴殿に、

本当の重さというものを教えよう!!」

「ふ、ふざけやがっ」

「そして私の娘を処刑だと……」

「私の娘を家族を守るならば私はこの力を振るうことを躊躇わん!!」

得たいの知れない迫力を払拭するべく熊の亜人族は再度拳を振り上げる。

「お、おとおおおおおお!俺はこのフェアベルゲンの族長だああああ」

「それは良かったものだ。だが私もハウリアの族長でそして」

「我が最愛の娘、シアの父親だ!!!」

と熊の亜人族族長の拳よりもカムの方が早く

ズガン!メキメキメキ ドオオオオオン

と固い大樹に穴を空け衝撃で風が吹く。

「な、な……」

その一撃は熊の亜人族の頭スレスレで外れていた。

まだまだカムは己の力の制御を完全には掌握していないことが幸いした。

しかし当たっていればどうなったのか想像するに容易い。

「ふむ……まだまだ未熟であったか。精進せねばな。」

「父様くありがとうですう〜」

と泣きじやくるシアの涙を静かに拭う香織とハジメの二人。

カムは彼らになれば娘を託せると再度確信をするのであった。

そして熊の亜人族は氣を失った。

「さてまだやりますかな？ 言っておきますが私などよりも此方の方々は数十倍は強いですぞ？」

その言葉に、頷けるものはいなかった。

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（俗

に言うドワーフ)のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、城之内たちと向かい合つて座っていた。その傍らにはユエとカム、シアが座り、その後ろにハウリア族が固まつて座っている。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。戦闘力では一、二を争う程の手練だった熊の亜人(名前はジン)が、文字通り手も足も出さず瞬殺されたのであるから無理もない。

それも彼らではなくハウリア族によつてだ。

そんな手練れが大勢とそれ以上がいる。

彼らはその矛先が此方へ向くのではないかと警戒する。

「で? 貴様らはどうする気だ?」

俺たちは大樹の下へ行きただけで、邪魔しなければ敵対することもない。亜人族としての総意を聞かせろ。でなければ俺はこの国を問答無用で焼き払う。

俺は凡骨たちのように甘くはない。

そしてこれは警告でもある。」

海馬の言葉に、身を強ばらせる長老衆。言外に、亜人族全体との戦争も辞さないという意志が込められていることに気がついたのだろう。

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも?」

グゼが苦虫を嘔み潰したような表情で呻くように呟いた。

その後熊の亜人族、ジンはまるでなにかに怯えるようになり、戦士としてのプライドは粉々に砕け散ったようで戦士として再起は難しいとのことだ。

「何言っている。先に殺意を向けてきたのは奴だ。」

カムは返り討ちにしただけだ。

再起不能になったのは自業自得だ。

己のプライド一つ守れん負け犬などどうでも良いことだ。」

「き、貴様! ジンはな! ジンは、いつも国のことを思つて!」

「それが、初対面の相手を問答無用に殺していい理由になるとでも?」

「そ、それは! かし!」

「勘違いしているようだが此方が被害者で奴が加害者。長とは罪科の判断も下すもの。上の者が愚かであるならば国は滅ぶだけだ。それをはき違えるな?」

そうしてその後のアルフレリックの諫めの言葉に、立ち上がりかけたグゼは表情を歪めてドスンと音を立てながら座り込んだ。そのまま、むっつりと黙り込む。

「確かに、彼等はは、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言う

だけのことはあるね。それにハウリア族は見違えるように強くしたのもある。僕は、彼等を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目でハジメを見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。

その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあろうだが、同意を示した。代表して、アルフレリックが代表だろう海馬へ伝える。

「海馬瀬人。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんたちを口伝の資格者として認める。故に、お前さんたちと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。しかし……」

「下のものたちの反感も押さえてこそ長だか?」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があつたからな……」

「それで?」

「お前さんを襲つた者達を殺さないで欲しい」

「……殺意を向けてくる相手に手加減しろと?」

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろうか？」

「だろうな。だが貴様らの都合など知ったことではない。襲うならば返り討ちに合う覚悟を持つことだ。奪うと言うならば奪われる覚悟を持つことだ。」

しかし、そこで虎人族のゼルが口を挟んだ。

「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

その言葉に、海馬は訝しそうな表情をした。もとより、案内はハウリア族に任せるつもりで、フェアベルゲンの者の手を借りるつもりはなかった。そのことは、彼等も知っているはずである。だが、ゼルの次の言葉で彼の真意が明らかになった。

「ハウリア族に案内してもらえないとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。」

何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。

フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下つてい

る」

ゼルの言葉に、シアは泣きそうな表情で震えるがカム達は堂々としている。

「社長発言をしても？」

「好きにしろ。」

「ハッ！フェアベルゲンの長老方。既に我らハウリアはフェアベルゲンの者ではなく、KC傘下でありトータス支部を何れは担う。故にその命令を聞く必要性などはない。」

「お、お前たち我等の決定に逆らうつもりか！」

「そう言っておりますが？我等はこれまでシアを守ることだけにしか力を入れておらんのだ。我等は隠し通すことで護ろうとした。」

しかし社長と出会い我等がしなければならなかったのは立ち向かう勇氣であった。我等は無意識に恐れていたのかも知れない。

だからこそ今こそ声を挙げなければならぬ。何れ生まれるであろうシアの子やこれから生まれてくる子達に魔力を持つ者が出てくるかもしれない。今の掟は忌子を追放する。

それは親から子を奪うこと、子から親を奪うことだ。

母親が命を懸けて産んだ命を散らす。

父親はその事実絶望し護らねばならない子を掟だからと従い母親は子を思い涙を流す。

そんな負の連鎖は何処かで断ち斬らねばならない！

我等は掟だからと屈するのではなくその子の自由を、成長を幸せを祝福する！そんなありふれた幸せのために戦う。

それが城之内殿たちが教えてくれたオスカー・オルクスひいてはフェアベルゲンを思いつたリーテイリス・ハルツイナの残してくれた意志だと我等が受け継ぐべき思いなのではないのですか？」

「……むう……」

「貴様ら亜人族は人に比べ寿命も長い、だからこそ掟を重視するのであろうが俺からすればどうでも良いことだ。」

「何を」

「人は愚かだ。人の成功に嫉妬し妬み、憎悪し快樂を求め奪い傷付け合わずにはいられない種族だ。」

「だが、貴様らは輝きを見たことはあるか？眩い光に目を開けられずされどそれを追い求め手を伸ばし続けても届く気配を掴ませない物。」

「俺はそれを手に入れるためにあらゆることをしてきた。それでも奴はその先を常に歩き続け、その果てに消えていった。」

「海馬お前……」

城之内は海馬がアテムを追い求めていることを改めて感じとる。いや狂気とも言える執念を見たと言うべきか。

「貴様らに問う。」

闘いとは何かを。

人間はこの世に生を受けた瞬間己の肉体という器に魂を宿す。

いわば肉体とは魂の牢獄なのだ。

死ぬまで出ることとは許されないものだ。

やがて肉体は己の魂を護るために武器を持つ…

己の敵は肉親か！」

その言葉に長老たちは息を飲む

「己の敵は他の者か！」

ハウリア族は帝国兵を思い浮かべる。

「己の敵は他の国か！」

亜人族として人族も魔族も共に虐げられてきた国である。

「己の敵は悪意か！」

ハジメやレイカ、香織、ユエはクラスメイトの悪意、己の信じていた者たちからの裏

切りを思い浮かべる。

「我々は守るものたちのために闘う。」

思想の異なるものと闘う。迫害を差別を失くすため自由を求めて闘う。愚かな戦争という殺し合いによって戦いの歴史は繰り返されてきた。皮肉にも勝者でさえ自由という物を得られず牢獄に束縛され続ける。

国境、思想、人種、言語

あらゆる異なるものを越え新たな未来へ突き進む。

トータスはそのための足掛かりでありハウリアはその第一号だ。

貴様らがそれを踏まえた上でハウリアを処刑するのであれば

俺を倒してからにしろ。

話しはそれからだ。」

人種を越えた未来。

その言葉は精霊である霊術使いの四人、ブリザードプリンセス、ヴェールも考えたことのない途轍もないことである。

そして海馬の迫力、そしてその言葉の魅力に長老たちは魅せられた。

「…人の輝きとは…こうも…」

そうして長老たちは

「ならば、お前さんの奴隷ということにでもしておこう。フェアベルゲンの掟では、樹海

の外に出て帰ってこなかった者奴隷として捕まったことが確定した者は死んだものとして扱う。

樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ。既に死亡と見なしたものを処刑はできない」

そしてハウリアを変えたこの男に懸けてみたくなつた。

「そして時が来たとき……お主たちさえ良ければまた立ち寄るが良い。その時はフェアベルゲン総出でその途轍もない夢を手伝わせてほしい。」

「それは貴様ら次第だ。話しは済んだ。ここにもう用はない。」

と海馬は立ち上がりそれに合わせ城之内たちも立ち上がる。

呆けるシア。

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか?」

「?さっきの話聞いてなかったのか?海馬が認めさせたんだぜ。」

「い、いえ、聞いてはいましたが……その、何だかトントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか……信じられない状況といえますか……」

「……素直に喜べばいい」

「ユエさん?」

「…セトに救われた。それが事実。受け入れて喜ばばいい」

「……」

シアは、ユエの言う通り素直に喜び、今の気持ちを衝動に任せて全力で表してみることにした。すなわち

「しゃぢよ〜う！ありがどうございませう〜！」

「ええい鬱陶しいわ！バカ娘!!」

「…社長！我等ハウリアは貴方と共に！」

「……海馬！海馬！海馬!!」

泣きべそを掻きながら絶対に離しません！とでも言う様にヒシツとしがみつき顔をグリグリと海馬の肩に押し付けるシア。

そして更に海馬へ対して尊敬の念を強めるハウリア。

「おいおい、海馬の野郎此処にもKC作ろうってか？」

「でも社長なら絶対にやるよ。だって有言実行をするのが社長だもんね。」

「海馬さんを思うハウリアの結束…凄いな。」

「…ん、セトは王様向き…良い王様になれる」

「ハウリアだけじゃなくて他の亜人族も魅せられてるね。」

巫人族たちから渴望や希望を見る目、猜疑心や敵対心など半々であったが海馬を中心として歯車は徐々に動き出していく。

そうして長老会議は終わり城之内たちは暫くフェアベルゲン周辺にて滞在することになったのであった。

明日を思う者たちとデュエルモンスターズ講座

フェアベルゲンの長老たちを説き伏せた海馬はフェアベルゲンから少し離れたところでテントを張らさせていた。

「これから十日は此処から動けん。ならばやるべきことはハウリア全体の連携とこれらの機材の説明、俺への連絡の仕方といったところか。」

「海馬さん。念話石を通信機みたいにつなげられました。問題だった長距離間での連絡は中継を挟むことで念話の距離を長くしました。」

「ご苦労。流石の仕事だ。では各々まずは通信機の説明からだ。男組は最初に女、子供は夕食の後にやる。」

と言いながら早速海馬は説明をしていく。

カムたちは海馬の説明をかみ砕きながら知識を吸収していく。

「さて俺たちは夕食の準備をするか!」

「そうだね!今日はまだ沢山あるあれを使おう!」

「もしかしてヒュドラもどきの?」

「おう!油もあるし何より肉汁が溢れる感触はたまんねえからな!とりあえず二種類や

るとするか!」

「それなら私は豚汁を作るよ!」

「僕も手伝うよ。」

「私もやりますう!」

「…克也の手伝う!」

そうしてヒュドラ肉を豚汁ようにいくつか切り落とし、そこから一口大に切る城之内と恵理。ユエも恵理に切り方を教わりながら一緒に作業する。

「やっぱりこうして見ると城之内君たち親子にしか見えないね。」

「そうだね。お父さんとお母さんの手伝いをする娘って感じだね。」

そしてヒータ、エリア、アウスには錬成で作ってもらったフォークで味が染み込むようにしてもらおう。

その間にワインと雪姫には大きめな袋に醬油、おろしにんにく、しょうが、オルクスで見つけた酒を入れてヒュドラ肉をどんどん加えて揉みこんでいく。

そして少しねかせている間に油を温める。

そして小麦粉と片栗粉を混ぜたものをまぶして余計な粉を軽く落とし揚げる。

「うっし!これであとはきつね色になったら完成だな!」

「ユエも油が跳ねると危ないから離れてようね。」

「…大丈夫。ちよつとの火傷なら治る。」

「ダメだよ。女の子なんだから肌は大切にしないと。」

それに僕たちの世界だとそういうのは隠さないといけないから今のうちに慣れとこうね。

後ユエが良くても僕も克也も怪我をしてほしくないのは同じだから…ね！」

「…ん！ありがとうエリ。」

そうして揚げたものをどんどん皿へと盛り付けていく。

途中味付けを変えて塩ダレや醤油味にチーズを混ぜたものなどハウリアの女性陣も加わり多種多様に変えていく。

「うわあああ凄いですう！色んな味付けが楽しめて楽しめる食事ですう！」

「でもこんなに沢山味付けが出来るのはシアさんたちが取ってきてくれた食材があったからだよ。」

「そうだね。シアさんたちが色んな食べれる野草や取ってきてくれたんだ。ハウリア族みんなのお陰だよ。」

「何にせよ食べたときの楽しみだね。」

とヴェールは次々とグラスを魔法で作っていく。その手際の良さは錬成師のハジメよりも上と言えるであろう。

「無駄な動作もなくこんなに大量に一瞬で作れるヴェールは凄いね！」

「ハジメも鍛練すればこれぐらいは出来るようになるよ」

要は慣れと魔力の質だよ。

少ない魔力でも純度が高ければ同じ魔法でも威力も持続性も変わるからね」

ハジメもレイカも磨けば光る原石だから教えがいもあつてウィッチクラフトへ勧誘したいぐらいだね」

そうして作る中で、城之内は

「こんなに作るなら米があると更にうめえよな！」

「そうだね。普通に鍋でやろうかな？でも人数もいるから大きいのを……」

「こんなやつで良いかな？」

とヴェールが特大の土鍋をいくつか用意をしていた。

「おお！これならいけそうだな！」

「克也さくん！これフェアベルゲンで食べてた穀物なんですけどこれも一緒にどうですか？」

「よしっ！でかしたシア！」

と土鍋に入れ水で良く研いでいき、

「火の扱いならあたしに任せときな！」

「綺麗なお水は私の方で用意するのでどんどんやりましょう！」

とヒータとエリアが見てくれ、そうして暫くすると炊けてきた。

それぞれに配膳していき海馬の講座も一段落したようだったので全員に配り終えたのを確認する。

「よし。じゃあ全員で食う前に海馬から一言頼むぜ！」

「ふうん。ハウリアたちよ。貴様らはまだ何も成しておらん。

未来を掴むために必要なのは意志と覚悟だ。

貴様らの成すことに意志は宿りやがては覚悟を問われることもある。

その日を迎えるまでは誰一人欠けることなど許さん！

まずは腹を満たし己の血肉としこれからを考える！」

「まあなんだ！海馬なりにハウリアに期待してるからこう言ってるだけだからな。興味がないやこんなことも言わねえしな！」

「凡骨め…余計なことを。」

「じゃあ一先ずはハウリアのこれからを祈って…乾杯！」

と城之内がいうと、一斉に食事にありつく。

「母様！このお肉口当たりが良くて美味しいです！」

「ふふ。そうね。後こっちはちよつとビリツとするけど程よい辛さが食欲をそそるわ。」

「モナさんこっちの作ってみた和風タレもいけますよ！」

「ありがとう香織さん。ハム…まあさつぱりした味わいに変わったわ。」

ゴクンそれにこのスープも野菜の甘さとシチューとは違った何種類もの栄養たっぷりでお肉の味をより鮮明にしてるわ。」

香織さんたちの世界は食が進んでるのね。」

「そうですね。味の追求って言う部分では世界的にトツプクラスだと思えます。僕たちの世界ではタコっていう独特な生き物を食べたり豆を発酵させた納豆っていう食べ物を食べたり色々あります。」

「そうなのね。シアもハジメさんたちの世界にいくなら料理も覚えないとね。今まで教えられなかったことも教えるわ。」

「母様〜！」

「うんうん。こういう光景を見られたのなら徹夜した甲斐があつたね。」

ハムハム…この唐揚げっていうの肉汁と様々な味があつて格別だ〜

それにご飯も進むし、豚汁っていうのも口の中をスツキリさせてくれるから手が止まらない〜

それにこれってこの間のチーズの味が染み込んでるやつだ〜濃厚で美味しい!」

「ハム……………美味しい……!」

「良かったぜ〜何せこんな種類を作るなんて初めてだからな。」

「でも克也器用だから全然いけるよ!あとこの野草の天ぷらもいけるね!」

「自然の味が染み込んでるみたいだぜ!」

「このグラス…中々の透明度。それに加えグラス自体に保温の魔法を掛けてあるのだろう。ワインにあつた最適な温度となり俺の喉を潤す…凡骨追加でこれも作れ。」

「あいよ!今日の立役者は海馬だからな!どんどん食ってくれ!」

と城之内は山芋の天ぷらを追加で作り更にはじゃがいもを薄く切り軽く揚げてポテトチップスを作り塩や野菜をふんだんに使ったタルタルソース風のタレを作りそれぞれに用意したテーブルへと運ぶ。

ポテトチップスは子供たちに人気で口一杯に頬張る姿は微笑ましい。

「…私も手伝う……!」

「伴侶あたしも手伝うぜ!にしてもこのじゃがいもただ揚げただけなのに口に運ぶ手が止まらないぜ!」

「もうヒータつたら。でもこのタルタルソース風のタレをに付けて食べるとさっぱりした味わいが広がりますね!」

「うん。じゃがいもの甘さに塩つけが加わり味を引き立ててるね！」

「箸が止まりませんね！唐揚げもタルタルと一緒にだとさらに止まらないです。」

「皆さん良い笑顔をされてますね。」

「これも社長や克也殿たちのお陰ですな。雪姫殿こちらのフェアベルゲンで20年ほど寝かせたワインはどうですか？」

「頂きますね。カムさんの行動もあつてハウリアは今を過ごせてますから貴方の父としての行動は感服するばかりです。」

「私は自らの出来ることをしたまでのことです。」

「しかしそれを出来ないものたちがいることも事実です。克也さんの父親、恵理の母親がそうでしたから。」

「深くは聞きますまい。しかし克也殿と恵理殿ならば大丈夫でしょう。ユエ殿を見てみるとハッキリ分かります。血が繋がらずとも心が繋がっているのならそれは家族と呼べるのではないのでしょうか。」

「そうですね。これからのあの子達の幸せを願って。」

「ハウリアの、娘の幸せを願って。」

カーン

そうして夕食が終わり海馬の講座も再び再開し片付けも終わった中でユエが

「…克也、デュエルモンスターズのこと色々教えて。」

「克也さん！私も教わりたいです！ハジメさんたちの世界にいくなら覚えておいた方が
良いと思いますう！」

「そうだな！ハジメや恵理も、詳しいから一緒に教えていくぜ！」

と言うと何処からともなく黒板とチョークが出現した。

「まずはデュエルモンスターズでは二人でデュエルをするのが普通だな。たまにタッグ
で組んで2vs2のデュエルもあるけど共通してるのは互いにライフポイントが決
まってるそれを0にした方の勝ちだ。」

「僕たちの世界では4000で固定されてるね。ライフを削るにはモンスターカードつ
ていうのを召喚して相手に攻撃するんだ。」

「…質問。モンスターカードは何でも出せるの？」

「そこは決まりがあつてね。レベル4以下のモンスターまでなら普通に出せるんだ。」

レベル5、6はモンスター1体の生贄がひつようでレベル7以上は2体必要だよ。」

「ん？恵理ちゃん、神のカードとかつて言うのと城之内君のモンスターって3体生贄に
してなかった？」

「あれはテキスト自体に書いてあるからで本来は2体で良いんだよ。克也のも三体生贄

じゃなくても平気だしね。」

「香織さん！この右上のマークはなんですか？」

「それは属性だね。確か六属性あって地、水、炎、風、闇、光属性って決まってるんだよ。」

「因みにレッドアイズが闇属性で」

「そういう枠組みだとするとあたしは炎属性だな！」

「私が水でアウスが地属性、ウインが風属性、雪姫が私と同じ水属性ですね。」

「私は光属性だね。」

「少し白い枠線のモンスターカードは通常モンスター、少し色が濃いのが特殊な効果を持ったモンスターカードで効果モンスターだね。」

「？恵理、克也のこの紫のカードは？あと青色のカードも？」

「それは儀式モンスターと融合モンスターだね！」

儀式モンスターはこの後説明する魔法カードっていうので決められたレベルのモンスターとかを生贄にして呼び出せる協力的なモンスターで

融合モンスターは決められたモンスター同士で融合っていう魔法カードとかで出せてどちらも攻撃力が凄かったり効果が強力なのが特徴だね。」

「ほえ、色んな種類があるんですね！」

「簡単に説明するとモンスターカードはこんな感じで下に種族が書いてあってそのモン

スターの、種族でデッキを組む人もいるね。」

「次に魔法カードだ。「発動」すればさまざまな「効果」を発揮できるデュエルに欠かせないカードだ！」

「魔法カードにも種類があつて、通常の魔法カード、装備魔法、永続魔法、速攻魔法、フィールド魔法そしてさっきの儀式モンスターを召喚するのに必要な儀式魔法の六種類だ！」

「装備魔法は城之内君がいつも使つてる剣とかがそうだよ。」

「基本的に自分のターンでしか使うことは出来ないんだけど速攻魔法はフィールドにセツトしてあれば相手のターンでも使えるんだ。」

「それって相手が自分を攻撃した時に使つて自分に有利に働くつてことですか？」

「シアさん正解。その通りなんだ。例えば相手の攻撃をしたときにモンスターを破壊する効果の魔法カードだったらモンスターへの攻撃を防ぐだけじゃなくて破壊も出来るから次のターンで自分に有利な状況を作れるんだ。」

「…適材適所で使うつてことならこっちの魔法と同じ！」

「んで最後に罠カードだ。これは最初に伏せてから相手のターンにならないと発動が出来ねえけど相手ターンでも発動ができるものなんだ。」

「罠カードはどれも強力なカードで様々な効果があるの。種類としては三種類あつて通

常、相手の攻撃に合わせて発動するカウンター罠、そして永続罠カードだね。」

「城之内君の使う罠カードだと悪魔のサイコロ、落とし穴系があるね！」

「大体はこんな感じだな。」

「成る程！それなら最初のターンにモンスターを召喚したらそのまま攻撃してしまえば良いんですね！」

「シアさん先行は攻撃が出来ないってルールがあるんだ。先行が攻撃できちゃうと不公平だからね。デュエルモンスターズは誰にでも楽しめるようになってるんだ。」

「…強力なモンスターが単純に強いわけじゃなくて魔法、罠カードで相手を攪乱してモンスターを強化していくのが良い？」

「それがデュエルモンスターズの醍醐味だな！」

「…奥が深い！」

「何だか難しそうですが面白そうです！」

「最初は中々勝てないこともあるけどそれでも相手とのコミュニケーションにもなるから結構盛んなんだ！」

「……カツヤとセトはどっちが強いの？」

「それは当然俺だっ！……っって言えりやあ良いんだがな」

「まあそうだね、まだ勝ってはいないからね。」

「当然の帰結だ。いくら凡骨が強くなろうとも俺のデュエルは進化を続ける。追い付けずとも不思議ではなからう。」

「社長！」

「海馬さんどうですか？」

「一通りの説明は奴らへした。後はこの短期間で仕上げる。訓練も今までは難度を上げていかねばならん。バカ娘はこれからは四倍だ。」

「社長、横暴ですう!?!」

「…そんぐらいしなげやヤバイってか？」

「慢心とは己を滅ぼすもの。この十日でどれだけ伸ばせるかが鍵となるだろう。」

「…シアは期待されてる…頑張れ。」

「あはは、シアさんはクエン酸とかそういう系を飲ませた方が良いかな？」

「そうだね。後は重りとか着けた方がいいかな？早速巻けるタイプの重りを作ろう。」

とそれぞれが強くなるために工夫を凝らす。

そんな中で城之内は海馬へ

「海馬！」

「なんだ凡骨。」

「異世界とはいえ海馬は海馬だからな。お前にデュエルを申し込む！」

「寝言は寝て言え。貴様では何度やろうと結果は変わらない。」

「んなもんやってみなけりや分からねえぜ！俺のデッキも強化してるしな。」

「ふうん、良かろう貴様の挑戦受けてやる。」

「おお！海馬さんと城之内君のデュエル！」

「これは凄い戦いになりそうだね！」

「…セトとカツヤのデュエル…楽しみ！」

「社長がんばってください！」

こうして海馬と城之内のデュエルが約束された。

対戦は翌日の昼からとのこと。

城之内はデッキの調整をし、海馬との対戦に備えるのであった。

一方のこちらはハイリヒ王国

いつも通り訓練を終えお風呂へと入った雫はいつもはポニーテールでまとめてる髪をそのままストレートに流し部屋へと戻ってくる。

「ふう…良いお風呂ね…香織たち…大丈夫かしら？」

この間無事に迷宮を出たという報告を受けた雫。

あれから数日経つが王国では勇者を持ち上げる声が多く雫は呆れていた。

「全く…光輝は調子に乗ってるし、相変わらず人の話は聞かないし…克也君ならそんなことないのに…」

　　と思いを思い浮かべる雫。

「やつほーシズシズ！遊びに来たよ！」

「雫入りますね。」

「リリイ！鈴も一緒ね。」

「わあ！シズシズ髪下ろしたんだね！すっごい綺麗だよ！」

「ありがとう。」

「これならカツヤンだって振り向く筈だよ！」

「もう鈴ったら。でもそうなら嬉しいわね。」

「所で雫？その…その子達はいつもそんな感じなんですか？」

　　とリリアーナが言う先にはふよふよと浮いては雫に抱きついていたりするうっすらとした存在…精霊だ。

　　雫は恵理からもらった他のパックを開けたら精霊がいて雫にとても懐いていた。

「ええ。この子たち私といるのが好きみたいだし、可愛いからね。」

　　と雫は今抱きしめているデュエルモンスターズの精霊を見ながら言う。

「可愛いよね〜そうだ！エリリンとカツヤンからはどう？」

「まだないわね。」

と言っていると端末にメールが届いていた。

「あら？もしかして香織からかしら？」

とメールを読むとフェアベルゲンへ到着したこと、ハウリア族と友達になったこと、異世界の海馬瀬人と出会い行動していること、フェアベルゲンがKCトータス支部になりそうなこと。

そして

「海馬瀬人と克也君のデュエル!？」

「それも明日のお昼過ぎからだね!」

「明日は確か訓練も何もないから大丈夫ね!」

「私もご一緒でも?初めて見る生のデュエルを拝見したいです!」

「勿論良いわよ!」

と雫、鈴、リリイは城之内のデュエルを観戦することにしたのであった。

雫の後ろではふよふよと浮いている雫に懐いた精霊、灰流うららが不思議そうに見つめるのであった。

熱きデュエリストたちの戦い 海馬 v s 城之内

翌日

起き上がった城之内は己のコンディションを確認する。

「うっし！いつも通りだな。…後はデッキを信じるだけだ。」

「んう…克也？」

「起こしちまったか？」

「ううん。いよいよだね。」

「ああ。今の俺があいつ相手に何処まで食らい付いていけるか…そんなもってあいつに勝つてやる！」

「大丈夫だよ。僕と一緒に考えた克也のデッキだもん。社長にだって勝てるよ！」

「ありがとな恵理。」

「克也こつち寄って」

「どうしたんだ？」

と恵理は城之内を正面から抱きつく。

「ん…克也の鼓動…暖かいな…」

「恵理。」

「頑張つて。勝てたらキスしてあげる。負けてもするけどね！」

「俺は俺のデュエルをするだけだぜ！」

と二人はテントから出ると朝食の用意をしているハジメと香織、ユエ、シアの姿を発見した。

「おはよう城之内君！良く眠れた？」

「ああ！バツチリだぜ！」

「…おはようカツヤ、エリ。頑張つて！」

「ユエもありがとな！」

「ユエは今日も可愛いね〜」

と二人してユエの頭を優しく撫でる。

「仲睦まじい光景ですね！」

「そうだね！親子のありふれた朝みたいかな？」

「ハジメ君いつかは私たちも…ね？」

「そうだね。子供…何人でもほしいね。」

「大丈夫！ハジメ君の赤ちゃんなら何人でも産むしハジメ君とレイカちゃん共々愛する

から…ね！」

「…ありがとう香織…」

(そうね。子供…か。城之内君との子供…いいなあ)

(…どうにかレイカにも女の子の幸せを味合わせてあげたいな。)

「まずは腹ごしらえだな！」

「そうだね！野菜たっぷりポトフとハウリア皆で作ったパンだよ！」

「ありがとな白崎！」

そうして海馬も朝のハウリアへ付ける鍛練から戻り食事を取る。

そして

開けた場所で二人のデュエリストが向かい合う。

「凡骨。逃げずにいたことは誉めてやろう。」

だが貴様は知るだろう。

どんな戦術を持ってしても越えられぬ壁があることを！」

「確かにてめえは途轍もないぐらい高い壁なんだろうな。」

けどそれぐらいで諦めるようなら真のデュエリストになるなんて夢のまた夢だろうよ。

俺はライフの尽きる最後まで戦い続ける！」

「ならば来い。貴様の相対する地上で最強のデュエリストであるこの俺に挑むが良い!!」

「ああ! いくぜ海馬!」

「デュエル開始の宣言をしろカム!」

「ハッ! デュエル開始イイイイイ!!!」

海馬 LP8000

vs

城之内 LP8000

今ここにいるのはKCを束ねる社長でも頼れるハジメたちの兄貴分でもない。

勝利を欲する二人の決闘者である。

一方のこちらはハイリヒ王国の雫の部屋

「いよいよ始まるのね」

「私こういうのビデオでしか見たことないから凄いワクワクするね!」

「私もです! 一体どんなデュエルになるのか」

「克也君…頑張つて!」

雫たちも恵理が設置したプロジェクトを通して端末の映写機能で壁に映像を投影し見守っている。

そして雫はこれまた懐かれた精霊、朔夜しぐれを抱きしめ応援をしていた。

しかしそれを邪魔するように勇者（残念）が雫の部屋へと向かっていた。

「折角の休みだし雫を誘って町へ行こう！雫だつてきつと嬉しいがる。それに城之内が香織を連れ去ったから元気もないし俺が何とかしないと！」

と勘違いをするその思考は一体どこから出てくるのか。

そうして雫の部屋へと続く曲がり道を行こうとすると

「勇者様！お待ちしておりました！さあ町へ行きましよう！」

と待つてましたと言わんばかりに女性メイドから給仕の仕事に就く女性たちが待ち構えていた。

「あの女の子たちの言った通りだね！さあ勇者様共に町へ行きましよう」

「いや俺は……」

と光輝雫を誘おうと来たことを言おうとする前に10数名の女性に囲まれながら向へと連れ去られるのであった。

雫の部屋へと続く通路では灰流うららや他にも儂無みずき、屋敷わらし、浮幽さくら、幽鬼うさぎが揃って立っていた。

勇者を雫たちから遠ざけようと各々勇者が日頃の疲れを労うという名目で手当たり次第に声をかけここを通ると吹聴しまんまと勇者を遠くへとやることに成功するので

あった。

「や…った！」

「成功〜」

「早く戻る〜」

「鈴たちのところへ戻ろう。」

「雫に撫でもらう…♪」

この通り幽鬼うさぎ以外は雫を気に入り幽鬼うさぎは鈴を気に入って最近はくっついていっていることが多い。

各々共通しているのは雫のことが鈴のことが大好きな点だろう。

なのでちよっかいを出す勇者ヘイタズラをしては雫から遠ざけるようにしてたまに雫から話題の出る克也に会ってみたいと最近は思っているようだ。

場面は戻り

「俺の先行！ドロー!!」

勢い良くカードを引く城之内。

「…俺はワイバーンの戦士を攻撃表示で召喚！」

と現れるのはワニのような剣と盾をもつ戦士。

ワイバーンの戦士

レベル4 通常モンスター

攻撃力1500 守備力1200

剣技にすぐれたトカゲ人間。音の速さで剣をふるう。

「更に永続魔法デンジャラスマシントYPE-6を発動！こいつの効果は次のターンのお楽しみだぜ！」

「ふうん。またギャンブルか」

「うっせ！俺はカードを二枚伏せてターンエンド！」

「最初の立ち上がりとしては堅実だね。」

「城之内君の伏せカードに対して海馬さんはどう出るのか。」

「俺のターン！ドロー!!」

と海馬は最新型デュエルディスクの立体化したデータを手に取る。

「俺はカイザー・ブラッドヴォルスを特殊召喚！」

と出てきたのは城之内たちの知るブラッドヴォルスが禍々しくなったモンスター。

「あれ？どうして社長はレベル5のモンスターを出せたんですか!？」

「恐らくは自分のフィールドにモンスターがカードがないときに特殊召喚ができるカー

ドなんだ！」

「カイザー・ブラッドヴォルスはモンスターが存在しない場合特殊召喚が可能！更にアサルト・ワイバーンを通常召喚！」

カイザー・ブラッドヴォルス

レベル5 効果モンスター

攻撃力1900 守備力1200

①：自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。②：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合に発動する。このカードの攻撃力は500アップする。③：このカードが戦闘で破壊された場合に発動する。このカードを破壊したモンスターの攻撃力は500ダウンする。

アサルト・ワイバーン

レベル4 効果モンスター

攻撃力1700 守備力1650

①：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、このカードをリリースして発動できる。自分の手札・墓地から「アサルトワイバーン」以外のドラゴン族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

「…一気に2体のモンスターを召喚した!？」

「これは不味いね。2体のモンスターは攻撃が通れば少なくともダメージになる！」

「やれカイザー・ブラッドヴォルス！ワイバーンの戦士を粉碎しろ！」

とカイザー・ブラッドヴォルスはその手に持つ独特な剣でワイバーンの戦士を両断する！

「クッ、ワイバーンの戦士！」

LP8000

←

LP7600

「更にカイザー・ブラッドヴォルスは戦闘でモンスターを破壊した時攻撃力を500上げる！アサルト・ワイバーンで凡骨ヘダイレクトアタック！」

「そうはさせるか！速攻魔法！スケープゴート！」

メエメエメエ

と四体の羊トークンが出現した！

スケープゴート

このカードを発動するターン、自分はこのカードの効果以外ではモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できない。①：自分フィールドに「羊トークン」(獣族・地・星1・攻/守0)4体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためには

リリースできない。

そしてアサルト・ワイバーンの攻撃で羊トークンが一体破壊される。

「…攻撃を凌いだ！」

「克也さんの場に羊トークン三体いるなら簡単に攻撃を通すのは難しいですかね？」

「貴様の浅知恵など俺には効かん！」

アサルト・ワイバーンは相手モンスターを破壊した時、自身を墓地へと送り手札 墓地よりアサルト・ワイバーン以外のドラゴン族を呼び寄せる！

手札より現れるクリスタル・ドラゴン!!

クリスタル・ドラゴン

レベル6 攻撃力2500 守備力1000

①：1ターンに1度、このカードが戦闘を行った自分ターンのバトルステップに発動できる。デッキからドラゴン族・レベル8モンスター1体を手札に加える。

「羊トークンがまた破壊されちゃう！」

「更に速攻魔法竜の闘志発動！特殊召喚されたドラゴンを選択し通常の攻撃に加え特殊召喚されたモンスターの数まで攻撃できる！目障りな羊どもをかき消せ！クリスタル・

ブレス！」

竜の闘志

①：このターンに特殊召喚された自分フィールドのドラゴン族モンスター1体を対象として発動できる。このターン、そのモンスターは通常の攻撃に加えて、相手フィールドのこのターンに特殊召喚されたモンスターの数まで、1度のバトルフェイズ中に攻撃できる。

羊トークンはクリスタル・ドラゴンの攻撃により破壊される！

「更にクリスタル・ドラゴンの効果でデッキより我が最強の僕を手に入れる！」

「まさかブルーアイズ!？」

「まだ通常攻撃が残っている！やれ！クリスタル・ドラゴン！」

「2500のダメージは結構でかい！」

「万事休すだよ!？」

「大丈夫！克也なら何とかするよ！」

「その攻撃宣言にトラップ発動！ピンポイント・ガード！こいつは墓地のレベル4以下のモンスターを対象に守備表示で特殊召喚できる！そしてこのターンそのモンスターは戦闘、効果で破壊されねえ！」

①：相手モンスターの攻撃宣言時、自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されない。

「ふうん、凄いだけ。俺はカードを伏せターンエンドだ。」

海馬LP8000 手札二枚

「一先ずは凄いだね。」

「海馬さんの場には二体の上級モンスター。この局面どう乗り越えるか」

（城之内君の腕の見せ所ね！）

「俺のターン、ドロロー！……良しデンジャラスマシンの効果発動！回れ！スロットマシン
！」

と大型のスロットマシンが回り出す。

「こいつは一から六までの数字で効果を発揮する！5が出ればお前のモンスターを一体破壊することができる！」

「成る程！止まった数字で効果が変わるんだ！」

デンジャラスマシンTYPE—6

自分のスタンバイフェイズ毎にサイコロを1回振る。出た目の効果を適用する。

1・自分は手札を1枚捨てる。

2・相手は手札を1枚捨てる。

3・自分はカードを1枚ドローする。

4・相手はカードを1枚ドローする。

5・相手フィールド上モンスター1体を破壊する。

6・このカードを破壊する。

そしてスロットが止まる出た数は：

「3か…」

「ふん残念だったな。」

「だが3の効果はカードをドローできる！」

とカードを引く城之内。

「行くぜ！俺は鉄の騎士ギア・フリードを召喚！」

鉄の騎士ギア・フリード

攻撃力1800 守備力1600

レベル4 効果モンスター

①：このカードに装備カードが装備された場合に発動する。その装備カードを破壊する。

「ギア・フリード！」

「ハジメ君を助けてくれたカードだね！」

「でもギア・フリードだけじゃ攻撃力は届かない……どうする城之内君。」

「いくらモンスターを召喚しようとも全て粉砕してくれる。」

「まあ慌てるなよ海馬。知ってるか？その昔、あまりの強さ故にデュエルモンスターズ界では敵なしと言われたソードマスターがいたってことを」

「なに？」

「もしかしてあいつ？」

「知ってるのヴェール？」

「まあ顔馴染みでまあ鍛練バカだよ。」

「ソードマスターの一太刀は海を裂き、天を割り、地を砕いた。」

その剣の前に1人として生きて帰って来れたものはいなかったらしい。

ソードマスターは自らに枷を課し、その剣を永遠に封印した。」

「何が言いたい？」

「その封印が今解かれる！魔法カード、拘束解除発動！」

この効果で鉄の騎士 ギア・フリードは拘束具の枷を脱ぎ捨てる！」

そうして現れたのは筋骨隆々の一人の戦士

「拘束解除は俺の場にいる鉄の騎士ギア・フリードを生贄にすることでデツキから現れ

ろ！

劍聖―ネイキッド・ギア・フリード！」

劍聖―ネイキッド・ギア・フリード

レベル7 攻撃力2600 守備力2200

このカードは通常召喚できない。「拘束解除」の効果でのみ特殊召喚できる。①：このカードに装備カードが装備された場合、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動する。その相手モンスターを破壊する。

雲サイド

「ギア・フリードの姿が変わった!？」

「あれは一体?！」

「それにしても中々の体付きですね。佇まいだけでも我が王国の騎士たちとは比べ物にならないですね。」

「所々南雲君たちが解説してくれるし二人のデュエルディスクと連動してるからカードの効果も分かりやすいわね。」

場面は戻る。

「ネイキッド・ギア・フリードに装備魔法稲妻の剣を装備!」

稲妻の剣

戦士族モンスターにのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップし、フィールド上に表側表示で存在する全ての水属性モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

「これで攻撃力が上がってダメージも大幅に与えられるね！」

「ネイキッド・ギア・フリードの効果はそれだけじゃないよ。」

「更にネイキッド・ギア・フリードの効果発動！装備カードを装備したとき相手のモンスター、一体を破壊することができる！俺はクリスタル・ドラゴンを選択！」

「さっせんぞ！トラップ発動！身代わりの闇！」

俺はデッキからモンスターを墓地へ送りネイキッド・ギア・フリードの効果を無効！「効果を無効化させちまったか！だがまだ攻撃は残ってる！ネイキッド・ギア・フリードでカイザー・ブラッドヴォルスを攻撃！」

ネイキッド・ギア・フリードの持つ稲妻の剣の閃光から放たれた一閃は瞬く間にカイザー・ブラッドヴォルスを切り裂いた！

LP8000

←

LP7000

「だが貴様のモンスターはカイザー・ブラッドヴォルスの呪いを受ける！」

攻撃力3400

←

攻撃力2900

「俺は魔法カード馬の骨の対価を発動！ワイバーンの戦士を生け贄にカードを二枚ドロ―する！」

「上手い！手札を補給して次のターンでワイバーンの戦士を破壊される前に馬の骨の対価でコストにした！」

「カードを二枚伏せてターンエンドだ！」

「多少はやるようになったか。だが俺のデュエルは貴様の先を行く。」

「俺のターン！ドロ―！」

「俺は手札のブルーアイズを見せることにより新たな僕を導く！」

「現れるブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン！」

「新しいブルーアイズ！」

「しかも手札のブルーアイズを見せることによる召喚！」

ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン

レベル8 攻撃力3000 守備力2500

このカードは通常召喚できない。手札の「青眼の白龍」1体を相手に見せた場合に特殊召喚できる。この方法による「青眼の亜白龍」の特殊召喚は1ターンに1度しかできない。①：このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り「青眼の白龍」として扱う。②：1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを破壊する。この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

「俺はカードを伏せ更に俺は命削りの宝札を発動！自分の手札が5枚になるようにドロし、自分のターンで数えて5ターン後に全ての手札を墓地に置く！」

「社長の手札が一杯増えましたあ!？」

「命削りの宝札：海馬さんの手札増強カード！」

「：セト手札がゼロだったのに一気に五枚も！」

(命削りの宝札の効果はアニメ準拠)

「魔法カード！ドラゴン目覚めの旋律を発動！手札一枚を糧にデッキから攻撃力3000以上、守備力2500以下のモンスターを二枚手札に加える！」

「つてことはまたブルーアイズか！」

「ふうん：俺はオルタナティブ・ホワイト・ドラゴンの効果を発動！自身の攻撃権を放棄する代わりに貴様のモンスターを破壊する！」

そうしてオルタナティブ・ホワイト・ドラゴンは翼をはためかせると粒子へと変わり
ネイキッド・ギア・フリードを、包み込み消滅させた。

「ネイキッド・ギア・フリードが！」

「魔法カードコストダウン！効果は貴様も知っている筈だ。」

「うん。コストダウンは手札を一枚捨てて発動ターンの間モンスターのレベルを2つ下
げることの出来る魔法カード。この場面なら」

「クリスタル・ドラゴンを糧に現れる！我が魂！ブルーアイズ・ホワイトドラゴン！」

「きやあああ！ブルーアイズですう！！社長の切り札が登場ですう！」

「…綺麗…おとぎ話の勝利をもたらす白龍みたい。」

「行けブルーアイズ！滅びのバーストストリーム！」

「この攻撃が通れば!?」

「させるかよ！トラップ発動！モンスターBOX！」

「モンスターBOX！コイントスをして指定した方を当てられたら相手モンスターの攻
撃力をそのターンゼロに出きるカード！」

「ホントならギア・フリードとコンボでブルーアイズを倒すつもりだったが仕方ねえ！

俺は裏を選択だ！」

「ふうん。懲りずにギャンブルか。」

そうして放られたコインは宙を舞い結果が出る。

「よっしや当たり！」

「悪運の強いやつだ。俺はカードを伏せ…ターンエンド。」

と二枚伏せカードを伏せる海馬。

「…カツヤ押されてる…」

「状況を見ると城之内君が劣勢だね。」

「でもまだデュエルは序盤どうなるかは分からないね！」

「行くぜ俺のターン！モンスターBOXの維持コスト500ポイントを払う！回れデーン
ジャラスマシン！」

城之内

LP7600

←

LP7100

と回転するマシン…出た目は…

「よっしやあ！5が出たってことは海馬のモンスターの破壊する！」

「デンジャラスマシンから電気が迸りオルタナティブ・ホワイトドラゴンを消滅させる。」

「カードを一枚伏せて更に俺は場のトラップ発動！墓荒らし!!こいつでお前の墓地のカードを頂くぜ！海馬！」

「なに!？」

「俺が選択するのは命削りの宝札だ!こいつで五枚ドロ―！」

「貴様だけドロ―することは許さん!トラップ発動!便乗!貴様がドロ―以外でカードを引いたとき俺はデッキから二枚カードをドロ―することが出来る!」

「手札が潤った!これなら」

「行くぜ海馬!レッドアイズの可能性を見せてやる!手札から融合を発動!」

「融合だと!」

「手札のレッドアイズ・ブラックドラゴンとアックスレイダーを融合する!覚醒せよ!黒き竜!新たな可能性をその刃に宿せ!」

「レッドアイズ・スラッシュドラゴン」

「あれは!オルクス迷宮で手に入れた新しいレッドアイズ!」

「…レッドアイズ…進化した!かっこいい!」

レッドアイズ・スラッシュドラゴン

レベル7 攻撃力2800 守備力2400

「真紅眼の黒竜」+戦士族モンスター

①:「レッドアイズ」モンスターの攻撃宣言時に自分の墓地の戦士族モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを攻撃力200アップの装備カード扱いとしてこのカードに装備する。②:自分フィールドのカードを対象とするカードの効果が発動した時、自分フィールドの装備カード1枚を墓地へ送って発動できる。その発動を無効にし破壊する。③:このカードが戦闘・効果で破壊された場合に発動できる。このカードに装備されていたモンスターを自分の墓地から可能な限り特殊召喚する。

「更に手札からドラゴンの秘宝を発動!ドラゴン族の攻守を300上げるぜ!レッドアイズ・スラッシュドラゴンでブルーアイズを攻撃!そして攻撃宣言時スラッシュドラゴンは墓地の戦士族モンスターを装備カード扱いにして攻撃力を200ポイントアップする!」

行け!スラッシュドラゴン!ダークメガスラッシュユ!」

「ちっ!凡骨にしてはやるものだ。」

LP7000

←

LP6700

「カードを伏せてターンエンド！」

城之内手札なし。

「これで城之内君が、有利になったね！」

「でも社長だつて負けません！きつと逆転しますう！」

「ふうん。凡骨貴様にしては中々やると誉めてやろう。貴様がレッドアイズの可能性を見せたのならば俺はその先の新たな力を見せてやる！」

「俺のターン！ドロオオオオ！」

「行くぞ！手札から儀式魔法、カオス・フォームを発動する！」

このカードによって手札のカオス・MAX・ドラゴンを墓地のオルタナティブ・ホワイトドラゴンを除外することで儀式召喚する！

貴様に味わわせてやろう。

完全なる敗北を！

光と闇の交わりしカオスの次元より現世へ姿を現せ！

儀式召喚！ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン！」

「ブルーアイズの儀式モンスター!?!」

「カオス・MAX・ドラゴンでスラッシュドラゴンを攻撃！混沌のマキシマムバースト

！

「モンスターBOXの効果！俺は裏を選択！」

とコインは宙を舞うが海馬の勢いか無情にも

「しまった!?!」

「貴様の悪運も尽きたようだな！やれ！」

とカオス・MAX・ドラゴンのプレスによりスラッシュドラゴンは消滅する。

LP7100

←

LP6100

「くっ！だがスラッシュドラゴンの効果発動！装備したモンスターをフィールドに呼び出す！ギア・フリードを守備表示で召喚！」

「ふうんレッドアイズの進化した姿であろうとカオス・MAX・ドラゴンの前では無意味！」

「これは…不味いね。完全に海馬さんペースだ！」

「克也…」

スラッシュドラゴンで反撃をした城之内を海馬はカオス・MAX・ドラゴンで粉碎しデュエルの主導権を握った。

果たして城之内の次なる手は！
次回へ続く。

熱きデュエリストたちの戦い 海馬VS城之内 2

遂に始まった海馬と城之内の戦い

一進一退の攻防を繰り返す城之内はレッドアイズを融合で強化しスラッシュドラゴンへと進化させるが海馬は圧倒的な攻撃力をもつカオス・MAX・ドラゴンを召喚し形勢は海馬へと傾いた。果たして城之内はどうするのか。

場面はハイリヒ王国

「どつちも引かない攻勢だね。でもスラッシュドラゴンを倒されたカツヤンのが不利かな?」

「そうね。あの攻撃力は並大抵のカードじゃ攻略出来ない…」
「克也さんはどう攻略をするのでしょうか。」

場面は戻り

「俺はカードを伏せターンエンド。凡骨貴様のターンだ。最もカオス・MAXを倒せるモンスターなどそういまいな」

海馬手札ゼロ

ブルーアイズ・カオス・MAXドラゴン

レベル8 攻撃力4000 守備力0

「カオス・フォーム」により降臨。このカードは儀式召喚でしか特殊召喚できない。

①：このカードは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない。

②：このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分の倍の数値だけ戦闘ダメージを与える。

「くっ！確かに俺のデッキにカオス・MAXドラゴンを倒せる攻撃力のモンスターはいねえ…どうする…」

「城之内君…」

「克也！諦めちゃダメだよ！勝負は何が起きるか分からないんだから！」

「恵理…ああそうだな！俺のターン…ドロー！モンスターBOXの維持コストを支払う！そしてデンジャラスマシンの効果発動！」

LP6100

←

LP5600

（頼む5が降りやカオス・MAXドラゴンを破壊して次に繋がられる！）

（とでも考えてるのだろうか所詮は凡骨の浅知恵）

そしてスロットは5を示す。

「出た目は5！カオス・MAXドラゴンを破壊だ！」

しかしデンジャラスマシンから迸る電気をもともせずカオス・MAXドラゴンは健在だ。

「バカな!?何でカオス・MAXドラゴンが破壊されねえ！」

「ふうん。カオス・MAXドラゴンは相手の効果の対象にならず相手の効果でも破壊されん！貴様の薄い戦術など通用せんわ！」

「なら！俺はマジックプランターを発動！モンスターBOXを墓地へ送りカードを二枚引くぜー！」

「便乗の効果で俺も二枚引く。」

「構わねえ！…今の手札じゃカオス・MAXドラゴンを倒せねえ。ここは耐えるしかねえ。」

「俺はモンスターを裏守備表示でセット、更にワームホールを発動！こいつでギア・フリードを次の俺のスタンバイフェイズまで除外する！…ターンエンド。」

「なす術もないか…俺の前にモンスターを守備表示にすることがどれだけ愚かなことか教えてくれる…ドロー!!」

「俺は再び手札のブルーアイズを見せ再び現れる！ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイトドラゴン！」

「またオルタナティブ・ホワイトドラゴンが!」

「そしてオルタナティブ・ホワイトドラゴンの効果を発動!そのセットモンスターを破壊しカオス・MAXドラゴンで凡骨にダイレクトアタック!」

しかしカオス・MAXドラゴンはピクリとも動かない。

「なにつ!?カオス・MAXドラゴン!なぜ攻撃せん!」

「わりいがお前のターンは終了してるぜ!」

「なに!」

と見るとデュエルディスクにエンドの表記が

「オルタナティブ・ホワイトドラゴンが破壊したカードそれはこいつだ!…ネコマネキング!こいつはモンスター、魔法、罠の効果で破壊されたとき相手ターンを強制的に終了させる!」

「チツ!オルタナティブ・ホワイトドラゴンの効果が仇となったか。」

(何とかなつたがまだ状況はこっちのが不利…)

おまけに海馬のフィールドには伏せカードが一枚とカオス・MAXドラゴンとオルタナティブ・ホワイトドラゴンがいる。

ならこのドローに掛ける!)

「俺のターン！ドロー！この瞬間ワームホールの効果で除外されていたギア・フリードがフィールドに戻る！」

（駄目だ。これじゃやつは攻撃力を上回れねえ…万事休すか…）

「それにしてもすごい攻撃力ですう！カオス・MAXドラゴンって無敵じゃないですか！」

「いや、シアさんデュエルモンスターズに無敵のモンスターはいないよ。必ず何処かしらに突破口がある。」

「そうだね。南雲君の言う通り。それにデュエルは最後まで何が起こるか分からないからね。」

（攻撃力…そういう前にも似たようなことが…確かビッグ5のタッグデュエルの時遊戯は…そうか！一か八かやってやる！）

「デンジャラスマシンの効果発動！」

そうして止まるのは…3

「コイツで一枚ドロー！」

「便乗で二枚ドローする。」

「更に強欲の壺を発動！更に二枚ドロー！」

「更に二枚こちらにも引かせてもらう。」

「……行くぜ海馬！カオス・MAXドラゴンはいやお前のモンスターはこのターンで全て破壊する！」

「寝言は寝て言え。ギア・フリードだけでどうするっていうのだ。」

「海馬さんの言う通りどうする城之内君……」

「……でもカツヤだつてハツタリで言ってる訳じゃない。」

「そうだね。克也なら本当に倒しちゃうからね。」

「まずはリトル・ウインガードを召喚！攻撃表示！」

「攻撃力では及ばないけどどうするのかな？」

（闇雲に出した訳じゃない……ならここからどうするかな？）

（多分サポートカードか何かしらで状況を打破する気がするね。レイカもそう思う？）

（ええハジメと同意見だわ。）

「ザコモンスターを出したところでカオス・MAXドラゴンの敵ではない！」

「まだだ！手札から魔法カード置換融合を発動！こいつは融合として扱える。フィールドの二体のモンスターを融合し、新たなモンスターを導く！」

そうしてギア・フリードとリトル・ウインガードは融合する。

「魔法の力を宿し更なる高みへ至りその剣で敵を切り裂け！融合召喚！」

「鋼鉄の魔法騎士ギルティギア・フリード！」

「ギア・フリードが新しい姿に!」

「そうか!ギルティギア・フリードなら…でもそれでもまだ…!もしかしてあのカードが手札に!」

「恵理ちゃんあのカードって?」

「克也が決闘王国から使ってるカードだよ。」

鋼鉄の魔法騎士ギルティギア・フリード

レベル8 攻撃力2700 守備力1600

属性が異なる戦士族モンスター×2

①:1ターンに1度、このカードを対象とする魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。その効果を無効にし、フィールドのカード1枚を選んで破壊する。

②:フィールドのモンスターのみを素材として融合召喚したこのカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。

③:iターンに1度、このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、自分の墓地から魔法カード1枚を除外して発動できる。このカードの攻撃力はターン終了時まで、このカードの守備力の半分アップする。

「コイツは戦いの儀の後に手に入れたカードだ!」

「だがカオス・MAXドラゴンには遠く及ばん。」

「慌てるなよ海馬。コイツがカオス・MAXドラゴンを倒す切り札だ！俺は手札から魔法カード発動！」

「右手に盾を左手に剣を！こいつで攻守逆転だぜ！」

「そうか！右手に盾を左手に剣をはフィールド全体に効果を及ぼす対象を選ばないカード。カオス・MAXドラゴンにも有効になる！」

「カオス・MAXドラゴンの弱点を突くとは……！」

「遊戯が言ってたんだ。どんなモンスターにだって弱点はあるってな！」

そうして攻撃力と守備力が入れ替わる！

カオス・MAXドラゴン

攻撃力4000 守備力0

←

攻撃力0 守備力4000

ギルティギア・フリード

攻撃力2700 守備力1600

←

攻撃力1600 守備力2700

「行け！ギルティギア・フリード！カオス・MAXドラゴンに攻撃！そしてこの瞬間ギア・フリードの効果発動！魔法カードを一枚墓地から除外することによりギルティギア・フリードの守備力の半分を攻撃力に加える！」

攻撃力1600

←

攻撃力2950

「これが通れば大ダメージだ！」

「させん！畏発動！ダメージダイエツト！このターン俺の受けるダメージは半分となる！」

「行け！ギルティギア・フリード！ソウルブレード！」

その一閃でカオス・MAXドラゴンは爆散する。

「更に！ギルティギア・フリードは場のモンスター同士で融合した場合二回攻撃が可能！オルタナティブ・ホワイトドラゴンへ追加攻撃！」

ソウルブレード2連！」

LP6700

←

LP4775

「凄い！本当に倒しちゃうなんて！」

「これが城之内君の凄さだよ香織。」

（上手いわ！城之内君！）

「これで俺はターンエンドだ！」

「二度ならず二度までもブルーアイズを破壊するとは…この屈辱許しはせんぞ。俺のターン！俺はモンスターをセット！更に二枚カードを伏せるターンエンド！」

海馬手札4枚

「随分消極的じゃねえか？海馬！」

「御託は良いさつさとしろ。」

（フツ俺の伏せたカードは破壊輪と防御輪…次の奴のターン破壊輪でギルティギア・フリードを粉碎してくれる。）

「俺のターン！ドロー！」

「デンジャラスマシンの効果！」

そうして今度は…3

「コイツで一枚ドロー！」

「便乗で二枚ドロー。」

「ギルティギア・フリードでセットモンスターを攻撃だ！」

「リバース発動!!破壊輪!そして防御輪。破壊輪でギルティギア・フリードを粉碎!そしてその攻撃力分を貴様のライフから削られる!」

「残念だったな!ギルティギア・フリードの効果!一ターンに一度コイツに対してモンスタ、魔法、罠の効果が発動したときその発動を無効にしてフィールドのカードを破壊する!」

破壊輪の効果は無効だ!そして俺の選択するのは便乗のカードだ!」

「くっ!」

「ギルティギア・フリード攻撃だ!ソウルブレード!」

「破壊されたジャイアントウイルスの効果により俺はデツキよりジャイアントウイルスを二体召喚!そして貴様に500のダメージを与える!」

LP5600

←

LP5100

「なら俺は一枚伏せてターンエンドだ!」

「俺のターン…ドロ…!…凡骨貴様に見せてやろう圧倒的存在を!!」

「ジャイアントウイルス二体を糧に目覚めよ青き炎の化身。ブルーアイズ・ホワイトドラゴン!」

「ブルーアイズ！」

「ここに来てブルーアイズ：難敵だね。」

「更に魔法カード龍の鏡（ドラゴンズミラー）を発動！」

「まさか：墓地のブルーアイズたちでの融合：アルティメットドラゴン!?」

「進化した最強ドラゴンの姿：その目で焼き付けるがいい！」

「ゆうううごおしようかん！」

「今こそ現れるがいい！」

「ネオ・ブルーアイズ・アルティメットドラゴン！」

「まさか!? アルティメットまで進化したって言うのかよ！」

「ぶ、ブルーアイズの首が三本もありますううう!?」

「…神々しい…綺麗。」

「手加減は無用！行くぞ！ネオ・アルティメットドラゴンは三回攻撃が可能！」

「なんだって!? それじゃあ…!?」

「ネオ・ブルーアイズの攻撃が直撃したら城之内君の負けだ！」

「ギルティギア・フリードを粉碎しろ！ハイパー・アルティメット・バースト！」

「まだだ！リバース発動！仲裁の代償！」

仲裁の代償

通常罨 相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手プレイヤーは相手の墓地に存在するカードを2枚選択し、選択したカードとこのカードをシャッフルしてモンスターカードゾーンにセットする。

自分は相手のモンスターカードゾーンからカードを1枚選択し、選択したカードがこのカードだった場合、相手ターンのバトルフェイズを終了する。その後、相手が選んだカードを相手のデッキの一番上に置く。

「まずコイツを海馬に渡す！そして墓地のカードを二枚選択して、モンスターカードゾーンにセット。その後俺が仲裁の代償を引き当てればバトルフェイズは終了。その後選んだカードは海馬のデッキの一番上に置く！」

と城之内は海馬へとカードを投げ渡す。

「ならば俺が選ぶのはドラゴン目覚めの旋律、命削りの宝札。最もこのターンで終わるのならば無用の長物であるがな。さあ自らの命運を選ぶが良い！」

「確率は1／3出たとこ勝負。」

「…当てられるかな…」

「「当ててるよ絶対！」」

「だって克也の勝負強さはここぞと言う時に発揮するんだから。」

—————

「カツヤン…当てられるかな？」

「でも当てないと勝敗が決まってしまいます。」

「当てるしかない状況…でも克也君なら当てるわ！」

—————

「……………俺が選ぶのは…そいつだ！」

と一番右のカードを示す。

ゆっくりとオープンされていくそのカードは……………

仲裁の代償であつた。

「悪運の強い…いや引き当てたと誉めるべきか。ふん！」
と仲裁の代償を投げ返す海馬。

「俺はカードを一枚伏せターンエンド。」

「一先ずは防いだけどアルティメットドラゴン…」

「さっきのカオス・MAXドラゴンで4000なのに今度は4500…圧倒的だね」
「…一進一退の攻防…これがデュエル…凄い！」

こうしてネオ・アルティメットの攻撃を凌いだ城之内。

クライマックスへと向けてデュエルは佳境を迎えるのであった。

最強と結末 海馬VS城之内 3

カオス・MAXドラゴンを撃破した城之内。

しかし空かさず海馬は進化したアルティメットドラゴンを繰り出す。

果たして勝負の行方は！

「ネオ・アルティメット…なんつう威圧感だ！」

「只でさえ攻撃力はカオス・MAXドラゴンより上で三回攻撃ができる。一体どうすれば…」

「社長すごいですう！」

「攻撃力4500。単純にして圧倒的な数値だね。」

「それに克也殿はどう攻略できるかですね。」

「克也君…頑張って」

城之内手札 一枚

「俺のターンドロロー！スロットマシンの効果！」

しかし示した数字は………6

「しまった!？」

スロットマシンは破壊されてしまった。

「スロットマシンの6はスロットマシンの破壊になつてる。」

「ふうん。いよいよツキも見放し始めたか。」

「まだだ！俺は永続魔法凡骨の意地を発動!」

凡骨の意地

ドローフエイズにドロートしたカードが通常モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で自分はカードをもう1枚ドロートする事ができる。

「ふうん。自覚があつたか。」

「うっせえ！今に見てろ！ギルティギア・フリードでネオ・アルティメットに攻撃!」

そして墓地の魔法を取り除くことで守備力の半分を攻撃力に加える!

そして天使のサイコロ発動! 出た目の数×100ポイントをギルティギア・フリード

へ加える!」

「出た目の数5以下ならギルティギア・フリードが負けるけど。6なら!」

「貴様に当てられるか。」

「どんなに低くたって俺は手繰り寄せてみせる!」

とサイコロが転がる。
そして出た目は

6??

「よつし！ギルティギア・フリードに600ポイント加える！これでネオ・アルティメットを越えたぜ！」

「すごいですう！土壇場で奇跡が！」

「奇跡というよりも結果を手繰り寄せたというべきかな？」

（流石城之内君！）

「いけ！ギルティギア・フリード！ソウルブレード！」

「ふうん。成る程。貴様の運はやはり侮れんということか。だがこの俺は更にその先を行く！」

畏発動！闇の呪縛！対象はギルティギア・フリード！

この効果で対象モンスターは攻撃力を700下げ表示形式を変えることはできない
！」

「しまった!?!」

「迎撃しろハイパーアルティメット・バースト！」

とネオ・アルティメットの攻撃がギルティギア・フリードに降り注ぎ破壊されてしまった。

城之内

LP 5100

←

LP 4500

「すまねえギルティギア・フリード……」

「ギルティギア・フリードが！」

「不味いよ！城之内君の場にモンスターがいないよ！」

「次のターンでネオ・アルティメットの攻撃で……」

「俺は手札から魔法カード一時休戦を発動！お互いに手札を引いて次の海馬のターン終了までお互いが受けるダメージは0になる！」

「一先ず首の皮一枚繋がったね。」

「……ん！でもまだカツヤのが劣勢。」

「カードを伏せてターンエンド！」

城之内伏せカード二枚。

「俺のターンドロ―！このターンダメージを与えられんなら…カードを二枚伏せターンエンド！」

次の貴様のターンがラストになるだろう！精々噛みしめてカードを引くが良い。」

「確かにこのままだとネオ・アルティメットの攻撃で…」

「いやまだわからないよ。あの伏せカード…そして凡骨の意地のカードがあるからね。」

「俺のターン！ドロ―！俺は凡骨の意地の効果を発動！今ドロ―したカードはアックスレイダー！」

もう一度ドロ―…ドロ―したカードは通常モンスターじゃねえが伏せカード凡人の施し発動！」

凡人の施し

デッキからカードを2枚ドロ―し、その後手札の通常モンスター1体をゲームから除外する。手札に通常モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。

「こいつで二枚ドロ―！そして手札のアックスレイダーを除外！」

「これで良いカードを引いたら…！」

「…俺はカードを二枚伏せてターンエンド！」

「なす術もないか。ならば終わりだ！俺のターン！命削りの宝札の効果で5ターン後に

全ての手札を墓地へと送る！

だがこのターンで終わるのならば関係ない！やれ！ハイパーアルティメット・バースト!!!」

「城之内君！」

「…克也がわざと一枚手札を残した理由…なら伏せたカードって！」

ネオ・アルティメットの攻撃が城之内へと降り注ぐ。

「…呆気ない終わりだったか…所詮俺の乾きを満たせるのは奴だけか。」

と海馬はアテムとの戦いでしか己の心を満たせないと背を向けるが、

「何終わった気になってんだ！海馬！」

そう言いいまだに立つ城之内は海馬へと言い放つ！

「俺はネオ・アルティメットの攻撃の時にこいつを発動させたのさ！」

「罨カード、レインボーライフ！こいつは手札を一枚捨てることによってこのターン俺が受ける全てのダメージを反転させてライフを回復出来る！つまり！」

LP4500

←

LP9000

「！克也さんのライフが一杯増えましたあ!!」

「そうか！城之内君も命削りの宝札の効果で次のターン手札を捨てなければいけないの
に手札を残したのはレインボーライフのコストのためだったのか!」

「城之内君そこまで計算して…凄いい!」

(……………やつべえええ。命削りの宝札のこと忘れてたぜええ。)

「(あくあの顔完全に忘れてたね。まあ言わないでおこう。)でもまだ喜ぶのは早いよ。
まだネオ・アルティメットは残ってるんだから。」

「…フハハハハハハ」

「何が可笑しいんだよ!」

「フツ。この俺を楽しませるとは…凡骨…いや城之内よ!」

「!」

「貴様がこの戦況を変えられるというのならば乗り越えて見せるが良い!俺は伏せてい
た命削りの宝札を発動!俺の手札は0!よって五枚ドロ!」

「カードを伏せてターンエンドだ!」

海馬

伏せカード二枚

「俺のターン！ドロー！俺も命削りの宝札の効果で手札を捨てなきゃいけない。俺は二枚目の凡人の施しを発動！」

「デッキから二枚ドロー！そして通常モンスターを捨てなきゃいけないえ、ガルーザスを除外！更に罠カード、テイクワンチャンスを発動！墓地のカードをランダムに選択して発動できる！引いたのは…強欲な壺!!そしてこいつを発動！」

「克也さん。手札0の状況からのドロー…どうなるんでしょうか？」

「ドローしたのは通常モンスター、ランドスターの剣士！もう一度ドロー！」

「…もう一回引ける！」

「通常モンスターランドスターの格闘士！もう一度ドロー！」

「…手札が増えていく。」

「克也の思いにカードが応えてるんだよ。」

「確かにそうだな！伴侶のデッキの奴ら伴侶のこと信頼してるからな。」

「あの決闘王国の時も私たちも恵理に付いていきましたがカードが克也様に力を貸す様子が分かりましたね。」

「そうだね。皆が皆、克也を勝たせようってその思いに応えてた。」

「克也さんの揺るぎない覚悟がそうさせたんです。」

「精霊からしたらとても名誉なことですからね。」

「通常モンスタースターランドスターの騎士！もう一度ドロー！」

通常モンスタースターランドスターの銃士！もう一度ドロー！」

「す、すごいですう！あつという間に手札が増えましたあ！」

「…ドローしたのは通常モンスターじゃねえ。」

（あと一枚、ネオ・アルティメットを倒すにはあのカードが必要だ…）

「そして墓地の置換融合の効果を発動！こいつを除外してレッドアイズ・スラッシュド
ラゴンをデッキに戻して一枚ドローする！」

（頼む！俺のデッキ…応えてくれ！）

「…ドロー!!」

そのドローに呼応するように風が吹く…

「…来た！いくぜ海馬！ネオ・アルティメットを打ち倒す！」

—————

「ネオ・アルティメットを倒すって…いったいどうやって？」

「…霏々あの人間が克也？」

「ええそうよ。どうしたのうらら？」

「凄いいい人間！私たち精霊が一番好きなタイプ〜」

「うん…力を貸したくなる人間…」

「そうだね。あんなに信頼されてるデツキが羨ましいね。」

「雫の思い人々私たちのご主人の伴侶〜」

「イイ人そうで安心!」

「あはは。カツヤン人気者だね。」

「は、伴侶つて…まだ早いわよ。まずは付き合うことからだしそれにもっと女の子らしくなつて克也君に誉めて貰いたいし…」

それから新婚旅行でしょ。綺麗な湖で告白して、指輪貰つて結婚式で……こ、子供は二人は欲しいし…

男の子なら剣道とデュエルを教える上げて女の子なら可愛い洋服を一緒にきて…それから」

「シズシズ既にそこまで考えてるんだ。」

「雫の頑張りを見てて気持ちいい。鈴も見習わないと!」

「私だつて頑張つてるよ!」

「雫には幸せになつてほしいですね。…と、戦況が動きますね。」

—————

「まずは蒼炎の剣士を召喚!」

「炎の剣士みたいなモンスター!」

蒼炎の剣士

効果モンスター

星4／戦士族／攻1800／守1600

アニメ版効果

このカード以外のフィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

このカードの攻撃力を1000の倍数だけダウンし、選択したモンスターの攻撃力を、この効果でダウンした数値分アップする。この効果は相手ターンでも発動できる。

また、フィールド上のこのカードが破壊された時、自分の融合デッキ・墓地から「炎の剣士」1体を特殊召喚する事ができる。

「そして魔法カード！ 集結ランドスター戦隊！ 手札のランドスターを可能な限り召喚する！ 来い！ ランドスターの騎士、剣士、格闘士、銃士！」

剣、銃、槍そして拳を構えた小さな戦士たちが並び立つ。

「いくらモンスターを増やそうがネオ・アルティメット前では無力！」

「確かにそうだ。ネオ・アルティメットの最強の攻撃力には敵わねえ。だがどんなに強大でも！」

手を取り合えば倒せねえもんはねえ！ いくぜ！ こいつがネオ・アルティメットを倒す切り札！」

「魔法カード！ブレイブアタック発動！」

「ブレイブアタック？」

「ブレイブアタックはモンスターを選択してフィールドに出てるモンスターの攻撃力を束ねて勝負が出来るカード！」

「ということは…ランドスターたちの攻撃力の合計は3500…蒼炎の剣士の攻撃力1800に加えると」

「こ、攻撃力5300ですう〜！」

「ネオ・アルティメットを越えるとは…」

「いけ！蒼炎の剣士！ランドスターたちの力を一つに！」

ランドスターの銃士以外は各々ネオ・アルティメットに向けて飛び立つ。

剣士の剣がネオ・アルティメットの左の首に突き刺さりヒビが入る。

騎士の槍が右の首へ入りまたヒビが入り

格闘士の拳の一撃が真ん中の首に命中しヒビが入る。

銃士の限界を越えた銃撃が身体全体に当たり胴体にヒビが入る。

各々が自分の仕事をしたことで破壊されるが全員城之内を信じ後を託す

そうして蒼炎の剣士が自らの剣に蒼色の炎を灯す！

「蒼炎の剣士の攻撃！蒼流炎絶斬！」

その一撃によりネオ・アルティメットは砕ける！

海馬

LP4775

←

LP3975

「す、凄い！ネオ・アルティメットを倒しちゃった！」

「これで海馬さんのフィールドにモンスターはいなくなっちゃった！」

と同時に蒼炎の剣士は破壊される。

「ブレイブアタックはバトルフェイズが終わると自分のモンスターが全て破壊される諸刃の剣。でも蒼炎の剣士の魂は受け継がれる！」

「蒼炎の剣士の効果！こいつが破壊されたときテツキ、墓地の炎の剣士をを特殊召喚できさる！来い炎の剣士！」

と現れるは昔から城之内を支えるカードの一枚で城之内の相棒。

「どうだ！海馬！強大な力でも力を合わせりやどんな壁でも乗り越えられるだろ！」

「フツ：貴様も決闘者の端くれ。ここまでやるとは：俺の予想を上回ったことは誉めてやろう。だが俺はこれで究極のドラゴンを呼び出せる！」

「なんだと!？」

「無窮の時、その始原に秘められし白い力よ

鳴り交わす魂の響きに震う羽根を広げ蒼の深淵より出でよ！」

「デイープアイズ・ホワイト・ドラゴン！」

デイープアイズ・ホワイト・ドラゴン

①：自分フィールドの表側表示の「ブルーアイズ」モンスターが戦闘または相手の効果で破壊された時に発動できる。このカードを手札から特殊召喚し、自分の墓地のドラゴン族モンスターの種類×600ダメージを相手に与える。

②：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のドラゴン族モンスター1体を対象として発動する。このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力と同じになる。

③：フィールドのこのカードが効果で破壊された場合に発動する。相手フィールドのモンスターを全て破壊する。

「……す、凄いな……綺麗なドラゴン……」

「ま、また新しいブルーアイズですう!!」

「……思わず見惚れちゃう……輝き……」

「デイープアイズ……一体どんな効果が？」

「ネオ・アルティメットを漸く倒したつつうのにまだ上があんのかよ。」

「更にこのモンスターが召喚されたことにより貴様は墓地のドラゴンの怒りを受ける
！」

ディープアイズの後ろに墓地に眠るドラゴン、アサルト・ワイバーン、クリスタルド
ラゴン、カオス・MAXドラゴン、ネオ・アルティメットドラゴンが並び立ち各々がブ
レスを放つ！

「クツうおおおおお！」

LP9000

←

LP6600

「更にディープアイズよ！ネオ・アルティメットの力を受け継ぐが良い！」

攻撃力4500

「折角ネオ・アルティメットを倒したのに！」

「城之内君ここからどうする？」

（城之内君…）

「へへっやっぱすげえ海馬！それでこそ俺が越えたいと思う決闘者だ！」

「当然だ。地上で最強の決闘者なのだからな。」

「まだ、勝負は付いてねえ！ここからが正念場だ！ここからはデュエリストパワー全開だ！おれはターンエンドだ！」

ネオ・アルティメットを結束の力で見事破壊した城之内。

しかしディープアイズという壁が更に立ち塞がる。

この高い壁をどう攻略するのか！

次回に続く。

熱き男たちの戦いの終幕 海馬 v s 城之内 4

ネオ・アルティメットを撃破した城之内だが海馬は更にディープアイズを繰り出してきた。

果たして勝負の行方は？

「俺のターン！ディープアイズで炎の剣士を攻撃！」

炎の剣士のみがフィールドにいる城之内に防ぐ術はなく炎の剣士は破壊される。

城之内

LP6600

←

LP3900

「すまねえ炎の剣士……」

「更なる場の罨発動！牙竜転生！除外されているブルーアイズを手札へ戻す！カードを伏せてターンエンド。」

「除外されてたブルーアイズが手札に！」

「海馬さんのフィールドにはディープアイズと伏せカードが二枚。対して城之内君は

…

「手札、フィールドともになにもない。」

「…このターン引くカードが重要。」

「いくぜ！俺の…：ターン！！ドロー！」

「！こいつに掛ける！」

「魔法カード、運命の宝札発動！」

「運命の宝札ですかあ？」

「運命の宝札はサイコロの出た目の数デツキからカードを引いてその後にもその出た目の数デツキからカードを除外するカード。克也のデツキの中でも最強のドロー増強カードだよー！」

「ここでドロー増強カードとはな。」

そうしてサイコロが転がる…：出た目は

「うっし！出た目は6！カードを6枚ドロー！そしてデツキから6枚除外する！」

「ここが勝負の分かれ目…：どうなる！」

「さらに早すぎた埋葬発動！800ライフを払いレッドアイズを特殊召喚する！」

L P 3 9 0 0

↑

LP3100

「レッドアイズ！でもディープアイズには届かない…」

「そして死者蘇生発動！来い炎の剣士！」

「今更炎の剣士を出したところで状況は変わらん！」

「まだだ！いくぜ俺は手札からこいつを発動！力を貸してくれ」

「ヘルモスの爪！」

「ヘルモスの爪!?!」

「こいつは場のモンスターと合体して装備カードにすることが出来る！俺はレッドアイズとヘルモスの爪を合体！」

「…青き龍は勝利をもたらす。しかし赤き竜がもたらすのは勝利にあらず、可能性なり…か。」

「レッドアイズの新たな進化…！凄いい！」

「来い！真紅眼の黒竜剣!!」

真紅眼の黒竜剣（レッドアイズ・ブラックドラゴンソード）

レベル7 攻撃力2400 守備力2000

このカードは「ヘルモスの爪」の効果で自分の手札・フィールドのドラゴン族モンスターを墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

①：このカードが特殊召喚に成功した場合、このカード以外のフィールドのモンスター1体を対象として発動する。このカードを攻撃力1000アップの装備カード扱いとしてそのモンスターに装備する。

②：このカードの効果でこのカードを装備したモンスターの攻撃力・守備力は、お互いのフィールド・墓地のドラゴン族モンスターの数×500アップする。

「真紅眼の黒竜剣!?!」

「レッドアイズが新たな姿に!」

「一体どんな効果が!」

—————

「そして炎の剣士に装備!真紅眼の黒竜剣は装備したモンスターの攻撃力を1000アップする!さらにお互いのフィールドと墓地のドラゴン属モンスターの数×500アップする!」

「確か海馬さんのフィールド、墓地のドラゴンは5体、城之内君はレッドアイズの1体…
という!とは!」

(装備されたことで攻撃力が2800になってさらに3000アップ…)

炎の剣士

攻撃力5800

「こ、攻撃力5800ううう!?」

「行け!炎の剣士!ディープアイズに攻撃!闘気炎斬剣!」

炎の剣士の一撃がディープアイズを切り裂いた!

「やはり越えてきたか…」

「見たか!これでディープアイズは…」

と城之内がフィールドを見るとそこには

「バカな!?!どうしてブルーアイズが!」

ディープアイズの代わりにブルーアイズが召喚されていた!

「炎の剣士の攻撃時俺は罨カード竜の転生を発動した。これによりディープアイズを除外し、手札のブルーアイズを特殊召喚した。」

「なら炎の剣士でブルーアイズを攻撃!」

「甘い!速攻魔法コマンド・サイレンサー!」

とトーテムポールのような物体が出現し低周音を響かせる!

「コマンド・サイレンサーにより貴様の攻撃命令は炎の剣士には届かない!そしてバト

ルフエイズは終了し、お互いはカードをドロウする。」

「くそつ躲されたか！俺は伏せカードを二枚セット！ターンエンド」

「ダメージは与えられなかったけどディープアイズはフィールドから離れた！」

「でもどうして海馬さんはディープアイズを除外したんだろ？コマンド・サイレンサーだつてその時に発動してたら…」

「ブルーアイズじゃないといけない理由があるつてことだね。」

「俺のターン！…俺はロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者を召喚！そして魔法カード滅びの爆裂疾風弾を発動！」

「ブルーアイズの必殺技と同じカード!?!」

「このターンブルーアイズは攻撃できんがその代わりに城之内貴様のフィールドのモンスターを全て破壊する！」

「なんだと！」

「そうか！このためにブルーアイズを召喚したんだ！」

「なぎ払え！滅びのバーストストリイイーム!!」

「そしてロード・オブ・ドラゴンで攻撃！」

「その攻撃の前に罠発動！レッドアイズ・スピリッツ！墓地のレッドアイズを特殊召喚する！」

「攻撃は中止だ。ターンエンド。」

「俺のターンドロロー…俺は罫カードメタル化魔法反射装甲を発動！」

「こいつでレッドアイズの攻守を300ポイントアップ！そしてバトルするとき相手の攻撃力の半分を加える！行け！黒炎弾！」

とブルーアイズへと黒炎を放つレッドアイズ。

「クッ！」

LP3975

←

LP2775

「カードを伏せてターンエンド！」

「どっちも引かない一進一退のデュエル…」

「どっちが勝つか全くわからない…」

「社長おおお！頑張れえええ！」

「…むっ…カツヤ！頑張れ！」

「ふっバカ娘が…だがこのデュエルを制するのは俺だ！」

「俺のターン！ドロロー！」

「俺は装備魔法D・D・R（デイファレント・デイメンション・リバイバル）を発動！」

「手札を一枚捨て除外されているモンスターを呼び出す！ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン！」

「更に黙する死者を発動！墓地のブルーアイズを守備表示で召喚！」

「二体のブルーアイズ！」

「そして俺は新たなブルーアイズを呼び出す！」

とブルーアイズ二体は飛翔し、光が覆う！

「新たな進化を見るがいい！融合召喚！」

ブルーアイズ・ツイン・バースト・ドラゴン！」

「融合なしでの融合召喚!?!」

ブルーアイズ・ツイン・バースト・ドラゴン

レベル10 攻撃力3000 守備力2500

「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

このカードは融合召喚及び以下の方法でのみ特殊召喚できる。●自分のモンスターゾーンの上記カードを墓地へ送った場合にEXデッキから特殊召喚できる（「融合」は必要としない）。

①：このカードは戦闘では破壊されない。

②：このカードは1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃できる。

③：このカードの攻撃で相手モンスターが破壊されなかったダメージステップ終了時に発動できる。その相手モンスターを除外する。

「ツイン・バースト・ドラゴンはフィールドのブルーアイズを墓地に送ることで特殊召喚することが出来る！」

「行けツイン・バースト・ドラゴン！レッドアイズを攻撃！滅びのツイン・バースト・ストリーム!!」

「畏発動！悪魔のサイコロ！」

「悪魔のサイコロ：出た目の数相手の攻撃力を下げる」

「4以上ならレッドアイズの攻撃力が勝る！」

出た目は…3！

レッドアイズは黒炎弾を放ち閃光が包む

「相討ちか！」

しかしそこには無傷のツイン・バースト・ドラゴンが！

「ツイン・バースト・ドラゴンはモンスターとの戦闘では破壊されん！」

「ツイン・バースト・ドラゴンの追撃！」

「ぐっ！」

LP3100

←

LP400

「これで終わりだ！ロード・オブ・ドラゴン！」

「この攻撃が通つたら！」

「毘発動！戦線復帰！こいつは墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚する！もう一度頼むぜ！レッドアイズ！」

「凌いだか。ならばカードを伏せ、ターンエンド。」

「城之内君のライフがあとちよつとに!？」

「…でもまだレッドアイズがいる！」

「それでもツイン・バースト・ドラゴンは戦闘では破壊できない…」

(城之内君：負けないで！)

「まだ諦めねえ俺のライフはまだ尽きてねえ。」

「奴のここぞという時の運は侮れん。この伏せカード…杞憂であれば…」

「こいつに掛ける！…ドロー!!!」

と勢いよく引いた城之内。

「…いくぜ！最後の賭けだ！俺は時の魔術師を召喚！」

と現れるは城之内を幾度も勝利に導いた元祖ギャンブルカード、時の魔術師。

「時の魔術師！克也のギャンブル最強のカード！」

「そして魔法カード戦士の生還！こいつでギア・フリードを手札に加えてフィールド魔法！フュージョンゲート！こいつは融合素材を除外することで融合モンスターを場に出すことが出来る！俺は時の魔術師と効果モンスターギア・フリードを除外！現れる！時の魔導士！」

と現れたのは時の魔術師がすこし立派な姿になったモンスター！

「あれは！スラッシュ・ドラゴンと同様オスカーの遺したカード！」

「時の魔術師との融合！」

「確か時の魔術師と同じタイムマジック…そして当たれば相手のモンスターを全滅させてその合計の半分のダメージを与えるカード。レッドアイズとの攻撃を合わせれば！」

（城之内君が勝つわ！）

時の魔導士

レベル5 攻撃力2000 守備力1900

「時の魔術師」＋効果モンスター

①：1ターンに1度、このカードが融合召喚されている場合に発動できる。コイントスを1回行い、裏表を当てる。当たった場合、フィールドのモンスターを全て破壊し、相

手は表側表示で破壊されたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分のダメージを受ける。

ハズレの場合、フィールドのモンスターを全て破壊し、自分は表側表示で破壊されたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分のダメージを受ける。

「時の魔術師に魔導士かく久々に見たねえ。自由気ままな奴なのにちゃんと従ってるなんてね。」

「で、でもまだ当たるかはわからないですう！」

「確率は2分の1」

「行くぜ！タイムルーレット!!」

と針が回転し出す。

クルクルクルクルクル

そして針の回転は遅くなり……

止まった。

針は……………当たった!!!

「行くぜ! タイムマジック!!」

「タイムマジック!!!」

の掛け声とともに時の魔術師の力によりツイーン・バースト・ドラゴン、ロードオブ・ドラゴンが消え去る。

LP2775

←

LP675

「やったああああ!!」

「戦闘破壊がでなくても効果でなら破壊できる…うん!流石克也!」

「トドメだ!レッドアイズ!黒炎弾!!」

とレッドアイズの黒炎弾が放たれ

「社長!!」

「畏発動!威嚇する咆哮!!このターンの攻撃を封じる!」

「防がれちまった。やっぱすげえぜ…俺はターンエンドだ!」

「はああああ社長が防ぎました〜」

「どちらも後一撃で決まる!」

「…セトも手札がない…ドローで決まる…!」

「昂る…デュエル…久しく忘れていた熱き鼓動…貴様とのデュエル悪くなかったと言お

「……こい！」

「貴様の全力しかと見届けた！ならばこちらもそれに答えるまで！」

「ブルーアイズ！滅びのバアースト・ストリイイイーム」

白き龍の一撃が黒き竜を貫く…

LP400

←

LP0

デュエル決着!!!

城之内vs海馬

勝者 海馬瀬人!!!

純愛Happiness

海馬と城之内のデュエルは海馬の勝利で幕を閉じたのであった。

「勝者社長！」

「負けちゃった……」

「お、お二人ともすごかったですうう!!」

「……ううカツヤ負けちゃった……」

「ユエ。デュエルはどちらかが勝者となつて敗者が決まる。でも負けたからつてそこで終わる訳じゃない。

克也も今回のデュエルで社長という強敵と戦えた。

それは克也の経験になる。またひとつ真の決闘者への道を進んでいったと思う。

命のやり取りとは違って何度だつて戦つて強くなつていける。それがデュエルモンスターズの面白さなんだ。」

「そうですね。間近で見えて社長と克也殿の思いのぶつかり合いはとても興奮しました。克也殿や社長の世界のようなぶつかり合い、そこに生まれる何かがこのトータスを良くすることに繋がると確信しますな。」

「ホント凄いな。時の魔術師もだけど気難しいネイキツドのやつも従う…いや共に戦うってのは人柄を知っている分より凄さが分かるね。」

「ヴェールもそう思うってことはやっぱり城之内君は凄いなだね。」

「そうだね。こんな凄いなヴェールを見たのは良かったよ！」

「本当ですね。手に汗握るヴェール…いつかは我々もやってみたいですね。それにハウリアだけじゃなくて他の子達も気になるみたいですね。」

とモナが言うとは何時の間にかやら集まっていた他のフェアベルゲンの部族たちも海馬、城之内のヴェールを見てそれに魅せられていた。

「城之内。貴様とのヴェール中々に俺を昂らせた。貴様のことだ高々一度負けただけで這い上がれぬなどとは言わさん。」

「ああ、負けたのは悔しいがそれだつて俺は全力だった。悔いはねえ。それにまだまだ先は長えがそれでも真の決闘者を目指すんだ。俺は諦めねえさ。」

「ふうん。まあいい。城之内。決闘者にとつて最大の敵は己の心に潜む『恐怖』という魔物に他ならない。その恐怖を乗り越えるか折り合いを付け前に進むか。それが大事だ。」

「ああ！サンキュー。」

「恐怖…か。」

レイカはハジメの攻撃的な部分が多少強く物事も力づくで解決しようとすることが多い。そんな自分を城之内に嫌われたくないという恐怖もあり考える。

「…レイカ？大丈夫だよ。」

「ヴェール？」

「レイカは一人じゃないよ。ハジメもいるし香織、ユエ、シアそれに克也と恵理もいる。この先色んなことがあるかもしれない…でもね。恐れることはないんだよ。なんとつてこの大魔法使い様がいるんだから！」

と両手を組み胸をはるヴェール。

「うん…ありがとうヴェール。」

「レ〜イカちゃん♪」

と香織がレイカの背後から抱き付く。

「わっ！か、香織？」

「大丈夫だよ。例えば世界が敵になっても私は…うん私たちはレイカちゃん、ハジメ君の味方だよ。だから不安なことがあったら言っつてね。力になるから。チュツ」

「香織…ありがとう♪」

「…レイカさん！私も微力ながら力になります！ハジメさん、レイカさん、香織さんは絶対守ります！」

「…ん！私たちもいる！」

「克也…あとちよつとだったね。」

「惠理か。ああ俺もまだまだだ。もつと戦術を磨かねえとな。」

「でも克也格好良かったよ！次は勝とう！」

「さてハウリア共！昨日の続きをする。トータス支部を担うのだ。生半可なことでは許

さん！」

「…ハッ!!!!」

「バカ娘！貴様は昨日の続きだ。重りを付けたままユエと模擬戦だ。魔法を使った戦闘に慣れろ！」

「じゃ、社長？この重り昨日より重い気が？」

と両手両足に付けた腕輪型の重りを指しながらシアは言う。

「昨日のは35キロだったが5キロずつ増やしている。いつも最高のパフォーマンスを出来るものなど一握り。貴様は最低値をあげねばならん。」

「そ、そんな〜」

「つべこべ言わずにやらんか!!!!」

「社長のおに〜、鬼畜〜」

「…シア早くやる！」

「ゆ、ユエさん!? 引きずらないでくださいいいい〜」

とシアを引つ張りながら開けた場所へと移動するユエ。

「僕は銃の整備と弾丸の生成、あとは魔道具の開発かな?」

「魔道具のことなら任せて〜」

「ありがとうヴェール!」

「私もハジメ君の作ってくれた弓にもっと慣れないとね。」

「克也と僕は他の人たちとのコミュニケーションかな?」

「その後は訓練だな。」

「伴侶の修行なら手を貸すぜ!」

「恵理の霊術の修行も並行してやりましょう。」

「克也も恵理も筋が良いから鍛え甲斐があるから気合が入るね。」

「そうですね! 克也さん、恵理はどんどん強くなりますから教え甲斐がありますね。」

「恵理も、克也殿もまだまだ強くなれます。」

そうして各々が目的に向かい歩みを進めるのであった。

—————

「負けちゃったか…途中まで良かったのに〜」

「でもこちらと違いまた挑戦出来るというのは心踊りますね。ハイリヒ王国で、ゆくゆくはトータス全体で広めたいですね。」

「デュエルつてドキドキするね！カードを信じてそれに応える。良いデュエルだったね。」

「私も幽鬼うさぎと一緒に戦いたいな〜」

とリリアーナ、鈴が話している。

……

（克也君…格好良かった…カードを引く仕草もどんな状況も諦めずに前を向いてカードを信じてどんな強敵も勇気をもつて向かって…男らしい横顔…心臓が…ドクンと跳ねて…益々惚れちゃうわ…）

「雫…どうしたの〜」

「雫は伴侶さんの顔を見て興奮なさってるんですわ！」

「伴侶凄いい格好良かった！」

「雫…幸せにしてくれる優しい人そう！」

「ナデナデ気持ち良さそう…」

と灰流うらら、朔夜しぐれ、夢無みずき、浮幽さくら、屋敷わらし、はそれぞれ言う。

「あはは、シズシズ顔真っ赤だよくカツヤンに惚れ直しちゃった？もしかして濡れ

「ちゃった…なあってね。」

「思い人の格好良い所を見られたんですから当然だと思えますよ。」

「ふっふっシズシズかつわいい!!うりゃ!」

と鈴は可愛いスカートを履いている雫へスカートめくりをする。

「おお!黒のスケスケ…シズシズエロ可愛くなってるねえ〜」

「こ、こら!鈴!」

「ありやま怒っちゃった……」

と鈴が言うがスカートをめくった時何だか女の子特有の甘い匂いが広がった気がするということ、下着が妙に透けてる気がしたのは鈴の気のせいにすることにした。

「ちよっとお手洗い行ってくるわ…」

「と言い部屋を一度出る雫…」

「……一人だと心配〜」

とふよふよと雫の後を付いていく灰流うらら。

部屋から往復で5分程の道。

………そうして雫が戻ってきたのは部屋を出て30分程してからであった。

灰流うららに事情を聞いた面々だか雫との秘密〜と教えてはくれなかった

—————

その夜城之内はベッドで恵理と寄り添い二人きりで今日のことを振り返る。

客観的に振り返りながらも楽しくデュエルが出来たことは城之内にとつて得難い経験になった。

「わりいな恵理。勝つて言ったのに」

「そんなことないよ。今は社長のが強かったってこと。でも克也なら次に活かせるでしよっ。」

「ああ勿論だぜ！次こそは勝つぜ！」

「うん…それに克也のデュエルしてる姿は格好良い。僕いつも克也のデュエル、ドキドキワクワクして楽しいよ。」

「恵理。」

「こんな僕を暗闇から引つ張り出してくれて…色々な景色を、克也のデュエルを通して見て僕の心も晴れやかになった。」

「そんな克也の全部が…好き。僕の全部を克也に捧げて…いつまでも寄り添いたいって思うのは克也だけ…」

と城之内の身体へと寄りかかる恵理。

「恵理」

「やっぱり…重い…よね」

「いや、やっぱ俺も恵理がいねえと駄目だ。だからこれからも一緒に歩いてこうぜ…人生つつう長い道をよ。」

「うん…克也 大好き?？」

と二人の空間を作るのを窓の外から浮かぶ五つの影

「恵理のやつ幸せそうだな。」

「そうですね。恵理様と克也様とても良い雰囲気です。」

「見てるこつちも癒されるね。」

「克也さん、恵理の幸せを守りましょう。」

「ええ。それが我々とマスターと約束したことです。それに辛いことを経験した恵理には幸せになってほしい。」

「そうだな！ 伴侶なら恵理を任せられるな！」

四人の霊術使いとブリザード・プリンセスは幸せそうに喋る二人を見守るのであった。

フエアベルゲンにて二人は崇め奉られる

二人のデュエルから数日

あれから各々自主的に励みハウリアたちは変装も上手く出来るようになり人族にのようになり町での諜報活動も出来るようになった。

更にはクナイや手裏剣、けむり玉、まきびしといった物をハジメが作りだし製造の仕方も教え、狭い所での戦い方や耳の良い彼らのアドバンテージを最大限に活かせるようになった。

ヴェールに師事するようになりイメージを持ち錬成し形を作り出すのに掛かる時間は前よりも半減するようになった。

技能も合わせて高速リロードの精度も上がりヴェールも筋が良いと褒めていた。

そして香織はというと

「はいっ……こうやってパンはイースト菌つていうものと混ぜ合わせるとふんわり柔らかく焼き上がります。菌の保存の仕方は前に教えた通りにすれば持ちます！」

それから醤油は簡単な工程になるようにハジメ君と考えて

まず昨日から乾燥キノコと乾燥させたトマトを浸した水へ鶏の胸肉を一部残してミ

ンチにします。

そしたら鍋に火をかけて沸騰させます。

沸騰したら麻布にこして出汁を取ります

そして残つてるミンチにフェアベルゲンで取れたメープルシロップを加えて混ぜたら火で炒めます。

色が茶色くなつたら鍋にお塩とお酒と出汁を入れます。

これで醤油の完成です！

本来の醤油の作り方はフェアベルゲンの方たちに教えたやり方で結構根気のいる作業になると思いますがこの作り方も覚えておけば即席で作れるので足りないときなどに役立ちます！

フェアベルゲンで取れるキノコや味付けにも合うと思います。」

フェアベルゲンの女性陣と力のある男性陣に醤油、味噌といった地球の調味料を教え
ていた。

更にはにんにくを使ったガーリックソースや爽やかな和風ソース、豆腐の作り方や豆腐を使った豆腐ステーキ、メンチカツ、コロツケ等地球の料理を作つてフェアベルゲンの住人たちに食べさせていた。

その甲斐もあつてかフェアベルゲンの大半は社長を支持するものたちが増え更には

目標のために変わろうとするハウリアに触発され訓練に精を出す若者たち。

「にしても白崎の奴随分フェアベルゲンに馴染んだよな。」

「そうだね。というか香織の突撃癖も少し治ってきたように思えるね。」

「そんなにだったのか？」

「まあね。あつちでは南雲君に所構わず構ってほしくて周りのことなんかとお構いなしで強引に行ってたね。雫が苦労するのも分かるよ。」

「もう恵理ちゃんったら…でもそうだね。あつちの時の私はハジメ君の苦労を知ろうとしないで自分の気持ちばかり押し付けちゃって

…ハジメ君を孤立させちゃってハジメ君は将来のために頑張ってるのを邪魔して天之河君やらがやつかみで悪者みたいにして…昔の私に会えたら迷わず止めるね。」

それでハジメ君の健康のために栄養バランスの良い食べ物を作って無理しないように一緒に手伝えることをしてハジメ君の負担を軽くしてあげたい…」

「本気で恋をして香織は良い意味で変わったね。香織も無理しちや駄目だよ。」

「大丈夫だよ！恵理ちゃんも城之内君も無理してたら止めてくれるでしょ？それにハジメ君やユエちゃん、シアさんも一緒だからね。」

「そうだね。香織が無茶をすると僕もハラハラするからちゃんと止めるよ。」

「ハジメ君！作業は終わったの？」

「うん。フェアベルゲンの周りの地形に熱感知器と赤外線レーザーでの警報を設置したから何かあればフェアベルゲン全体に知らせが届くようなシステムにしてきたよ。

フェアベルゲンの亜人族なら戦闘態勢になるのも速いだろうから十分迎撃はできると思うよ。」

「そうなんだ！ やっぱりハジメ君は凄いな。ハジメ君作業してて喉渴いてるでしょ？ フェアベルゲンの水質が良くて凄い飲みやすいお水どうかな？」

「ありがとう香織。頂きます。ゴクツ…うん美味しいね。」

「より透明になるように酸素を少し混ぜ合わせてみたの。口に合って良かった」

「フェアベルゲンの水が美味しいからっていうのもあるけど香織の優しさが更に美味しさを引き立ててるね。」

「もうハジメ君たら…」

と顔を赤らめて微笑む香織。

フェアベルゲンの女性陣は二人の仲の良さを応援し、男衆は何度か香織へアタックしていたり時折ハジメの方にも告白紛いのことをしていたりするものの身体は女であるものの男なので、

香織に言い寄る男衆たちに牽制で非殺傷のゴム弾を弱めな威力で股間へシューティング（それでも激痛である）しそれでも無理矢理に手箆めにしようと自暴自棄になつて

いたカムに破れた熊人族ジンが香織を襲おうとした場面があったが
まず最初に股間へシユーツーティング強打し、悶絶する。

レイカにバトンタッチし顔以外を全身氷漬けにして身動きを取れなくした所にスタンガンの要領で纏雷を両手足に打ち込み感覚を奪い股間の氷を溶かして全感覚がそこへと集中するようにし、

これまた纏雷を足に纏わせ適度な力で鞏丸を片方ずつ………グシャリと

因みに纏雷の精密操作で中で弾けさせることが可能なためフェアベルゲン中に絶叫が響き渡るもフェアベルゲンの女性陣は軽蔑の視線を男衆は大事な部分を隠しながら哀れみの表情を向けて祈った。

ヴェールはその魔法の使い方方に10点満点とにこやかに笑ったそうである。

そうして両の鞏丸に別れをし、痛みに悶絶するものの動けないためもはや表現できないような顔をするがハジメとレイカはそのまま役に絶たなくなったそれを…

アウスから習った地霊術で振動脚と化させて身体強化をこれでもかと重ねて……グキリと折りしかもトンでもない振動で文字通り中の神経すらも粉碎しジンは男としての人生に幕を閉じたのであった。

その後はフェアベルゲンを良くしようとする客人に対する暴挙に流石に庇いきれないと判断し熊人族の長老は謝罪し、ハジメも一度目は矛を下ろすと言いつつ次はないと威圧

しながら言ったとのこと。

因みにユエ、シアはこのハジメの1場面を見てハジメ、レイカ、香織に寄り付く害虫に効果的だとのある町にてそれを実行するのだがそれはまた別の話で。

フェアベルゲンの者たちも普段怒らない人物を怒らせたらどうなるか身に染みたようにこれで以降は遠巻きに応援するファンクラブのような形に落ち着くのであった。

ハジメはフェアベルゲンの女性陣たちから憧れの眼差しを受け男勝りと勘違いされ姐さんと呼ばれるようになってしまいちよつと恥ずかしいとのこと。

話しは戻り

「それにしても良く喉が渴いてるってわかったね?」

「うん。ハジメ君ちよつと額に汗かいてたし体温もちよつと高くなつてたのと何時もより吐息が暖かいから喉が渴いてるんだなって思ったの。」

「成る程流石香織だね…香織もちよつと疲れてるね。肌の潤いがちよつとなくなつて…魔力の循環も…ちよつと手先の所が滞つてるね。」

料理とかの手作業で使つてるからかな?あとで振動マッサージだね。香織の身体と心のケアは任せてね。」

「ありがとうハジメ君!」

とハジメの豊満な胸元へと飛び込む香織。

「……………なあ恵理…」

「うん…克也」

「あの二人以心伝心過ぎじゃん」

と二人でもツツコミが追い付かない状況に戦々恐々とするのであった。

そして今日も訓練に明け暮れるシアはユエとの模擬戦で漸く一撃を入れられたと喜ぶものの社長が

「ほう？慢心するほど強くなったと？ならば今からもう十キロ追加だ。」

とさらに手足の重りを重くするのであった。

因みに追加された重りを合わせて重量は各五十キロの総重量200キロという常人ならばとうに潰れているほどだがシアは身体強化を掛け続け、必死で付いていく。

ステータスでいうならば身体強化込みで7000オーバーとユエからハジメの六割と太鼓判を押されたのであった。

「…シア動きが遅くなってる…もつと俊敏に！」

「ひえええ!!ユエさん待ってください!まだ慣れなくてえええ」

「…敵は待つてくれない。それじゃあいざという時に動けないでハジメ、レイカ、香織を守れない…良いの？」

「そんなの…嫌に決まっていますうう！私は私に誓ったですう。ハジメさん、レイカさん、香織を守るって！これぐらい!!」

「…ん！少し良くなった…：シア少し踊るみたいに動ける？」

「お、踊りですかああ!?!やったことないですう」

「…むう…なら教える…！」

と流石吸血鬼の女王。シアへと踊りの手本を見せる。嫌、魅せたというべきか。

その踊りはシアの訓練を間近で見っていたフェアベルゲンの女性陣たちも魅了しシアもユエの華麗な動き、無駄のない精練された輝きに目を奪われた。

そうして付け焼き刃であるものの力強い踊りをみせ、しなやかな動きで関節をしなませ打撃の威力の向上、ハジメが急造で作った大槌に遠心力と自身の体重と重りの重量を乗せる攻撃はユエの防御壁にヒビを入れるほどで地面にはクレーターがいくつも出来るほどだ。

ユエもこれには冷や汗をかくが当のシアはまだまだと自身を鍛えるためユエに教えを乞うのであった。

海馬は時折何かしらの装置を作りフェアベルゲンへと埋め込んだり、ハウリアへはツーマンセルでの動き方、確実性を取る行動を心掛けること。しかし人命救助や緊急の場合は仲間内に報告してから行動するようにと

これから直面するであろう出来事を例を挙げ仮想敵としてこのような場合どうするかと海馬自らが実践しハウリアは吸収し、ハウリアは覚えた知識をフェアベルゲンへと伝え更に理解を深める。

そうして霧の晴れる10日間を過ごすのであった。

因みに数年後トータスでは亜人族を筆頭に食の革命を起こし餓える者を減らし更に彫刻といった芸術作品に革命を起こした二人の人物を讃えて、こう呼んだ。

トータスの食文化を50年押し早めた美しい天から遣わされた天女

そして天女を愛し共に歩み彫刻を愛し、自らが先頭にたち後の者に道を示した女帝のごとき麗しい麗人

食卓の天女（ターフェル・フォーレンエンジェル）

氷刻の女帝（アイスエツジ・エンプレス）

などと信仰されることとなる。

これについて聞く二人の子供へ、未来の二人は若かりし時のやんちゃ、夫婦の馴れ初めと恥ずかしながらも嬉しそうに語るのであった。

大樹への道のり

レギン・バントンは熊人族最大の一族であるバントン族の次期族長との噂も高い実力者だ。現長老の一人であるジン・バントンの右腕的な存在でもあり、ジンに心酔にも近い感情を抱いていた。

もつとも、それは、レギンに限ったことではなくバントン族全体に言えることで、特に若者衆の間でジンは絶大な人気を誇っていた。

その理由としては、ジンの豪放磊落な性格と深い愛国心、そして亜人族の中でも最高クラスの實力を持っていることが大きいだろう。

だからこそ、その知らせを聞いたとき熊人族はタチの悪い冗談だと思った。ジンが兎人族に敗れ自暴自棄の末に人間族の女に男としての尊厳を奪われたといふことに。

現場にいた長老達に詰め寄り一切の事情を聞く。そして、全てを知ったレギンは、長老衆の忠告を無視して熊人族の全てに事実を伝え、報復へと乗り出した。

長老衆や他の一族の説得もあり、全ての熊人族を駆り立てることはできなかったが、バントン族の若者を中心にジンを特に慕っていた者達が集まり

憎き人間を討とうと息巻いた。その数は五十人以上。仇の人間の目的が大樹であることを知ったレギン達は、もつとも効果的な報復として大樹へと至る寸前で襲撃する事にした。目的を眼前に果てるがいい！」と。

その後ろで熊人族の女性陣及び一部始終を見ていた者たちは呆れと失望を向けていたこと、何処かへと連絡をしていたことに気付かぬままに。

—————

深い霧の中、城之内達一行は大樹に向かって歩みを進めていた。先頭をカムに任せ、これも訓練とハウリア達は周囲に散らばって索敵をしている。油断大敵を骨身に刻まれているので、全員、その表情は真剣そのものである。

「それにしてもフェアベルゲンの人たちに南雲君、レイカちゃん、香織は物凄い懐かれたね。」

「まあそりゃあな。生活基盤を整えて新しい料理に栄養価たっぷりな食事を振る舞ったり色々やってたからな。」

「ええ〜そうかな？ 私なんて料理して作り方教えてたぐらいだけだよ〜」

「…ん！カオリ特に小さい子達から懐かれてた。」

「香織さん面倒見が良くて私たちハウリアの小さい子達もお姉さんみたいに慕ってますからね！お料理を配る姿は若奥様でしたね。」

流石香織さん！

それにハジメさんも生活に便利な物を作ってくれて使い方もレクチャーしてくださってフェアベルゲンの女性陣から姐様なんて呼ばれてましたね！好きになった方たちを誉められて私も鼻が高いです！」

「…凶に乗るのはいけない…シアはまだ未熟。ハジメ、レイカ、カオリの魅力はこんなものじゃない！」

とハジメは生活基盤も整え、今まで井戸から水を酌むのに若い衆の力を必要としていたものが滑車を利用して老若男女安心して使えるように作り替え、高圧洗浄機といった環境に優しい素材で作った魔道具、食器洗い機、IHコンロから炊飯器、電子レンジ、掃除機などをヴェールと共に作り

フェアベルゲンの全ての女性陣に感謝されていた。

作り出した魔道具は全てソーラー充電と良く霧が発生するならと空気中の水分を電気分解して水素のエネルギーで動くようにし魔力のないフェアベルゲンの者たちでも使えるように改造した。

城之内と恵理は身体の栄養バランス、食事に気を付けるだけでも健康で丈夫な身体になるように適度な運動や子供たちでも遊ぶのと同時に鍛えられるように遊具といった遊び場を作り特に遊び場が増えた子供たちから感謝された。

「城之内君たちだつて子供たちから感謝されてたし社長はフェアベルゲンの子達に簡単な計算から社会での立ち振舞いとか外の人たちとの交流の仕方も教えてたから人気だつたよ！」

「流石伴侶だぜ！子供たちも気兼ねなく遊んでたしな！」

「そうですね。ヒータのいう通りフェアベルゲンの生活水準を高めて友好的に接してくれるから皆様懐かれてましたね！」

「ハジメもレイカも錬成の精度が細かいところも上がつてより効率的に錬成できるようになったしね。環境と師匠がいると違うものだね。」

「ホントだねえ。ハジメは物の仕組みを理解した上でそれを形にするのが得意だから良い仕上がりになるね。」

まあ魔力の込め方とかはまだ此方に来て浅いからまだまだただけどゆくゆくうちの工房を任せられる位上達するね。いや、弟子を取るのは久しぶりだから腕がなるね！」

「皆さんの相手を思う気持ちさがフェアベルゲンの方々に通じて良かったです。」

「ええ。ただ一部はまだ凝り固まって現実を見ようとしてない者たちもおりますね。」

雪姫がそう言う中で伝令が入る。

「社長！熊人族の若奥様たちよりどうやら大樹のルートを塞ぐように熊人族がいるとのことです。数は約50名程。」

「ふうん…大方南雲の見せしめが気に食わないということか。」

「社長…我々に行かせてください！」

「良からう。カム！貴様が指揮を取れ。奴らの安いプライドへし折ってくるが良い。」

「ハッ！お任せください！」

と海馬たちの元に十人ほど残り一斉に散会する。

「父様たち大丈夫でしょうか…社長のお陰で前より遅しくなったとはいえ優しい父様たちは…」

「大丈夫よ。シア。お父さんもただ強くなった訳じゃないわ。心も養って皆が本当に大事なものに気付いた…今のあの人たちなら無事に帰ってくるわ。怪我してたら私が作った薬もあるし心配ないわ。」

「母様…」

「いざとなったら僕も参戦するよ。元はといえば僕のせいでもあるしね。」

—————

彼ら熊人族は地力もあり土地勘もある。フェアベルゲンならば人間族、兎人族に負けるはずがなく、ジンの仇を容易に取ることが出来る。その後はジンの受けた痛みをジンを再起不能に陥れた女に支払わせる。

そう息巻いていたが：現実是非情だ。

相手は所詮、人間と兎人族のみ。例えジンを倒したのだとしても、どうせ不意を打つなど卑怯な手段を使ったに違いないと勝手に解釈していた。

樹海の深い霧の中なら感覚の狂う人間や、まして脆弱な兎人族など恐るるに足らずと。レギンは優秀な男だ。普段であるならば、そのような都合解釈はしなかっただろう。深い怒りが目を曇らせていたとしか言い様がない。

だが、だとしても、己の目が曇っていたのだとしても……

「なにが起きているというのだ!？」

そう熊人族たちは襲撃を受けている。しかしながら敵の姿が見えない。

仲間内では兎の耳が見えたことから兎人族だということはわかっているが気配が掴めず一人また一人と仲間たちが悲鳴を上げて気を失う。

「な、なにがおきてるんだ!？」

「ちくしょう! 何なんだよ! 誰だよ、お前等!!」

「うわあああ! 来るなっ! 来るなああ!」

最初に異変に気付いたのは周りを警戒し話をしていた者が黙ったことからだ。それから音もなくあちら此方からクナイ、足縄といった即席トラップ、トラバサミ、網が引つ掛かり身動きが取れなくなりバチバチという炸裂音と共に気を失う者たち。

無音で迫る彼らは熊人族を圧倒していた。

奇襲しようとしていた相手に逆に奇襲されたこと、亜人族の中でも格下のはずの兎人族の有り得ない強さ、認識を狂わせる巧みな気配の断ち方、高度な連携、その全てが激しい動揺を生み、スペックで上回っているはずの熊人族に窮地を与えていた。

何より彼らは一切の言葉を発さないのである。

熊人族からすれば無言のままに正体不明の攻撃を受けているのだ、不気味以外の何物でもないだろう。

ハウリア族は念話石を通して話さずとも意思を伝えられる。更にハジメ、ヴェールから授けられた電気の魔法を込めた所謂スタンガン、網を発射し動きを封じるものといった物

元から気配を断つことになれている彼らは最初の一人を香織、モナの製作した眠り薬をハンカチに染み込ませ眠らせ、気付かれないようトラップを設置。

そこから麻痺毒を塗りたいくったクナイで動きを封じて戦力を削る。

彼らは極力不殺を貫いている。

彼らにはまだ他人の人生を奪うという覚悟はどうしても出来なかった。しかし殺さずとも行動不能にし戦闘する意思を奪うことに注力することにより彼らは化けた。

海馬も無理に殺す必要などない。何故なら死とは一瞬の出来事。何人足りとも逃れることの出来ない終わり。

一瞬の出来事よりも生きて苦痛を舐め這いつくばらせそれでもなお這い上がろうとする意思を持つものだけが輝ける。

海馬の言葉を受けカムたちは今までの己の優しさはただ可愛そうだから、傷付けたくないからと争うことから逃げてきた。

しかし時代は移ろう。ならばそれに柔軟に対応し順応しなければハウリアという種族に未来はないだろう。

彼らは訓練と同時に瞑想をし、己の中での大切なものを再度確認した。

それは家族、恋人、母親、父親、息子、娘

各々の中でもそれは違うが共通しているのは仲間を守ろうとする意思であった。かくして彼らは闘う。

奪うために？

自分達の力を見せるために？

否！

彼らは己の仲間を家族を守るために闘う。

それが例え己の手を血に染めてしまおうとしてもそれでも守りたいもののために闘う。

そしてその選択肢を与えてくれた社長へ恩返しをしたいというのがハウリア族の、総意であった。

そうして、戦えるものが一人また一人と減り遂には50名いた人員は10名程までになった。

レギンたちバントン族のものたちは追い詰められ木を背に向け何処からでも来る攻撃に備える。

そうして、ハウリアたちが姿を現した。

地球でいう忍び装束に身を包みあらゆる機器を手に持ちじつと此方を見る。

無言の圧に本当にあの非力で臆病なハウリア族なのかと疑うがそれを認めなかったのが今の現状だ。

「……俺はどうなつてもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。だが、部下は俺が無理やり連れてきたのだ。見逃して欲しい」

「なっ、レギン殿!?!」

「レギン殿! それはず……」

レギンの言葉に部下達が途端にざわつき始めた。レギンは自分の命と引き換えに部

下達の存命を図ろうというのだろう。動揺する部下達にレギンが一喝した。

「だまれっ！ ……頭に血が登り目を曇らせた私の責任だ。兎人……いや、ハウリア族の長殿。勝手は重々承知。だが、どうか、この者達の命だけは助けて欲しい！ この通りだ」

「ふむ。そなたたちは我らが恩人に牙を剥いた。それを許せと？ 少々勝手すぎるのではないか？」

「身勝手なのは承知している！ だがどうか……どうかこの者たちはまだ若い。俺のせいでも来あるものたちの可能性は潰したくない……」

「命を差し出す……人の命で賄うことなど口でいうのならば簡単なこと。」

とカムは鋭利な刃物をレギンの横へと放る。

ザクツと地面に突き刺さる剣を見て

「覚悟を見せていただけけるかな？ 本当ならば躊躇いなどないでしょう」

とカムは言いレギンは己の服の一部を引き裂き、利き腕にキツく縛る。

そして破いた衣服を口に入れ舌を噛まないようにする。

「……ムンツツツ!!」

スパン！ プシヤヤヤヤヤヤ

と利き腕を鋭利な刃物で切断した！

「グツアアアアア」

「レ、レギン殿!？」

「はあ、ハアハア…これで足りぬのであればもう片方も…」

「……………社長宜しいですか?」

「元よりそいつらになど興味の欠片もない。好きにしろ。」

「承知しました。バントン族のレギン殿。条件がごさいます。フェアベルゲンに帰つたら長老衆にこう言つてください」

「……………で、伝言か?」

条件と言われて何を言われるのかと戦々恐々としていたのに、ただのメッセンジャーだったことに拍子抜けするレギン。しかし、言伝の内容に凍りついた。

「貸一つとお伝えください。」

「……………ッ!?それはっ!」

「我々はどちらでも、構いません。生き恥を受け入れてでも未来を掴みたいというのであれば…引き受けるかは自由です。」

つまり、レギン達が生き残るということは、自国に不利な要素を持ち帰るということでもあるのだ。長老会議の決定を無視した挙句、負債を背負わせる、しかも最強種と豪語しておきながら最弱といっても言いハウリア族に何の負傷も与えられずに帰還……

カムの言う通りまさに生き恥だ。

「…わ、判った…」

「では早く去るといい。」

「ちよつと待つてくださいい！」

と後ろで待機していた香織がレギンの側まで寄るのを慌てて駆け寄り自らの背に隠すシア。

「香織さん!? どうして駆け寄るんですか! 危ないですから下がってください! 彼らが、貴女を人質に取るなんてことやる可能性だってあるんですよ!」

「ごめんなさいシアさん…でもね、目の前の怪我をしている人をむざむざ放っておくことは出来ないの。」

「んもう! 香織さんのお人好し! …でもその優しさに私は惚れたんですから…仕方ないですね! 惚れた弱みです! 何かあればすぐに中止させますから!」

「ありがとうシアさん。」

と香織はレギンの切断した腕を、断面に合わせる。

幸いにも綺麗に切断されているためかまだ、治癒可能な範囲である。

「…リヴァイケーション。」

と香織が唱えると淡い光が包み込み腕がくつついた。

「…神経もくつつけましたが数日は動かささないでくださいね。」

「香織さんに感謝するですよ！」

その淡い光と慈愛に満ちた顔はまるで天から降臨された天女のようなのである。

「あ、ありがとうございます。天女様！」

「へ？」

「女神だ…」

「この世の者とは思えない美しさだ」

「天女様…」

「あなた方の目の前にいる方を同じ熊人族のジンは襲おうとしたのだ。こちらの香織殿の最愛の伴侶のハジメ殿が撃退したということだ。」

と近くまで寄っていたハジメをさしてカムは言う。

「ジンは何ということをして…我らが全て悪かったのだな…こんなにも美しい方を害するようなと…」

「あなた方の中であの熊人族は大事だったのかもしれない。でも僕にとつて香織は命と同等以上に大事な人だ。それでも恨むというなら僕を恨んでください。」

「…いや…我等は本来命を取られても文句の言えない立場。それを慈悲深きお方たちは許してくれたのだ…そんな方を恨むなど出来ようはずがない。」

とレギンたちはそう言い立ち上がる。

「熊人族を代表しお詫び申し上げる。誠に申し訳ない！」

「…命あるものは間違えることはある。僕らは完璧じゃない。だからこそ失敗だつてするし間違えることもある。重要なのはそこから何を学ぶかです。貴方たちのこれからの行動に期待します。」

「かたじけない…！」

そうしてレギンたち熊人族はフェアベルゲンへと帰還するのであった。

これ以降彼らは香織、ハジメを信仰するようになるのであった。

「これで行く手を遮るものはない。行くぞ！全速前進だ！」

そうして彼らは再び歩き出す

大樹まであと少し。

娘を託された一行は変態たちの巣窟へ

一行は遂に大樹の下へたどり着いた。

大樹を見た城之内の第一声は、

「……なんだこりゃ？」

という驚き半分、疑問半分といった感じのものだった。他の面々もも、予想が外れたのか微妙な表情だ。大樹についてフェアベルゲンで見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していたのである。

しかし、実際の大樹は……見事に枯れていたのだ。

大きさに関しては想像通り途轍もない。直径は目算では測りづらいほど大きい。直径五十メートルはあるのではないだろうか。明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。周りの木々が青々とした葉を盛大に広げているのにもかかわらず、大樹だけが枯れ木となっているのである。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。しかし、朽ちることはない。枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖視されるようになりました。まあ、それだけなので、言ってみれば観光名所みたいなものですが……」

ハジメとユエの疑問顔にカムが解説を入れる。それを聞きながら城之内たちは大樹の根元まで歩み寄った。そこには、アルフレリックが言っていた通り石板が建てられている。

「これは……オスカーの？」

「……ん、同じ文様」

石版には七角形とその頂点の位置に七つの文様が刻まれていた。オルクスの部屋の扉に刻まれていたものと全く同じものだ。ハジメは確認のため、オルクスの指輪を取り出す。指輪の文様と石版に刻まれた文様の一つはやはり同じものだった。

「やつぱり、ここが大迷宮の入口みたいだな……だが……こつからどうすりゃいいんだ？」

「普通なら何処かに入口がありそうなものなんだけどね」

城之内と恵理は大樹に近寄ってその幹をペシペシと叩いてみたりするが、当然変化などあるはずもなく、カム達に何か知らないか聞くが返答はNOだ。アルフレリックにも

口伝は聞いているが、入口に関する口伝はなかった。隠していた可能性もないわけではないかと悩む。

ユエが注目していたのは石板の裏側だった。そこには、表の七つの文様に対応する様に小さな窪みが開いていた。

「これは……」

とハジメが、手に持っているオルクスの指輪を表のオルクスの文様に対応している窪みに嵌めてみる。

すると……石板が淡く輝きだした。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まってきた。しばらく、輝く石板を見ていると、次第に光が収まり、代わりに何やら文字が浮き出始める。そこにはこう書かれていた。

〃四つの証〃

〃再生の力〃

〃紡がれた絆の道標〃

〃全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう〃

「……どういう意味だ？」

「四つの証は多分、他の迷宮の証?」

「……再生の力と紡がれた絆の道標は?」

「予測ではあるが再生に関する神代魔法であろう。絆の道標はフェアベルゲンの者共の協力といったところか」

「だとしたらここは後回しにするしかないってことですかね。」

「私たちに足りないのは後3つの迷宮攻略の印とその中でも再生の力ってことだね!」

と各々この大樹の迷宮は後回しにするしかない結論を出した。

「予定は変わったが俺達は、先に他の大迷宮の攻略を目指すことにする。」

貴様らは予定通り他の主要都市や街の情報を探り俺へと伝達

魔族の情報は特に念入りにだ。

ここに残り他を鍛えるも貴様らの自由だ。」

「社長……あの時……私たちを受け入れてくださりありがとうございます! 我々は奴隷となった同族たちを助けたい……それと同時にここを襲撃する可能性のある魔族、帝国兵に対して脆弱です。」

何人が残り我々は各地へと散らばります!

社長……我らKCトータス支部の名を偉大なものにしてみせます!」

そしてハウリアたちは全員が海馬へと向き合い

「「社長…このご恩決して忘れません!!!」
「ふうん、少しはましな顔になったか。」

シアはカムたちに改めてハジメたちに付いていくことを言おうとする。いずれ戻ってくるとしても、三つもの大迷宮の攻略となれば、それなりに時間がかかるだろう。当分は家族とも会えなくなる。

シアはカム達に話しかけようと一歩前に出る前にカムとモナがシアの前にいく。

「シアよ。社長とハジメ殿たちと行こうとしているところは未知の場所だ。お前には様々な困難が待ち受けているだろう。」

「…はい。」

「でもねシア。どんな困難や辛いことがあってもこれだけは忘れないで」

とカムとモナはシアを優しく抱きしめて

「お前は立派なハウリア族の一人で私たちの自慢の娘だ。」

「例えどんなことがあろうともシアの味方よ。」

「父様…母様…ありがとうございますですうううう」

「社長…娘を宜しく願います」

「ふうん。精々死なんよう鍛えてやる。」

「ハジメ殿、香織殿、シアは寂しがりなので時々で良いので慰めて上げてください。」

「任せてください！それにシアさんというと退屈しないですし天真爛漫な笑顔に癒されますし」

「甘えられると守りたい庇護欲がそそられるしシアさんの耳痛い柔らかくて此方もお世話になつてます！」

「ユエさん。シアと対等に接してくれてありがとうございます。これからあの娘の友達でいてください」

「…ん！シアとても頑張り屋…見てて気持ちいいし…良い娘。私の方もお世話になつて…任せて！」

「克也殿、恵理殿、拳式を上げられるのでしたら是非とも我々にご連絡を！立派なものを建てますので」

「もう！気が早いよ…でもありがとうございますカムさん！」

「そんな時はお袋と静香、恵理のおばさんも呼ばねえとな。」

「うん！」

「ヴェールさんお気を付けて。貴女から頂いた命大事にします！」

「良いの良いの。そんな深く受け止めなくて。元気にやりなよ」

そうして樹海の境界でカム達の見送りを受けた城之内たちは宝物庫から大型の魔力駆動四輪に乗り込んで平原を疾走していた。位置取りは、運転席に海馬、助手席に城之内が乗り込み後ろに恵理、ユエが乗り込みその後ろにハジメ、シア、香織の順番である。この中でまともに運転経験のあるのは海馬なので本人も運転することには納得をしている。

精霊たちは皆霊体化し、車内で寛いでいる。

「ハジメさん。そう言えば聞いていませんでしたが目的地は何処ですか？」

とシアは隣で密着しているハジメに聞く。

「次の目的地はライセン大峽谷だよ。」

「ライセン大峽谷？」

ハジメの告げた目的地に疑問の表情を浮かべるシア。現在、確認されている七大迷宮は、【ハルツィナ樹海】を除けば、【グリューエン大砂漠の火山】と【シユネー雪原の氷雪洞窟】である。確実を期すなら、次の目的地はそのどちらかにするべきでは？ と

思ったのだ。その疑問を察したのかハジメが意図を話す。

「シユネー雪原は魔族の拠点に近いから情報のない今はまだ行かない方がいいから後回し、取り敢えず大火山を目指すのがベターだけど、どうせ西大陸に行くなら東西に伸びるライセンスを通りながら行けば、途中で迷宮が見つかるかもしれないからね。」

「後はこの先の町で出来れば、食料とか調味料関係を揃えたいね。今後のためにも素材を換金しておきたいかな。前に見た地図通りなら、この方角に町があったと思うから今の目的地はそっちだね。」

「成る程……あの香織さん？ハジメさん？その……私のウサ耳を触っても良いことなんて……」

「分かってないねシアさん！シアさんの耳は柔らかい中にも芯の通った程よい弾力で触る人を魅了するんだよ？」

「ハジメ君の言う通りだよ！シアさんの耳は触つてとても幸せな気分になるの！頬つぺたも弾力あつていつまでも触り続けられるよ！」

「はうう〜ユエさ〜んお二人を宥めてくださ〜い」

「……諦めて……頑張れ！シア」

グツと親指を立てるユエは恵理の膝に頭を乗せながら言う。

「ユエの髪凄いサラサラしてて触ると気持ちいいね。」

「…ん！エリの髪も…綺麗！」

「ありがとうユエ…」

(…凄い…安心する…カツヤもエリも一緒にいて落ち着く…ハジメたちとはまた違う

…お父様、お母様ってこんなに温かいのかな…)

「ユエ？」

「zzzzzz」

「寝ちやつたね。」

「ふふふユエちゃん寝顔も可愛い♪」

「ユエさん気持ち良さそうですね」

「本当だね。」

(ハジメ、ハジメ。私もシアの耳触りたいわ！)

(それじゃ変わるね！)

「ユエも安心しきってるしシアの耳を堪能しましょう！」

「ふえ!?レイカさん！はうろう触り方が優しくて力が抜けちゃいますうう」

「レイカちゃん狡い！私ももつと触る！」

「騒々しい。」

「そういうなって。まずはこの先の街だな。」

「情報と文明レベル、食料、やることは多い。貴様にも動いてもらおうぞ城内」
「おうとも！」

数時間ほど走り、そろそろ日が暮れるという頃、前方に町が見えてきた。
変態たちの巣窟…ブルックだ。

ブルックの町 前編

町の方からもハジメ達を視認できそうなので魔力駆動四輪を「宝物庫」にしまい、徒歩に切り替える城之内たち。

流石に、漆黒のバイクで乗り付けては大騒ぎになるだろう。

道中、シアが途中でハジメから付けられた首輪にブチブチと文句を垂れていたが、やはりスルーして遂に町の門までたどり着いた。案の定、門の脇の小屋は門番の詰所だったらしく、武装した男が出てきた。格好は、革鎧に長剣を腰につけているだけで、兵士というより冒険者に見える。その冒険者風の男がハジメ達を呼び止めた。

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと、町に来た目的は？」

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

ふくと気のない声で相槌を打ちながら門番の男が城之内のステータスプレートをチェックする。そして、目を瞬かせた。

ちよつと遠くにかざしてみたり、自分の目を揉みほぐしたりしている。その門番の様子をみて、城之内は「ヤベエ、隠蔽すんの忘れてた」と内心冷や汗を流した。

ステータスプレートには、ステータスの数値と技能欄を隠蔽する機能があるのだ。冒険者や傭兵においては、戦闘能力の情報漏洩は致命傷になりかねないからである。城之内は、咄嗟に誤魔化すため、嘘八百を並べ立てた。

「ちよつと前に、魔物に襲われてな、その時に壊れたみたいでな！」

「こ、壊れた？ いや、しかし……」

「壊れてなきや、そんな表示おかしいだろ？まるで俺が化物みたいじゃないか。門番さん俺がそんな指先一つで町を滅ぼせるような化物に見えるか？」

両手を広げておどける様な仕草をする城之内の姿に、門番は苦笑いをする。ステータスプレートの表示が正しければ、文字通り魔王や勇者すら軽く凌駕する化物ということになるのだ。例え聞いたことがなくてもプレートが壊れたと考える方がまともである。

実は本当に化物だと知ったら、きつと、この門番は卒倒するに違いない。いけしやあしやあと嘘をつく城之内に、恵理は呆れた表情を向けている。

それから他の者も見せるようにと言われ、先程の城之内のようなことにならないように隠蔽をする。

そしてユエと海馬、シアは

「さつき言った魔物の襲撃のせいだな、二人のは失くしちまったんだ。こっちの兎人族は……わかるだろ？」

その言葉だけで門番は納得したのか、なるほどと頷いてステータスプレートをハジメに返す。

「それにしても随分な綺麗どころを手に入れたな。白髪の兎人族なんて相当レアなんじゃないか？ あんたつて意外に金持ち？」

「まあそういうことだ。後はノーコメントで。なあ門番のおっさん。素材の換金場所つて何処にある？」

「あん？ それなら中央の道を真つ直ぐ行けば冒険者ギルドがある。店に直接持ち込むなら、ギルドで場所を聞け。簡単な町の地図をくれるから」

「おお、そいつは親切だな。ありがとよ」

と言いつつ漸く町へ入れた。

「うう香織さくんどうして首輪をしないとイケないんですか？ 私奴隷じゃないのに〜」

「ごめんねシアさん。でも町だとね、シアさんの身柄を証明するものが何もないの。そうなるシアさんを奴隷にしようとする有象無象が現れるからそうならないように首輪をもらったの。」

「シアさんは僕たちの仲間だしその……ゆくゆくは家族になるから……不快な思いをさせて

ごめんね。」

「香織さ〜んハジメさ〜ん！私のこと思っ言ってくれてたのですね！ありがとうございませ〜！」

「それにシアさんは私たちにとって家宝みたいなものだも。でもそうだね。」

と香織はシアの耳元で

（今日の夜ハジメ君と私でシアさんを気持ち良くして上げるね。）

と妖艶に微笑む。

「うさつ!?!…香織しや〜ん！嬉しいですう！」

とシアは香織に抱き付く。

そうしてメインストリートを歩いていき、一本の大剣が描かれた看板を発見する。かつてホルアドの町でも見た冒険者ギルドの看板だ。規模は、ホルアドに比べて二回りほど小さい。

城之内は看板を確認すると重厚そうな扉を開き中に踏み込んだ。

ギルドは荒くれ者達の場所というイメージからハジメや香織は、勝手に薄汚れた場所と考えていのだが、意外に清潔さが保たれた場所だった。

入口正面にカウンターがあり、左手は飲食店になっているようだ。何人かの冒険者らしい者達が食事を取ったり雑談したりしている。誰ひとり酒を注文していないことか

らすると、元々、酒は置いていないのかも知れない。酔っ払いたいなら酒場に行けということだろう。

カウンターには大変魅力的な……笑顔を浮かべたオバチャンがいた。恰幅がいい。横幅がユエ二人分はある。

「オバチャンわりい！ 買い取りつてここで出来るのか？」

「克也いきなりは駄目だよ。そういう時は礼儀正しく。」

「なあに男つてのはこれぐらい元気があつた方がいいさ！ にしても……ふむ両手に華……というところかい……」

「ん？ 花なんて俺は持つてねえぜ？」

「例えさ例え。男ならそれぐらい分かりな。あんまり余所見ばつかして愛想尽かされないようにね？」

「サンキューオバチャン！」

「さて改めて冒険者ギルド、ブルック支部によるこそ。ご用件は買い取りかい？」

「はい！ 素材の買取をお願いしたいんです。」

「素材の買取だね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい？」

「ん？ 買取にステータスプレートの提示が必要なんですか？」

ハジメと香織の疑問を代表してハジメが言う。

その疑問に「おや？」という表情をするオバチャン。

「あんたは冒険者じゃなかったのかい？ 確かに、買取にステータスプレートは不要だけどね、冒険者と確認できれば一割増で売れるんだよ」

「そうだったんですね。」

オバチャンの言う通り、冒険者になれば様々な特典も付いてくる。生活に必要な魔石や回復薬を始めとした薬関係の素材は冒険者が取ってくるものがほとんどだ。町の外はいつ魔物に襲われるかわからない以上、素人が自分で採取しに行くことはほとんどない。危険に見合った特典がついてくるのは当然だった。

「他にも、ギルドと提携している宿や店は一〜二割程度は割り引いてくれるし、移動馬車を利用するときも高ランクなら無料で使えたりするね。どうする？ 登録しておくかい？ 登録には千ルタ必要だよ」

ルタとは、この世界トータスの北大陸共通の通貨だ。

ザガルタ鉱石という特殊な鉱石に他の鉱物を混ぜることで異なった色の鉱石ができ、それに特殊な方法で刻印したものが使われている。

青、赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金の種類があり、左から

一、五、十、五十、百、五百、千、五千、一万ルタとなっている。

驚いたことに貨幣価値は日本と同じだ。

ハイリヒ王国の方で登録していた城之内と恵理は問題なくそのままステータスプレートを出す。

「…ん？この名前…もしや王都のリリアーナ王女お抱えの冒険者かい？」

と少しトーンを落として話すオバチャン

「姫さんのこと知ってんのか？」

「ギルドで通達来ててね。成る程。ここにいると言うことは…迷宮を踏破したと言うことだね。」

「ああ姫さんの手紙もあるぜ！」

と城之内はリリアーナから渡されていた手紙の封をオバチャンにだけ見えるようにする。

「成る程。なら問題ないよ。あんたら二人はあのリリアーナ王女が認めている実力者。ならランクも更新しとくよ。」

「あの！私とハジメ君も登録してもいいですか？」

「お嬢ちゃんたちもかい？いいよ。登録料で10000ルタだが良いものを見せてもらったから少し素材は高く買取りさせてもらおうよ！」

「ありがとうございます！」

「そつちの子達はどうするんだい？」

「そうだな…海馬どうする?」

「今は必要ではない。」

「なら二人分頼む!」

そうして二人分のステータスプレートを渡し暫くすると戻ってきたステータスプレートには、新たな情報が表記されていた。天職欄の横に職業欄が出来ており、そこに“冒険者”と表記され、更にその横に青色の点が付いている。

青色の点は、冒険者ランクだ。

上昇するにつれ赤、黄、紫、緑、白、黒、銀、金と変化する。

そう、冒険者ランクは通貨の価値を示す色と同じなのである。

「まずは一つずつ上がって行って頑張つて黒を目指しなよ?お嬢さん達は中々見所があるからね。それと克也と恵理だったね。ランクの方も上げといたよ。前は赤だったけど、オルクスを踏破したんだ。本来なら金に上がっても可笑しくないがあんまり目立ちたくないんだろ?」

「まあ出来るならな。」

「そう思つて白にしといたよ。でもそうだね。他の支部にも通達しとくよ。そしたら多分金ランクになるのも時間の問題さね。」

「色々とありがとうございます!」

「ありがとうございます！それで、買取はここで？」

「構わないよ。あたしは査定資格も持つてるから見せてちょうだい」

オバチャンは受付だけでなく買取品の査定もできるらしい。優秀なオバチャンだ。

そうしてハジメは、あらかじめ“宝物庫”から出してバックに入れ替えておいた素材を取り出す。

品目は、魔物の毛皮や爪、牙、そして魔石だ。カウンターの受け取り用の入れ物に入れられていく素材を見て、再びオバチャンが驚愕の表情をする。

「ハ、これは！」

恐る恐る手に取り、隅から隅まで丹念に確かめる。息を詰めるような緊張感の中、ようやく顔を上げたオバチャンは、溜息を吐きハジメに視線を転じた。

「とんでもないものを持ってきたね。これは……………樹海の魔物だね？」

「ええ仲間の協力で何とか倒せました。」

と本当のことと嘘を織り混ぜながら話すハジメ。

「そりゃあねえ。樹海の中じゃあ、人間族は感覚を狂わされるし、一度迷えば二度と出てこれないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。巫人の奴隷持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

オバチャンはチラリとシアを見る。おそらく、シアの協力を得て樹海を探索したのだと推測したのだろう。樹海の素材を出しても、シアのおかげで不審にまでは思われなかったようだ。

「オバチャンこいつもみれるか？」

と城之内はひっそりとオルクスの迷宮で手に入れた二尾狼の革とバジリスクもどきの牙を数本取り出す。

「……、こいつはまさか？」

「ああ。」

「とんでもないのを持ってきたね。電導率の高い革、雷耐性の高い防具を作れそうだし、しかもこの牙……そんなじよそこの魔物なんかより強いね。牙の形からして蛇……これなら良質な解毒ポーションを作れるさね。」

それからオバチャンは、全ての素材を査定し金額を提示した。買取額は七十五万七千ルタ。結構な額だ。

「これでいいかい？中央ならもう少し高くなるだろうけどね。」

「いや、オバチャン所で頼むぜ！」

そうして代表でハジメは75枚のルタ通貨を受け取る。この貨幣、鉱石の特性なのか異様に軽い上、薄いので70枚を超えていても然程苦にならなかった。もつとも、例え

邪魔でも、ハジメには「宝物庫」があるので問題はない。

「ところで、門番の人に、この町の簡易な地図を貰えると聞いたんだが……」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

手渡された地図は、中々に精巧で有用な情報が簡潔に記載された素晴らしい出来だった。これが無料とは、ちよつと信じられないくらいの出来である。

「凄い！これガイドブックだよ！」

「ほえ〜これが地図なのですねえ〜」

「何から何まですまねえオバチャン」

「良いさ良いさ。今日はこつちも良いものを見させてもらつたんだ。それより金はあるんだから、少しはいいところに泊りなよ。治安が悪いわけじゃあないけど、五人とも美人なんだからそんなの関係なく暴走する男連中が出そうだからね」

オバチャンは最後までいい人で心配り上手だった。城之内は笑顔で分かつたと言いつ海馬と共に入口に向かって踵を返した。五人は頭を下げて追従する。

「ふむ、いろんな意味で面白そうな連中だね……」

後には、そんなオバチャンの楽しげな呟きが残された。

そうしてオバチャンの地図を頼りに向かったのはマサカの宿。

料理が美味く防犯もしっかりしており、何より風呂に入れるという。

宿の中は一階が食堂になっていて、何より風呂に入れるという。ハジメ達が入ると、お約束のように五人に視線が集まる。それらを見無視して、カウンターらしき場所に行くと、十五歳くらい女の子が元氣よく挨拶しながら現れた。

「いらつしやいませー、ようこそ “マサカの宿” へ！ 本日はお泊りですか？ それともお食事だけですか？」

「宿泊で頼む！ このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいいのか？」

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

「じゃあ一泊……」

「二泊だ。」

「じゃあ二泊で頼む。あと飯と風呂つきで！」

「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

「じゃあ二時間で頼む。恵理たちはゆつくり入りたいだろ？」

「そうだね！」

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？ 今は一人部屋が一つと三人部屋がお二つ

空いてますが……」

「ならば一人部屋をもらおう。キサマらと同じだと気が散るのでな。」

と海馬は鍵をそのまま持つと先に部屋へと向かう。

海馬はこの後各地に散らばったハウリアからの報告を聞く必要もありなるべく一人で作業をするようだ。

「でしたら後は三人部屋ですね！」

と城之内、恵理は同じなのは決まっているがハジメ、香織、ユエ、シアはどうしようかと悩む。

「ユエさん！ここは譲ってください！その…香織さんとハジメさんに…」

「…ん、良い。」

「はえ？良いんですか？」

「だって」

と城之内と恵理の両手を握ると

「…お父様とお母様と一緒に寝たいから…」

「成る程！ご夫婦でしたか！これは失礼しました！ゆっくりとお休みくださいませ！お嬢さんもお両親と仲良くね。」

「…ん、ありがとう。」

周りはどよめく。

城之内なら分かるが恵理の身長は150センチ程度…

「まさかあの身体で人妻!？」

だが熟練の夫婦の気配はする…

ざわめく冒険者たちを他所にユエは鍵を貰うとそのまま固まっていた城之内と恵理を引つ張り部屋へと行く。

「あはは? まあユエちゃんに何か心境の変化があつたのかな?」

「そうですね。取り敢えず私たちも部屋に行きましよう!!」

とハジメ、香織、シアも部屋へと入るのであった。

城之内夫妻、娘が出来る。そして弟子も取る

呆ける城之内と恵理を部屋まで連れていったユエ。

ガチャつと部屋へ入る。

部屋の中は三人部屋なだけあり広くのんびり出来そうな感じであった。

「…二人とも部屋着いたよ？」

「あ…ああ。」

「それよりユエさっきのは？」

「…？お父様とお母様」

「何だつて急にそんなこと？」

「…私…親つて言うの知らない…叔父様はいたけど…克也に撫でられた時優しく注意してくれて心配してくれて…お父様みたいって。」

…今日恵理に膝枕してもらって撫でられた時…凄い温かくて心配してくれるお母様みたいで…二人の娘になりたいって思った。」

「…俺らは片方酷え親でな。なんつうか探り探りな感じだ。それでも良いのか？」

「…克也たちが良い！」

「…正直僕が母親っていうのは…少し怖い部分もある…お母さんのこともあつて…でも…でもユエがいいなら母親になりたい。」

「…ありがとう♪お父様！お母様！」

そうして夕食まで城之内と恵理はユエを後ろから抱きしめて自分達の世界の話し特に学校の話しをユエは聞きたがり色んな人との交流が出来るというのは王族であつたユエからしたらとても新鮮であつた。

「…学校…皆で学ぶ…私そういうのなかつたから克也たちの世界で見てみたい…！」

「ああそれに色んなカードがあるからそれで自分だけのデッキを作るなんてものいいな
！」

「色んなカードとの出会いがあるからね。ヒータたちと出会つたのもそうだね。」

「…ん！ヒータたち恵理のこと大好き！」

「確かにな！…お！そろそろ夕飯の時間だな！」

「ユエ行こっか！」

「…ん」

とユエは立ち上がると恵理の手を握り城之内の手も握る。

そして廊下の食堂へと着くと先程のチェックインにいたメンバーがまだ残っていたものの城之内たちの姿を見ると微笑ましいものを見る目で見守っていた。

ハジメたちがまだ来ないので先に注文をすると野菜たっぷりのスープにオニオンの香りのパスタのようかどうかのようなもっちりとしたものがきた。

冷めてもいけないと先に食べることにした三人。

三人とも美味しそうに食べる様子は心暖まる光景だ。

「惠理ちゃん、城之内君、ユエちゃん！遅くなっちゃってごめんね！」

「香織先食べてる…その…シアさん大丈夫？」

「あはは、さつきまで香織がシアさん撫でたり抱きしめたり色々してたからね。」

「うさ〜香織さ〜ん。もつとなでてください〜い！」

「ほらシアさん。ご飯食べよ！続きはまたあとでね。」

「あれ？城之内君、社長は？」

「海馬のやつはまだ作業してるみたいだな…あとで差し入れ持つてくか。」

とハジメたちも来たのだが香織はシアのことを撫で回し甘えさせていたためであるうかシアが香織に抱きつきながら椅子に座る。

そうして全員食事を取った後に城之内はダツシユでまだ開いていた市場にてパスタの乾麺を買いマサカの宿の厨房を借り受けた。

「さてと海馬のヤロウに作ってやるか。」

と城之内は手持ちの物で、トマト大き目2つ、玉ねぎ1個、人参二分の一本、にんに

く2片、樹海で取れた魔物を神秘の中華鍋にて毒素を取り合挽きしたミンチ300g、オリーブオイル大2、固形にしたコンソメの素2個、ケチャップ大2、ソース、塩コショウ適量、砂糖大1、醤油大1、オレガノ適量、ナツメグ適量を用意した。

まずは玉ねぎ、にんじん、にんにくはみじん切りにする。トマトはざく切りにしてオリーブオイルを熱してにんにくを炒める。

香りがたつてきたら、玉葱と合挽きミンチをいれて炒める。

玉葱が透明になってきたら他の野菜をいれて炒める。

全体的になじんだら、トマト投入！

トマトから水気が出るまで炒める。

水気が出たところに、コンソメの素、ナツメグ、塩コショウを入れて、コンソメの素がしっかり溶けるまで煮る。

残りの調味料を入れて、味を見る。

「…うっし！これなら良いだろう。あとはパスタにこいつを掛ければ…」

「あつあのー！」

「ん？あんたは…亭主の娘さんか？」

「はい！凄い手際が良くて見惚れました！それにパスタでこういった料理見たことがないですー！」

「ありがとよ。作りすぎちまった分あるが食べるか？」

「良いんですか!? ありがとうございます!」

「俺は一回あいつのところに行つてくるぜ。」

と海馬の元へと向かう城之内。

部屋へ入ると海馬は各地へと散らばったハウリアたちから定時連絡を受けていた。

「成る程。帝国は動きなし…王国の方は凡骨の言つていた者共が迷宮に挑んでいる。と言つたところか。」

「ハツ！ 魔族側は何やらキナ臭い動きをしているようで魔物を量産しているとのことです。」

「フム…」

「社長、アンカジ公国内も異常はありません。」

「お前たちに渡した装置の取り付けも進めろ。」

「「はい!」」

とハウリアたちとの通信が終わった頃を見計らい

「海馬、飯作つてきたぞ。」

「ふうん、凡骨にしてはタイミングがいいな。」

「それで各地の様子はどうなんだ？」

「まずハイリヒ王国は貴様の言う者共が迷宮に挑んでいる。教会の者共が最近になり税を増やしたとある。恐らくは魔人族側との戦争を激化させようとしているのであろう。

それに伴い帝国との結び付きを強化しようとする動きも出ている。」

最近は帝国の皇帝が迷宮組を試したそう。結果は言わんでも分かるだろう。」

「まあな。帝国の皇帝になるぐらいなんだ。経験も違う、戦闘に関しては言わずもだ
な。」

「そうだ。そして魔人族側は魔物を強化する術がある。それで軍備を整えているとい
たところか。」

「魔物の強化……んな魔法聞いたことねえな。」

「ハウリア共もそう言っていた。ならば間違いなく神代魔法が関わっているのでは
う。」

「何はともあれまずはライセンスからか。」

といつの間にか食べ終わっていた海馬はそのまま作業を続けるのであった。

「克也、社長どうだった？」

と部屋を出た城之内を恵理が呼び止める。

「相変わらずだぜ。さっさと食って作業を再開してたな。」

「それにしても社長何を作ってるんだらうね。」

「あいつが無駄なもの作るはずないからな。いつか必要になるだろ。」

そして食器を返しに降りると

「城之内さん！さっきの物凄く美味しかったです！さっきの料理を教えてください！あと出来れば私を弟子にしてください！」

と勢いよく言う看板娘のソーナ・マサカ。

「克也何したらこんな短時間で好かれるのさ？」

「いや俺はただミートソースパスタ作ったただけだぞ？」

「私もお母さんお父さんに何かしてあげたいんです！」

「うーん俺たちもここに長くいるわけじゃないからな。それでも良いか？」

「全く…克也つたらお人好しなんだから。」

「ありがとうございます先生！」

とマサカの宿の娘ソーナが城之内に弟子入りをするのであった。

そして風呂の時間となり、先に海馬と城之内が入り三十分もしない内に出て和気あいあいと風呂へと入る。

「とても良い湯ね。」

「あははレイカちゃんお風呂好きだもんね。」

「…ん、いい湯…カオリ背中流す。」

「ありがとうユエちゃん！」

「うさ〜いい湯ですう〜」

「ほらシアだらしないわよ。こつち来なさい。」

「レイカさ〜ん」

むぎゆうとレイカに抱きつき甘えるシア。

レイカもシアのうさ耳を撫でながら堪能する。

「ほら恵理リンスもしないとダメですよ。髪は女の子にとって大事なものですから。」

「ありがとう雪姫！」

「ほらヒータ逃げないでください！」

「ちよっ!? エリア! んな勢い良くお湯を描けんよ!」

「いい湯だね〜」

「本当ですね。それにしてもあの二人は元気にやってますかね？」

「心配しなくてもあの二人なら問題ないさ。というか今頃二人きりでイチヤイチヤしてるだろうしね。」

「霊使いの中でもあの二人は恋仲でとても仲睦まじいですからね。」

「光と闇の子達だったね〜あの子たち宜しくやつてるんだね〜」

「仲が良すぎて二人の空間と化してますからね。」

とアウス、ウイン、ヴェールは言う。

そして夜ユエは城之内、恵理と川の字になり三人仲良く寝る。

(…暖かい。私…ハジメと香織に…お父様…お母様に出会えて良かった…)

穏やかに眠る三人。

夜は静かに更けていった…のだが。

その夜ある一室ではうさぎ娘を甘やかしては甘い喘ぎ声やら腰を打ち付けるような音や甘美な声が部屋に響くのであった。

因みにユエから教わった遮音魔法にてそこら辺の配慮はちゃんとしていたとのこと。そうしてブルツクでの一日を終えるのであった。

ブルツクの街の漢女と変態たちの断末魔

次の日の朝。

朝食を食べた一行は各々行動を分けることにした。

海馬は街を見て文明を観察することと既に外へと出ていた。

城之内と恵理はソーナへと料理を教えるために残りハジメ、レイカはシアの武器を作るとのことでこれまた残り

香織、ユエ、シア、ヴェールの四人はシアの服装を見繕うために先日冒険者ギルドでお世話になったオバチャンことキャサリンからの地図を頼りに探す。

「ヴェールさんハジメ君たちと一緒にじゃなくて良いの？」

「心配ないよ。今回は属性とかの魔力を付与するようなものじゃないからハジメたちなら問題ないよ。それよりは街を見て回ってインスピレーションを働かせたいからね。」

折角来たんだからこの世界特有の物を作ろうと思ってるね。」

「ヴェールさんのガラス細工とっても綺麗ですから楽しみですよ！」

「……！昔お城で見たようなものより数段上！」

「ありがとね。さっ！着いたね！」

とオススメの店へと辿り着いた：辿り着いてしまった。

「あらくん、いらつしやい♥可愛い子達ねえん。来てくれて、おねえさん嬉しいわあ、たくぷりサービスしちゃうわよおくん♥」

化粧物がいた。身長二メートル強、全身に筋肉という天然の鎧を纏い、劇画かと思うほど濃い顔、禿頭の天辺にはチヨコンと一房の長い髪が生えており三つ編みに結われて先端をピンクのリボンで纏めている。

動く度に全身の筋肉がピクピクと動きギシミシと音を立て、両手を頬の隣で組みくねくねと動いている。

服装は……いや、言うべきではないだろう。少なくとも、ゴン太の腕と足、そして腹筋が丸見えの服装とだけ言っておこう。

ユエとシアは硬直してしまった：それは当然であろう。いきなりこんな姿した化物が出てきたのだ。

しかし…

「宜しくね〜こっちのウサ耳の娘の服を見てほしいんだ。」

「それから動き易そうな服を幾つか見繕ってほしいです。あと男性用の物も願います。」

と香織とヴェールはそんなこと気にせず普通に話しかける。

「ヴェッツ!? ヴェールさん!? 香織さんも!」

「…その人…人間?」

「だが、それが、伝説級の魔物すら裸足で逃げ出す、見ただけで正気度がゼロを通り越してマイナスに突入するような化物だゴラアアア!!」

「…ご、ごめんなさい」

「ユエちゃん大丈夫だよ。私たちの世界だと性別が違ってもそういう格好する人もいるしどんな格好をするのは自由だからそれにとってもいい人そうだし。」

「私も長年色んな精霊に関わってきたからね、これぐらい大したことないさ。」

「ありがとうね。それじゃあくそっちの娘の服をあわせるわねくん!」

とへたりこんでいたシアを担ぐと奥の方へと進むクリスタルベル

世紀末した格好でクリスタルベル…

そうしてシアは見繕ってもらった服に袖を通して良質な布な洋服も買えてとても満足するのであった。

中々に気遣いも出来る乙女であった。

「良い買い物をしたね。さてあとは道具屋と調味料と食材を買わないとね。」

「…人は見た目じゃないって良く分かった」

「クリスタルベルさんとてもいい人でしたね!」

「凄い良い布使ってて格安だね。そういえばヴェールさんさつき布の買える場所を聞いてたけどどうしてですか？」

「なあに弟子にプレゼントしようと思っただけ。あの娘は泣き虫な所もあるけど私の代理が出来る娘だからね。今回も苦勞掛けるからお詫びも兼ねてね。」

「そうだったんですね！」

と歩いていっていると、気がつけば数十人の男達に囲まれていた。冒険者風の男が大半だが、中にはどこかの店のエプロンをしている男もいる。

「ユエちゃんとシアちゃんの名前あつてるよな？」

「？……合ってる」

何のようだと訝しそうに目を細めるユエ。シアは亜人族であるにもかかわらず、
「ちゃん」付けで呼ばれたことに驚いた表情をする。

ユエの返答を聞くとその男は、後ろを振り返り他の男連中に頷くと覚悟を決めた目でユエを見つめた。

他の男連中も前に進み出てユエかシアの前に出る。

そして……

「ユエちゃん、俺と付き合ってください!!」

「シアちゃん！俺の奴隷になれ!!」

「「「「香織ちゃん俺と付き合ってください!!」「」」」」

「「「「お嬢さんふんでください!!」「」」」」

とまあナンパされた。

絶世の美少女三人がいるのだ。

少し頭のおかしいロリコン共もいるがまあ……愛敬ということだ。

「すいません。恋人がいますのでお気持ちは嬉しいけどごめんなさい。」

と普通に断る香織。

「……シア、道具屋はこっち」

「あ、はい。一軒で全部揃うといいですね。香織さん早く行きましょう!」

と何事もなかったように歩みを再開した。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ! 返事は!? 返事を聞かせてく」「断る(ります)」「……

ぐう……」

まさに眼中にないという態度に、男は呻き、何人かは膝を折って四つん這い状態に崩れ落ちた。しかし、諦めが悪い奴はどこにでもいる。まして、香織たちの美貌は他から隔絶したレベルだ。多少、暴走するのも仕方ないといえれば仕方ないかもしれない。

「なら、なら力づくでも俺のものにしてやるう!」

暴走男の雄叫びに、他の連中の目もギンツと光を宿す。二人を逃さないように取り囲

み、ジリジリと迫っていく。

そして遂に、最初に声を掛けてきた男が、雄叫びを上げながら香織に飛びかかった。日本人が彼を見たらこう叫ぶに違いない。「あつ、ルパ○ダイブ!」と。

「わあくアニメで見たことあるけどル○ンダイブってホントにあるんだ!」

と日本人な香織は呑気に感動していた。

ユエは冷めた目付きで一言呟く。

「凍樞」

直後、男が首だけを残して氷の樞に閉じ込められ、重力に引かれて落下した。「グペツ!」と情けない悲鳴を上げて地面に転がるル○ンダイブの男。

「……」

ユエは、ツカツカと氷の樞に包まれる男のもとへ歩み寄った。周囲には、ユエの実力に驚愕の表情を見せながらも、我こそ第二の○パンなり! と言わんばかり身構えている男連中がいる。なので、ユエは、見せしめをすることにした。

ユエが手をかざすと男を包む氷が少しづつ溶けていく。それに解放してもらえるのかと表情を緩める男。さらに熱っぽい瞳でユエを見つめる。

「ユ、ユエちゃん。いきなりすまねえ!だが、俺は本気で香織ちゃんのことを……」

未だ氷に包まれながら男は更に思いを告げようとするが、その言葉が途中で止まる。なぜなら、溶かされていく氷がごく一部だけだと気がついたからだ。それは……

「あ、あの、ユエちゃん？ どうして、その、そんな……股間の部分だけ？」

そう、ユエが溶かしたのは男の股間部分の氷だけだ。他は完全に男を拘束している。嫌な予感が全身を襲い、男が冷や汗を浮かべながら「まさか、ウソだよな？ そうだよな？ ね？」という表情でユエを見つめる。

「……今香織を襲おうとした……ギルティ……許さない………狙い撃つ」

そして、風の礫が連続で男の股間に叩き込まれた。

アッー！！

もうやめてえー

おかあちゃん！

男の悲鳴が昼前の街路に響き渡る。マ○オがコインを取得した時のような効果音を響かせながら（本当の音は生々しいので、懐かしき○リオをご想像ください）執拗に狙い撃ちされる男の股間。きつと中身は、デン○シーロールを受けたボクサーのように翻弄されていることだろう。

周囲の男は、囲んでいた連中も、関係ない野次馬も、近くの露店の店主も関係なく崩

れ落ちて自分の股間を両手で隠した。

やがて永遠に続くかと思われた集中砲火は、男の意識の喪失と同時に終わりを告げた。一撃で意識を失わず、しかし、確実にダメージを蓄積させる風の魔法。まさに神業である。

更に追加で纏雷を足に纏わせて…グシャリと中の神経と睾丸をまとめて破壊した。

ユエは人差し指の先をフツと吹き払い、置き土産に言葉を残した。

「……漢女になるがいい」

「香織さん!!怪我ないですか!変態に触られてないですか!」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。」

「…香織は私たちが守る!」

と自分よりも香織を狙ったことに怒っているユエ。

この日、一人の男が死に、第二のクリスタベル、後のマリアベルちゃんが生まれた。彼は、クリスタベル店長の下で修行を積み、二号店の店長を任され、その確かな見立てで名を上げるのだが…それはまた別のお話。

ユエに、「股間スマツシャー」という二つ名が付き、後に冒険者ギルドを通して王都にまで名が轟き、男性冒険者を震え上がらせるのだが、それもまた別の話だ。

ユエとシアは、畏怖の視線を向けてくる男達の視線をさらつと無視して香織を連れて

買い物物の続きに向かった。道中、女の子達が「ユエお姉様……」とか呟いて熱い視線を向けていた気がするがそれも無視して買い物物に向かった。

因みにヴェールは踏んでくださいと言った者たちをそのまま座らせて人間椅子にしながら靴でその頬をグリグリしたりガラス細工や宝石、質の良い粘土や羊皮紙、絵の具の場所を聞いていたのであった。

後に硝子の女王なんて言われるのだが余談である。

さらばブルック。旅の再開

ユエとシア、香織たちが宿に戻るとハジメもちょうど作業を終えたところのようだった。

ヴェールとは途中で別れた。理由は他の弟子たちへのお土産だとのこと。

「お疲れ様。何か町中が騒がしそうだっただけど何かあった？」

「どうやら、先の騒動を感知していたようである。」

「……問題ない」

「あく、うん……そうですね。問題ないですよ！」

服飾店の店長が化け物じみていたり、香織を襲おうとした一人の男が天に召されたりしたが、概ね何もなかったと流す三人。そんな三人に、ハジメは、少し訝しそうな表情をするも、まあいいかと肩を竦めた。

「必要なものは全部揃った？」

「……ん、大丈夫」

「ですね。食料も沢山揃えましたから大丈夫です。にしても宝物庫ってホント便利ですよね」

「ホントにそうだね。僕の技術じゃまだまだ作れなさそうだから目標は宝物庫を作れるようにしたいね。」

ヴェールは片手間で作れるみたいだからね。」

「ヴェールさん凄いいね！」

「さて、シアさん。これを」

そう言ってハジメはシアに直径四十センチ長さ五十センチ程の円柱状の物体を渡した。銀色をした円柱には側面に取っ手のようなものが取り付けられている。

ハジメが差し出すそれを反射的に受け取ったシアは、あまりの重さに思わずたたらを踏みそうになり慌てて体勢を整えた。

「ここも海馬の鍛練の賜物か身体強化なしでもある程度持てるようになっていた。」

「な、なんですか、これ？ 物凄く重いですけど……」

「それはシアさん用の新しい大槌だからな。重いほうがいいと思ってるね。」

「へっ、これが……ですか？」

シアの疑問はもつともだ。円柱部分は、槌に見えなくもないが、それにしても取っ手が短すぎる。何ともアンバランスだ。

「その状態は待機状態で取り敢えず魔力流してみて」

「えっと、こうですか？ ツ！」

言われた通り、槌モドキに魔力を流すと、カシユン！ カシユン！という機械音を響かせながら取っ手が伸長し、槌として振るうのに丁度いい長さになった。

この大槌型アーティファクト：ドリユツケン（ハジメ命名）は、幾つかのギミックを搭載したシア用の武器だ。魔力を特定の場所に流すことで変形したり内蔵の武器が作動したりする。

ハジメの済ませておきたいことは、この武器の作成だったのだ。午前中、ユエ達が買い物に行っている間に、改めてシア用の武器を作っていたのである。

「ハジメさんありがとうございます！」

「機能の方は随時アップデートしていくから使いづらかったり何か気付いたことがあったら遠慮なく言ってね。その都度改良していくから。」

「シアさん良かったね！」

「はいです！これでハジメさんと香織さんをもっと守れるようになります！」

「…ん…頑張れ！」

「おう！三人とも帰ったか！」

「城之内君！」

「…お父様…ただいま。」

「おかえりどうだったユエ？」

「…ん！色んなものがあつてカオリと沢山買い物できて良かった！」
「そうか」

と城之内はユエの頭を撫でユエも城之内に抱き付く。

「ユエおかえり。香織、シアさんもおかえり！」

「恵理ちゃんただいま！」

「今ソーナちゃんに肉じゃがを教えててね。今日の夕飯に出す予定なんだ！」

「…肉じゃが？」

「肉じゃがは作る人によつて色んな味わいになるからお袋の味つて言われてるんだ。」

「それとこの辺はパンが主食らしいからシチューとか野菜スープ、ビーフシチューの作り方も教えたよ。」

「レシピはお袋さんに渡したからソーナの奴も覚えられるだろうぜ。」

「とうかレシピ渡したらお金払うって言われちゃったね。」

「……ん。それだけ美味しいってこと！」

「けど金もらうほどじゃねえから今度来たときにサービスしてくれて言つたな。」

「さっ！皆手を洗つて身だしなみ整えよう!!」

と一同は部屋へと一度戻るのであつた。

一方のヴェールはホクホク顔で買った弟子たちへのお土産を自作の收容空間に入れ

て帰っているところだった。

「いや、大量大量。これなら納得するかな、ハイネに合いそうな布有ったしエーデルも納得の純度の寶石、ピットレの新しい絵の具、ポトリーの製作するゴーレムの素材、ジェニーは羊皮紙で良いだろうしシユミツタは魔石を上げれば良いだろうし良いことだらけだな」

と歩いていると海馬の姿があつた。

海馬は子供たちに何か言いながら懐から五千ルタを握らせていた。

そうして、子供たちがいなくなったのを見計らい声をかける。

「やあセト、何してたの？」

「貴様か、何をしようが俺の勝手だ。」

「ふくん。子供たちに案内させて案内してくれたお駄賃を上げてたみたいかな？」

それか技能的な今後の投資とか？」

そう海馬はブルックを見て周る際に孤児や親のいない子供たちに街を案内させてその報酬を与えていた。

「ふうん。勤の良い奴だ。何処の世界でも孤児や捨てられた者というのは一定数いる。そんな者たちは明日を生きるのに必死だ。だからこそ下手な大人よりも情報を持つているものだ。」

俺はそれを対価に金を払った。

そして先程接した中で収納という技能を持った者、書士の天職を持った者は冒険者ギルドに推薦をしておいた。受付の女に言っておけば悪いようにはせんだろう。」

KC社長としてあらゆる人間を見てきた海馬はトータスという異世界にて見ようと思えばその者の秘めた才能、技能を見抜けるようになっていた。

「アフターケアもしたってことだね。でもそれで貧しい子達が減ることはないよ。一時的に良くなってもまた増えてっていう連鎖だ。」

ヴェールも長く生きているからこそ簡単には貧しい子達が減らないということは知っている。

知っているからこそ問いかける。

「そんなことは俺が一番よく知っている。だからこそこのトータスでもデュエルモンスターズを流行らせる。」

そして貧しい者たちでも気軽に遊び強くなればそれ相応の恩恵を受けられカードショップや、だれでも学ぶことの出来る学舎、強くなれずとも此方に支部を作り働く人員にすることにより働き口を増やし貧富の差を少しでも失くす。」

「そう。それが長く険しい道のりでもかい？」

「道とは己の力で切り開く物だ。だが越えるのならばより険しい方がやりがいがあると

いうものだ。」

「それなら私は何もいわないよ。何かあれば依頼してくれれば手伝うからいつでも言うてね。」

とヴェールも海馬の行動の先にあるものに興味があるので手伝う気満々であった。そうして二人ともマサカの宿に戻り夕飯を食べるのであった。

夕食後

「ねえ恵理と克也の二人ちよつと良いかい？」

「どうしたんだヴェール？まだ食べたりないか？」

「ビーフシチューの残りまだあるよ？」

「ありがたく貰うよ。」

と夕飯を食べ各々部屋へと戻る中で誰もいなくなった食堂にてヴェールは恵理と城之内に話しかける。

「聞きたいのはセトのことだね。彼は孤児に対して真摯的だったからどうしてか聞きたくてね。」

「ああその事か…そうだな。俺たちが言ったことは内緒にしてくれよ。」

「社長はね。元々は孤児だったんだ。」

「弟のモクバ君と二人幼い頃に親は事故で亡くしたんだって」

「んで親戚たちは遺産を食い潰して結果二人は孤児院に入ったんだ。」

「それからのことは俺らも知らねえけど今の性の海馬剛三郎つつうのに引き取られてその中で奴は死に物狂いで頑張って養父の社長の座を奪い取ったんだ。」

「んで剛三郎の時KCは軍事会社だったんだ。」

「軍事ってことは…戦争とか？」

「ああ。で海馬の構想していたバーチャルシユミレーションシステムをそっちに運用しようとして海馬の逆鱗に触れたみたいでな。」

「社長はそれまで軍事会社だったKCをおもちややゲームの開発に力を入れるようになったんだ。」

「んで、あいつの夢が身寄りの無い子供ならタダで遊べるテーマパーク…海馬ランドを作るって。」

俺たちの世界の海馬は本当にそれを実現できる所まで来てたな」

「違う世界とはいえこっちの社長も同じ感じじゃないかな？」

「そういうことなんだね。」

「ヴェールはどうして聞きたかったの？」

「今日街を周ってたときセトが孤児や親のいない子達に案内したりアフターフォローしてたから気になってね。」

成る程そういう背景があつたのか。」

「知りたかつたことは知れたか？」

「うん。セトは立派だつてことだね。私も精霊界に帰ったら考えてみるかな。」

そうしてヴェールはそのまま霊体化して戻るのであつた。

———
翌日

早い時間帯にチェックアウトするためマサカの宿の女将にお礼を言う。

「それじゃ気を付けていくんだよ。」

「ありがとう女将さん！また来たときは泊まらせて貰うね！」

「こつちの方こそ礼を言わないとだよ。ソーナがあんなに一生懸命になるのは初めてだ。あんたらのおかげだよ。」

「じゃあおばちゃん！行つてくるぜ！」

「ああいつてらしゃい！」

「先生！」

「ソーナまだ寝てたんじゃ？」

「先生が行くのに見送らない弟子はいません！今度いらしたときはもつと美味しい料理を作れるように精進します！」

「おう！楽しみに待ってるぜ！」

「ふふ、城之内君凄く懐かれてたね。」

「克也君の人柄が良いからだね！」

「良いお弟子さんですね克也さん！」

「……！流石お父様！」

「ふうん。俺には関係のないことだ。行くぞ！目指すはライセンス迷宮だ！」

と海馬を先頭に彼らはブルツクの街を出るのであった。

ライセン迷宮までの道のり

死屍累々

そんな言葉がピッタリな光景がライセン大峽谷の谷底に広がっていた。ある魔物はひしゃげた頭部を地面にめり込ませ、

またある魔物は頭部を粉碎されて横たわり更には全身を炭化させた魔物など死に方は様々だが一様に一撃で絶命しているようだ。

当然、この世の地獄、処刑場と人々に恐れられるこの場所で、こんなことが出来るのは……

「一撃必殺ですう！」

ズガンツ!!

【ライセン大峽谷】では、相変わらず懲りもしない魔物達がこぞつて襲ってくる。

そんな中でも海馬は修行の一環とシアに露払いを任せていた。

時折恵理が火霊術で魔物を焼き尽くしたりもしているが殆どはシアが攻撃を担当していた。

シアの大槌がその絶大な膂力をもって振るわれ文字通り一撃必殺となって魔物を叩

き潰す。

攻撃を受けた魔物は自身の耐久力を遙かに超えた衝撃に為す術なく潰され絶命する。餅つきウサギも真つ青な破壊力である。

しかも身体強化も軽めの物しか使っておらずである。

海馬主導の訓練は確実にシアを成長させていた。

城之内達はブルツクの町を出た後魔力駆動四輪を走らせてかつて通った「ライセン大峽谷」の入口にたどり着いた。

そして現在は、そこから更に進み野営もしつつ「オルクス大迷宮」の転移陣が隠されている洞窟も通り過ぎて、更に二日ほど進んだあたりだ。

「ライセンの何処かってだけじゃやっぱわかんねえな」

「まあここはついででもあるから探してみなければ大火山の迷宮へ行けば良いと思うよ。」

「そうだね。今はとりあえずシアさんの経験になるから相手して貰ってるけど何事も程々が一番だね。」

「シアさ〜ん怪我したら治すから早めに言ってね!」

「はいです!香織さん!なるべく怪我しないようにします!じゃないと社長からまた重りを二倍にされちゃうですう〜」

「ふうん。それなりに動けるようになってきたか。後は城之内やユエのような魔法職の者らとの鍛錬をして対人戦は経験を積ませるとしよう。」

「…対人戦は魔族との戦いのため？」

「そうだ。いずれは合間見えるだろうからな。」

そんな風に愚痴をこぼし、魔物の多さに辟易しつつもシアの経験値としつつ更に走り続けること三日。

その日も収穫なく日が暮れて谷底から見上げる空に上弦の月が美しく輝く頃、ハジメ達はその日の野営の準備をしていた。

野営テントを取り出し、夕食の準備をする。町で揃えた食材と調味料と共に調理器具も取り出す。この野営テントと調理器具はハジメと城之内謹製のアーティファクトだったりする。

野営テントは生成魔法により創り出した“暖房石”と“冷房石”が取り付けられており、常に快適な温度を保ってくれる。また、冷房石を利用して“冷蔵庫”や“冷凍庫”も完備されている。さらに、金属製の骨組みには“気配遮断”が付加された“気断石”を組み込んであるので敵に見つかりにくい。

調理器具には、流し込む魔力量に比例して熱量を調整できる火要らずのフライパンや

鍋

魔力を流し込むことで「風爪」が付与された切れ味鋭い包丁などがある。スチームクリナーモードキなんかもある。

どれも旅の食事を豊かにしてくれるハジメの愛し子達だ。しかも魔力の直接操作が出来ないと扱えないというある意味防犯性もある。

諸々の属性付与はヴェールの手を借りながら作ったので性能もとても良い。

そうして城之内は神秘の中華鍋で毒素を取り除いた魔物肉に塩、胡椒を振り味付けで一分程焼いていき裏面も焼いていく。

皿へ移してさらにそこにハジメが錬成したアルミホイルを被せて余熱を入れていく。そして予め作った玉ねぎをすりつぶしたオニオンソース、デミグラスソース、バターの風味のステークソース、赤ワインソースを並べる

赤ワインソースはフライパンに水大さじ2を入れて中火で煮立たせ、しょうゆ、みりんを加え、ひと煮立ちしたら赤ワインを加え煮立ったらバターを加える。バターが溶けたら火からおろしステーキにかけるだけ。

そしてサラダに恵理とユエの二人で作ったポテトサラダを付け足して完成！

魔物肉のステーキとポテトサラダの盛り合わせ

「美味しそうだね！」

「シアさんが倒した魔物だよ！」

「セトが選んだ特に美味しそうな魔物：美味しそう」

「海馬は赤ワインの方で良いよな？」

「当然だ。そこらのソースなどこの俺には合わん。」

「とても美味しそうです」

「お好みでパンとご飯もあるよ！」

「ブルツクの街でもお米が売ってて良かったよ。」

そうして全員思い思いに食べ始める。

「伴侶そっちのバターのやつ取ってくれ！」

「おうよ！中々良い出来だからな！」

「香織様スープどうぞ。」

「エリアさんありがとう！」

「錬成の技術も上がったし錬金術にも手を出してみないかいハジメ？」

「いやいやハジメには錬金術より錬成のが合ってるよ。まずはそっちを極めてから錬金術の方に取っかかる方が良いでしょう」

「アウスもヴェールもありがとう。ご飯のおかわりいる？」

「うん！」

「ユエさん、不調とかはありませんか？ここは魔力の通りが悪いですから何かあれば言ってくださいね。」

「…ありがとうウイン…」

「シアさん後で柔軟しましょうね。身体が柔らかければ動きにもキレが出来ますし怪我もしにくいですからね。」

「雪姫さんありがとうですう！」

「社長、例のやつどうなの？」

「問題なく起動は出来ていると報告が来ている。後はハウリアたちの働き次第でトータス中に取り付けられるだろう。」

「各々夕飯を済ませてそれぞれテントを設置し寝るときは交代で見張りをするようする。」

城之内が最初の見張りをすることにして他は眠り始める。

暫くすると寝息も聞こえ始め城之内はカードを触る。

念入りに装備魔法を確認し罫カードも十全に確認する。

「城之内君…」

「ハジメ…いやレイカか？」

「うん。ハジメは寝ちゃってるからその…ちよつとお話ししたくて」

「ああいいぞ。」

とレイカは城之内の隣に座る。

暫く無言でいると

「城之内君はさ…解放者の人たちのことどう思う?」

「そうだな。素直にすげえと思う。今よりもっと昔にエヒトの野郎を倒そうとして団結して…けど道半ばで潰えちまったがそれでも後世に希望を託そうとして大迷宮を作り出した。」

「うん。そうだよね…」

「急にどうしたんだ?」

「何かね…時折記憶が見えたりするんだ。今よりも昔で解放者の人たちと一緒に戦ってるような場面が…」

「夢とは違うんだな。」

「うん。凄いいリアリティがあつて…今のハジメや私に似てるような人が氷血を使ってるようなの。とても精度が高くてその人みたく技を出したりも出来たりするんだ。」

「あれか氷血を取り込んだ時にその技能を持ってた奴の記憶も引き継いだ感じなのか?」

「断片的だけどそうなのかも。解放者の人たちへの感情流れてきたんだ。仲間としても

友人としても仲が良く特に金髪の女の子と姉妹みたいだった。」

「それはハジメも知ってるのか？」

「ハジメにも伝えたけどハジメの方はそういうのを見てないみたいなんだ。多分私が氷血の適合率が高いからなのかも……」

「何はともあれ様子見だな。辛かったりしたら言ってくれ。」

「ありがとう……それが解放者の人に会えれば何か分かるのかもしれない……でも解放者の人は今よりも遥か昔の人だから流石にないもんね。」

「だな。それかオスカーみたいにホログラムで記録を残してる可能性はあるな。それか日記みたいなのがあれば良いんだがな。」

「でもそう上手いこといかないかな。」

「全部が全部上手くいくようなら人生は苦労しないさ。だからそうなるように俺たちは足掻くだけだ。」

「うん！ ありがとう克也君……」

「お、おう。」

とレイカの寝ぼけ眼で上目でふにやりと微笑んだ顔に城之内も思わず赤面する。

「面白いや呼び方」

「下の名前で呼びたくて……ダメ？」

「んなこたねえよ。」

「ふふ…これからも宜しくね。」

そうしてレイカもテントへと戻る。

「ふう危なかつた…」

「伴侶く恵理のやつがいながら…」

「うおっ!?!ヒータ!」

「なんてな。レイカのやつも伴侶のことは好いてるから別にそこは気にしてねえ。ま、伴侶に言う必要はねえと思うけど真摯に向き直ってやれよ」

「おう!サンキュー!」

そうしてヒータと共に見張りをして交代で見張りを代わる代わるすること2日
今日もテントを張るなかでシアがお花摘みに少し席を外すと

「ハ、ハジメさくん! 香織さくん! 社長!

大変ですう! こつちに来てくださあ〜い!」

何やら真剣な言葉に何事かとシアの声がした方へ行くと

そこには巨大な一枚岩が谷の壁面にもたれ掛かるように倒れおり、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。

シアは、その隙間の前でブンブンと腕を振っている。その表情は信じられないものを見た！というように興奮に彩られていた。

「こつち、こつちですう！ 見つけたんですよお！」

「喚くな、鬱陶しい……何を見つけたというのだ。」

はしやぎながら海馬の手を引つ張るシアの姿に、全員が何事かとそちらへと向かう。

シアに導かれて岩の隙間に入ると、壁面側が奥へと窪んでおり、意外なほど広い空間が存在した。そして、その空間の中程まで来るとシアが無言で、しかし得意気な表情でビシツと壁の一部に向けて指をさした。

その指先をたどって視線を転じる城之内たちは、そこにあるものを見て「は？」と思わず呆けた声を出し目を瞬かせた。

二人の視線の先其処には壁を直接削って作ったのであろう見事な装飾の長方形型の看板があり

それに反して妙に女の子らしい丸っこい字でこう掘られていた。

“おいでませ！ ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪と

ライセン大迷宮 1

「まじでライセン大迷宮の入口なのか？」

「何て言うか…軽いというかチャライというか」

「でも多分ここがそうなんだと思うよ。」

「…ん、ライセンの名前は分かるけど…ミレデイってところ」

「そうだね。ライセンの名前は広がってるけどそのファーストネームまでは広がってないし、オスカーさんの日記にも書いてあったから間違いないね。」

「ふうんバカ娘にしては上出来だ。」

「ふふん！私だつてやれば出来るんです！どうですか社長！」

「その程度ではしゃぐな。…入口らしきものは端から見えてない」

「つつうことは擬態させてるってことか？」

「恐らく。」

そうして、海馬は付近を搜索する。

城之内たち一行はシアが見つけた看板を見ながらも万全の状態を整えようとする。

「大迷宮でここの特性を考えると今まで以上に魔法は使いづらくなりそうだね。」

「……か。」

と海馬がその薄くなっている部分を見て

「バカ娘ここを叩いてみる。」

「はいですう！」

バシバシとシアが遠慮なく叩くと

ガコンツ！

「ふきゅや?!」

「む?」

と城之内たちの眼前で、シアの触っていた窪みの奥の壁が突如グルンツと回転し、シアと巻き込まれた海馬はそのまま壁の向こう側へ姿を消した。さながら忍者屋敷の仕掛け扉だ。

「はきゅつ!?!なっ!何ですか!」

「迷宮の仕掛けか……」

ヒュヒュヒュ!

無数の風切り音が響いたかと思うと暗闇の中を海馬とシア目掛けて何かかが飛来した。海馬は即座にその正体を暴く。

それは矢だ。

全く光を反射しない漆黒の矢が侵入者を排除せんと無数に飛んできているのだ。

「成る程暗闇と矢の色が同じということは見えづらく悪意があるな」

「はわわわ!!しや、社長危ないですう!!」

と海馬に鍛えられたことハウリア特有の聴力の良さで矢の位置と本数を判断し、シアは海馬から渡されていた伸縮する警棒のような物を両手にカシヤンと一瞬で伸ばすと飛来する漆黒の矢の尽くに対処する。

ドリユツケンでは小回りが効かないと判断してかつ海馬に当たらぬように軌道を反らしたりとハウリアから海馬の周りのことは頼むと念を押されていたシアは確りと弾く!

カンツカンツカンツと金属同士がぶつかるような音を響かせ、一本の矢も逃しはしない。

本数にすれば二十本。一本の金属から削り出したような艶のない黒い矢が地面に散らばり、最後の矢が地面に叩き落とされる音を最後に再び静寂が戻った。

と、同時に周囲の壁がぼんやりと光りだし辺りを照らし出す。ハジメ達のいる場所は、十メートル四方の部屋で、奥へと真つ直ぐに整備された通路が伸びていた。そして部屋の中央には石版があり、看板と同じ丸っこい女の子文字でとある言葉が掘られてい

た。

「ビビった？　ねえ、ビビっちゃった？　チビってたりして、ニヤニヤ」

「それとも怪我した？　もしかして誰か死んじゃった？　……ぶふっ」

「ピキツとシアの額に青筋が……」

「ムツキー！！何ですか！この文は！社長に当たったらどうするんですか!!」

「ふうん……毒の類いはないということは小手調べということか。」

「海馬無事か……てそりゃ無事だよな。」

「何かあつてもシアさんもいるし大丈夫だね。」

「はいです！社長の身の回りの危険は私が取り除きますう！父様からも頼まれますか

らー！」

そして、シアの準備も整い、いざ迷宮攻略へ！と意気込み奥へ進もうとして、シアが

石版に気がついた。

顔を俯かせ垂れ下がった髪が表情を隠す。しばらく無言だったシアは、おもむろにド

リユツケンを取り出すと一瞬で展開し、渾身の一撃を石版に叩き込んだ。ゴギヤ！とい

う破壊音を響かせて粉碎される石版。

よほど海馬を狙ったことが腹に据えかねたのか、親の仇と言わんばかりの勢いでド

リユツケンを何度も何度も振り下ろした。

すると、砕けた石板の跡、地面の部分に何やら文字が彫つてあり、そこには……

「ぎんねくん♪ この石板は一定時間経つと自動修復するよお〜プ〜クスクス!!」

「…なんとというか性格が悪いつつうか…」

「うざいといえれば良いのかな?」

「う〜んやつぱり大迷宮は一筋縄じゃいかなさそうだね。」

そうして一行はライセン大迷宮を攻略するために歩みを進めるのであった。

ウウイイイイイイイン

ガシツ!

「ん?なんだ!?!」

と突如として大きめの手のようなマジックアームが城之内の肩を掴む。

そして

「うおおおおおおお!!なんつう力で引つ張つてやがる!」

城之内を物凄い力で引つ張り出す。

ザシユツ!

「面倒を掛けさせるな城之内。」

とすぐさま海馬が城之内のデッキから渡されていた伝説の剣にて断ち切る。

「わりの海馬、助かったぜ。」

「魔眼石のメガネに反応はなかったから物理的なトラップがあるってことかな……」
「これは気が抜けないね。」

どうやらライセンの大迷宮はオルクス大迷宮とは別の意味で一筋縄ではない場所のようだ。

こうして城之内たちはライセン大迷宮を進んでいくのであった。

その様子をエヒトから感知されないように城之内のデッキの中で見守るヘルモス自身も見守る。

(ミレディ：…我らは蛇神を倒すためにここから離れた…再びこの地に踏み入れるまでミレディは一人戦ったのだろう…願わくば弔ってやりたい…)

と考えるヘルモス。

そのヘルモスもまさか本人がまだ生きて自身ならびにハジメ、レイカを狙っていると
は考えもしなかったのであった。

????

やっぱりこれぐらいなら切り抜けるよね♪

あのマジックハンド魔力とか抜いて完全に死角からの構造で大型の魔物だって連れてこれる一品…

それもちゃんと切り抜けたんだから…

それにしても魔力的にはエス姉その物だけど…なんか違和感あるんだよね…

…もしかしてエス姉の子孫？

で先祖返りかして氷血の技能を持ったのかな？

まだまだ氷血の力を出しきれてないし

こここの分解効率を考えてもエス姉ならいつも通り操るし…

それなら納得がいくけど…うくん…まあいつか♪

いずれにしるここできたくたばるようならそれはそれで偽物だろうしクソ神に良いように操られるだけだし…

あつ！でもヘルモスとエス姉の子孫？はちゃんと迎えにいかないとか♪

あく楽しみだな…フフフフフフフフフフフフフフ…

こことか模様替えとかかないと…

あと重要な所以外はゴーレムに任せて

それからこここのベッドもトリプルにしとこう♪

とその主……解放者のリーダーにしてエヒトと戦った最後の生き証人でその瞳に狂気を宿した……ミレディは準備をするのであった。

ライセンス大迷宮2

改めてライセンス大迷宮では魔法の使用が困難であった。

大迷宮に入り魔法の分解が谷底よりも早く魔法職であるユエや回復魔法、及び毒魔法主体の香織は魔法の効果範囲も狭まっておりハジメにとつても多大な影響が出ている。

“空力”や“風爪”といった体の外部に魔力を形成・放出するタイプの固有魔法は全て使用不可となっており、頼みの“纏雷”もその出力が大幅に下がってしまったている。

ドンナー・シユラークは、その威力が半分以下に落ちているし、シユラーゲンも通常のドンナー・シユラークの最大威力レベルしかない。

やはり身体強化の出来るシアや運動神経の良い城之内、海馬、そして霊術が問題なく使える恵理が主体となる。

そうして道なりに通路を進み、とある広大な空間に出た。

そこは、階段や通路、奥へと続く入口が何の規則性もなくごちゃごちゃにつながり合っておりまるでレゴブロックを無造作に組み合わせたような場所だった。

一階から伸びる階段が三階の通路に繋がっているかと思えば、その三階の通路は緩やかなスロープとなつて一階の通路に繋がっていたり、二階から伸びる階段の先が、何も

ない唯の壁だったり本当にめっちゃくちゃだった。

「こりやまた、ある意味迷宮らしいと言えばらしい場所だな」

「……ん、迷いそう」

「でも昔こういう迷路に憧れてたな」

「まっどこかしらに進めば行けるだろ。」

「そうだね。王様の心の迷路の方が余程迷いやすかったね！」

「南雲、先程の入口付近同様マーキングを施しつつ進む。行くぞー！」

と海馬はどんどん進んでいく。

「流石社長ー！どんどん進んでいきますうー！それにしても流石は腹の奥底まで腐ったヤツの迷宮ですう。このめっちゃくちゃ具合がヤツの心を表しているんですよおー！」

とシアは先ほどのことをプンプン怒りながらも海馬へ付いていく。

「まあまあシアさん、気持ちには分かるけど落ち着いて。何事も平常心じゃないと避けれるものも避けれなくなっちゃうから方の力を抜いて。」

とハジメはシアのうさ耳を、撫でながら落ち着かせる。

「はふう〜落ち着きますう〜」

「シアさんったら」

「……カオリ。考えても仕方ない」

なお、先程の海馬がハジメへ言った“マーキング”とは

ハジメの“追跡”の固有魔法のことだ。

この固有魔法は、自分の触れた場所に魔力で“マーキング”することで、その痕跡を追う事ができるというものだ。生物に“マーキング”した場合、ハジメにはその生物の移動した痕跡が見えるのである。

今回の場合は、壁などに“マーキング”することで通った場所の目印にする。“マーキング”は可視化することもできるのでユエやシアにもわかる。魔力を直接添付しているの、分解作用も及ばず効果があるようだ。

なので、入ってきた入口にもマーキングは施しているので一度迷宮から出ることも可能である。

そうして一行は歩いていると突如海馬が左に避けて歩き出した。

「なんだ？海馬の奴いきなり左に避けて」

ガコンツ

という音を響かせて城之内の足が床のブロックの一つを踏み抜いた。そのブロックだけ城之内の体重により沈んでいる。城之内達が思わず「えっ？」と一斉にその足元を見た。

その瞬間、

シヤアアア!!

そんな刃が滑るような音を響かせながら、左右の壁のブロックとブロックの隙間から高速回転・振動する円形でノコギリ状の巨大な刃が飛び出してきた。右の壁からは首の高さで、左の壁からは腰の高さで前方から薙ぐように迫ってくる。

「うおおおおおまつ!?!」

「回避してー!」

ハジメは咄嗟にそう叫びつつ、マトリツ〇スの某主人公のように後ろに倒れ込みながら二本の凶悪な刃を回避する。香織もそれを真似て同じく回避する。

二人とも身体が柔らかいので特に怪我なくやり過ごす。

ユエは元々背が小さいのでしやがむだけで回避した。

シアは海馬と共に歩いていたらちめトラップに掛からずに済む。

城之内は驚きつつも冷静に恵理を抱えて前へと飛ぶことでやり過ごす。

何とか回避したようだ。前から「はわわ、はわわわ」と動揺に揺れる声が聞こえてくる。

二枚の殺意と悪意がたつぷりと乗った刃はハジメ達を通り過ぎると何事もなかった

ように再び壁の中に消えていった。第二陣を警戒して、しばらく注意深く辺りを見回すハジメ。しかし、どうやら今ので終わりらしい。ホッと息を吐き後ろを振り返ろうとして、

不意に海馬が戻ってきてむんずとハジメ、香織、ユエの三人を引つ張る

その行動に城之内が声を掛けようとした瞬間今の今までハジメ達がいた場所に

頭上からギロチンの如く無数の刃が射出されるでバターの如く床にスつと食い込んだ。やはり先程の刃と同じく高速振動している。

「あ、危なかった…物理的なトラップだから魔眼石に反応もなかった…海馬さんありがとうございませすー！」

「しっかし良く分かったな海馬！」

「ふうん。この程度のトラップ、幼稚なイタズラに過ぎん。罠とは二重三重に気付かれんように仕掛けるからこそ相手にダメージがゆく。何事も用心することに越したことはないということだ。」

と海馬は再び歩き出す。

次に待ち構えていたのは傾斜のある階段が歩いていると突然階段が引つ込み角度のあるスロープとなった。

しかし海馬は慌てることなく左手に持っていた城之内に作らせていた銀のアタツ

シユケースを壁に打ち付けると杭とワイヤーが連結した一種の命綱にした。

シアは海馬に捕まり、ハジメは香織、ユエを背負い靴に仕込んだ鉋石と義手に錬成して即席のスパイクにして落下を防ぐ。

城之内は恵理を背にそのまま伝説の剣を突き刺して何とか落下を防ぐ。

こうも対応が早かったのは海馬がいち早く行動したおかげだろう。

スロープの先の下を見てみるとカサカサと動く生き物がいてリン鉋石という空気と触れあうと光る鉋物を塗料にしたのか文字が浮かび上がる。

彼等に致死性の毒はありません”

でも麻痺はします”

存分に可愛いこの子達との添い寝を堪能して下さい、プギャー!!

「なんつう嫌がらせだよ!？」

「あれは女の子としても絶対に体験したくないね…」

「…あれ? あそこの下…横穴があるっぼいね。」

「ほう。ならばそちらから行くでしょう。」

と海馬はワイヤー代わりにしたアタッシユケースを下へとどんどん伸ばしていく。

「僕たちも行こう! 香織、ユエも確り捕まってて!」

「うん、ありがとうハジメ君」

「……ん、ハジメ凄いい頼りになる」

「んじやあ俺たちも行くか。」

と城之内はデカイホチキスのようなものを取り出してそのまま勢い良く壁へと突き刺して簡易版の梯子へとするとそのまま下へと降りて横穴へと入るのであった。

「ぐぬぬぬぬ……!!なにさ！幼稚なイタズラって!!もう怒った！こうなったらあんまり使わないようにしてた溶岩と硫酸、竹付きトラップもそっちに配置してやる！」

それにヘルモスもヘルモスだよ！どうして私じゃない女を抱っこしてるのさ！そこは私の特等席なのに……ヘルモスにもお仕置きしてやる！吊り天井トラップで潰されて反省させてやる!!」

と一人愚痴るミレディであった。

ミレディも気付かぬ内に長い時の間に凍りついていた感情がゆっくりと再燃しはじめていた。

その次のトラップは文字通り天井そのものが降ってくる吊り天井トラップであったが城之内が受け止めることで事なきを得て海馬、シアは先へ脱出して香織、ユエ、恵理も脱出した。

「ハジメも早く行け!!俺も流石に限界近いからよ……!」

「克也君だけ置いてけないよ!そうだ!克也君剣貸して!」

とハジメからバトンタッチしたレイカが城之内から伝説の剣を借りると

「多分……行けるはず……それ!」

とレイカは氷血の力を使い伝説の剣を支柱にすることで天井がこれ以上落ちてこないように固定した。

「長くは持たないから急ご!」

「サンキューレイカ!」

とそのままトラップを抜け出す。

「レイカちゃんポジション飲んだ方が良いよ!」

「……ん!いつき!」

「んくでもそれほど疲労感があるわけでもないんだよね。それに何時もよりは力を使っただけどあんまり変わらないみたいだし?」

「この迷宮は魔力を分解するのになんでだろうね?」

「空気中の水分に干渉しそれを冷やして凝結しているのだろう。体内で生成した魔力を外に放出するというよりは空気中の水分を凍らせている分炎や風といった現象は魔力の分解でなくなるが

水分を凍らせている分魔法よりも科学的な説明になる。よって自然現象そのものは分解されないということだ。

だがその氷血という技能……まだ何かしらの隠された能力があるのかもしれない。」

「要は鍛練しただいどこまでも伸びるってことだな。」

「そうかもしれないね。さっ！気を取り直して行こう！」

と歩き出そうとしてまたもや文字が浮かび上がる。

ぶぶー、焦ってやんの、ダサい

どうやらこのウザイ文は、全てのトラップの場所に設置されているらしい。ミレ

ディ・ライセン……嫌がらせに努力を惜しまないヤツである

「何というか……お茶目な人だったのかな？」

「香織さん!?これがお茶目で済む話ではないですよ！」

「うくんでもね、なんだか必死な感じがするんだよね？」

「必死？」

「うん。多分元々そういう人なのかもしれないけどそれだけじゃない……大迷宮を作った目的は後世にエヒト神の打倒を願ってでしょ。だからこれもエヒト神を倒すための試練みたいなものじゃないかな？」

「……………熱は……ないね……本当に香織？」

「ちよつと恵理ちゃん!」

「いや、地球の時の香織を見てた私としては何かホント人の気持ちに気付けるようになったんだって…僕も嬉しいよ…(T|T)」

「あははは、それだけ香織が成長してるってことだよ。」

「…お母様、カオリとの出会い今度教えて!」

「恵理さん私にも教えてくださいですう!」

「良いよ、香織の黒歴史とか色々…」

「え〜り〜ちゃん!!」

「わははははは、じよ、冗談だよ香織」

と香織の後ろに般若が見えたので恵理は引き下がる。

と同時にガコンと何かを踏み抜いたようで一斉に地面から石槍のような鋭利なものが突き出した。

……城之内目掛けて

「うおっ!?!ちよつ!まつ…のわっつ!?!」

「克也さん!!それっ!」

とウインが風霊術で城之内の身体を上手く風に乗せてトラップを回避させる。

「ふう〜助かったぜありがとなウイン。」

「いえ、克也さんにはいつも恵理がお世話になってますからこれぐらいさせてください。」

「ありがとうウイン、それにしても罨が多いけど何だが遠隔で動かしてるのがいくつかある気がするね。」

「油断しないで行こう！」

” イチャイチャしてたらズブリといくよどこまでも プププ ”

「ん？何だがこの文字だけ後付け感があるね…？」

「ふうん、俺には関係のないことだ。さっさと行くぞ。」

とライセン大迷宮を進んでいく城之内たちであった。

ライセン大迷宮3

その後も、進む通路、たどり着く部屋の尽くで罨が待ち受けていた。突如、全方位から飛来する毒矢、硫酸らしき物を溶かす液体がたつぷり入った落とし穴、アリジゴクのように床が砂状化し、その中央にワーム型の魔物が待ち受ける部屋、マグマのような鉱石が敷き詰められた灼熱地獄、そしてウザイ文

城之内たちのストレスは溜まる一方であった。

しかし悪いことばかりではなく道中城之内たちの世界でいう竹のような植物をトラップにしている箇所にてとても頑丈でしかもしなやかさがある植物をハジメが伐採して香織の使っている弓の弦にし、これにより負担が比較的軽くなり矢の射程距離も伸びたので戦術が広がった。

そして全てのトラップを突破し、この迷宮に入って一番大きな通路に出た。幅は六、七メートルといったところだろう。結構急なスロープ状の通路で緩やかに右に曲がっている。おそらく螺旋状に下っていく通路なのだろう。

ハジメ達は警戒する。こんな如何にもな通路で何のトラップも作動しないなど有り得ない。

そして、その考えは正しかった。もう嫌というほど聞いてきた「ガコンツッ!」という何かが作動する音が響く。既に、スイツチを押そうが押すまいが関係なく発動している気がする。なら、スイツチなんか作ってんじやねえよ! と盛大にツツコミたいハジメだったが、きつとそんな思いもミレディ・ライセンを喜ばせるだけに違いないとグツと堪える。

無言で顔を見合わせ、同時に頭上を見上げた。スロープの上方はカーブになっているため見えない。異音は次第に大きくなり、そして……カーブの奥から通路と同じ大きさの巨大な大岩が転がって来た。岩で出来た大玉である

「さてどうする? 城之内ここで一度退くかこのままか好きな方を選ぶがいい。」
「んじや! こつちだな!」

と城之内は格闘戦士アルティメーターの力を借り受けそのまま転がってきた大岩に向かつて拳を突き出す!

「アルティメットスクリューナックル!!」

ドガンとその拳で大岩を砕いた城之内。

「おお! 流石城之内君!」

「拳にいい感じに体重も乗って重心もブレテなかったからいい威力だね!」

「おう! これでゆつくりと進めんだろ…」

「…克也さん、社長の言つてた感じで二重三重に罫を張つてるとしたらもう一回…今度は避けないと不味いものが転がってくるのでは？」

「シアさん流石に」

それはと言う香織だが再びガコンという音が響き渡る。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

という聞き覚えのある音によつて。笑顔のまま固まる香織。同じく笑顔で引き攀つているシア、ギギギと油を差し忘れた機械のようにぎこちなく背後を振り向いた城之内の目に映つたのは……

——黒光りする金属製の大玉だった。

「海馬逃げる……つていねえ!」

既に海馬は一人先に走つていた。護衛で守らねばとシアも後に付いていつている。

「早く逃げるよ克也!」

「そうだね!しかもあれ転がつてるところが溶けてるから触つたら一溜りもないよ!」
という間に走る城之内たち。

「まったくやべえな!」

「これもまた試練なのかもね!神とかの嫌らしい手段に耐えるとかかな!」

「そう言つてないで走るよ恵理ちゃん!」

「…ん！」

と言いながら走る。精霊たちは一旦霊体化しているものの何かあるといけないとウインは実体化していたものの彼女の本職は魔法使いであるため徐々に走るスピードが落ちていいるのを感じた城之内、恵理は

「恵理！悪いがそつちは任せた！」

「OK克也！そつちもお願いな！」

とそのままスピードの落ちてきたウインを城之内は抱き抱えてスピードを上げる。

「か、克也さん!?!危ないですから降ろしてください、私は何とかしますので。」

「それでもこうやって走った方が早いぜ！」

と赤面するウインを尻目に走り続けていると通路の終わりが見えた。

「遠見」で確認すると、どうやら相当大きな空間が広がっているようだ。だが見える範囲が少しおかしい。

部屋の床がずつと遠くの部分しか見ええないのだ。おそらく、部屋の天井付近にハジメ達が走る通路の出口があるのだろう。

「真下に降りるぞー！」

「んっ」

「はいっー！」

城之内達は、スライディングするように通路の先の部屋に飛び込み、出口の真下へと落下した。

「げっ!？」

「んっ!？」

「ひんっ!？」

三者三様の呻き声を上げた。出口の真下が明らかにヤバそうな液体で満たされてプールになっていたからだ。

「危なっ!!」

とハジメは、咄嗟に義手からナイフを射出、同時に壁にアンカーを撃ち込み右手で香織を捕まえユエは背中に乗ってもらい落下を防いだ。

恵理はそのまま風霊術による風で浮かび上がり城之内とウインもまた風霊術にて落下を免れる。

直後、頭上を溶解液を撒き散らしながら金属球が飛び出していき、眼下のプールへと落下した。そのままズブズブと煙を吹き上げながら沈んでいく。

「〃風壁〃」

ユエの魔法で飛び散った溶解液が吹き散らされる。しばらく、周囲を警戒したが特に何も起こらないので、ハジメはようやく肩から力を抜いた。

「はわわわわわわ、あ、危なかったですう」

「…バカ娘が、目に見える状況だけでなく常に予測をしろ。未来視があつたとしても宝の持ち腐れだ。日に何度も使えるように身体を慣らす訓練もいれるとしよう。」

「ひいひい社、社長！未来視使つたら魔力がカラカラになつちやいますう！あつ！も、もしかして訓練もお休みに…」

「なるこでもっ」

「ず…ずみません。」

と海馬も無事でありシアはそんな海馬にしがみついている状態だ。

そして城之内達はそれぞれ溶解液のプールを飛び越えて今度こそ部屋の地面に着地した。

その部屋は長方形型の奥行きがある大きな部屋だった。壁の両サイドには無数の窪みがあり騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した身長二メートルほどの像が並び立っている。

部屋の一番奥には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と奥の壁に荘厳な扉があつた。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。

ハジメは周囲を見渡しながら微妙に顔をしかめた。

「いかにもな扉だね。ミレディ・ライセンの住処に到着？それなら万々歳だけど……こ

の周りの騎士甲冑に嫌な予感がするのは僕だけかな？」

「まあ多分だけど襲つてくると思うかな？」

「動きを見せてないけど唐突に動き出すだろうから武器は構えておいた方がいいね。」

そんなことを話しながら城之内達が部屋の中央まで進んだとき、確かにお約束は守られた。

毎度お馴染みのあの音である。

ガコン！

ピタリと立ち止まるハジメ達。内心「やつぱりなあ」と思いつつ周囲を見ると、騎士達の兜の間隙から見えている眼の部分がギンツと光り輝いた。そして、ガシャガシャと金属の擦れ合う音を立てながら窪みから騎士達が抜け出てきた。その数、総勢五十体。

騎士達は、スッと腰を落とすと盾を前面に掲げつつ大剣を突き型の型で構えた。窪みの位置的に現れた時点で既に包囲が完成している。

「まっそんなこつたらうと思つたぜ。」

「これぐらいならまだヒュドラもどきの方がキツかったよ。」

「ふうん。バカ娘に对人戦を積ませるいい機会か」

「社長は私が守りますう！」

「皆さん！行きますよ！」

ウインが言うのと一斉に襲いかかってきた。

迷宮にて最初の戦闘が始まり各々が武器を構え迫り来る騎士たちを相手取るのであった。

ライセン大迷宮4

ゴーレム騎士達の動きは、その巨体に似合わず俊敏だった。ガシヤンガシヤンと騒音を立てながら急速に迫るその姿は、装備している武器や眼光と相まって凄まじい迫力である。まるで四方八方から壁が迫って来たか錯覚すらしそうだ。

「オラアアアア！」

と城之内はサラマンドラを振りかざして剣を持った騎士を相手取る。

ガキインという音と共につばぜり合いになるので何度目かの衝突の時に城之内はサラマンドラを少し横に傾けることで剣を受け流すと勢い良く地面にめり込む。

「恵理！」

「うん！ウイン合わせるのお願い！水霊術！」

「任せてください！風霊術！」

と勢い良く出た水霊術によるウォーターカッターに風霊術が加わり威力がましそのままズバンと騎士を両断する。

ハジメ、香織の方は両手のレールガンでの火力不足を補うように途中途中ハジメからレイカへと変わり氷の槍やデカイ杭のようなものでゴーレム騎士たちの身体にヒビを

入れそこへレールガンを撃ち込んだり香織がユエの魔力を込めた矢を撃ち込み対処する。

それでも対処しきれない場合はユエが控えて水系の中級魔法「破断」でなぎ払う。破断は空気中の水分を超圧縮して撃ち放つウォーターカッターだ。

ユエは両手に金属で出来た大型の水筒を持つていた。肩紐で更に二つ同じ水筒を下げている。これらは、ハジメの「宝物庫」から取り出してもらった物だ。ユエが、その水筒をかざして魔法名を呟く度にウォーターカッターが水筒より飛び出し敵を切り裂いていく。

ユエは、魔法で空気中の水分を集めるよりも、最初からある水分を圧縮してやる方が魔力消費が少なくて済むと考えたのだ、また照準は水筒の出口を向けることで付けており、飛び出たウォーターカッター自体は魔力を含まないものなので分解作用により消されることもない。

これもレイカが氷血で証明しているため魔法のエキスパートたるユエにとっては朝飯前であった。

さてシアの方は青みがかった白髪をなびかせ、超重量の大槌を大上段に構えたまま飛び上がりゴレム騎士へと飛び掛かる。限界まで強化したその身体能力を以て遠慮容赦の一切を排した問答無用の一撃を繰り出す。

「でえやあああ!!」

ドオガアア!!

気合一発。打ち下ろされた大槌ドリユツケンのは、凄まじい衝撃音を響かせながら一体のゴーレム騎士をペシャンコに押しつぶした。一応、騎士も頭上に盾を構えていたのだが、その防御ごと押しつぶされたのだ。

地面にまで亀裂を生じさせめり込んでいるドリユツケン。渾身の一撃を放ち、死に体となつてしていると判断したのか、盾を構えて衝撃に耐えていた傍らの騎士が大きく大剣を振りかぶりシアを両断せんと踏み込む。

シアはそれをしっかり横目で確認していた。柄を捻り、ドリユツケンの頭の角度を調整すると、柄に付いているトリガーを引く。

ドガンツ!!

そんな破裂音を響かせながら地面にめり込んでいたドリユツケンが跳ね上がった。シアの脇を排莖されたショットシエルが舞う。跳ね上がったドリユツケンの勢いを殺さず、シアはその場で一回転すると遠心力をたっぷり乗せた一撃を、今まさに大剣を振り下ろそうとしている騎士の脇腹部分に叩きつけた。

「りやあああ!!」

そのまま気迫を込めて一気に振り抜く。直撃を受けた騎士は、体をくの字に折り曲げ

て、まるで高速で突っ込んできたトラックに轢かれたかのようにぶっ飛んでいき、後ろから迫って来ていた騎士達を盛大に巻き込んで地面に叩きつけられた。騎士の胴体は、原型を止めないほどひしゃげており身動きが取れなくなっているようだ。

ヒュンヒュン

そんな風切り音がシアのウサミミに入る。チラリと上空を見ると、先程のゴーレム騎士が振り上げていた大剣が、シアに吹き飛ばされた際に手放なされたようで上空から回転しながら落下してくるところだった。シアは、落ちてきた大剣を跳躍しながら掴み取ると、そのまま全力で、迫り来るゴーレム騎士に投げつけた。

大剣は豪速で飛翔し、ゴーレム騎士が構えた盾に衝突して大きく弾く。シアは、その隙を逃さず踏み込み、下段からカチ上げるようにドリユツケンを振るった。腹部に衝撃を受けた騎士の巨体が宙に浮く。苦し紛れに大剣を振るうが、シアはカチ上げたドリユツケンの勢いを利用してくるりと回転し、大剣をかわしながら再度、今度は浅い角度で未だ宙に浮く騎士にドリユツケンを叩きつけた。

先のゴーレム騎士と同様、砲弾と化してぶっ飛んだゴーレム騎士は後続の騎士達を巻き込みひしゃげた巨体を地面に横たわらせた。

その後ゴーレム騎士の剣を回収しつつシアは笑う。

自分自身強くなってる感覚がし海馬の期待に応えたい、ハジメたちの横に並び立ちた

いとドリユツケンを振るう。

気を抜いていないものの肩に力が入りすぎ動きが一瞬鈍った瞬間を逃さずゴーレム騎士は剣を投げる。

それも弾くシアだがドリユツケンで弾いた瞬間に時間差で投げたもう一本が迫る。

その衝撃を耐えようとギユツと目をつぶるがその剣を海馬がゴーレム騎士から奪った剣で弾く。

「バカ娘、気を抜かぬのは誉めよう。しかし気を張りすぎるな。」

気を張ることにより身体の筋肉が硬直し対処できるものすら出来なくなる。

気を張りすぎず気を抜かぬその空気は実戦でしか養えん。

最善の状態で最高のパフォーマンスを発揮するのは当然のことだが疲労した中で最低値を上げること。それが貴様の課題だ。

最低値を知れば自ずと自分の限界というものも計れよう。」

「は、はいです！」

「身体の力は抜け。それでいて相手の動きの一挙一動を見て隙を逃さずそこを突け。」

その言葉通りシアは身体の力を抜きゴーレム騎士の動きを見て対処し段々と慣れていく。

しかしゴーレム騎士を何度倒してもキリがない

「こいつらなんだって数が減らねえんだ!」

「城之内君!このゴーレム再生というか再構築されてる!それに遠隔操作されてるからこことは違う所からここを見てるんだと思う!」

錬成師であるハジメの鉱物系鑑定をしたところ

感応石という魔力を定着させる性質を持つ鉱石が使われていて同質の魔力が定着した二つ以上の感応石は、一方の鉱石に触れていることで、もう一方の鉱石及び定着魔力を遠隔操作することができる。

「……ハジメ、ゴーレムなら核があるはず」

ユエの言う通り、ゴーレムは体内に核を持つているのが通常であり、その核が動力源となる。核は魔物の魔石を加工して作られている。オスカーのお掃除ゴーレムの設計書にもそう記されてあった。ユエは、その核を壊そうと言っているのだ。

しかし床にも感応石が所々に使われており、まるで削り出したようにかけている部分が見られる。ゴーレムのかけた部分の補充に使われたに違いない。操っている者を直接叩かないと本当にキリがないようだ。

「ふうん……ならばここに用はなからう、バカ娘の経験を積みませるといふ一応の目的は果たした。行くぞ!」

と海馬は奥にある扉へと悠々と歩く。

「じゃ、社長!?! ゴーレムたち動いてますから!」

とシアは海馬へ向かうゴーレムをドリユッケンとゴーレム騎士たちの剣を使いなき払う。

城之内たちも奥へと進むと扉は封印されていた。

見るからに怪しい祭壇と扉なのだ。封印は想定内。だからこそ、最初は面倒な殲滅戦を選択したのだ。扉の封印を落ち着いて解くために。シアは、案の定の結果に文句を垂れつつも、階段を上ってきた騎士を弾き飛ばす。

「封印の解除はユエに任せる。僕の錬成で突破するのは時間がかかりそうだ」

殿を務めていたハジメが城之内とシアの隣に並び立った。ハジメの言う通り、錬成で強引に扉を突破することは、もしかすると可能かもしれないが、この領域では途轍もない魔力を消費して、多大な時間がかかることだろう。

それなら、せつかく如何にもな祭壇と黄色の水晶なんて物が置かれているのだから、正規の手順で封印を破る方がきつと早い。ハジメはそう判断して、戦闘では燃費の悪いユエに封印の解除役を任せる。

「ん……任せて」

ユエは、二つ返事で了承し祭壇に置かれている黄色の水晶を手を取った。その水晶は、正双四角錐をしており、よくみれば幾つもの小さな立体ブロックが組み合わさって出来ているようだ。

ユエは、背後の扉を振り返る。其処には三つの窪みがあった。ユエは少し考える素振りを見せると、正双四角錐を分解し始めた。

分解し、各ブロックを組み立て直すことで扉の窪みにハマる新たな立方体を作ろうと考えたのだ。

分解しながら、ユエは、扉の窪みを観察する。そして、よく観察しなければ見つからないくらい薄く文字が彫つてあることに気がついた。それは……

“とっけるかなあ、とっけるかなあ”

“早くしないと死んじゃうよお”

“まあ、解けなくても仕方ないよお！ 私と違って君は凡人なんだから！”

“大丈夫！ 頭が悪くても生きて……いけないねえ！ ざんねえくん！ プギャ
アー！”

何時ものウザイ文だった。めちゃくちゃイラつとするユエ。いつも以上に無表情となり、扉を殴りつけたい衝動を堪えながらパズルの解説に集中する。

「ユエちゃん大丈夫そう？ 私も何か手伝えることある？」

と香織はユエの後ろから声をかける。

「……………カオリが抱きしめてくれたら早く解けそう。」

「わかった！」

と香織はユエを後ろから抱きしめる。

香織の暖かさに包まれ先程まで怒りに染まった思考はほぐされうざい文章も気にならなくなる。

何となく、背後から尊さ溢れる気配を感じながら、ハジメとシア、城之内、ウイン、恵理は触らぬ神に祟りなしと前方の群れるゴーステム騎士達の排除に集中した

果たして香織に抱きしめられたユエは扉を開けることは出来るのか！

続く。

ライセン大迷宮5

ライセン大迷宮を攻略する城之内たちは最奥の部屋にてゴーレム騎士たちと対峙し奥の封印された部屋を解除しようとユエが挑みゴーレム騎士たちを相手取る城之内たちであった。

そうしてゴーレム騎士たちを押し退けること数分

若干、疲れた表情であるもののほんわかしたユエは香織に抱きしめられながら少し得意気に任務達成を伝えた。

「……開いた」

「流石ユエありがとう！中村さん！城之内君下がって！」

「おう！」

ハジメが、チラリと後ろを振り返ると、ユエの言った通り封印が解かれて扉が開いているのが確認できた。

奥は特になにもない部屋になっているようでハジメは、城之内たちに撤退を呼びかけ、自らも奥の部屋に向かって後退する。

封印の扉を閉めればゴーレム騎士達の襲撃も阻めるだろう。最初に海馬とシアがそ

の次にユエと香織、恵理、ウインが扉の向こうへ飛び込み、両開きの扉の両サイドを持っていつでも閉められるようにスタンバイする。

そうして城之内がハジメを抱えてそして置き土産にと手榴弾を数個放り投げると、城之内たちは奥の部屋へと飛び込んだ。

ゴーレム騎士達が逃がすものかと殺到するが、手榴弾が爆発し強烈な衝撃を撒き散らす。バランスを崩したたらを踏むゴーレム騎士達。

その隙に恵理、ウインが扉を閉めた。

部屋の中は、遠目に確認した通り何も無い四角い部屋だった。てつきり、ミレディ・ライセンの部屋とまではいかなくとも、何かしらの手掛かりがあるのでは？と考えていたので少し拍子抜けする。

「これは、あれか？ これみよがしに封印しておいて、実は何もありませんでしたっけうやつか？」

「どうなんだろうね？ さっきのゲームでいう中ボスみたいなものだろうけど…？」

「うう、ミレディめえ。何処までもバカにしてえ！」

「ハジメ君何もなさそう？」

「そうだね…感知には引っ掛からないけど物理的な罠があるかもしれないから気を付け

よう。」

と各々三人が、一番あり得る可能性にガツクリしていると、突如もうんざりする程聞いているあの音が響き渡った。

ガコン！

「!?!」

仕掛けが作動する音と共に部屋全体がガタンツと揺れ動いた。そして、城之内達の体に横向きのGがかかる。

「っ!? 何だ!? この部屋自体が移動してんのか!?!」

「……そうみたツ!?!」

「ユエちゃん!」

「香織!こつちに!」

「うきや!?!」

城之内が推測を口にすると同時に、今度は真上からGがかかる。急激な変化に、ユエが舌を噛んだのか涙目で口を抑えてぶるぶるしている。

ハジメはユエたちの方へと駆け寄りスパイクで踏ん張り香織、ユエを守る。

シアは、転倒してカエルのようなポーズで這いつくばっている。

城之内はサラマンドラを床に突き刺して恵理を抱きしめ衝撃を緩和させる。

海馬は特に何事もないように立っていた。

ここでウインが一度霊体化し代わりにアウスが実体化し地霊術にて部屋の重力を一定に保つことで部屋に掛かるGを相殺する。

そして部屋は、その後も何度か方向を変えて移動しているようで、約四十秒程してから慣性の法則を完全に無視するようにピタリと止まった。

ハジメは何かあったときに動けるようにしていたスパイクを解除して立ち上がった。周囲を観察するが特に変化はない。先ほどの移動を考えると、入ってきた時の扉を開ければ別の場所ということだろう。

全員無事なのを確認して

「しっかし何だったんだ？」

「部屋が移動してるってことはまた違うところへ移動させられたってことだね。」

と城之内は恵理と話す。

ハジメとユエ、香織は周囲を確認していく。シアはうずぐまっていたいたもののにすぐに立ち上がり海馬の周辺に危険がないか確認するものの何もなしなので扉へと向かった。

「さて、何が出るかな？」

「……操ってたヤツ？」

「その可能性もあるかな。ミレディ・ライセンは死んでいるはずだし……一体誰が、あのゴーレム騎士を動かしていたのか……自動つてことは流石にないとは思うけどね」

「……何が出てても大丈夫。ハジメと香織、セト、お父様、お母様は私が守る……ついでにシアも」

「聞こえてますよお〜もう！」

いつも通りの真っ直ぐなユエの言葉に頬を緩めるハジメ。優しい手付きで、そつとユエの柔らかかな髪を撫でる。ユエも甘えるように寄り添い気持ちよさそうに目を細めた。

先陣をきり扉を開ける城之内。

扉の先は、ミレディの住処か、ゴーレム操者か、あるいは別の罠か……一向は「何でも来い」と不敵な笑みを浮かべて扉を開いた。

そこには……

「……何か見覚えねえか？この部屋……」

「……物凄くある。特にあの石板」

「最悪の予想が当たったね」

扉を開けた先は、別の部屋に繋がっていた。その部屋は中央に石板が立っており左側に通路がある。見覚えがあるはずだ。なぜなら、その部屋は、

「最初の部屋……みたいですね？」

シアが、思っても口に出したくなかった事を言ってしまう。だが、確かに、シアの言う通り最初に入ったウザイ文が彫り込まれた石板のある部屋だった。よく似た部屋ではない。それは、扉を開いて数秒後に元の部屋の床に浮き出た文字が証明していた。

「ねえ、今、どんな気持ち？」

「苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知った時って、どんな気持ち

？」

「ねえ、ねえ、どんな気持ち？　どんな気持ちなの？　ねえ、ねえ」

「また一からやり直しかよー！？」

「まあでもマツピングはしてあるから問題ないよ城之内く……」

「あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します」

「いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣い

です」

「嬉しい？　嬉しいよね？　お礼なんていいよお！　好きでやってるだけだからあ

!

“ちなみに、常に変化するのでマップピングは無駄です”

“ひよつとして作っちゃった？ 苦勞しちやった？ 残念！ プギヤア”

「な、なんて悪趣味な！」

「流石大迷宮一筋縄じゃいかないね。」

「…ミレディ許すまじ」

「全くですよ！こんな罠だらけじゃやってられないです！何か罠を一網打尽に出来る方法があれば！」

「罠…トラップ…といえばあいつでどうにかなるか？」

「克也もしかして…！」

「おうあいつの力を借りやこんな迷宮」

「城之内一度ここから出るぞ。」

と海馬は城之内の首根つこを掴み入ってきた入口とも連動していたためかすぐに出ることが出来た。

海馬が一度出たのでそれを追い掛けて全員が大迷宮をでる。

「なんだよ海馬！今良いこと思い付いたってのに」

「貴様は一度ここで待機だ。」

「海馬さんそれはいったい？」

「貴様らの連携は脆い。」

「脆いつてそんなことは！」

「城之内が前衛なのは別に良い、後方支援など器用なことなど出来んだろうからな。」

「まあ確かにそうかもね。」

「貴様は前衛で味方を鼓舞するのが得意だ。だが反面貴様が崩れた時にそれは瓦解する。」

「…確かに城之内君に頼りすぎてる部分はあるかな。」

「ならばこそ今それを克服する必要がある。これから先大迷宮だけでなく強大な敵というのは存在する。」

生き残るためには出来ることを増やし弱点をなくさねばならん。幸いにしてバカ娘の攻撃力と対応力はこの俺が鍛えた。城之内ほどではないがカバー出来るであろう。」

「…ん！セトの言うこと一理ある。頑張る！」

「そうだね。これから先分断されたり不慮のことで城之内君がいなくちゃ駄目なんて…頼りすぎないようにしたい！僕たちは守ってもらうんじゃないで横で一緒に戦いたいんだ！」

「回復は任せて！私も魔法だけじゃなく判断力と鍛えないと！」

「そういう訳だ。貴様と俺はここで待機。もしくは誰か一人付いていた方が良からう。」
「それならあたしだな！」

「それなら私も一緒に残りましょう。惠理様たちのサポートはウインとアウスの二人がいれば何とかできます。」

とヒータ、エリアの二人が残ることにした。

そうして海馬、城之内、エリア、ヒータを残し一行は再びライセン大迷宮へと挑むのであった。

暫くして

「海馬何で俺を残したんだ？さっきの言い分だけじゃねえんだろ？」

「そうだ。貴様は気付いていたか。この迷宮の罠は予め仕掛けられていたものは軒並み南雲たちへと向いていたがそれ以外の貴様を狙った物はいずれも何処かへと連れていこうとしていたことに。」

「なんだって!？」

「つうか連れ去るって伴侶何かしたのか？」

「城之内ではなからう。」

「それならいったいなぜ？」

「いるであろう。城之内に似ている者…正確には竜であるが。」

「！まさかヘルモス!？」

「そうだ。少なくともこの迷宮にヘルモスに関係するものが存在しているのであろう。それを確認するためにもまずは奴らのレベルアップが必要不可欠。」

「そういうことか。なら俺は恵理たちが帰ってきたときに腹ごしらえ出来るように何か作っておくぜ！」

「私も手伝いますね！」

一度大迷宮のスタート地点に戻された城之内たちは城之内、海馬、ヒータ、エリアを残し再び迷宮を挑んでいくのであった。

ライセン大迷宮6

城之内たちを残し再度ライセン大迷宮へと突入したハジメたち。

しかしその道のりは困難の連続であった。

まず物理的な罫は海馬がないので気付かずに踏んでしまい銀たらいがシアに直撃したりある時はくすぐり棒のような物でシアがくすぐられたり、何とか精神を立て直し進むハジメ達。

しかし、やはり順風満帆とは行かず、特にシアが地味なトラップ（金たらい、トリモチ、変な匂いのする液体ぶっかけetc）の尽くにはまり、精神的にヤバくない？ というほどキレッキレになったりと、厄介な事に変わりはなかった。

大槌ドリユッケンを担ぎ、据わった目で獲物を探すように周囲を見渡していた。明らかにキレている。それはもう深く深くキレている。言葉のイントネーションも所々おかしいことになっている。その理由は、ミレディ・ライセンの意地の悪さを考えれば容易に想像がつくだろう。

シアの気持ちはよく分かるので、何とも言えないハジメとユエ。凄まじく興奮してい

る人が傍にいと、逆に冷静になれるということがある。

ハジメたちの現在の心理状態はまさにそんな感じだ。現在、それなりに歩みを進めてきたハジメ達だが、

ここに至るまでに実に様々なトラップや例のウザイ言葉の彫刻に遭遇してきた。シアがマジギレしてなければ、ハジメとユエがキレていただろう。

大槌ドリユッケンを担ぎ、据わった目で獲物を探すように周囲を見渡していた。明らかにキレている。それはもう深く深くキレている。言葉のイントネーションも所々おかしいことになっている。その理由は、ミレデイ・ライセンの意地の悪さを考えれば容易に想像がつくだろう。

そうしてハジメ達が、ライセンの迷宮に入ってから今日でちょうど一週間その間も数々のトラップとウザイ文に体よりも精神を削られ続けた。

スタート地点に戻されること七回、致死性のトラップに襲われること四十八回、全く意味のない唯の嫌がらせ百六十九回。

最初こそ、心の内をミレデイ・ライセンへの怒りで満たしていたハジメ達だが、四日過ぎた辺りから何かもうどうでもいいやあくみたいな投げやりな心境になっていた。

この迷宮でハジメは効率的な魔力操作の技量が上がり、レイカは氷血の技能の理解を深め香織と恵理は状況把握と視野が拡がりユエ、シアも連携に磨きが掛かった。

迷宮を一度出て城之内、エリアが作った温かい食事に舌鼓をうち精神的に落ち着く。それだけでも頑張ろうという気力が湧く。

食料は潤沢にあるし、身体スペック的に早々死にはしないのが不幸中の幸いだ。今のように休息を取りながら少しずつ探索を進めている。

その結果、どうやら構造変化には一定のパターンがあることがわかった。＼マーキング＼を利用して、どのブロックがどの位置に移動したのかを確かめていったのだ。

もうそろそろ進展があるかもしれない。そんなことを思いながら、ハジメは両隣と膝で座り込んで眠る少女達に視線を向けた。

「三人とも疲れてるみたいだね。」

（それはそうよ。あんなに致死性のトラップがあるんだもの。気を張りすぎたら疲れるわ。ハジメも休んだ方が良くわよ。）

（そうだね。これが終わったら休むよ。僕はレイカと代わる代わるだったから皆よりは疲れてないかな。）

（それはそれよ。早めに休まないなら無理やり代わるわよ？）

「うん。僕も休むよ。」

とハジメも眠りにつく。

「ふう……」

「やあレイカ大丈夫かい？」

「大丈夫だよ。ヴェールも助けてくれたりしてたから疲れてないよ。」

「なら良いけど。にしてもレイカにとつて良い修行になるね。この迷宮レイカがまだ制御できてなかった技能の練習をさせてくれてるみたいだね。」

「うん。そこは不思議だね。どういうことなんだろう？」

「まあそれも明日には分かる筈だよ。今度はセトもカツヤも一緒だし、昨日聞いた限りはトラップはもう平気だろうからね。」

「そうだね。早いところ私も休むね。」

「おやすみ〜」

とレイカも眠る。

「…セト、この迷宮やつぱり誰かいるね。それも聞いた限り解放者の誰かしらかな？」

「試すようなやり方といい後世へと託そうとしたのだろうな。だがひとつ府に落ちんなぜこの場所にいるのかだ。」

この地で奴を倒すために爪を研いでいるのか、それか敗北者として燻っているのかは俺には関係のないことだ。」

「もし本当に解放者ならエヒトのやり口とか知ってるだろうし神代で唯一生きる証人だから仲間になってほしいね。」

「だな、そのためにもここを突破して認められないとな！」

「そうだねえ……それにしてもあの娘たちは大丈夫……大丈夫かな？」

とヴェールは自身の弟子たちと他の工房の魔女たちを思う。

そうして夜が更けていく。

体調も万全になり再び迷宮へと突入する城之内たちであった。

—————

場面は変わりとする精霊界

ここは職人たちの集まる町、バイストリートに店を構える魔法技術集団ウィッチクラフトの本拠地。

あるものは鍛冶、あるものは仕立てであるものはスクロール作り、またあるものは染師、宝石商など様々な者たちを人はウィッチクラフトと呼んだ。

今日もいつものように賑やかに

「あぁ—————マスタァ—————いつ帰ってくるんですか—————」
に、賑やかに

「ほらハイネさんまだまだありますよ。私も手伝いますから頑張りましょう！」

「ハイネ！これもお願いなね！あたしはこっちの取引のやるから！」

……賑やかにというよりも騒がしいといえる。

彼らの長であるウィッチクラフトマスター・ヴェールが突然いなくなり（サボることは今まで何度もあった。）その代役として仕立て屋でもあり工房の魔女の中でも指折りの使い手のハイネが頑張っているがそれでも仕事はまわらず歴代のスクロール管理及びスクロール作りをしているジェニーとヴェールの弟子でもあるエーデルが手伝い何とかまわっている状況であった。

「それにしてもヴェールさんいつもよりも長いね。」

「そうですね。いつもなら帰ってきてても可笑しくないというのに。」

「お姉ちゃんまだなの？」

とシユミツタ、ピットレ、末っ子弟子なポトリーは言う。

「マスターのことだから新しく弟子でも取って育成してたりしてね！」

「まあでもヴェールさんのお眼鏡に叶う人って中々ないけどね。」

「…したら私もお姉ちゃん？」

「そうだね。ポトリーの妹弟子になるもんね。」

と、ピットレはポトリーを撫でる。

「何はともあれ連絡つけば良いんだけどね。」

「まあ、ヴェールさんがこちらを頼るなんて滅多にないですけど、余程のことや依頼がな

「限りは。」

そうしてウィッチクラフトの慌ただしい一日が過ぎていく。

ハイネは涙目になりながらもマスター不在のウィッチクラフトを指揮する代理マスターとして奮闘する。

しかし彼女らも思いもしなかつたであろう。

近い将来ヴェールにより全員一度に異世界に召喚されてしまうことになるとは。

ライセン大迷宮7

そうして改めて迷宮へと入る城之内、海馬を加えた一行。

「罨に時間を割く暇などない。城之内」

「おう！任せろ！いくぜ！」

と城之内はライセン以前よりレベル6モンスターの力をデメリットなして借り受けられるようになっていた。

まだそれ以上のモンスターたちの場合は体力を大幅に消費するので長時間の戦闘には耐えられない。

「頼むぜ！人造人間サイコシロッカー！」

と顕現するのは城之内がバトルシティにてエスパール紹場から譲り受けたカードで幾度と助けられたモンスター。

そしてその能力は

「トラップサーチ！からのトラップクラッシュユ！」

そうして罨だらけのライセン大迷宮をことごとく破壊していく。

—————

「よしよしシアさんは頑張ってる〜」

「…むう、ズルい」

「ユエだつて頑張ってるもんね〜よしよし」

「…んお母様のナデナデ気持ちいい…!」

「城之内君そろそろ一番最初の部屋に入つて何度も探したけど来れてなかつた場所だよ。」

「うっし! 気を引き締めるぜ!」

とゴーレム騎士たちのいる部屋へと辿り着いた。

ただし、今度は封印の扉は最初から開いており、向こう側は部屋ではなく大きな通路になっていた。

「また包囲されても面倒だ。一気に行くぞ!」

「おう!」

城之内達は、ゴーレム騎士の部屋に一気に踏み込んだ。部屋の中央に差し掛かると、案の定、ガシャンガシャンと音を立ててゴーレム騎士達が両サイドの窪みから飛び出してくる。

出鼻を挟いて前方のゴーレム騎士達をハジメが銃撃し蹴散らしておく。そうやって稼いだ時間で、城之内達は更に加速し包囲される前に祭壇の傍まで到達した。

ゴーレム騎士達が猛然と追いかけるが、城之内達が扉をくぐるまでには追いつけそうにない。逃げ切り勝ちだと、城之内はほくそ笑んだ。

「城之内ボサツとするな！」

「なに言ってるんだ海馬あいつら追い掛けてくるわけ……」

と後ろを見ると絶句した。

何と、ゴーレム騎士達も扉をくぐって追いかけてきたからだ。しかも……

「なっ!? 天井を走ってるだ!?」

「……びっくり」

「重力さん仕事してくださいさあ〜い！」

「うっそおお〜〜どういうこと!?!」

「成る程重力……ってことはこの迷宮の神代魔法は重力に関係することなのかな?」

「恵理ちゃん冷静に分析してないで〜〜」

そう、追いかけてきたゴーレム騎士達は、まるで重力など知らんとばかり壁やら天井やらをガシャンガシャンと重そうな全身甲冑の音を響かせながら走っているのである。

これには、流石の城之内達も度肝を抜かれた。ハジメは咄嗟に通路に対して「鉋物系鑑定」を使うが、材質は既知のものばかり。重力を中和したり、吸着の性質を持った鉋物等は一切検知できなかった。

「どうなってるんだ？」

そんな呟きが思わず口から漏れる。

天井を走っていたゴーレム騎士の一体が、走りながらピョンとジャンプすると、まるで砲弾のように凄まじい勢いで頭を進行方向に向けたまま宙を飛んできたのである。

「なっ!？」

「狼狽えるな！攻撃誘導アーマー発動！対象はゴーレム騎士！」

と海馬が攻撃誘導アーマーを発動して他の転がるゴーレム騎士へと装着させる。

そうすると宙を飛んできていたゴーレム騎士は方向転換してアーマーを装着したゴーレム騎士に突っ込む。

そうしてもみくちやになったことで他のゴーレム騎士も巻き込み団子状態になる。

「今のうちだ！行くぞ！」

と海馬を先頭に走る一同。

通路の終わりが見えた。通路の先は巨大な空間が広がっているようだ。道自体は途切れており、十メートルほど先に正方形の足場が見える。

そのまま勢いを付けて全員が飛ぶものの思った通りにいかないのがこの大迷宮の特徴。

何と、放物線を描いて跳んだ城之内達の目の前で正方形のブロックがスィーと移動し始めたのだ。

しかし、伊達に城之内たちもこの迷宮を潜り続けていない。

ハジメはすぐにレイカへとバトンタッチして空気中の水分を固めて一瞬ではあるものの足場にする事で方向転換を行う。

その間にユエと香織を抱えることも忘れずに足場へと着地する。

他の面々は恵理と実体化したウインの風霊術の風圧に乗り無事に着地した。

後ろから追い掛けてきていたゴーレム騎士たちは重力を無視してそのままこちらへと迫るものと

「上方方向へ重力の比重が傾いてるなら中和すれば良いだけだね。」

とアウスも実体化すると地霊術で重力を中和すると途端に勢いを失いそのまま墜落していくのであった。

「アウスさんがいてくれて良かったですよ！」

「……ん！流石……」

「ふふ、ありがとう。さっ！気を引き締めてさっきのゴーレムたち精密に重力操作出来

てたからここに操ってるのがいる筈。」

とアウスの言葉に一段と気を引き締める。

そうして

城之内達の目の前に現れたのは、宙に浮く超巨大なゴーレム騎士だった。全身甲冑はそのままだが、全長が二十メートル弱はある。右手はヒートナツクルとでも言うのか赤熱化しており、先ほどブロックを爆砕したのはこれが原因かもしれない。左手には鎖がジャラジャラと巻きついていて、フレイル型のモーニングスターを装備している。

ハジメ達が、巨体ゴーレムに身構えていると、墜落していったゴーレム騎士達がヒュンヒュンと音を立てながら飛来し、ハジメ達の周囲を囲むように並びだした。整列したゴーレム騎士達は胸の前で大剣を立てて構える。まるで王を前にして敬礼しているようだ。

「まさしく親玉って貫禄だな！」

「そうだね、でも僕たちも負けない」

「絶対に突破してみせる！」

緊張感が高まり辺りに静寂が満ちまさに一触即発の状況。

動いた瞬間、殺し合いが始まる。

そんな予感をさせるほど張り詰めた空気を破ったのは……

「グスン…もー…う私の作った自信作トラップを壊してえー…あれ作るのにとれだけ年月掛けたと思ってるのおお。」

グシユン私が大事にしてた物を傷物にしてええ

ヘルモスの鬼畜く鬼く変態ドラゴク

ヘルモスのおつきいので私の大事な物を（トラップを）奪われたく

責任とつてよおおおおおお

シクシクシクシク

…なんて？

「……お父様……」

「克也…取り敢えず謝った方が良いんじゃないかな？」

「あはは…まああんなに派手に壊しちやつてたからねく」

「うーんさつきまでの緊張感が台無しだね。」

「というか親玉なんですか？…ホントに？」

「あくとす、すまん謝って済むとは思わねえけど…悪かった。」

と何故だか巨大ゴーレムを慰める羽目になってしまった城之内たちであった。

そうして慰めること10分ぐらい

漸く泣き止んだ巨大ゴーレムはこれまたびつくりすることを言う。

「と、取り乱しちゃったね改めて！」

「やほ、はじめまして、みんな大好きミレディ・ライセンだよ〜」

「……はあ!？」

「…ミレディ…?」

「ライセン？」

「あつこんには、僕は中村恵理だよ。」

「はじめまして白崎香織です。」

「香織さん!?! 恵理さんも呑気に挨拶してないで警戒しないとダメですよ!」

「ふうん、ゴーレム自体を遠隔で操る…ではないな魂自体が定着しているといったところか。」

ライセン大迷宮の奥地へと辿り着いた城之内たちを待ち受けていたのは何だがポンコツ臭漂う自身をミレディ・ライセンと名乗ったゴーレムなのであった

ライセン大迷宮 8

前回ミレデイと邂逅を果たした城之内たち一行。

「うんうん女の子……カオリンとエリエリだね。宜しくね、他の子達はノリが悪いよ、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？ ヘルモスは別として……あれ？ 良く見るとヘルモスだけどヘルモスじゃない？」

「ああ悪いそうだったな。俺は城之内克也だぜ！」

「……ん、城之内ユエ」

「失礼しました。僕は南雲ハジメ、香織の恋人です。」

「シアですう！ 社長の護衛でハジメさんたちの女です！ 此方は我々ハウリアの恩人の海馬瀬人社長ですう！」

「ほうほう元氣一杯なウサギちゃんだね。……そっか……君たちは亜人族の娘に嫌悪感はないの？ 亜人族は神から見放された悪しき種族って教会で習ったんじゃないの？」

「そんなことないよ！ シアさんはとっても頑張り屋で優しくて時々残念だけど」

「香織ちゃん!？」

「でも私たちの大切な仲間です！ それにエヒトが定めた理屈なんて私たちには関係ない

ですー！」

「そうだね。シアさんは…うんハウリア族も他の亜人だって生きてるんだ。それを神がいったから迫害するなんて間違ってる。だから僕たちは神代魔法を得て僕たちの世界に侵攻してこようとするエヒトを討伐したい。」

「僕たちの世界…ってことは君たちはウサギちゃんを除くと皆異世界の子達なのかな？」

「…私はトータスの人間…で吸血鬼族の最後の生き残り」

「…成る程ね。種族は違えど気持ち繋がってる…私たちのしてきたことは無駄じゃないって思えるな。」

「ミレディ・ライセンと言ったな。姿形はゴーレムのようだが貴様の肉体はどうなってる？」

「おおよ？ミレディさんは元からゴーレムですよグレートでナイスバディ（厳つい）なスペシャルゴーレムなのです〜」

「オスカーの手記に載ってた記録には貴女は人間だったって書いてあったよ。」

「オー君の手記ってことはオルクス迷宮を踏破したんだね。だからあのクソ神のことを知ってたんだね。」

「おう！それとオスカーが残したカードも使わせてもらってるぜ。」

「……ねえ君…克也って言つてたっけ？君はヘルモスの末裔なのかな？ヘルモスは…もういないの…？」

「いやヘルモスのやつは」

「勇者よ。そこからは私が話そう。」

とデツキに潜んでいたヘルモスが実体化をする。

「!!ヘルモス！ま、幻じゃないよね…？」

「久しぶり…であるな。長い時を…生きていたのだな。」

「ヘルモス…帰ってきてくれたんだ…！」

「うむ。…ミレディあの後は…」

「…皆…皆バラバラになって…一人また一人いなくなっちゃった…でも未来に希望を託そうって…必死に隠れて辛いことも沢山あつてエス姉が励ましてくれて…でもそんなエス姉もいなくなっちゃって…」

「ふうん…俺には至極どうでも良いことだ。」

「海馬今良いところだから邪魔すんなつての！」

「ミレディ・ライセン貴様に問おう。エヒトは信仰心の塊か？」

「…君つて空気読めないって言われたい？全く天才美少女ミレディちゃんの感動の再会を邪魔しないでほしいんだけど…そうだよ。クソ神は人々の信仰心を糧にして力を蓄

えているよ。」

「ならばその信仰心を奪う又は他のものへと注目させれば力は削ぎ落とせるのか?」

「多分弱体化は出来るはず、でもクソ神が作った神の使徒が沢山いるから削ぎ落とせたとしても本体にたどり着く前に物量的に押し返される。」

「神の使徒って俺等が喚ばれたときにんなこと言ってたな。」

「あれとは別のことなんだね。」

「ミレデイさんが答えてあげたんだから君も答えてもらうよ。君はあのクソ神を殺してくれるの?」

「勘違いするな。貴様の目的など知ったことではない。」

その言葉にミレデイゴーレムの纏う気配が不穏になるが海馬は続けて

「俺には俺の目的がある。」

奴に会うにはその神代魔法とやらが鍵になる。

ならばそれら全てを集め俺は冥界へと行った奴に引導を渡す! 勝ち逃げなどこの俺が許さん!

俺の行く道に立ち塞がるのならば神だろうとなぎ倒す!

俺の踏み標したロードの邪魔はさせん!!」

と力強く宣言をする。

「強い意思…何事にも動じない精神力…君みたいな人がいたら私たちも何か変わったのかな…」

と呟くミレデイ。

「そう…ならば私は迷宮の番人としてこう言おう！」

んん、よし、ならば戦争だ！

見事、この私を打ち破って神代魔法を手にするがいい！」

いきなりのことであつたものの気を取り直してミレデイは再度此方を試すように言う。何かを押し込むように気持ちに蓋をして。

「…の前にもう一つ。そのハジメだったね。君も異世界の出身なんだよね？氷血の技能をどうして持つてるのか聞いてもいいかな？」

「その…あんまり大つぴらに言えないんですが…オルクス迷宮でその…拾い食いしました」

「ひ、拾い食いってことは…まさか?!君氷の神獣の血液まるごと飲んじやったの!?!」

あれは危険だからオー君が嚴重に封印を掛けて自分の迷宮に封じたはずなのに!?!

つていうか君自我は大丈夫なの!?!

とうかか拾い食いしちゃいけないよ!

子供でも落ちてる妙なものは食べないって!

精神力オバケなエス姉だつてギリギリつて言つてたのに!？」

と珍しく人を氣遣うミレディ。

「あく破壊衝動というか何もかも壊したいつて…僕一人じゃ無理でした…でも香織が…僕の大切な人がいたから乗り越えられたんです。」

「ハジメ君！私もハジメ君のこと愛してるよ！」

「香織…」

「ハジメ君…」

「こら二人ともイチャイチャしないの。ミレディさんの試練始まるんだから氣を引きしめる！」

「すいません。」

「ふふ…熟年夫婦さんなんだね…愛の力が神獣の意思を跳ね退けたんだね。」

ますます試したくなってきた！

私もヘルモスとしたいなあ…」

「ミレディ…」

「ヘルモス感動の再会だけどそれはまた後で。今は解放者のリーダーとして！このライセン迷宮の番人として見極めさせてもらおうよ！」

「おうよ！俺たちの全力！ぶつけさせてもらうぜ！」

「僕たちの思いをぶつける！」

こうして解放者のリーダー、ミレデイ・ライセンの試練が始まる。

はたして城之内たちは無事に認められ神代魔法を手に入れることが出来るのであるだろうか！

ミレデイの試練が始まる中怪しげに光を放つ緑色の鉱石

それはまるで彼女の負の気持ちに呼応するかのようであった。

ライセン大迷宮9

最初に動いたのはハジメでオルカンからロケット弾をぶつぱす。火花の尾を引く破壊の嵐が真つ直ぐにミレディ・ゴーレムへと突き進み直撃する。

ズガアアアアン!!

凄絶な爆音が空間全体を振動させながら響き渡る。もうもうとたつ爆煙。

「やりましたか!?!」

「……シア、それはフラグ」

シアが先手必勝ですう!と喜色を浮かべ、ユエがツツコミを入れる。結果、正しいのはユエだった。煙の中から赤熱化した右手がボバツと音を立てながら現れると横薙ぎに振るわれ煙が吹き散らされる。

「二人ともミレディさんは神代から生きてるから僕たちなんかよりもずっと戦いの経験がある、気を抜けばそれだけでやられるから集中!」

と恵理の言葉に更に気を引き締める二人。

煙の晴れた奥からは、両腕の前腕部の一部を砕かれながらも大して堪えた様子のないミレディ・ゴーレムが現れるとミレディ・ゴーレムは、近くを通ったブロックを引き寄

せそれを砕きそのまま欠けた両腕の材料にして再構成する。

「ふふ、先制攻撃とはやってくれるねえ、さあ、もしかしたら私の神代魔法が君のお目当てのものかもしれないよ、私は強いけど、死なないように頑張つてねえ」
そう楽しそうに笑つて、ミレディ・ゴレムは左腕のフレイル型モーニングスターをハジメ達に向かつて射出した。投げつけたのではない。

予備動作なくいきなりモーニングスターが猛烈な勢いで飛び出したのだ。おそらく、ゴレム達と同じく重力方向を調整して“落下”させたのだろう。

「成る程ね。重力に関係する魔法…しかも最小限に効率良く発動させてるから魔力消費も少ない、厄介な相手だね！」

とアウスが言いそのまま一部の床を柔らかくすることで周りのゴレムの追撃をいなす。

その際に香織がユエの魔力付加をした炎属性の矢と風属性の矢を二本をそのまま射る。

香織の毒魔法がライセンの分解作用の影響もありほぼ範囲も絞られゴレムたちへ使えないため弓矢での応戦になる。

ミレディ・ゴレム目掛けて弓は飛んでいくもののその進路を塞ぐようにゴレムが立ち塞がり爆発する。

「成る程ねく魔力付加してある弓か！狙いも良しそれに属性を組み合わせる最大限の効果を發揮させてるねく私じゃなければそれなりにダメージが入ってるかなく」

続けて弓を打ち込むが

「フツフツフ弓ならそのまま落とすしちやええば当たらないよく」

と向かってくる弓を上から下に重力を働かせて落下させて届かないようにするミレディは左腕をそのまま構えると

「オー君のロマン武器くロケツトパクンチ！」

と気の抜けることを言いながらも強烈な一撃を飛ばしてきた。

それをハジメがカバーして香織を抱き抱えてかわし、香織はハジメの手に持っていたシユラーゲンをミレディへと立て続けに放つ。

本来の威力の出ていないもののミレディゴーレムを後退させることに成功する。

「トンでもない威力だねくこれで弱体化してるってオー君並みのアーティファクトの作成技術だ。」

でもまだまだ経験が足りないかな？

纏雷を使って弾を加速させてる…

魔力を最小限に最大限の威力を出せてればこの身体を貫けていたかな。

オー君が構想していたレールガンってやつ電磁投射の問題と弾と砲身の問題で断念

してたけど君たちの世界は発展してるんだね！」

と観察眼も優れているのかシユラーゲンの原理を読み取るミレディ。

「いきます！そりやああああああ！」

とシアは飛び上がりドリユツケンにてミレディを強襲する

しかしミレディは重力を自身に掛けて素早く移動するとそのまま左腕を横なぎに振るう

「まだまだ！」

とドリユツケンのトリガーを引き爆発による推進力を利用して軌道を修正をしてミレディゴーレムの左腕へと叩きつける。

左腕は壊れるもののすぐさま周辺の瓦礫を取り込み再生する。

「！成る程、中々のパワー…それに身体強化もこのまま成長すれば私たちクラスも夢じゃないね！でも対応力はこれからかな！」

と左腕の瓦礫だったものが空中を漂い無数の飛礫となりシアへと殺到する！

「それはさせねえぜ！」

と城之内が鎖付きブーメランを伸ばしシアへ巻き付け離脱させる

「克也さんありがとうございませす！」

「良いつてことよ！」

「ふふ…対応力の甘さは他の子達がカバーしてるね。それに…」

とミレディイゴーレムは右腕を切り離す。

切り離れた右腕には恵理の水霊術と雪姫の氷の凍結で即座に砕けた。

「エリエリは魔法と違う力を使えるんだね。成る程だからこの魔力分解を問題にしないんだね。それにそっちの女性…中々の凍結魔法…それもノータイムで使えて威力もすごいね…！」

とゴーレム騎士たちを総動員するミレディ

無数のゴーレム騎士たちが囲い込むが

「ふうん…物量ならば圧倒的火力を出すまでのこと」

と海馬はハジメの持つ宝物庫に接続できる指輪のアーティファクトから（城之内作）ガトリング砲砲メツエライを取り出す。

そして全員を下がらせると毎分一万二千発の死を撒き散らす化物を解き放った。

ズガガガガガガガガガ

とゴーレム騎士たちをなぎ倒していく海馬。

「ちよつ、なにそれえ！ そんなの見たことも聞いたこともないんですけどお！」

「ハジメのやつお手製だぜ！」

そうしてゴーレム全体を片付ける海馬。

そしてハジメが聞こえるように声を張り上げた。

「ミレデイの核は、心臓と同じ位置です!!」

「んなつ! 何で、わかつたのお!」

再度、驚愕の声をあげるミレデイ。まさか、ハジメが魔力そのものを見通す眼鏡をもっているとは思えないのだろうか。

ゴーレムを倒すセオリーである核の位置が判明し城之内たちの眼光も鋭くなる。

周囲を飛び交うゴーレム騎士も今は十体程度。全員で波状攻撃をかけて、ミレデイの心臓に一撃を入れるのだ。

しかし、破壊された胸部の装甲の奥に漆黒の装甲があり、それには傷一つ付いていなかった。ハジメにはその装甲の材質に見覚えがあった。

「……アザンチウムか、ヤバイな」

アザンチウム鉱石は、ハジメの装備の幾つかにも使われている世界最高硬度を誇る鉱石だ。薄くコーティングする程度でもドンナーの最大威力を耐え凌ぐ。

道理で、シユラーゲンの一撃に傷一つつかないわけである。あのアザンチウム装甲を破るのは至難の業だとハジメは眉間にシワを寄せた。

「でもこの分解作用のある迷宮でココまで動けるなら及第点……だから次をかわせたら試

練はクリアで良いよ！」

と言うやいなや右腕を上から下へと振り下ろすと

「!!皆さん!上から落ちて…いや降ってきます!!」

とシアの未来視に映ったのは…いや現在形で空間全体が鳴動する。低い地鳴りのような音が響き、天井からパラパラと破片が落ちくる。いや、破片だけではない。天井そのものが落下しようとしているのだ。

「っ!?…っ!っあー!」

「ふふふ、騎士以外は同時に複数进行操作することは出来ないけど、ただ一斉に『落とす』だけなら数百単位でいけるからねえ、見事凌いで見せてねえ」

のんきなミレディの言葉に苛立つが、そんな事に気を取られている余裕はない。この空間の壁には幾つものブロックが敷き詰められているのだが、天井に敷き詰められた数多のブロックが全て落下しようとしているのだ。

一つ一つのブロックが、軽く十トン以上ありそうな巨石である。そんなものが豪雨の如く降ってくるのだ。城之内たちの額に冷たい汗が流れる。

「!合流…間に合わねえ!」

「克也!…っちは何とかする!…っちはっちはっちでお願い!」

と恵理はハジメ、香織の方へ

城之内はユエ、シア、海馬のほうへと合流すると同時に降り注いでくる。

「ユエしっかり掴まってる!」

「…ん!」

「最大展開! いけっ!」

とハジメは宝物庫からありつたけのオルカンを出して全弾発射する。

炸裂して降り注ぐ巨岩に穴が空いたのを確認してハジメたちの方はオルカンを仕舞い代わりにドンナー・シユラークを抜くと天に掲げて連射した。

僅かな生存の道を押し広げるように、計算された精密射撃が砕かれた巨石の破片を更に砕きつつ連鎖的に退けていく。

城之内の方は

「団結の力を俺とシアへ装備!」

と元祖チート装備カード団結の力を使い能力値が爆発的に上がった二人は共にユエと海馬を背負い薄くなった層を駆け抜ける。

シアが避けきれないものは海馬がガードオブカードを召喚して防御し防御輪で対処する。

「おおおおおおお!」

城之内は更にフェニックスブレードを召喚して斬撃を飛ばしてユエが破断で細かく

して通れる隙間を広くしていく。

ハジメの方は限界突破を使い分解作用で身体強化はキャンセルされても、知覚能力の拡大はキャンセルされずに有効となり香織を背負いながら隙間を通る。

「憑依覚醒発動！」

永続魔法である憑依覚醒の効果で味方の力が更に引き上がる。

そして霊術での身体強化と風霊術での風の加速で駆け抜けていく。

天井の崩落が一段落して土煙で見えなくなる。

「……駄目だったのかな？ヘルモスが見込んでいたから大丈夫かなって思ったけど……」

「ミレディ」

「ごめんヘルモス、君の仲間を……」

「見くびるでないぞ。あれぐらいなら勇者の仲間ならば」

とヘルモスの言葉が終わらない内に城之内たちが飛び出してくる。

「勝手に殺すんじゃないねえ！」

とフェニックスブレードを振るいミレディゴーレムの右腕を切断し更にシアがドリユッケンのトリガーを引くと杭のように鋭くなり胴体へと食い込ませるとアザンチウム鉱石があらわになる。

そしてここでハジメはレイカへとボタンタッチしミレディゴーレムの周りの水分を一気に凍らせる。

駄目押しでエリア、恵理が水霊術で水を大量に纏わせ雪姫が凍らせる。

体を固定されたミレディ・ゴーレムの胸部に立ちレイカきらハジメに戻ると、宝物庫から切り札を取り出す。虚空に現れたそれは全長二メートル半程の縦長の大筒だった。

外部には幾つものゴツゴツした機械が取り付けられており、中には直径二十センチはある漆黒の杭が装填されている。

下方は四本の頑丈そうなアームがつけられており、中程に空いている機構にハジメが義手をはめ込むと連動して動き出した。

ハジメはそのまま、直下の身動きが取れないミレディ・ゴーレムをアームで挟み込み、更に筒の外部に取り付けられたアンカーを射出した。

合計六本のアームは周囲の地面に深々と突き刺さると大筒をしつかりと固定する。同時に、ハジメが魔力を注ぎ込んだ。

すると大筒が紅いスパークを放ち中に装填されている漆黒の杭が猛烈と回転を始める。

キイイイイイ!!

凶悪なフォルムのそれは、義手の外付け兵器。『パイルバンカー』である。『圧縮錬成』により、四トン分の質量を直径二十センチ長さ一・二メートルの杭に圧縮し

表面をアザンチウム鉱石でコーティングした。世界最高重量かつ硬度の杭。それを大筒の上方に設置した大量の圧縮燃焼粉と電磁加速で射出する。

それはアザンチウムを4分の3程度まで破壊したところで止まる。

「どうやら未だ威力が足りなかったようだねえ。だけど、まあ大したものだよお？ 四分の三くらいは貫けたんじゃないかなあ？」

「まだまだよー！ お願いシアさん！」

とハジメは、『宝物庫』に杭以外のパイルバンカーをしまうと、ミレディ・ゴーレムの胸部から勢いよく飛び退くと団結の力で上がった力と遠心力とアウスからの支援魔法で勢い良くドリユツケンを杭へと振るう！

ズガガーン

とミレディの核は砕け散った。

「……お見事！」

と機能を停止したゴーレム。

「ふう何とかなったな。」

「そうだね。これでクリアかな？」

「ふふそうだね。君たちなら大丈夫そうだ。君たちの連携、絆なら他の迷宮だって平気だ。これなら私たちの悲願を託せるよ。ヘルモスの見込んだ通りだった…」

と最後の力を振り絞るようにミレディゴーレムの核が淡く光る。

「ミレディ！」

「大丈夫だよ。試練はクリアだからね。」

「それならミレディさん他の迷宮のことを聞いても良いですか？」

「そっか…他の迷宮の文献もなくなるぐらい時が経ったんだね。良いよ。他の迷宮は…」

と各迷宮の在処を話すミレディ。

「以上だよ。頑張つてね。君たちならきつと変えられるよ。私たちの為せなかったことを…どうか自由の意思の下に生きられる世界を…」

そうしてミレディの迷宮の試練をクリアし認められた城之内たち
こうしてライセン大迷宮は攻略された。

そして闇の波動が止むと一行の前に

金髪の少女…否

ミレディ・ライセンその人が闇の波動を身に纏い怪しく笑う。

その身に緑色の鉱石を身につけて不気味に光るのであった。

ライセン大迷宮10

「ミレデイ……じゃねえ……誰だテメエ！」

「これは異なことを我はミレデイ・ライセンであるぞ？」

「いえこれは……乗っ取り……？でも神代から生きるミレデイ・ライセンを乗っ取るなんてことが出来るとは……」

「そうとも。だからこそ貴様たちとの戦いで疲弊した瞬間を狙ったのだ。我が悲願を達成するためにこの身体を欲したのだ。」

「……まさかあの鉱石……あり得ん！あれは勇者たちと共に全て滅した筈だ！」

「ヘルモス！あの鉱石に何かあるのか！」

「……克也……まさかだけ……一度見たことがあるから分かる……どうしてこの世界に！」

「惠理さん！ヘルモスさん知ってるのですか？」

「憎き竜には分かるであろう。欠片とはいえ力は健在なのだからなあ」

「……オレイカルコスの蛇神！」

「嘘だろ!?あれは俺と遊戯と海馬で倒してアテムのやつが封印した筈だ！」

「オレイカルコスって城之内君たちの言ってたあの異常気象の原因!?!」

「ほう本体は封じられたのか…ならば我が本体に成り代わりこの世界を闇へ染めよう。」

「オスカーさんの言ってた漆黒の大蛇ってオレイカルコスのことだったってこと」

「そういうことか…オスカーたちの魂を取ったってことか!!」

「弁えよ。我が復活し闇へと染める礎となれたのだ。光栄なことであろう。」

「なんてことを!」

「…こいつ…話を通じない…倒そう!」

「良いのか? 我を倒せばこやつも死ぬぞ?」

「くっ!」

「まあ良い。余興としては良いだろう。掛かってくるが良い。」

と挑発をするミレディ…否オレイカルコスの残滓

「先手必勝ですう!」

と勇猛果敢にドリユツケンを振るうシアであったが

「…ふんこの程度か?」

と渾身の一撃を止められる。団結の力を装備している筈のシアの攻撃がだ。

「うそっ!?!」

「今度はこちらだな。」

と目に見えぬ程の早さでシアへ接近すると蹴りを放つオレイカルコスの残滓。

(なんて重さっ!?)

咄嗟に身体強化を最大限まで使用するもそのまま蹴り抜かれシアはまるでボールのように弾き飛ばされる。

「シアさん!?!」

「普通の蹴りであんな威力が!?!」

「この!?!」

とフェニックスブレードで斬りかかる城之内であるがオレイカルコスの残滓…ミレディオルタは難なく受け止めて拳の一撃でフェニックスブレードを砕く。

「グッ!?!身体が重い…!?!」

「フンッ!?!」

「させない!?!」

と追撃を掛けるが恵理が鎖付きブーメランで城之内を引っ張り事なきを得る。

「そういうことか、自分の周りの重力を重くし動きを鈍らせ更に…貴様質量を上乗せしているな。それも惑星の重力を」

「惑星の重力!?!で、でもそんなことしたらまず身体が耐えきれずに崩壊する!?!」

「だからこそ他の神代魔法なのだろう。迷宮を作ったということは他の迷宮を作った者たちの神代魔法を使っても可笑しくはない。

避けるもののその衝撃は凄まじく余波だけでレイカを壁へ叩きつける。

「まさかゴーレム騎士たちにまで付加出来るの!？」

「ここには無数のゴーレムがあるからな」

と宙に浮くゴーレム騎士を操りミレディオルタは不適に笑う。

今度は恵理へと狙いをつけるミレディオルタ

「くっ!なら中和すれば!地霊術!」

「重力を中和、成る程厄介な。とでもいうと思ったか?」

とミレディオルタは瓦礫を集め重力を横なぎに振るい猛烈な勢いで飛んでくる。

そこへアウスが間に入りある程度軽減したものの瓦礫は恵理へと降り注ぐ

「恵理!!」

「余所見をしていて良いのか?」

「させん!」

とヘルモスが間に入り剣で防御しつつ自身に翻弄するエルフの剣士の力を宿し踏ん張るが城之内諸とも数メートル弾き飛ばされる。

「なんだこいつの強さ……!」

「ミレディ・ライセンのポテンシャルを最大限発揮し容赦の欠片もない。後衛から狙う当たり趣味が悪い。」

という間に香織へ接近し、弓を射る間もなくミレディオルタの指先が香織の身体を貫く。

「香織いいいいいいいい！」

ハジメの絶叫が響く。

「ふん他愛ない……ムツ」

「近付いてくれて良かった。これなら分解作用も関係ない！」

と香織の全身から毒が吹き出す。

「身体の動きが！」

「神経毒……代謝器官全部に行き渡れば指一本動かせなくなる！皮膚からも感染するから防げないよ！」

更に駄目押しとばかりに身体を溶かす猛毒が突き刺した右腕から侵食する。

「クッ！」

しかしミレディオルタは右腕を切断し距離を取る。

「猛毒使いとはだがその傷では動けまい。厄介さで言えば貴様が断トツか」

「ヌーン！」

と海馬は稲妻の剣で斬り付ける。

「片腕かつ毒で身動きも取れまい……っ！」

と海馬はその場から離れた。

「勘の良い……そのまま斬りかかれば重力の餌食にしたものを……」

「そんな!? 毒が効いてないの!?!」

「いや効いているとも。だが」

と切り離した右腕が再生した。

「こやつを持つ再生魔法で治しただけのこと。」

「再生?……逆行の間違いでしょ。まるで巻き戻したみたいにな。」

「ふっ再生魔法ではあるがその本質は復元、時に干渉する魔法。毒を受ける前に身体の状態を巻き戻しただけのこと。貴様の決死の攻撃も無意味であったな。」

と自身に回復魔法を掛ける香織へと言うミレディオルタ。

数分の間にパーティ全滅の危機に瀕する城之内たち。

「そろそろ終わりにするとしよう。貴様らをオレイカルコスが生け贄にし我が神体を復活させ混沌とした世を作る……グッ!?!」

と突然苦しみだすミレディオルタ

「へる……モス……今のうちに私を……殺して!」

「ミレディ! 意識が!」

「まだ塗りつぶされていなかったか……! 解放者リーダーは伊達ではないか……だがこの程

度」

「…早く…私が私じゃなくなる前に…！」

「何も殺すことなんて！」

「私は未来のために戦った…それは人々が自由の下に歩めるように…だから私がそれを台無しにすることなんて出来ない！オー君たちの覚悟を私が踏みにじるわけにはいかない！」

それは解放者として未来を案じた先駆者としての言葉。

「ねえ本当にそれで良いのかい？」

と実体化したヴェールが訊ねる。

「君の本当の気持ちは違うんじゃないかい？覚悟云々よりも君自身の願いが」

「…私は…皆の魂を見つけない…囚われた仲間の魂を見付けて弔いたい…でも私は…ここから出ることは出来ない…なら」

「出来る出来ないじゃない。君がどうしたいかだけさ。本音くらいさらけ出しちゃいな。」

「…皆を見つけない…だから…だから」

「たすけて！」

「その言葉しかと聞き届けた！ならそれは私への依頼だ！魔法の依頼…承ろう！」
とヴェールは自身の杖で地面を数回叩く。

それと同時にミレディオルタは再びミレディを封じ込めヴェールへ向かおうとする
が

「させるかつてんです！」

と蹴り飛ばされあちこち傷だらけのシアがドリユッケンを小型化してコンパクトに
振りやすい形態へと変えてミレディオルタを強襲する。

「その傷で動けるとは！」

「ヴェールさんに活性アンプルっていうのを打ってもらいました…後日副作用が凄まじ
いらしいですけど今この瞬間に！皆を守るなら怖くないですよ！」

と額が切れたのか顔から流血しながらもそれでも仲間を…自分を認めてくれた恩人、
恋人、尊敬する人を守りたい一心でドリユッケンを振るうシア。

「風霊術エンチャント！シアさん行って！」

とウインの風霊術による風の付加魔法でシアの全身に風の魔力が迸りドリユッケン
からは鎌鼬が巻き起こる。

「バカな!?周りの重力を三倍にしている筈…なのになぜ動ける！」

「こんなの！社長の訓練に比べればなんてことないです！」

とシアが奮闘する中ヴェールの準備が出来る。

「ゴーレムを出したのならこちらも出そうか！ウイツチクラフトの最高傑作！女神の写し身…そして私が育て、スカウトした仲間たちを！」

とバカでかい魔方阵が起動する。大魔導士たるヴェールにかかれればあつという間であつた。

「さあ！ウイツチクラフトのデモンストレーションだ！まずは最高傑作にして私の娘みたいな娘！ウイツチクラフト・ゴーレムアルル!!」

と呼び出されるは大きな槌を携えた大きな女性。

「……………zzz」

「ありや!?もしかしてお昼寝中だったかい？」

「zzz…ん?あれ?ヴェールだあゝ」

「こりや寝ぼけてるね。まあその内戻るでしょ。続いては！ウイツチクラフトで私に次ぐ魔力の持ち主で代理マスターを任せられる逸材！頼りになる高位魔法使い！」

ウイツチクラフト・ハイネ！」

と今度は魔法の杖を持った高身長的女性が出てくる。

「へっ!?ここはいつたいたい何処ですか!?まだ仕事が終わってないのに!?ってマスター!?今まで何処で油を売っていたのですか!早く帰ってきてくださいよく仕事が終わらない

んです」

「それはこれを片付けてからだよ！手伝ってちょうだい！」

「ハッ！マスターから頼られた…このハイネしつかりやります！その方しつかり！」

とハイネはそのまま倒れている香織に駆け寄るとすぐさま治療を始める。

「そして私の弟子で宝石商、加工技術は年々上がって将来は私を抜くだろう逸材！」

ウイツチクラフト・エーデル！

炎の扱いはウイツチクラフト！鍛冶関連はお手の物！頼りになる炎のウイツチクラ

フト・シユミッター！」

「こおら！ヴェール！呼び出すなら事前連絡ぐらいしなさいよ！」

「まあまあエーデルさん落ち着いて。ヴェールさんが僕たちを頼ってくれたんだから嬉しいことだよ？それよりこっちの娘を運ばないと！」

と衝撃から立ち直ろうとするものの左腕の義手の一部が使えなくなっているハジメの方へと駆け寄りながら言うシユミッター。

「ああ！もうちゃんと後で説明しなさいよ！」

「さてそして、あらゆる物を染め上げ色を使わせたら右に出るものはいない生粋の染士

ウイツチクラフト・ピットレ

最年少でゴーレム作りの天才、粘土や陶器何でもござれ

ウィツチクラフト・ポトリー」

「お姉ちゃん……!」

「おおポトリー元氣そうだね。力を貸してくれるかい?」

「うん!」

「ほわあ!?!この娘上半身と下半身が!?!い、急いで治療を!」

「ピットレはユエちゃんを下げさせて。魔力があればその娘は回復できるから問題ない。

さてこれで」

「ちよつとヴェールさん!?私の紹介は何処にいったんですか!?!」

「忘れてないよ。でも何も言わなくなつて仕事してるから良いかなつて。」

「全くヴェールさんは」

「スクロール作りからウィツチクラフトの仕事を振る的確な手腕、我らがウィツチクラフトの看板娘

ウィツチクラフト・ジェニー!」

「はいは〜い!というわけでここら辺作り替えちゃいましょう!」

とジェニーはいつの間にか設置したスクロールを起動させると

「!これって魔力が分解されない?」

「ええ。ジェニーさんがすぐさまこの部屋全体の魔力を分解する機能を一時的に停止させました。しかし30分と持たないでしょうから早めの決着をしましょう!」

「それなら…:回天!」

と香織はすぐさま回復魔法を発動させると全員の傷が一定で治る

「応急処置だけはこの戦闘だけなら持つように直したよ!」

とシュミツタがハジメの義手を手早く補修する。

「ありがとう。僕だけ寝てるわけにはいかなからね。」

「にしてもこれは貴方が作ったのね。中々の一品ね。武器の使用に仕込み武器、重さの軽減がネックといったところね。それでも良い作品ね。」

「そりやそうさ。なんとたつてこのハジメは私がこつちの世界で取つた弟子だからね!」

「うっそおお!?!あの気難しいヴェールが新しく弟子を取るなんて!?!」

「成る程ね。じゃあ君は末弟子になるのか。宜しくね。私はシュミツタ。こつちの人はエーデルさん。私たちもヴェールさんの弟子なんだ。」

「ヴェールの?」

「そうだよ。ウィツチクラフトはヴェールさんに憧れて門を叩く人が多いんだけどクラフトやらは難しくて私たちしかいないんだけどね。その分卸売りとかは他のギルドに任せることも多いかな?」

「てことはヴェールって社長みたいなもの？」

「人間界風にいうならそうかな？」

「恵理の方は霊使いの娘たちがいるから大丈夫…さてここから反撃開始だよ！」

一度は全滅の危機に瀕したもののヴェールの助力により新たにウィッチクラフトの面々が参戦しライセン迷宮の分解作用を無効化に成功。

果たして彼らはミレディを助かることが出来るのか！

ライセン大迷宮11

ミレディオルタの苛烈な攻撃の前に全滅の危機に瀕したもののヴェールの助力によりウィッチクラフトメンバーたちが参戦し最終決戦へと突入するのであった。

シアが決死にミレディオルタへと攻撃を浴びせる中

「さてまずはあの娘の中の残滓をどうにかして外へ追い出さないと共倒れになってしまうからね。」

「魂を乗っ取ってるだったか。物理攻撃が駄目なら俺じや役に立てねえ。」

「…魂を解放する…城之内、貴様魂の解放のカードはあるか？」

「魂の解放って…俺は持ってねえ…そうだ！恵理が持ってた筈だ！」

「でも単体でやると威力が削がれるかもしれない。何か上乘せできれば…」

「それなら魔法効果の矢をプラスして直接ミレディさん自身に打ち込むのはどう？」

とフラフラしながらも恵理が合流した。

「恵理、怪我は！」

「大丈夫、アウスたちが守ってくれたからかすり傷だよ。でも魔法効果の矢で直接打つとしてもはずす可能性はあるしミレディさんの持つ魔法で効果を弾かれちゃう可能性

はある。」

「クソツ！折角良い考えだったのに」

「そこは僕たち霊術使いの出番だね。」

「ええ。私たち全員の霊術を合わせれば一時的に魔法を封じられるでしょう。そうすれば魂を引き剥がせる筈です！」

「……？誰だ？」

「いつの間になんだい。光霊使いの娘と闇霊使いの子？」

「先程ですよ！恵理ちゃんのピンチだとびびつと来たのでヒータたちの力を追いかけて来ました！」

「全くびつくりしたよ。来たら瓦礫が大量に振りかかる所だし、ライナが飛び出すし。」

「恵理ちゃんが危なかったのですよ！飛び出しますよ！」

時間は少し遡り

瓦礫が恵理へと振り注ぐ中で恵理のデッキが光輝き、二人の人影…一人は恵理を前に立ち光の障壁を展開し続いてもう一人も暗い闇の障壁を展開して受け止めた。

「これは……！ライナ！ダルク！」

「アウスお久し振りですね。」

「大丈夫かい？」

「えと？貴女たちは？」

「私はライナ、光霊術を使えます！」

「僕はダルク、闇霊術を使えるよ。久しぶりだね。」

とライナは恵理を抱きしめる。

「久しぶりって？」

「昔…君が赤ん坊の時にね。僕もライナも君の父親と同期だね。一緒に魔法を学んだ。んだ。」

「はい！ちっちゃい頃の恵理ちゃんはそれはもう可愛くてお姉ちゃんって呼んでくれたんですよー！」

「お父さんの…知り合いだったの？」

「ええ、ごめんなさい、貴女の苦しいときに一緒にいてあげられなくて…でもこうやって会えたのは何かの導きです！これから共に戦わせてください！」

「うん！お願いね。ライナあつちの人ミレディさんって人がオレイカルコスの残滓に乗っ取られたの。どうにかして引き剥がせないかな？」

「そうですね。魂を解放してどうにかその残滓の方を追い出せれば。」

「でもミレディさんの神代魔法を使えるから厄介だし…」

「それなら私たち霊使い皆の力を合わせた大霊術ならその魔法を封じ込められる筈です

「！」

「ともかくあつちの人たちと合流しよう！」

とダルク、ライナを伴い恵理は城之内たちと合流した。

「その霊術とやらはどれぐらいで発動出来る？」

「集中力が必要なのと僕たち全員の霊術を合わせるから……5分は必要。その間無防備になつちやうから守りをお願いしたい。」

「要は決まればいけるってことだな。なら俺たちで注意を引き付ける！」

「克也お願いね。」

「ああ！恵理が後ろにいてくれるって思えば俺にとつてこれ程安心出来ることはねえさ！」

そうして作戦も決まりミレディオルタを抑えにかかる城之内。

その間にハイネに連れられ回復した香織が恵理の方へ駆け寄る。

「恵理ちゃん！私はどうする？」

「香織、今から説明するね。」

と作戦を説明する恵理。

「そういうこと。なら私がそれを射るよ。」

「……任せたよ香織。」

「うん！」

と魔法効果の矢に魂の解放をのせて香織へと託す恵理。

—————

そうしてミレディオルタの方へと戻る。

「せいやー！」

「クツ！」

シアの猛攻をかろうじてかわすミレディオルタ。

シアの攻撃に全振りした動きは防御を考えない捨て身の行動であった。

しかしそれ故にミレディオルタは攻めあぐねていた。

(こやつ防御を考えていない…生物は普通攻撃と防御のどちらかの行動を取るがそれでも回避、

防御への意識を回す。どんなに優秀な生物でも100ある内の20はそういう配分だ。故にそこを崩すことで隙を生み殺す。

だが攻撃をし続けるこやつに隙がない。更に)

ズドン！

「殺りづらい…！」

ミレディオルタが死角を攻撃するタイミングでハジメが援護射撃することによりミ

レディオルタの攻撃のタイミングをずらしシアの攻撃をサポートしていた。

分解作用を無効化したことで威力の戻ったドンナーでの攻撃は一撃でも受ければ致命的な隙になり、シアの攻撃に対処出来なくなる。

更にゴーレム騎士たちは

「そこ！エーデルさんそいつは右腕が脆くなってる！」

「わかった…わよ！」

シユミツタがゴーレム騎士を自身の鍛冶道具で叩いた反響音で何処が脆くなってるかを的確に導きエーデルは宝石に魔力を込めて破壊する。

再生して一際大きくなったゴーレムは

「…じゃま…！」

とアルルの大槌で粉碎される。

「さてさてこれは量が多いですね。っと」

ゴーレム騎士たちを相手するジェニー。

同じく相手をしていた海馬は後ろに下がると丁度

ポンと背中合わせになる。

「ふうん、貴様が持つスクロールとやら酸素はあるか？」

「酸素ですかあ？何をするおつもりで？」

「周辺全てのブロックが現状ゴーレムに取り込まれることで再生している。だが元のブロックを錆び、風化させてしまえば脆くなる。さすれば労力を掛けずにやつを葬れる。」
「成る程そういうことですか、用意は出来ませんがそれほどの火力はどうするおつもりで？」

「そんなものどうとでもなる。やれるのかやれないのか？」

「はあ…仕方ないですね。やりますよ。」

「それと貴様のもつスクロールの大量発注はできるか？」

「別に良いですけど、人間界の通貨での支払いは出来ませんよ？」

「ならばこちらはバーチャルシステムの雛形を提供する。それがあれば貴様らの工房とやらの宣伝になるであろう。古株だけでなく新規の顧客を取るのは重要なこと。シンブルかつインパクトあるものは食いつきやすい。」

「これはこれは、貴方は経営者でしたか！ええやはり新規のお客様の獲得は死活問題ですからね。そのバーチャルシステムとやら後で見せてもらっても？」
「構わん。それで値段をつけるが良い。」

「交渉成立ですね！それでは行きます！」

とスクロールに貯めていた膨大な酸素を解き放つジェニー。

そして海馬はカイザー・グライダー・ゴールデンバーストを召喚し

「カイザーグライダー！ゴールデンバースト！」

カイザーグライダーが炎のブレスを解き放つとそれに伴い次々に引火してゴーレムたちを焼き付くしていく。

更に駄目押しで

「魔法カード火竜の火炎弾！」

と海馬は容赦なく炎の勢いを強める。

炎の燃焼で酸素を持ってかれ息を切らすミレデイオルタだがシアはものともせずドリユッケンを振るう。

ガギン

「貴様の仲間は味方諸とも殺す気か!？」

「社長がそんなことするわけないですう！社長は私たちならこれぐらいへっちやらだつて信頼してくれてるんです！」

「にしても暑いわよ!？」

「まあ僕は気にならないかな？鍛冶の時はもつと熱いし」

「シユミツタはそれでも私は違うわよ！」

「…そうか！海馬さんはゴーレム周りのブロックを酸化させて再生速度を落とそうとしてるんだ！」

「成る程ね。二酸化炭素による風化を急激に進めさせるって訳だね。」

そうして急激な酸素の延焼による二酸化炭素がブロックへと吸収されていきブロックが風化されていくものの残ったゴーレム騎士たちが向かっていくが突如として動きが止まる。

「!? ゴーレムの制御が離れただど!」

「…ゴーレムたちもその人助けたい…だから私たちが助けるまで動かないでもらってる…!」

とポトリリーがゴーレム騎士たちの制御を奪うことに成功し動きが止まり隙が出来た。

「今です!」

とハイネが魔力布を取り出しミレディオルタを縛り上げる

「クツ!? これは!」

「魔力を吸い取る特殊な布です! 魔力がなければ魔法も使えないでしょう!」

とハイネが拘束したのですかさず香織が弓を構える。

直感的にそれを受けたら不味いということを知り回避することを選択するのは動きの制限と魔力を吸い取られるというダブルパンチ。

そして香織から矢が放たれた。

「動けぬとしても回避する術などいくらでもあるわ!」

と魔力を吸い取られながらも強引に空間魔法を使用することで射線から外れることにより香織の矢をかわされてしまう。

「香織さんの矢が!?!」

「ふん、確かに危うかったが見え見えの上矢という少し回避すれば当たらぬものを使ったのが運のツキ、これで」

仕切り直しと言おうとしたミレディオルタ

しかし

グサツ！

「…は？」

かわした筈の矢が身体に刺さっていた。

「バカな!？」

「良かった。貴女を信じて、貴女は死に物狂いで避けると思った。私たちの希望をねじ伏せてこっちの心を折ってそのオレイカルコスの生け贄にしようとしたくらいなんだ

から…だから私は…仲間を信じた！」

そう香織が言う中でミレディオルタが見たものそれは

かわした先で弓を放ったユエとそれを支えるピットレの姿であった。

「バカな!? 奴は我が真つ二つにした筈!? 生きているわけが」

「…ん、ちよつと危なかつた。でもピットレのおかげ。でも貧血気味…」

「そつちの女の子の言った通りでした！」

そう香織は恵理から矢を託された時回復途中のユエと治療していたピットレへと渡し自身の矢を放った後無防備になるからそれを放つように言っていたのである。

そして矢に封じられた魂の解放の効果が発動する！

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ!? た、魂が!?!、魂魂魔法で縛れば!」

と尚も足掻こうとする。

実際魂魂魔法を使用すれば魂の解放も不発になったであろう。

「さあて好き放題やったんだ、そろそろ観念しな!」

「私たち全員の霊術を合わせた大霊術!」

「ミレディは返してもらおうよ!」

「皆さんの頑張り…無駄にしない!」

「さあいきましよう! 恵理ちゃんを傷つけた報いを受けるのです!」

「全くライナは……まあでも僕も同感かな。それに放置してたら駄目だつてわかる闇だからね！」

「皆の力を合わせる！」

「させるか！」

と抵抗を続けて重力の塊を投げつけるミレデイオルタ。

「うおおおおおおおおお！」

と城之内は重力の塊を剣で受け止める。

ジリジリと後退していくがそれでも恵理を守るべく引かない城之内。

「克也さん！筋力、速力、魔力エンチャント！」

雪姫が城之内を援護する。

そしてそこへ

「ハイネ！やっちゃつて！」

「はい！マスター！」

とヴェールの持っていた魔力を溜め込む水晶がおもむろに割れるとハイネが固有の能力を発動させる。

ハイネは魔道具を消費することでそれに見合った破壊をすることが出来る。

ただし魔道具の消費と本人が破壊を嫌う性質なため滅多には使われないが使うべき時

には躊躇わずに使う。

そして重力の塊が切り裂かれ遂に恵理たち7人の霊使いによる術が解放される！

「「「「大霊術！一輪!!!」」」」

遂に解放された大霊術

果たしてミレディを救えるのであろうか

ライセン大迷宮12

ミレディを助けるため恵理は他の霊使いの6人の力を借り大霊術一輪を発動した。

その霊術は恵理を中心として一輪の花のように咲きほこる。

「ば、バカな!?魔法が使えないだど!?!」

「大霊術一輪…それは私たち霊術を極めた者が使える奥義!!」

「こいつを発動すると対象の魔法や異能を無効化出来るんだ!」

「まあ発動まで時間は掛かるけど一度決まれば!」

「後は見ての通りさ!」

「好き勝手してきたんです!往生しなさい!」

「闇つてものは人や精霊にとつて切り離せないもの。でもそれと折り合いを付けて生きてるんだ!それに」

「闇があるから光があつて光があつて闇がある。表裏一体だからこそ私たちは共存して生きてこれからを歩んでいくんです!」

「貴方のそれは只滅ぼし支配し未来がありません!」

「僕たちは未来へ進む!例えどんなに辛いことや悲しいことがあつても…前に進んでい

くしかないんだ！過去は変えられない…でも！未来は変えることが出来るんだ！」

各々の霊使いの精霊と恵理の力強い言葉に大霊術は呼応するように強く光輝く！

そして魂の解放の効果が発揮されオレイカルコスの残滓を鉱石事ミレデイから引き離すことに成功する。

「まだだ！まだ取り憑けば」

「そうはさせない！ブリューナクの槍！」

とハジメからレイカへと代わり迷宮で培われた綿密な魔力コントロールにより一瞬で氷の槍が作られオレイカルコスの残滓へと到達する。

「ガッ!?う、動けぬ…（し、思考が…とま）」

ブリューナクの槍それは当たった対象を只凍らせるだけでなく数秒相手の思考能力を奪う凍結能力。

まだレイカは未熟であるが成長すれば相手の思考をレイカの思うままに操ることも可能になるだろう。

そうしてオレイカルコスの残滓の動きが完全に止まる。

「これで最後だ！」

と城之内はサラマンドラの炎を集約して一気に解き放つ！

サラマンドラの炎がオレイカルコスの残滓を包み込む。

「気を抜けば吸い込まれる…！皆踏ん張って！」

と全員がその場に踏ん張るが強力な引力で吸い込み始めたブラックホールは勢いを増していく。

「このままではライセンだけではない、ブルツクの町…最悪この世界そのものを飲み込むぞー！」

「どうすりゃいい！」

「それなら私が同じ質量をぶつければ…いけると思う。」

「ミレデイ！だがそんなことをすればお前の魂が消滅しかねん！」

「良いんだ…例えば私が消えても…意思を継いでくれる子達がいるって分かったんだもの

…後悔はない…」

「そんなの駄目だよ！折角ミレデイさんと分かり合えたんだもの！それにヘルモスさんに思いを伝えてないでしょ！それに誰かを犠牲にしなきゃいけない選択はしたくない！」

と香織はミレデイを止める。

吸い込み始めたブラックホールはさらに勢いを増していきポトリーが耐えきれずに吸い込まれ掛けるがハジメが無事にキャッチして耐える。

「ブラックホール…核はオレイカルコスの残滓…の鉱石…一か八かだけ破壊の概念の

宿った攻撃ならブラックホールをまるごと破壊出来るかもしれない……でも」

「流石にブラックホールを破壊できるほどの威力はだせな」

「城之内！ 貴様にデュエリストとしての誇りがあるのならはこの場の打開策があるのは分かる筈だ！」

「……まさかヘルモスの力をか！ だが装備合体させたとしても……」

城之内は海馬の目を見た。そこには根拠はないものの任せろという意志が伝わる。

「分かったぜ海馬！ いくぜ！ 力を貸してくれ！ ヘルモスの爪！」

と竜状態のヘルモスが顕現する。

この絶望的な状況でも誰一人諦めず前に進む意思を繋いでいく！

「俺は混カオス・エンペラー・ドラゴン沌 帝 龍——終焉の使者を召喚！」

現れるは数多のデュエリストを絶望に落としてきた破壊竜

今絶望を破壊せんと顕現する

「混沌帝龍とヘルモスの爪を融合！」

ヘルモス竜形態を中心に光輝きそして

「混沌なる時代を終わらせ光と闇を超越せよ！」

「終焉剣カオスブレード！」

一本の大剣が出現する。

終焉剣カオスブレード

レベル 8 攻撃力 3000 守備力 2500

このカードは「ヘルモスの爪」の効果で自分の手札・フィールドの通常召喚できないドラゴン族モンスターを墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

このカードの効果を使用する場合自身はターン終了時までこのカードの効果以外のカードを発動できない。

このカードの①②③④の効果は1ターンに一度までしか使用できない。

① 1000LP支払うことで発動出来る。

お互いの手札を全て墓地へと送る。送った枚数×200ポイントのダメージを相手に与える。

② 2000LP支払うことで発動出来る。

お互いのフィールドのカードを全て墓地へと送る。送った枚数×300ポイントのダメージを相手に与える。

③ 3000LP支払うことで発動出来る。

お互いの墓地のカードを全て除外する。除外した枚数×300ポイントのダメージを相手に与える。

④ 4000LPを支払うことで発動出来る。

お互いのフィールド、手札、墓地のカードを全て除外する。

その後除外したお互いのフィールドにモンスターを攻撃表示で特殊召喚しこのカードを装備する。

⑤このカードを装備したモンスターの攻撃力は除外されている枚数×300ポイントアップし3000LPを支払い装備したモンスターの攻撃力を半分にし相手へ直接攻撃することが出来る。

このカードの④の効果を発動した場合自分の次ターンをスキップする。

「オオオオオオ！」

と海馬は勢い良くその大剣をブラックホールへと真っ直ぐに投げる。

寸分変わらず中心に向けて投げられるが瓦礫に当たり軌道がずれる

「社長と克也さんの思い！」

一緒に戦ってきたハジメさんや香織さんユエさん、恵理さん！霊術使いの皆さん！
ウィッチクラフトの方々！そして！

私たち後世の人たちを信じてくれたひねくれてうざいけど！誰よりも乙女なミレ
ディ・ライセンの思いを！無駄にはしません！」

とシアは痛む身体にむち打ちドリユッケンを元のハンマー形態へと戻すとカオスブ
レードの柄の底をドリユッケンの中心で

「シアホオオオオムランですうううううう!!」

打ち抜いた!

ブラックホールを中心へ到達しカオスブレードの力が解き放たれる!

その場に巻き起こっていたブラックホールが瞬く間に破壊されていく。

本来ブラックホールを消滅させることは不可能である。

しかしカオスブレードはブラックホールという理そのものを破壊した。

それによりブラックホールが消滅することとなった。

ブラックホールを作り出していた核であるオレイカルコスの残滓を宿した鉱石が露出した。

露出した鉱石へと雪姫の氷の魔法、ヴェールの魔法が放たれ

パキイイイイイイイイン

と何千年もの間ミレディを蝕み続けていた闇は消滅するのであった。

ブラックホールも止みオレイカルコスの残滓を完全に葬り去ったことで緊張感が抜けたのか座り込む一同。

海馬も散乱した瓦礫に腰掛ける。

「これで…終わっただんだよな?」

「うん…僕たちの…勝ちだよ!」

「一時はどうなるかと思っただけで何とかなつたね。」

「そうだね。えっとポトリーだったよね。大丈夫？」

「……♪」

ギユツとポトリーはハジメに抱きつく。

「ハジメ君懐かれたみたいだね♪」

「ポトリーがなつくなんて珍しいね。」

「何か惹き付けられるものがあつたのね。」

「漸く終わったですう〜」

ぐでつとシアは大の字で倒れる。

「ふうん、バカ娘がこれぐらいで疲れるなどまだまだだ、」

「ふええんしやちよおおくひどいで」

「だが漸く貴様もハウリアらしくなつたと言えるか、今に満足せずこれから精進しろ

…シア・ハウリアよ。」

「しや、社長が誉めてくれました!!が、頑張りまぜうううううううう」

「ええいバカ娘離れんか!」

とシアは疲れも忘れ海馬へダイブする。

「漸く終わったのだな。オレイカルコスを巡る因果が…ミレディ!!?」

「ふふ力を合わせて困難に立ち向かう姿…貴方たちならきつとあのクソ神を倒せる…思
い残すことは沢山あるけど…でも後悔はない…」

今にも消え入りそうなミレディ。

「どういうことだよ！オレイカルコスが倒したんだぜ！なのはどうして！」

「元々私は魂魄魔法でゴレムに魂を移していたようなもの…それに…何千年と過ご
す内に魂も摩耗してたの…」

皆のオー君たちの顔も思い出せないぐらい…大切なことなのに思い出せなくなる…
辛いし悲しいし…

でもクソ神を殺したくて今まで生きてきて…最後に残してた力もあのオレイカルコ
スに吸われて…でも後継者が生まれてくれた…」

「喋るなミレディ」

「ごめんヘルモス…でも最後に…愛してる人会えて…孤独に死んでくんじゃなくて誰か
に看取られる…それだけでも私は幸せだよ…」

そうしてどんどん冷たくなっていき鼓動が弱くなっていくミレディ。

「ヴェールどうにか出来ないの！」

「ハジメ…魔法っていうのはね、万能に見えるけど…でも出来ないことだつてあるんだ。
それなら彼女を看取る。その志を忘れないようにするべきだ。」

「そんな！漸くヘルモスさんに会えて…これからだつていうのにそんなの…そんなの可笑しいよ！」

とハジメと香織は涙を流しながら叫ぶ。

「ありがとうカオリン…君みたいに優しい娘と友達になりたかつたなあ…ハジメちゃんだっけ？私がいふのもなんだけど…カオリン泣かせちゃ駄目だよ。」

囁くようにユエが一言、消えゆく偉大な「解放者」に言葉を贈った。

「……お疲れ様。よく頑張りました…後は任せて」

「……」

それは劳いの言葉。たった一人、深い闇の底で希望を待ち続けた偉大な存在への、今を生きる者からのささやかな贈り物。本来なら、遥かに年下の者からの言葉としては不適切かもしれない。だが、やはり、これ以外の言葉を、ユエは思いつかなかつた。

「…しゃちよおおおどうにかしてください！愛し合う二人をひきざがないでください
いいいいいい」

「泣くなバカ娘！俺には何も出来ん…だがミレディ・ライセン」

「…なに…」

「このまま消え逝くならば最後に賭けする気はあるか」

「…え…？」

「城之内、時の魔術師と魔導師の力を貴様のありつただけの魔力を込めて使え。上手いけば助かるであろう。だが何が起こるかは未知数。

助けられる可能性など精々1%あるかどうか。ギャンブルとしてはやれば負ける可能性が99%だ。」

「1%成功すんだろ？ならやるぜ！この迷宮で俺らは強くなれた…ならその恩を返すときだぜ！」

「勇者よ…私も手伝おう。私は…仲間を二度と死なせたくない。」

「ヘル…モス…：…うん…このまま死ぬぐらいならヘルモスに私の全部…預けるよ…」

「それなら魔法効果を高める陣を引いておきました！ここなら最大限に発揮できる筈です！」

とハイネがはなしを聞きすぐさま陣を書いていた。

そこへミレディを寝かせる。

「頼むぜ…！時の魔術師！」

「我に宿れ！時の魔導師よ！」

ポオンとコミカルな音と共に出現した城之内のピンチを何度も助けてきた魔術師。

そうして魔力を高めていく城之内とヘルモス。

しかし戦いの影響か消耗しているからか本来の魔力の三分の一程度しか魔力が集ま

らない。

「城之内君！」

「私たちの魔力も使って！」

「…ん！」

「私たちの力も！」

「それなら私たちもだね。」

と霊使い、ウィッチクラフトの面々が魔力を二人へと集結させていく。

そうして二人を淡い光が包み時の魔術師たちがその手に持った杖を振り上げる！

それに合わせて城之内とヘルモスも力を行使する。

「デュアルタイムマジック!!!」

ミレディを中心にタイムマジックが発動し光が包み込む。

ミレディはその中でヘルモスへの想いを…出会いを思い出していた。

……最初に会ったときは堅物で…事あるごとに使命だなんだって…うるさくて良く衝突してティマイオスやクリティウスに止められてたっけ…

私のピンチに颯爽と駆けつけてくれて助けてくれてそれから一人の男として見るようになって…皆にからかわれて…でも応援してくれて…ヘルモスは中々気付いてくれなくて…

「そうして解放者の皆が散り散りになって後世に託そうって……でも寂しくて……ヘルモスはそんな私に寄り添ってくれて……」

「でもあの蛇神が……皆の魂を奪って別の世界に逃げて……ヘルモスたちはそれを追い掛けて……帰ってこなくなつて……」

「寂しくて寂しくて……残つたエス姉に当たっちゃつた……」

「でもエス姉は最後まで私の側にいてくれた……」

「最後まで自分じゃなくて私の心配をしてた……」

「何年も何十年も待つて二千年は経つたのかな？」

「そうしてヘルモスがもう一度来てくれて嬉しくて嬉しくて……でもどうしてもつと早く来てくれなかつたのか」

「そうやってつものつていた闇が溢れだして暴走して皆を傷付けてでも今もこうやって助けようとしてくれて……」

「ヘルモス……私の愛した……愛しい人……」

そして…

そして目を開けるとそこには……

「ミレディ……ミレディ！」

「……あ……ヘルモス……？ 私……あれ？ 身体が軽い？」

「成功みたいだな！」

「よかったあああ!!!」

「良かったですううううううう！」

「……ん！ ヘルモスと一緒に生きれる！」

「ミレディさんよかった！」

「ありがとよ海馬！ お前が言ってくれたから俺も気付けたぜ！」

「ふうん、勘違いするな、エヒトを知る者がいなくなれば対策が取れなくなるから助けただけのこと。」

「……わたし……私はまだ生きてていいのかな？」

「ああ、ミレディお前は生きていいんだ。お前の頑張りは身近で見えていたから分かる。それにお前はもう一人ではない。私も共にいる。」

「ヘルモス……ヘルモスウウウ、うわああああああああん、寂しかった……辛かった……皆皆いなくなっちゃった……エス姉だつて死んじやつて心細くて……」

でも私は後世に託さなきゃって……みんなの想いを無駄にしたくなくて……心が痛くて

…皆の思い出が消えていって思い出せなくて…使命だけが残って…ヘルモスとの想いも消えちやうかもって怖くて」

「すまなかつた…ミレデイ、辛い想いをさせたな。お前が辛いなら私も背負おう共に歩み、悲しみ喜びを分かち合おう。もうこの手から離さぬ…ミレデイ、私と共にこれから歩んでゆかないか？」

「うん…うん！ミレデイさんはヘルモスのこと大大大好きだよ！一緒に…一緒にいよう！」

と泣きながらもミレデイは憑き物が落ちたように満面の笑みを浮かべ、ヘルモスはそんなミレデイを離さないように強く抱きしめるのであった。

ここにライセン大迷宮は完全に攻略されるのであった。

攻略の印 友好を深める一行

オレイカルコスに残滓を完全に消滅させた城之内たちは半壊したライセン大迷宮の奥地でミレデイの住処へ移動した

そこには魔法陣の書かれた部屋がありオルクス迷宮と同じならそこで神代魔法を手に入れることが出来るのが推測できる。

「さあ皆魔法陣の中に入ってね。途中から参戦した娘たちもOKだから遠慮せずね。」と最初に魔法陣の中に入るハジメ、香織、ユエ、シア、城之内、恵理、海馬。今回は、試練をクリアしたことをミレデイ本人が知っているのでオルクス大迷宮の時のような記憶を探るプロセスは無く、直接脳に神代魔法の知識や使用方法が刻まれていく。海馬とシア以外は経験済みなので無反応だったが、シアは初めての経験にビクンツと体を跳ねさせた。

海馬は興味深くふうんというだけであった。

ものの数秒で刻み込みは終了し、あっさりとハジメ達はミレデイ・ライセンの神代魔法を手に入れる。

そして今度は精霊たちも陣の中に入り全員が神代を手にした。

「これは……やつぱり重力操作の魔法か」

「そうだよ〜ミレディちゃんの魔法は重力魔法。上手く使つてね…つて言いたいところだけど、ハジメちゃんとウサギちゃん、カツヤンは適性ないねえ〜もうびつくりするレベルでないね！」

「まあそうなるのは想定済みですので」

ミレディの言う通り、ハジメとシア、城之内は重力魔法の知識等を刻まれてもまともに使える気がしなかった。ユエが、生成魔法をきちんと使えないのと同じく、適性が無いのだろう。

「まあ、ウサギちゃんとカツヤンは体重の増減くらいなら使えるんじゃないかな。ハジメちゃんは生成魔法使えるからそれで何とか出来るさ」

ユエちゃん、エリリン、その重力系の魔法の使えたアウスちゃんと社長さんは適性ばつちりだね。修練すれば十全に使いこなせるようになるよ、あとの人たちはん〜可もなく不可もなくかな？」

アウス、恵理は地霊術で重力を操れたこともあり重力魔法に適正があることは分かつておりユエも元々の相性が良かったのであろう。

そして漸く一段落したのでハジメの持つ宝物庫から香織が

「それじゃあ簡単なものだけど食べよつか！皆魔力も体力も使つてるから〜ごはん食べて

ゆっくりしよう！」

宝物庫から作り置きしていた物をどんどん出していく。

ハジメの作った寸胴鍋に沢山作られた味噌汁、更にブルツクの町にて沢山買って炊いてハジメ、香織、城之内、恵理で握ったおむすびを出していく。

ライセンに生息していた魔物も宝物庫へ入れていたのでそれを出してハジメ特性の魔道コンロ付きのキッチンも取り出して油で焼いていきある程度焼いたところで水を投入して蒸していく。

辺りをいい匂いが包み込み

キュルキュルキュル

と可愛らしいお腹の音がなりそちらを向くと

「あくその…き、気にしないでくれるとミレデイさんも嬉しいかなんて…ううう」
と恥ずかしがるミレデイ。

無理もない何千年とゴレムへ魂を移して生き長らえ味覚も嗅覚もない無機物に憑依していたのだ。

デュアルタイムマジックにより魂の状態も肉体の状態も巻き戻り万全になったとはいえ経験してきたことが消えるわけではないので仕切りにミレデイのお腹は空腹を訴える。

「ミレデイさん先におむすびをどうぞ。」

と香織は神秘の中華鍋を振るう手を止めると恵理と代わりおむすびをミレデイへ手渡す。

「へ？い、良いの？ミレデイさん試練やその…暴走しちゃってカオリンたち傷付けちゃって…」

「戦いが終わればノーサイド、私たちの世界ではデュエルなんですけど、戦い終わったらそういったものは全部流して潰えて仲良くなることは多いです。それにさつきも言ったんですけど私、ミレデイさんとお友だちになりたいんです！」

「カオリン…ありがとう！それじゃ頂くね…」

もぐもぐとおむすびを頬張るミレデイ…

宝物庫に入れておいたお陰が握った時の温かさがあるそれを食べて

「ミレデイ…？どうしたのだ？」

「え？ヘルモス？どうしたってなにが？」

「泣いておるぞ」

ミレデイの瞳からこぼれ落ちた雫はどんどんと流れ落ちていく。

「へ、変だな…私…どうして泣いてるのかな…食べただけなのに…どうして」

「古来食事とは英気を養うものだ。ミレデイ・ライセン貴様は何千年の間で気を張り詰

め来る日も来る日も待ちわびていたのだらう。孤独、空腹、極度の緊張感…頼れるものがない環境張り詰めたものが溢れたのであらう。」

「ミレデイさん泣いて良いんです。ミレデイさんはいっぱい頑張ってきたんです。だから泣いたって僕たちは気にしません。だって貴女の頑張りは偉大なものだから。」

とハジメはお椀に味噌汁をよそいミレデイへと差し出す。

おむすびを更に一口入れて味噌汁を飲む

米一つ一つがほじめてミレデイの胃を…いや心を満たしていく。

「グスン…しよっぱいなあ…でもなんでだろう…凄…温かい…」

「ミレデイさんおむすびって縁を結ぶ、お結びって言う風に言われてるんです。

人と人との良縁を結ぶという意味から縁起が良いものって伝わってて私たちの国日本っていうんですけど

その中の歴史書で日本歴史書である『古事記』には

「むすびの神（正確には、高御産巢日神（たかみむすびのかみ）」っていう神様が登場して

この神様は万物の生みの神とされていて、その神様の名前が由来とされる説があるんです。」

と言いおむすびを食べ終わりお椀を置いたミレデイの手を握り

「ミレデイさんの頑張りが結ばれてこうやって手を結んで縁を紡いでいくことが出来たんです！ミレデイさん…ありがとう。」

「カオリン…ううああああああああん」

ミレデイは今までのごとく、そして自分のやってきたことが無駄ではなかったと言われ香織に抱き付く。

香織もミレデイを抱きしめて抱擁するそれは女神のように優しい心地であった。

「香織ったら成長したんだね…何だか嬉しくなるね…！」

「つうか歴史書なんて良く知ってたな白崎。」

「えっと…ハジメ君のやるゲームとかアニメとか見ててそういう背景とか調べてる内にルーツを調べてみようかなって…エヘヘ」

（全く…凄いわね。香織は…ハジメ離す気はないと思うけど絶対に）

（分かってるよレイカ。香織は僕が絶対に守るよ。）

ひとしきり泣いてスッキリしたのかミレデイは乙女にあるべく姿とは離れどんどんおむすびを口に入れていく。

「はむ…はむ…はむ…美味い！こっちの魚の入ったのとツンとくる酸っぱさのやつもおむすびに合ってるし味噌汁が程よく食欲をつついてくるね！」

とどんどん食べていくミレデイ

「ミレディよ、そんなに慌てて食べると喉を」

「はぐっ!？」

「全く言わんこつちやない…水だ。」

とヘルモスは水を差し出すとミレディは一気に呷る。

「ぷはあ…美味しすぎて慌てちゃった…ミレディさんうっかり…テへっ♪」

「さっ!こつちも出来たよ!魔物肉のケチャップソース合えだよ!」

と皿に出されたそれは濃厚な肉汁にケチャップとソースを混ぜ合わせクリーミーに仕上げた一品。

「さっ!皆遠慮せずに食べてね!」

と言う間に全員が手を伸ばしていく。

「…♪美味しい!」

「や、やっとご飯を食べられます〜マスターのお仕事と自分の仕事両方やってたら食事する時間もなく2日ぶりです!」

「ハイネさんまた食事抜いてたんですか!ダメですよ!ちゃんと食べないと身体壊しちゃうんですから!」

「いや〜このお椀を裝飾も中々だし鍋も耐熱性があつて良い逸品だね!」

「これは中々良い逸材ね!」

「おむすびとお肉の連鎖が止まらないね！更に味噌汁でリセットしてループしてるよ！流石香織たちだね！」

「…美味しい…あう…酸っぱい…」

「大丈夫？お味噌汁どうぞ。」

「…ありがとう…酸っぱいけど…お味噌汁に合う…」

「香織さん！肉巻きおむすび美味しいですう！」

「良かった♪シアさん凄い頑張ったからどんどん食べてね。」

「はいですう！あつ！ヴェールさんその…副作用って凄い痛いですかね？」

「んくあれはね。ゴニヨゴニヨ」

ポフィンとシアの頭から湯気が出る。

「まあそういうことだから頑張ってるね。ハジメと香織もね。」

「？どういうこと？」

「まあ夜になれば分かるさ。」

「さつ！恵理ちゃんモウヤンのカレーです！栄養満点ですから一杯食べてください！あと克也さんもどうぞー！」

「ライナそんなに急かさないの。あとは精霊界の霊験あらたかな霊水も飲んでね。魔力の回復に良いから。」

「おお！うめえな！味噌汁の具もネギっぽいやつとワカメっぽいやつで食が進むぜ！」

「ほらヒータほっぺについてますよ。もう。」

「わりいエリアサンキュ！」

「にしても重力魔法ね：霊術と組み合わせると良い具合に強化出来るかな？」

「アウス今はそっちよりも恵理の手作りのおむすびがなくなってしまうですよ？」

「そうだね。それは困るな。」

「皆さん良く食べて休んでいきましよう。恵理辛くはないですか？」

「うん雪姫ありがとう！」

「ユエしつかり食うんだぞ、特に血を結構流してたからこっちのレバー肉食って鉄分を

補給しねえと！」

「…ありがとうお父様…美味しい！」

「ふうん…まずまずといったところか…他の神代魔法…アテム…待っている。」

そうして一行は久方振りの休息を挟むのであった。

迷宮変革と女子会

迷宮を攻略して数日。

体力も魔力も回復した一同は1/3が崩壊したライセン大迷宮を直し：改造していった。

最初はミレデイが直すだけといったものの海馬が生ぬるいとソリッドビジョンを設置してソリッドビジョンで人の嫌がるアトラクション化をさせてしまった。

流石に海馬の世界で作ったDEATH-T程ではないものの精神力を試されるような設計へと変貌し、ミレデイの数々のトラップと合わさり以前よりも難易度が上がる仕様になったとのこと。

後にミレデイは

いや〜私もウザイとかイラつくとか良く言われるけど社長さんの考えたのは：控えめにいってヤバイね：

と顔を青ざめさせていた。

更にゴーレムたちはポトリが更に改良を加えて軽くて素早い飛行型、殺傷力がない代わりにトラップの方へ誘導するオジャマゴーレム、通常のゴーレムといった感じで張

り切っていた。

あの後重力魔法を授かった後流石に一度戻って仕事を片付けようとヴェールを始め、アルル、エーデル、ピットレ、海馬との取引のためスクロールを持ってくるとジェニーが精霊界へと戻った。

仕事のし過ぎと言われ休暇も兼ねてハイネが残りヴェールからハジメを鍛えるように言われたシュミツタ、ハジメと香織を気に入りゴーレムが心配とポトリーが残った。

ハイネは仕事から解放されたのか趣味でもある裁縫でボロボロな全員の服を一律に作り直して魔法耐性の付与された魔法衣へと早変わりした。

香織やユエの二人の服には魔力消費を押さえられる特殊な製法を使い以前よりも魔法の使用スピードが上がったとのこと。

そして恵理の方はライナがハイネへとある頼みをしていた

「ハイネさん！恵理ちゃんに専用の魔装束を作ってください！」

「ええ!?ライナ、魔装束ってあれはとんでもなく高いやつだぜ！」

「そうですよ！お金だって相当」

「私とダルクで貯めに貯めた全財産です！」

「ドゴッ！と音のなる程の衝撃と共に大量の金塊から金貨などが出現する。

「ちよっ!?ライナ！」

「ライナさんこれどうしたんですか!？」

「まあ僕たちで貯めてたんだ…恵理にいつか渡そうと思つてね。」

「僕に?」

「ええ貴女のお父さんと約束したんです!立派な魔装束を贈るつて!魔装束は魔法使いにとつて一人前になつたつて印でもありますから!」

「で、でも僕は…」

「優河と約束したんだ。それにライナにとつて恵理は特別だからね。」

「どういふことなんだぜ?」

「それはね…ライナは恵理の名付け親なんだ。」

「……………」

シーンと静まり返りそして

「ええええええええええ!?!」

その発言に驚く一同。それは恵理も同じであつた。

「ライナが…僕の名付け親?」

「うん。君が生まれたのは人間界だつたんだけどね、その時僕とライナも側で見守つてたんだ。そしたら生まれたばかりの君がライナの手を掴んで微笑んだんだ。」

それでライナはメロメロになつちやつて…で、優河が名前をどうしようか悩んでた時

に恵理って提案してその名前を付けたんだ。」

「かしこくて優しく、魔法の理のような包容するような娘になってほしいと思つて…恵理ちゃんのことを見守ろうとしました。…他の娘たちも一緒に恵理ちゃんの可愛さを堪能したりしました…でも」

「…優河がなくなつてそれまで私たちが実体化してた魔力も尽きてしまつて…恵理もそれまでの幸せだった記憶は優河を思い出させてしまうからと臆気になつてると思う。」

「私…何も出来なくて…名付け親でもあつたのに…出来たことはその世界の弁護士という人を恵理ちゃんの方へ誘導することしか出来なかつた…」

「まさか!? あん時弁護士が何とかしてくれたのはライナがそこまで誘導してくれたからなのか!？」

「誘導までしか出来なかつたですがそれでも…出来ることをしました…優河の妹の優美に何とか夢という形で恵理ちゃんのことを伝えて…」

「優美は魔法とかは使えなかつたけど魔道具の作成とか得意で…それで探知の魔道具を作つて恵理を探してたんだ。」

「叔母さんもライナたちのことを知つてたの…?」

「私とダルクのこととは知つてると思います。優美とも遊んだりする仲でしたから…だから恵理ちゃんのことを笑顔にしてくれた克也さんには感謝してもしきれません。」

「そうだね。僕たちは実体化出来なければ話し相手にさえなれないんだ…悔しいけどね。」

「だから…だから優河との約束を…恵理ちゃんに似合う魔装束を…」

「…分かりました。通常魔装束の作成はデザインからなまでに時間が掛かり一年近く期間はもらいます…しかし…そうでしたか恵理さんは優河の娘だったのですね。」

「え？ハイネさんもお父さんのこと？」

「昔に娘に贈る魔装束のデザインを頂いてました。大きくなったら着せたいからと。お金の方はなんとかなると仰つてましたので…期間は3ヶ月程貰えればやりましょう！もしかしたらそれよりは早くなることもありますからね。」

「宜しくお願いします！」

「ねえライナ…良かったらなんだけど…昔のお父さんの話を聞かせてほしい…ダメかな？」

「！はい！恵理ちゃん…」

「それとライナ…ありがとう。貴女のおかげで僕は…叔母さんに会えたし…あんな所から抜け出せて克也と一緒に過ごせるようになった…」

とライナの手を握りしめる恵理はその手の感触に覚えがあった。

「ライナの手の感触…何だろ…昔に感じた暖かい感触に似てる…」

「心が覚えてるんじゃないか？ 恵理がライナのことをよ。」

「ありがとうございます…恵理ちゃん！」

とライナが抱きしめる。

「良かった。ライナもとても気にしてたからね。そうだ！ 克也も聞くかい？ 将来的に夫になるんだろうしね。」

「おう！」

「克也さん！ 恵理ちゃんとお付き合いは良いですけど結婚はまだ早いですからね！ お姉ちゃん結婚はまだ許しませんよ！」

「こらライナ。まあでも結婚はもう少し先だと僕も思うけどね。生活が安定したらすれば良いと思うよ。」

「恵理ちゃん良かったね。それにしてもまさかライナさんが名付け親だったのは驚いたね。」

「そうだね。さてと僕ももう一回やるかな。」

「…ハジメ遊ば♪」

「ポトリーもうちよつと待ってね。すぐ終わるから。香織と待っててね。」

「…うん！」

「ポトリーちゃん簡単にクッキー焼いたから一緒に食べよ」

「モグモグ：美味しい！」

「なんとというかハジメさんと香織さんに子供が出来たみたいですね、ユエさん」
「…ん！二人とも良い親になる！」

そして夜になり城之内が丹精込めて作り打ったうどんと鳥のような魔物の鳥天ぷらに山菜、玉ねぎ、ちくわ天を恵理と香織が作り各々食べる。

「ズルズルズル：美味しい〜！なにこれ！昔の時代にもこういうの合ったら良かったの
に〜カオリンたちの世界は食が進んでるんだね！」

特にミレディは初めて食べる味わいに舌鼓をうちヘルモスも良く味わう。

「鰹の濃厚な味がこのうどんと一緒になることで美味しさが引き上がりますね！」

「これで消化に良いんだからいくらでも食べれるね！」

「香織：おかわり！」

「はいポトリーちゃん熱いから気を付けてね！」

鰹の出汁の効いた汁に程良くうどんが絡まりハイネやシユミツタ、ポトリーも美味しく食すのであった。

そうして夜になりミレディ主催で女子会が始まる。

「さてさてじゃあ女子会的なことをしようか！」

「ええミレディさんどうしたんですか？早く寝ますよ〜」

「チツチツ甘いよウサギちゃん、折角の機会なんだか親睦を深めないといけないと思うよー！ほら何か話題ブリーズ！」

「うーんあつ！それなら恋バナとかはどうですか？私はハジメ君のことなら1日以上話せませすー！」

「私もハジメさんや香織のことならお手のものですよ」

「まあ香織は南雲君ラブだからね。」

「こういう女子会は良いものですね！」

「ミレデイさんが言い出しつべなんだからヘルモスとのかを話して貰おうかな？」

「みみみみミレデイさんはヘルモスとは健全なお付き合いを……出来たら良いかなと！！」

「まあヘルモスさんお堅いというかそこら辺しっかりしてますもんね。」

「ミレデイさん！そういう時は色仕掛けか胃袋を掴むのが一番ですよ！」

「シアさんヘルモスさんはそういうのは逆効果じゃないかな？それならそれとなく側においてご飯とかで胃袋を掴むのが良いと思うよ。」

「流石力オリン！……でも私……料理とかその……ここ数千年やってないし」

「それなら私たちが教えますよ！美味しいご飯を作って虜にしちゃいましょう！」

「ありがとう……それとね……あの……夜の方の話しなだけで……初めてってそのどうなのか

なつて……？」

「そうですね、まあいきなり始めるよりもキスとかでならしてから良くほぐしての方が痛くないと思います。多少痛いけどでも愛しい人のだから段々気持ち良くなります！」

「成る程……だからウサギちゃんあんな風に……スツゴい幸せそうだったもんね」

「あわわわわわ、そ、それは」

「ふふ、シアさん凄く柔らかくて抱き心地良くて反応も可愛いから癒されるの！」

「たしかに、特にシアさん耳柔らかくていつまでも触れるし心がほかほかするんだ。」

（極上の触り心地だものね！）

香織、ハジメ、レイカはシアを褒める。

「そうなんだね……ねえウサギちゃん私も触って良いかな？」

「良いですけど優しくですよ」

「うん……おこの柔らかくも弾力があつてフサフサした感触……それにぬくぬくしてるからいつまでも触れるのは本当だね♪」

「ミレデイさん、くすぐりたいですよ」

とシアもミレデイの触り方は気持ちいいのか嫌がらずされるがままになっている。

「そういえばハジメちゃん明日なただけど少し良いかな？氷血のこととその……エス姉の残した物を見てもらいたくて。」

「ミレディさんが良ければいつでも良いですよ。」

「ありがとう。それにしても可愛い顔してあんな凶悪な物を持つてるなんてね〜女泣かせでどんだけヒイヒイ言わせてきたの？」

「う〜ん、香織とユエとシアさんと三人だね、ちゃんと責任は取るよ」

「当たり前よ、とうか私たちの方こそ愛想付かれないようにしないとだもんね。香織もユエもシアも大切なもの」

とハジメとレイカは言う。

「おおいケメンさんだね！」

「もうハジメ君もレイカちゃんも嬉しいこと言ってくれね！私も好きだよ！」

「ハジメさんレイカさん私も大好きですう〜！」

「…ん二人ともカッコいい！」

こうしてライセン大迷宮での夜は更けていくのであった。

さらばライセン大迷宮

そうして女子会の翌日

ミレディは全員に見てもらいたいと言い隠し部屋へと案内をした。

そこには本などの一式と写真立てが置かれていた

「この写真…確かオスカーだよな？」

「オルクス迷宮でホログラムで出てきたから俺たちは分かるな。」

「うん。これは私たち解放者で取った…最後の写真だよ。」

「…この人今のハジメそっくり…？」

「本当だね。もしかしてこの人が？」

「そうだよ。その人が君の氷血の前任者でシュネー氷雪洞窟の由来になったヴァンドゥル・シュネーの姉でとっても心強い人・エスデス・シュネーだよ。」

「この人が…？」

（これ…夢で見た人とそっくり？というか本人なのかしら？）

「エス姉は私に最後まで付き添ってくれて…それで人として死んだ…最後にまた会おうって言ってね…そんなことあるわけがないのに…それで最後に氷血に関わる物を残し

てたの。」

とミレディは大事に飾っていた木箱の中身を取り出す。

「それはオルクス迷宮でハジメ君と見た!」

「うん。氷血の元になった神獣の血液。オルクスで封じてたのは原液だったけどその他にも六本あるの。これは薄まつてるけど常人が飲めば廃人になってしまふ代物。」

エス姉は最期の時に7つに分けてバラバラに保管したの。何のためかは分からないけどね。」

と言うミレディ

ハジメ: いや正確にはレイカはその小瓶から目が離せなくなっていた。まるで求めていたものに出会えたかのような

「これ以外に6個:ううん5個ある。濃縮されてて一番濃いのがオー君の迷宮に封じたやつだったんだけどハジメちゃんが飲んじやつたからね。多分いまハジメちゃんこれから目が離せないでしょ?」

「そうですね。僕もですがレイカが特に顕著に表れてます。」

「レイカちゃんもか:もしかしたらレイカちゃんの方が適正が高いっていうのもあるのかもかもしれないけどここ数日私たちの時代のことを夢で見たことを考えると氷血の中の記憶:主にエス姉の記憶がレイカちゃんに流れてる。」

うくん分からないな。でも異変を感じたら言つてね。」

と言いなからミレディはハジメにその氷血の入った瓶を渡す。

「ミレディさん…良いんですか?」

「うん。エス姉は氷血の継承者に渡してほしいって言つてたのもあるの。だから一気に飲んでね!」

と軽く言われハジメはそのまま飲み干す。

「…う…なんともないかな?」

(でも確実に何か変化があったのは感じられるわね。)

「まあそこは後で確かめよう!私も皆に着いてくからね!」

とミレディは柵に仕舞つてある本をいくつか取り出す。

「はい、ユエちゃんにはこの魔道書だね。君は魔法に関しての才能はこのミレディさんを越えるほどのものがある。

けどどうにもムラがあるのかカンが戻つてない気がするからそれとんでもできて少し基礎が疎かになつてる部分もあるみたいだからそこも勉強だね。

魔法は決められた形で使うんじゃないやなくて発想を自由に思うままに使うものだからね!先達として色々と教えてしんぜよう!」

「…ん、宜しく。お婆ちゃん」

「あ、あ、ん？」

「…素敵なミレディお姉さん…」

「宜しい！」

「ウサギちゃんは対人経験が圧倒的に不足してるから組手だね！社長さんに頼まれてるからカツヤンも一緒に鍛えてあげるよ。肉弾戦は得意じゃないけど君たちよりはなれるからね！」

「宜しくお願いするですう！ミレディさんは経験豊富ですから色々ご教授ください！」

「任せたまえ！この迷宮は社長が改造した影響もあるから中々クリア出来る人はいないと思うしクリアしてもポトリーちゃんが作ってくれた音声ゴーレムが案内してくれるから安心だね。あとは」

とミレディはアーティファクトを取り出す。

「これはくそ神からの干渉を防いでくれるアイテムで私の分とヘルモスの分と…もう一人分しか用意が出来なかった。作るのに物凄い集中がいるものだから」

と鉱石を首からヘルモス共々掛ける。

「あとの一個はどうする？私的にカツヤンが持ってた方が良い気がするけど？」

「そうだな…ミレディから聞いた話だとエヒトのやつは今身体がないから動きも指示を出すくらいしか出来ねえけど器にされる可能性もあるんだよな…」

「それは貴様の娘にでも渡しておくが良い。」

「…私？」

「どういふことだよ海馬。」

「天職が神子だからだ。」

「！それが本当ならユエちゃんが持つてた方が良いね、神子はエヒトの器にされかねないからね。くそ神と相性が良い憑依先には神子の子がなるはずだから。」

とユエにそのアーティファクトが手渡される。

「さてと他の本とかは宝物庫に入れとけばいいからどぼどぼと」

と本棚ごと宝物庫へと仕舞うミレディ。

「しっかしミレディも一緒なら鬼に金棒だな！」

「カツヤン誰が鬼だつて〜！」

「地球のことわざで強い者に更に強さが加わり、無敵となることつていう意味だよ！」

「成る程〜そつちの文明は良いことを言うね！」

「ミレディの目的は我も手伝うものであるからな。今のうちに地球のことも知っておくのは良いことであろう。」

「うん…どんなに時間が掛かろうとも絶対に見付けてみせる！カツヤンたちが蛇神を倒してくれたんだもの。囚われた魂も解放されてるならきつと皆カツヤンの世界にいる

はずー！」

「俺ももどつたらペガサスの野郎に協力してもらおうように頼んでみるぜ！」

「あとデュエルモンスタースターズも覚えないとだね！ミレデイさん的にはトラップ中心なカードがあるといいな〜」

「ああトラップによる嫌がらせ…想像が出来るね…」

「さあ！皆さん張り切つていきましよう！」

「ハインネさん異世界の布を自分の目で見てみたいから張り切つてるね！」

「…ハジメと香織一緒ならどこでも良い…♪」

「それでここから町へ行く近道は地下水道を通るのだつたな。」

「まあ〜そうだね！ただそのまま降りると溺れちゃうから透明なバリアを張つて水の流れるままに行く感じだね！」

「ならば次なる大迷宮へ全速前進だ！」

そうして準備も終わりミレデイが全員が入る球体型のバリアを張り巡らせて迷宮に垂れ下がるヒモを引っ張ると勢い良く水が流れ出す。

そうして一同はライセンを後にし激流で満たされた地下トンネルのような場所を猛スピードで流されていく。

バリアのお陰で快適にひたすら水中を進む。

と、その時、ハジメ達の視界が自分達を追い越していく幾つもの影を捉えた。それは魚だった。

他の川や湖とも繋がっている地下水脈らしい。ただ、流される城之内たちと違って魚達は激流の中を逞しく泳いでいるので、どんどんハジメ達を追い越して行く。

「何だか水族館みたいで凄いな」

「透明なバリアで鑑賞できる…あつちに戻ったらアクアリウムでも作ってみるかな？」

「…水族館…行ってみよう」

「俺たちの世界に来たらいつでも見れるぜ！」

「そうだね。水族館行って色々な物食べて満喫出来るよ」

「…ありがとうお父様、お母様…！」

「ほえ、沢山お魚がいるんですね、それに水が綺麗ですう」

とその内の一匹がシアの顔のすぐ横を並走ならぬ並泳していた。何となし、その魚に視線を向けるシア。

目があった。

魚と。いや、魚ではあるが人間の顔、それもおっさん顔の目と。何を言っているかわからないだろうが、そうとしか言い様がない。つまり、シアと目があった魚は人面魚だったのだ。

「中立商業都市フェーレンへ向かう。」

「商業都市に行くってことは何かしら商売をするってこと？」

「いや、そこでハウリアの先行させている者たちへスクロールを渡す手筈だ。」

「そういうことか、ブルックでジェニーからスクロールをもらって検分して先行させてるハウリアから全員へ行き渡らせるってことだな！」

「そういうことだ。」

そうこうしている内に光が見えてきた。

ライセン大迷宮を後にした城之内たち

新たに解放者リーダーでもあり先人たるミレデイ・ライセンを仲間に加えて旅を再開するのあった。

再び変態の巣窟へ

地下水路を抜けていくと大きな湖へと辿り着き地面に着地したと同時にミレデイがバリアを解く。

「しつかしここはどこら辺なんだろうな？」

「うくんミレデイさんも外に出るのは相当久し振りだからそこまでは分からないかな」

「地道に探せば何とかなるよ！」

「香織さくんハジメさくんもう着きましたから平気ですう」

「もうちよつとだけ触らせて。このふかふかが心地良いんだ。」

「あはは、私もハジメ君と同じかな？」

「ふうん、森の形状を見る限りはブルツクの町からそう離れているわけではないだろう。」

「つうことはブルツクへ向かうってことだな。」

「中村、城之内のつくった方位磁石は何処を指している。」

「あつちが北を指してるね。」

「ブルックで地図を手に入れた時に方角は記入した。そしてハウリアたちを先行させることにより更に詳しく調べた、どちらを向いてるかはこのトータスの地図で分かる。」
と地図に記入したブルックの町と方角を確認して

「…この方角へ行けばブルックの町が見えるだろう。」

と海馬を先頭に森を抜ける城之内たち

ある程度道が拓けてきたところでハジメが宝物庫から魔道四輪を取り出す。

「おおお！ 凄い！ なにこれなにこれ！」

「俺たちの世界の移動手段をこっちの世界用に魔力で動くように真似して作ったんだ。」

と言いながら乗り込み城之内と恵理は魔道二輪を取り出してそちらへ乗る。

海馬運転でブルックを目指して走り出す。

「こんな乗り物が昔にあったらどれだけ移動が楽だったことか！」

「やっぱり昔は徒歩だったんですか？」

「まあね。色んな所を自分の足で歩いたよ。大規模な移動とか敵のアジトに踏み込むときはナッチちゃんに頼んでたかな。」

「移動を頼むってことはその人は転移の魔法を使えたってことですか？」

「まあね。すっごい便利だったな。」

そうして途中休憩を挟み城之内と恵理合作のサンドイッチを食した。

「このフルーツサンドは美味しいね！果実の甘さとパンの柔らかさが何ともいえないよ！パンってこんなに柔らかいのがあったんだね！」

「こつちのパンはちよつと固いからな。イースト菌とかは白崎が作ってくれてるからな！」

「そうなんだね！エリリンの作ったこつちのハムカツサンドも美味しいよ！ソースって言う調味料だけでこんなに味が変わるんだね！」

「まあ僕たちの世界は食も凄い進んでるからね！」

「そうだね！そういえば北の町でカレーみたいな料理が出るって前王城で聞いたよ。」

「成る程、だったらスパイスとかもこつちにあるだろうからこつち風のカレーを作ってみようかな？」

「…カレー…お父様とお母様に聞いたちよつと辛いけどご飯が進む食べ物…！」

「辛いんですかあ？どんな食べ物か楽しみですう！」

「だな！後はカレーパンとかも作れたら作りたいぜ！」

「カレーパンですか！人間の食べ物皆美味しいといわれてますからね！食べてみていすね！」

「ハイネさんもテンション上がってるね。ハジメも属性付与が上達してきたし筋が良いね！」

「…うん！ハジメ器用！香織のご飯も美味しい！」

「ありがとうポトリーちゃん。」

そして小休憩も終わり城之内たちと代わり今度はヘルモスとミレデイの二人が魔道二輪に乗り込むのだが

「ミレデイよ…足が届いてないぞ？」

「そそそそんなことないよ！こんなのへっちゃ…ぬぐぐぐ…」

「今は諦めて後ろに乗ってくれ。我が運転しよう。克也の運転を見ていたから勝手は分かる。」

とミレデイが運転しようとしたものの足が着かず泣く泣くヘルモスに運転を代わるのであった。

因みにヘルモスの勇者呼びはこれから共に旅する中で王国の正義のポンコツ勇者のこともあるので名前呼びになった。

「風が凄いい心地良いねえ〜！」

「ミレデイ、あまり立ち上がると落ちてしまうぞ。」

「平気平気！こうやってまたヘルモスと一緒に冒険できるんだもん。凄いい楽しいし嬉しいよー！」

そんなミレデイの言動にウザさはなく素の自分をだしてヘルモスと話をしていた。

「うむ、それならば良い。…む？少しスピードを上げたようだな。ミレデイしつかり掴まっているのだ。」

と速度の上がった魔道四輪を追い掛けるべくスピードをあげる。

(むふう…！ヘルモスの男らしくて良い匂い…それに凄い安心するなあ〜ゆくゆくは……………)

と考えたミレデイはふと思った。

(あれ…そういえば…ヘルモスのヘルモスって……………!?ああああああ)

そうミレデイはライセン大迷宮でヘルモスと共に温泉へ入り二人の再会の邪魔をしないように二人きりにして偶然ミレデイはタオルがはだけてヘルモスのヘルモスを直視していた。

(あ、あんなにおっきいの…入るのかな…っていうかヘルモスって竜だから夜も凄いのかな…た、体力づくりもしよう、…こ、こういうのは経験者に相談してみよう…)

と密かに香織に相談をしようとしたミレデイなのであった。

(うむ…ミレデイは変わらん。昔はよく突っ掛かってきたがそれも段々と変わり皆で活動し共に笑い共に生きた。今度こそミレデイを守ってみせよう。竜の誇りに掛けて)

そうして走ることに数時間

ブルツクの町の手前に差し掛かり以前と同じく魔道四輪から降りて宝物庫へとしま

う海馬。

そして歩いていくと以前もいた門番と出会いスムーズにブルックへと入ることが出来た城之内たちは夕暮れ近くなのでマサカの宿へと足を進める。

「ハイネさんこつちですよ。布は逃げませんから後日にでも」

「ダメですよハジメさん！布は湿度もそうですが最適な保存をしなければどんどん状態が悪くなってしまいますので！明日の布はもしかしたら染度が落ちてしまつて魔法の布が作れなくなつてしまうetc………」

「あくハイネさんいつものが出ちやったか、ごめんハジメ少し付き合つて上げよう、そうすればハイネさん満足してくれるだろうから」

と町に着いた途端ハイネは魔法衣の材料などに使う布を探しに布屋へと直行しようとし止めるハジメなのだがハイネの勢いが凄くシユミツタはいつもが出たと言いつつもハジメとシユミツタ、ハイネはハジメがマサカの宿の場所を知っているので一度別れた。

「あはは、ハイネさん張り切つてるね」

「うん、ハイネさんは仕立て屋だから良い布を探してることが多いの。休みの日もいろんな所に行つて身寄りのない子達に洋服を上げたりしてるの。」

「……ん、優しい人」

そうしてマサカの宿へと辿り着いた城之内たち。

「あーいらっしや……先生！」

と看板娘のソーナが出迎えた。

「おう！ソーナ久し振り！」

「また来てくれて嬉しいですよ！」

「おやおやくカツヤン、エリリンというものがありながら浮気かい？およよよミレデイさんは悲しいよ！確かに可愛いけどエリリンみたいに受け入れてくれる包容力に比べたらまだまだだと思わないかい？」

「違えってこいつはこの宿屋の娘でソーナつつうんだ、前に泊まったときに料理を恵理と一緒に教えててんでまあ俺が言うのもあれだが慕われてるってことよ。」

「そうだよミレデイさん、克也が浮気するわけないよ。だって……僕の大切な人なんだから、余程信頼できる人ならともかく……ほんの少ししか知らないくせに克也を取ろうなんて……ユルサナイ」

「恵理も心配すんなって俺が見捨てられるならいざ知れず俺がお前を見捨てるわけねえだろ？」

「克也……うん！」

「ミレデイよ。克也と恵理の仲は話した通りであろう。あまりそれ関連でからかうと

…

「そ、そうだね、うん流石に自重するよ。」

「そういえば先生そちらのお二人は？先生そっくりな方ですが？」

「ああ実は」

「こちらの方は城之内君のお兄さんのヘルモスさんと婚約者のミレデイさん。」

「昔に旅に出ただけで偶然この間再会して僕たちと一緒に行動することになったんだ！」

「…ん！ヘルモス叔父さんとミレデイ叔母さんとても仲の良い夫婦になる予定…！」

「ミレデイさんはヘルモスさんのことがとても大好きで小さい頃からの付き合いで将来おしどり夫婦になること間違いなしですよ！」

と香織、恵理、ユエ、シアの順番で言う。

特にユエは城之内の兄ということなら叔父と叔母に当たることもしっかりフォローしていた。

これにはたまらずミレデイも顔がどんどん赤面していきボフィンと音を立てるようだ。

「ななななな何を言うのかな?!みみみみみみミレデイさんはヘルモスのこと「…大好き過ぎて必死なミレデイ叔母さん」こっ！こら！大人をからかわないの！」

と迷宮で散々ウザイ文面を見せられた仕返ししかユエがミレデイをからかう。

「成る程！仲の良いお兄さん夫婦なんですね！社長さんはもう上がられましたがお部屋はどうしますか？」

「この間とおなじで二人分追加で頼むぜ！」

「はい！あと先生！また料理を教えてください！」

「おう！任せとけ！恵理と一緒に教えてやるぜ！」

「ふふ、そうだね夫婦共同作業だね！」

（まだ結婚は早いですよー）

（こらライナ良い雰囲気なんだから邪魔しちやダメ）

（そうだそうだ！伴侶と恵理の時間は邪魔しちやダメだぞ！）

（ヒータの言う通り見守りましょう！）

（僕たちは邪魔にならないようにしないとね）

（そうですねアウス。克也さんたちに迷惑をかけないようにです！）

（ふふふ、皆さん元気でいいですね。）

ブルツクの町へ再びやってきた城之内たち。

暫くの間滞在することになり滞在中ヘルモスとミレディは早く結婚してしまえおしどり夫婦と口から砂糖を吐き出すことになる独り身連中の言葉であった。

尚この後ハジメもやってきたのだがハイネが手に入れた布をホクホク顔で持ち霊体

化し忘れていたのもあり更にはポトリーも香織に抱きついたらままためもう一部屋追加したことは余談である。

北の山脈の異変 黒龍降臨の章

ブルックでの平穏な日常

ブルックの町に滞在すること三日。

この三日は消費したアイテムや調味料の補充、ライセンスに行くまでに狩った魔物の素材を換金したりと色々であった。

城之内と恵理、香織はマサカの宿にてソーナとミレディに料理を教えていた。

ソーナは手際も良く料理も趣味でやっていたようで城之内も恵理もどんどん覚えていくソーナの姿を微笑ましく見守っていた。

ミレディはというと……

「ミレディさん!?それは砂糖だよ!?そっちは胡椒じゃなくて塩だよって目分量とは言ったけどそんなにドバトバ入れちゃダメだよ!」

とても大変なことになっていた。

まずチャーハンを作ってみようとなり香織が手本で見せその後ミレディさんにおまかせ!という風に言いながら

卵を粉々に砕いた。

どうやらゴーレムの身体でいたことで細かな力加減が中々難しいようであったがそこは数分して慣れて綺麗に割ることが出来た。

その後の具材を切るといったことは最初自分の指を切るのではという持ち方だったため香織が猫の手で持って包丁を握るように後ろからサポートすると段々と切る作業も慣れてきた

の다가砂糖と塩を間違えて入れたり塩と胡椒の配分を間違えたり目分量で良いならとドバトバ入れたり……

出来上がったチャーハンは甘しょっぱく卵がまばらで具材が大きかったりな失敗作となった。

「ごめんヘルモス……美味しく食べてもらおうと思ったのに……これは」

捨てるといったミレディからヘルモスはチャーハンをそのまま受け取り食べた。

途中じやりといった砂糖の塊の音が聞こえたり胡椒のスパイスにむせたりしたもののヘルモスは全て平らげた。

「うむ。味は確かに砂糖の塊やらが甘く、胡椒が強くしょっぱい、しかし具材は火は通っていて問題ない……確かに味としてはあれかもしれん……」

「あう」

「だがミレディが心を込める作ったのだ。捨てるなど持ったのほか、それならば我が食

べよう。失敗など誰にだってある。ミレディよ。我のためにありがとう。」

「ううヘルモスくもつと上手くなるからく食べてく」

「…なんだか口が甘い…?」

「ほい、ユエちよつとブラックな紅茶でも飲みな。」

「…ゴク うん美味しい。」

と料理に張り切るミレディとその横ではソーナが試しに試食会というような形で外で屋台のようにし冒険者から旅の者や近所の人たちまで集まり試食をしては食堂に案内してを繰り返すうちにマサカの宿の平素の売上の3倍を記録し女将から大層感謝される城之内と恵理。

因みにミレディは何度か失敗するものの近所のおばさんたちが頑張るミレディを見ておばちゃんんの豆知識を教えてくれたり等香織も勉強する場面もあり、ヘルモスとの仲を応援してくれミレディも満足なのであった。

一方のハジメの方はシユミツタから物への魔法付与や効率的な魔力伝達や炎の扱いなどの師事を受けていた。

シユミツタが持ち歩いている魔法の簡易工房を広い場所で開いて普段の錬成とは違った一から物を作る工程や物を作る過程を知ることにより錬成に磨きが掛かるとシユミツタは言い

事実三日であるもののハジメの錬成の精度は上がっていた

シユミツタからの師事の間でハイネはハジメとポトリーを連れて市井へ来て品質の良い物の見極め方や値切り交渉、同じ物でも材質の違いなど商売をする上での知識を二人へと教えた。

「ハジメさんも元の世界に戻れば勤めに出るでしょうから今の内に覚えておけばそれだけ他の者たちとの差となり良い地位を築いて生活も豊かになります。

特にハジメさんには香織さんやユエさん、シアさんがいますから不自由なく暮らすためにもいつそのこと開業するか海馬社長の傘下で色んな物を作る仕事をしてお金を得るのも良さそうですね。

ポトリーもゴーレム作りに茶器といった物から土器はマニアや一般家庭に普及しやすいので茶器に不純物の混ざらないように良質な土などを仕入れる土台を作るためにも交渉術は必須になります。

貴女はまだ幼い。しかしウィツクラフトの工房を任せられたということは一人前の証でもあります。

ゆくゆくは一人で仕入れを」

「まあまあハイネさん、難しい話しは一旦置いてお昼にしましょう。」

と長い話しに船をこぎ始めてしまったポトリーをおんぶしてハジメは城之内から持

たされたバスケットを片手に言い眺めの良いテラス席を借りて昼食を取ることにした。

バスケットの中にはしゃつきりしたレタスつぼいものに城之内特製のハムカツをパンに挟んだハムカツサンド、細い麵類様なものもあり試しに焼きそばを作ってみたところ上手くいき香織が少し濃い目に作りパンに挟んだ焼きそばパンにして

更には小豆に似た甘味もあつたのでそれを購入しあんこを作るのには中々骨が折れたもののマサカの宿の女将から温度調整のアドバイスを受けたりして完成しあんパンとして持たせてくれた。

他にもクロワッサンや他のパンもありスープを頼む。

「眺めが良くて打ってつけだね。」

「モグモグ…甘くて美味しい…香織のパン美味…！」

「このハムカツっていうのも良いね。しゃつきりした食感と肉汁も合うしパンの柔らかさで口当たりも凄い！」

「この焼きそばパン、パンに合うように少し濃い目で作られてて濃厚な味わい…美味しいですね！」

「うん！やっぱり二人の作ったのは美味しい！」

（そうね。ハジメそっちのクリームパンも！）

「ハジメさんはとても勤勉なのです。マスターが気に入るのも頷けますね。」

「ヴェールさんは中々気難しい所あるからね」

「…? お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ?」

「ポトリの才能を見出だしたのもマスターでしたからね。」

「いや、その…僕って学校だと不真面目というか…親の手伝いをしてそれで学校はあんまり楽しくないというか寝るだけというか…ね。」

「そうだったのですか。将来的に備えてというのとはとても良いと思います。しかし時間というものは有限です。今しかない時間を大事にして学友も終生の友を得ることだつてありえますからね。」

「そうだね。香織とも会えたし…うん」

「? ハジメと香織仲良しだよ?」

「ありがとうポトリ。」

「ハイネさんは真面目だね、まあそういつたところもヴェールさんから認められてウィッチクラフトのマスター代理を頼まれる程だしね。」

「代理つてヴェールの!?! 凄いです!」

「いやあ、私はマスターみたいの色々出来るわけではありませんし皆さんに手伝ってもらつて何とかやれてるだけですから。」

「? ハイネさん凄く頼りになる。安心!」

「さてとこの後はどうするの?」

「最後に寄りたいたいところがあるのでそちらに行ったら戻りましょう。」

と昼食も終わりブルックの町の外れへとやってきたハジメたち。

そこは親のいない子供たちが暮らすスラムのようになっていた。

ハイネは宝物庫のような魔法の収納空間から子供のような服をいくつも取り出して並べていく。

その様子を不思議に見つめるいつの間にか集まっていた子供たち。

そうしてブルーシートに並べたハイネ。

「さあどれでも好きなものを持って行ってください」

「…いいの?」

「ええ!古着ではありませんが寒さも、凌げますからね。お金は要りません。」

というと恐る恐る服を手を持ち着ていく子供たち。

その間にハジメは水の浄化装置をシュミッタと共同して作り出す。

飲み水の確保も子供たちにとつては命懸けな部分もありそうした状況を改善すべきだと海馬から頼まれていたことでもあった。

「それにしてもハイネさんどうしてあんなに子供服を持っているのかな?」

「えくとね、余り広めないでね。ハイネさんは孤児だったんだって、それで幼い時はボロ

ボロの服や食べるのにも一苦勞したつて聞いたよ。

いつも町の綺麗な服を眺めていつか自分で作りたいつて夢を持ってそこをヴェールさんに拾われたんだつて。

ハイネさんは人よりも沢山努力して今では私たちウィツクラフトのナンバー2にまで登り詰めた尊敬できる人なんだ。

幼少の貧しい子達に時間があるときに洋服をああやつて寄付したり分け与えたりするのは自分のような思いをする子を少しでも減らしたいつて思いがあるんだと思う。」

(凄いなあのねハイネは)

(そうだね、ハイネさんの勤勉さ見習わなくちゃね！)

「あわあわあわ は、ハジメさーん助けてください〜」

と感極まった子供たちから抱きつかれたりお礼を言われたりと中々混乱した状況になり涙目になりハジメに助けを求めるハイネであった。

(もう…何だか締まらない人ね)

「でもああいうのがハイネさんらしいんだろ〜うね」

と取り敢えず場を収めるハジメ。

そうして子供たちから名残惜しそうにされながらマサカの宿に戻るのであった。

後にハイネはブルックの町で子供たちから洋服のおねーさんと慕われるようになる

のであつた

星の導きの先を目指す者との邂逅

海馬はこの数日ブルックの町でとある物を設置し使用状況や発動できる条件を整えていた。

この数日はハウリアからの定期連絡も順調であり全員が隠密に徹しているのもありいざこざはないようである。

だが気になることも幾つかあった。

一つは最近になりユニコーンのような魔物が出現するようになったこと。そのユニコーンは黄色く討伐や綺麗な色で剥製にしようと貴族が冒険者に依頼したもののいずれも失敗していること。

更に呼応するように赤い鳥のような魔物も出現しこれもユニコーンと同じように依頼があったものの失敗している。

いずれも何かを探するような動きを見せていることをその場で居合わせたハウリアたちは証言している。

何かの前触れなのかは知らないものの特に被害が出ているわけでもないので後回しにする。

もう一つは西の町エリセンからで何でも海人族の子供が拐われたとのことで母親はその時誘拐犯から受けた傷で歩けず冒険者ギルドで依頼が出されているとのこと。

丁度そこへ偵察に向かっていたモナは母親として同じように子供を持ちそんな状況になつたらと情が湧いたのか薬を調合し彼女一人の時に手渡したそうである。

大体の傷は治つたものな神経をやられているからか歩けないでいるとのこと。

そうしたこともありモナからもし海人族の子供を見かけたら連絡をしてほしいと全体に通達されていた。

そして海馬はブルツクの町を回り孤児の天職を見たりし冒険者ギルドへ推薦したりして一度ブルツクの町を出る。

周辺に装置を埋め込む海馬は後ろに気配を感じた。

チャキという武器を構える音もする。

「その方向をされていたのですか」

「…」

「その機械から何かを遮断する気配を感じます。それを作動させて良からぬことをしようとしているのではないですか？」

「ふうん、小娘には分からんことだろうがこれは結界装置だ。」

「何故そんなものを？」

「来るべき決戦に備えてだ。この世界の神を騙る者は狡猾だ。ならばいくら準備しても足りないだろう。」

「皆から聞いたこの世界の神エヒトは信仰されていると聞きます。」

「それは本性を隠しているからだ。後は教会の言うことを鵜呑みにする馬鹿者だけではないだろうが洗脳の類いを受けているのだろう。」

「…」

「人から言われたことを鵜呑みにするなど三流のすることだ。己が感じ決めずして未来など掴めん。」

「ワウウウ?」

「イムドウーク多分この人は嘘をついてないと思う。」

と少女は鍵を下ろす。

「先程は失礼しました。私はリイヴ、こちらはイムドウーク。旅をしていてある噂を聞きここに立ち寄りしました。」

「噂だと?」

「はい。私たちの世界にいた者たちがこちらに出現しているという。既にユニコーン、フェニックスが確認されていてここにもその一体が入るはずなのですが…」

「ハウリアたちの報告にあった奴らを知っているだど?小娘キサマ何者だ。」

「それは」

という去何処からともなく咆哮が轟く。

海馬たちの前に三つの首を持つモンスターが出現する。

「グルルルルルル」

「やっぱり…ユニコーン、フェニックスだけじゃなくケルベロスまで！」

「ふうん、中々の力を秘めているようだが」

「そちらの方逃げてください！ケルベロスは私たちの世界のジャックナイツと呼ばれる存在の成れの果て…私が浄化しないと…！」

とリイヴはその手に持った星鍵を握りしめて言う。

「奴らがどういう存在かなど、どうでも良い。だがこの俺の前に立ちはだかったのだ。ならば容赦はせん！」

とデュエルディスクを起動させる海馬。

「行けアサルトワイバーン！敵を蹴散らせ！」

とアサルトワイバーンを召喚し攻撃を仕掛ける海馬。

アサルトワイバーンはケルベロスの回りを旋回しその刃を向けるがケルベロスの三つの首の一つが刃を歯で受け止め残りの2体がアサルトワイバーンの胴を噛み千切る。

「ハアアアア!!」

首が全てアサルトワイバーンを見ている隙にリイヴは星鍵を振りかぶる。ケルベロスはそのまま跳躍し距離を取る。

三つ首から火炎を吐き出しリイヴは自身に当たりそうなものを星鍵で切り裂き回避する。

その後に斬りかかるものの何度も距離を取られる。まるでリイヴの持つ星鍵を警戒するように。

「少しはやるようだな…だが小手調べは終わりだ。

来いX―ヘッドキャノン！

Y―ドラゴンヘッド

Z―メタルキヤタピラー！」

と海馬はXYZを呼び出す。

その機械染みた姿を見て何かを思うリイヴだが秘めている力にも驚く。

「凄い…あんな簡単に強力な機械たちが言うことを聞いている…クローラーとは違った機械の力…」

「行けX―ヘッドキャノン！」

とキャノン砲が発射されるがケルベロスが魔法陣のようなものを発動させるとそこに飲み込まれていく。

「もしかして!?!そちらの方エネルギー砲はケルベロスの能力で吸収されてしまっています!多分ですがケルベロスが暴食を司ってるから…」

「ふうん。俺には関係のないことだ。Yードラゴンヘッド、Zーメタルキヤタピラー、進撃!」

そうして空からはYードラゴンヘッド、陸からはZーメタルキヤタピラーが続く。

しかしそれらもかわしてXYZに火炎を吐きダメージを与えていく。

「やっぱり不利です…このままでは」

「ならば真の力を見せてくれるわ!X、Y、Z、合体!」

と言うと空へ浮かび上がる三体。

Yードラゴンヘッドの胴体にXーヘッドキヤノンの下部がZーメタルキヤタピラーの胴体にYードラゴンヘッドが合体しその姿を現す。

「XYZードラゴン・キヤノン!」

「三体が一体に合体した!?!でもあの巨体ではケルベロスのスピードに追い付くことは」と言う前にXYZはその体に似合わぬ超スピードでケルベロスを組伏せる。

一瞬の出来事にリイヴは驚きを隠せない。

海馬はこの時重力魔法でドラゴンキヤノンにかかる重力を限りなくゼロにすることで高速での戦闘を可能としていた。

抵抗するケルベロスは炎を吐き出そうとするもののその三つ首をX―ヘッドの腕にすべての頭を掴まれ身動きを封じられる。

「これで終わりだ！」

X・Y・Z ハイパー・キャノン！」

と各ユニットの武装がケルベロスに照準を合わせ最大威力の攻撃が浴びせられる。

魔法陣で吸収を試みるものの膨大な量のエネルギーに魔法陣は砕けてケルベロスを蹂躪する。

ドガーローンと土煙が晴れるとケルベロスは動かなくなっていた。

「す、凄い……ハッ！呆けてる場合じゃない……」

トリイヴはケルベロスに近付き星鍵を掲げるとケルベロスは丸い球体のようなものへ変化するとそのまま星鍵に吸い込まれた。

「……よし、これで封印できた。……あのお名前は……？」

「ふうん……海馬瀬人だ。」

「ではセトさん、ありがとうございます。貴方のお陰でケルベロスを封印できました。」

「俺の前に立った障害を取り除いただけのことだ。それより小娘、キサマはその存在を知っているのだろう。ならば話してもらおうぞ。」

「そうですね。巻き込んでしまったのはこちらです。」

そうしてリイヴは話し始める。

自身の世界において重要な聖遺物という存在、クローラー、ジャックナイツと呼ばれ自身を乗っ取ったリースによりコアを抜かれトロイメアという存在になってしまったこと。

そして自身が一度死にその後起こった親友と兄との対立

最後に聖遺物は統合され世界を守るために双星神となった親友から託された星鍵。

その光の導く先を目指していること。

「そして星鍵の導きでこの世界へ来た私はトロイメアの存在を感じ取りました。トロイメアにしたのは私ではないですがそれでも関係あるのには違いありません。

ユニコーン、フェニックスの目撃情報があり星鍵が反応したので此方に向かいセトさんに会うこととなりました。」

「文明のリセット、過ぎたる力は身を滅ぼすと言ったところか。星鍵の導きというが小娘自身の目的は違うのだろうか。」

「それはどういう。」

「そんなものは自分で見付けるものだ。他人に言われた目的を成すことと己の中から生まれたものはそれだけで価値が違う。」

「…わたしは…」

リイヴは目を伏せる。

「まあ良い。トロイメアという存在がどういったものかは分かった。目の前に現れると
いうのならば容赦せんというだけだ。」

と踵をかえし海馬はブルックへと戻ろうとする。

「小娘、キサマの情報には有意義であった。ならば対価を払わねば釣り合わん。」

と言い10万ルタを渡す海馬。

「?これは?」

「物を買うのならば必須になるものだ。キサマのいたところは文明も衰えそうだった貨
幣の概念がなかったということか。」

と言いそのまま簡易的な端末を渡す海馬。

「その端末に手をかざせ。その後は音声入力すれば大抵のことは答えるだろう。時間は
有限だ。キサマに構う暇など俺にはない。」

と言い今度こそブルックへと戻る海馬。

「…なんというか優しい方なのでしょうか?」

「わう!」

「そうだね。イムドワーク。えっとこれをこうして?」

その歩む先はブルツクの町のマサカの宿であつた

こうして白き龍を操りし決闘者は荒ぶる獅子を沈め聖遺物の光の導く先を歩む少女
たちと邂逅するのであつた。

湯船にて遭遇する乙女たち

海馬から色々な情報の入った端末を手渡されたリイヴはブルツクの町へとイムドゥークと共に入ることが出来た。

途中イムドゥークが魔物と間違えられかけたものの端末であらかじめ聞いておいた気を付けることに親切にもそういう時の対処が端末に記録されていたのでそちらを参照に犬だということで強引に納得させた。

因みにこの端末の気を付けておくことの設定は城之内と恵理で作成をしていた。

そうして暫く歩いていると露店など様々な所に点在しているので興味深いものが多い。

「まずは何か食べてみようかな？」

「わう！」

とリイヴは串焼きの屋台へ立ち寄り恐る恐る金額を払い少し広い広場でイムドゥークと一緒に食べる。

「…凄く塩味が聞いているし温かくて美味しい…！」

「ハフハフ…！」

とあつという間に食べ終わり次々と露店を巡っていく。

揚げた魚のフライにふわふわの綿のようなお菓子など種類が豊富であった。

そして当初の予定どおりマサカの宿までやってきたリイヴは人だかりが出来ているの確認して周りの人に聞いてみる。

「あのすいません。この列はどうしたんですか？」

「おう！実はマサカの宿のソーナちゃんが新しい料理を作ってて試食だつってな、色んな物が食べられるしもつと食べたいなら宿が食堂も兼ねてるからそつちで頼めるのさー！」

「ありがとうございますー！…それなら先に泊まる受付をした方が良いかな？」

「わううー！」

とリイヴは宿舎で受付をして先ほどの並んだ列へと戻る。

お風呂の時間を聞かれ2時間程取ったので少し驚かれていた。

そうして並び暫くすると自分の番がきたので試食の物をもらい受ける。

「これは…細長い？こつちは野菜が一杯…！」

と細長い…ボンゴレパスタと肉じゃがを食べる。

生まれて初めて食べる品々に心踊るリイヴ。

気付けば全て食べ終わっていたので少し残念そうにするが横から焼きそば、イカスミ

パスタ、ピザが少量ずつ更に盛られていたものを出された。

「良かったらこいつも食いな。見てて気持ちいい食いつぶりだからよ。」

「良いんですか!？」

「おう!」

「ありがとうございます! 頂きます!」

「もうヒータつたら。」

「良いじゃねえかエリア。見てて気持ちいいしき。そちの竜もどうだ?」

「わうう!」

「おし、ほら食いな。」

「わううう!」

「…あれどうしてイムドワークが竜って分かったのですか!？」

「ん? そりゃあ、あたしたちも精霊だし雰囲気分かるぜ。あたしも使い魔いるしな。」

とヒータは自身の使い魔のきつね火を出す。

「キュウ〜」

「わああ〜可愛い!」

「ワウウウ!」

「キュ?」

「ワウ！」

「キュウ！」

「触っても良いですか？」

「おうきつね火に確認してやってくれ。」

「きつねさん良いですか？」

「キュウ！」

とリイヴはきつねさんを撫でる。

炎属性なためか体温が高くとてもヌクヌクしていた。

「ふさふさで柔らかい……！」

「わうう！」

「可愛い竜さんですね。お肉食べますか？」

「わう！」

「きつねさんありがとうございます。」

「おうきつね火も喜んでたしな！にしたって精霊が旅してるなんて珍しいな。」

「そうですね。それにその剣の形も独特というか。」

「えとそれはその……」

「ああ事情があるなら無理に話さなくても大丈夫だせ。あたしはヒータ、こっちは幼馴

染みのエリアだ。」

「私はリイヴと申します。此方はイムドワークです。」

「そっか！今日はここに泊まるのか？」

「はい！湯浴みも出来るみたいで凄いです！」

「あああんただったのか！あたしら以外で長く時間取ったっていうのは。」

「お風呂は心の洗濯にもなりますからね。疲れを取り明日に備えるのはとても重要なことです。」

そうして言葉をかわしてリイヴは宿へと戻り部屋で一休みして食堂で食事を取った。夕食は少し辛みの効いた汁物に浸けた豆腐を使用した麻婆豆腐でリイヴはご飯やパンに付けて食べたりととても満足する一品であった。

そうして、夜

リイヴは貸し切りにしたお風呂でイムドワークと共に入っていった。

丁度良い温度のお湯で身体を清め浴槽に浸かるのだが不意に端の方に小さい人影が見えた。

「スピーー」

「あれ？この娘寝てる？大丈夫？」

と優しく揺ると目をぱっちり開けた少女もといポトリー

「……………？お姉さん誰？」

「私はリイヴと申します。」

「私ポトリー…」

「ポトリーさんはどうしたのですか？」

「…………お風呂気持ち良くて寝てたかも…すぐ出る」

「良ければ一緒に入りませんか？」

「良いの？」

「ええ！」

「ありがとう…！」

「わうう！」

「もふもふ…」

とイムドワークを抱きしめるポトリー。そんな微笑ましい光景にリイヴもほっこりしていた。

そこへ

「ポトリーさんここにいたんですね。香織さんとハジメさんが心配していましたよ。」

とワインが浴槽から浮かび上がりながら言う。

「ウイン…なの!」

「知り合いなのですか?」

「初めまして、私はウイン、風の霊術を操る風霊術師です。」

と自己紹介し合いリイヴから一緒に入らないかという誘いもあり風霊術でポトリーを見付けたこととお風呂で一緒になった人のご厚意で一緒に入ることになったのをハジメたちへと伝えるウイン。

(勢いで誘ってしまいました…ど、どうしましょう…)

「それにしても珍しいですね。自分の世界から飛び出そうとする精霊はそこまで多くないといえ積極的にいないというのに」

「それは…その」

それが星鍵に導かれたことであるのはあまり大つぴらに言えることではないため言い淀むリイヴ。

「なんて、人のことを言えません。私だってそうでしたから。」

「そうなんですか?」

「ええ私は元々ある一族の長の娘でした。母は物心つく前に亡くなっていましたがそれでも父や姉、友に囲まれていました。」

「それだったらどうして…」

「私は何とか色んな物を見てみたかったです。里の雰囲気も好きでしたがそれでも外を見てみたかった。だから父である長と話をして

…でも反対されてしまってそれから意固地になって喧嘩してしまって、止めようとした姉にも酷いこと言ってしまうって飛び出して次元を越えたんです。そうして霊術を使える人たちの所へ案内をしてもらって風を操ることは得意でしたから風霊術を極めました。

立派になって里の役に立ちたかった思いもあつたのですがそれでも喧嘩した手前どうしようかと悩んで最初に次元を超えて霊術師の所へ連れていってくれた雪姫様も来てくれるって言われて里に行っただんです。

そしたらどうなつていたと思います?」

「え?それは…立派に成長したって褒めて、仲直りしたのでは…?」

「そうだったらどんなに良かったのかな…里はもう…原型を留めていなかった。」

「そんな!」

「侵略してきたインヴェルズ、氷結界…そして父は皆を守ろうと命を掛け皆を守って…でもそれでも戦況は良くなかったみたいで…姉は祭壇に祈りを捧げ…そして祭壇に祈りは届いてしまった。」

創星神が復活してその復活の余波で祭壇は崩壊…姉もその崩壊に巻き込まれて…亡

くなりました。」

リイヴは言葉を失う。久し振りに会いに行こうとして仲直りをしたいという気持ち
が永遠に叶わなくなってしまったのだから。

「生き残った人たちの治療などを手伝いそこで色んなことを聞きました。ガスタを復興
させるため皆前を向いてました。」

でも私は…私は肝心なときにいられませんでした。

唯一の家族も亡くして天涯孤独になった私は…ガスタの人たちに戻ってくるか聞か
れましたがどの面下げて戻るといふのか…

私は故郷から逃げるように去って…無気力に生きるようになりました…

その間も雪姫様が看病してくれてあの人には頭が上がらないです。

そうして長い時間が過ぎて…精霊下位から人間界へと向かって私たちのマスターの恵
理と出会って…恵理もまた頼れる人を失ってその時、私たちは恵理に何も出来ず…一人
の孤独をあじわわせてしまった。

孤独になるのが辛いつて誰よりも知ってるのに。

そんな時に克也さんと恵理は出会って恵理は前のように明るくなりました。

克也さんは恵理のために怒ってくれてそれに妹の静香さんのことを大切にしてい
て
そういう兄妹の絆を感じさせてくれる人でした。」

「…」

（兄妹の絆…兄さんは私のことを守ろうと…必死になって死んでしまった私を生き返らせようと禁忌に手を伸ばして

アウラムも優しい兄さんを取り戻そうと必死に戦って…

私は新成した星で聖遺物の光を辿って…それが使命だと…そうじゃないと兄さんとアウラムが頑張ってくれた意味がなくなってしまうと思つて

本当はいつかまたアウラムと会えるつて信じて…旅をしてる。そうだ…私はアウラムに会いたいんだ）

「リイヴさん、貴女は後悔のない選択をしてください私はいつも後悔ばかりです。でもそれでもその中で見つけた大切なものを取り落とさないようにしてください」

「スピー」

「わう〜」

「すいません、何だか私の話ばかりで…」

「いえ！そんなことないです。私も私のしたいことを自覚できました！

いなくなつてしまった幼馴染みを双星神になつてしまった好きな人を追い掛けて一杯言いたいことを…

約束を破つたことを叱つて…それで私の旅した所の話を二人でして今まで会えな

かった分、目一杯話すんです！」

「そうですね。とても良いことです。」

「ワインさんその…私と友達になってもらえませんか！」

「ええ勿論良いですよ。」

そうしてワインとリイヴは時間ギリギリまで語り合いワインの知る限りの創星神のことを話しリイヴは聖遺物のことを教えるのであった。

さらば変態の巢窟そして星に導かれる者の決意

それから数日間城之内たちはブルックに滞在をしていた。

その間ウインやヒータ、エリアと仲良くなっていたリイヴは改めて自分たちの仲間を紹介するというところで城之内たちと顔合わせをしていた。

「それにしてもこの剣……?というかなんというか?」

「多分だけど剣というよりかは鍵って言う方がしっくりくるかな?作られたというより天然のあるべき形を取っている……中身を内包する入れ物に近いのかな?今は反応的に一つ入ってるかな?」

「そこまで分かるんですか?」

「まあ長年鍛冶をしてると自然とね。これは下手に弄ると性能が逆に下がるかもね。それにしても薄手というか……うん……よし!」

とシユミッタは唐突に

「じゃあ服脱いで!」

と言い放つ。

「……ふえ!」

「シユミツタそれでは言葉が足りませんよ。全く鍛冶になると言葉が抜けるんですから。」

「お姉さん、シユミツタさん装備作ってくれるって…それで採寸とかしたいから脱いでってことだよ。」

「ごめんごめん、でも装備は作っておきたいのは本当だよ。ハジメたちは普通の服の下にハインネさんの簡易魔法衣を着てるから魔法耐性もあるし」

ハジメの作った防具もある程度着けるから攻撃を受けても体へのダメージは少ないんだ。それに比べるとリイヴの装備はぶっちゃけその鍵ぐらいいだし身軽なのも良いけど重い攻撃を受けたら一発でダウンしちゃうんじゃないかと思うんだよね。」

「シユミツタさんの装備は色々と凄い」

「ポトリーちゃん色々凄いつて？」

「性能も高く動きを損ねないように軽量化しているのです。それと普通にシユミツタの装備はとても重宝されるので一点単価がとても高いのです。」

とハインネはそろばんを弾き上位の装備の値段を出す。

「……………ハインネさんこの金額…マジですか？」

「ハジメ君？どれぐらいなの？」

「…こつちでいう金額なら大体50万ルタはするのが平均ってことだね。」

「ただ一点なのでそこに籠手や防具に剣や道具入れに杖やなど様々入れると200から300程ですかね？特注だと3から5倍の金額になることもありますね。」

「それだけ信用が出来る作品ってことなんだね！」

「まあ命を守る上で信用できる装備はありがてえからな。」

とシユミツタはリイヴを連れて簡易工房へと向かいハジメもその手伝いをする事になった。

その間ポトリーはイムドワークと遊んでいたりシアは海馬の特訓で以前の重量の重りに加えて自身の体重を重力魔法で二倍にして負荷をかけてやっている。

ユエもミレディから渡された魔道書を自分なりにアレンジし魔法のレパートリーを増やし重力魔法に慣れるためにギルドで近場の依頼を城之内と香織、恵理、アウスで共に受けて帰る途中広々とした丘で重力魔法の練習をアウス監修のもと恵理と香織と共に励むのであった。

海馬は相変わらずハウリアとの連絡や孤児の育成に至るところの生活排水の基盤を整えたりと忙しく過ごし、

その間もミレディは料理に励み失敗したものはヘルモスが残さず食べつつマサカの宿ではその様子を暖かい眼差しで見守るミレディとヘルモスを見守り隊なるものが誕生しつつもその横でソーナは試食会を開きマサカの食堂は大忙しであった。

そんな城之内たちはリイヴにあることを頼まれていた。

それは

「お願いします！私も旅の仲間に加えてください！」

「わう！わうう！」

「俺は良いと思うんだが海馬のやつがOKするかどうかな。」

「そうだね。社長は興味のないことにはとことん無関心だからね。」

「無関心ですか？」

「そうだよ。シアさんは愛情の反対ってなんだと思う？」

「それは…嫌いとか憎悪とかではないんですか？」

「どれも違うよ。正解は無関心そもそも興味があればそういう感情に行き着かないの。だからシアさんも気を付けてね。社長は厳しいけど面倒見が良いからね。」

「はいです！」

「…ん！セトを説得できたら大丈夫だと思う…！」

「いやはや社長さんストイックだからね〜ミレディさんだってあそこまではやらないかな〜」

「だからこそ克也と同じく我らが選んだ勇者足りうる者であったのだ。」

「ふうん、小娘か」

「海馬！」

「前会った時の貴様では付いていくなど許さん。惰性に身を任せ自らを運命の奴隷などと思う内はな。」

「…確かに貴方と出会った時の私は星鍵に導かれるままに歩みを進めていました…この星鍵の導く先に何かがあるのではないかと。でも！私は決めたんです！

例えば星鍵の導く先に何があるうとも私は私の大事な人に会いたい！会って約束を破ったことを叱ってそれで…私の歩いた軌跡を語りたい。

自分の歩いた道を胸を張って言えるようにするために同行させてください！」

「…俺たちの目的は聞いているか？」

「…はい、故郷へと帰るためと。」

「そうだ、そして神代魔法を集め城之内たちは元いた世界へ俺は奴の元へと辿り着くために。貴様の求める可能性もあるだろう。」

「！それじゃあ！」

「好きにするが良い。」

「良かったねリイヴさん！」

「はい！」

「ワウウ！」

「城之内明後日にここを発つぞ。」

「つてことはフェーレンにハウリアたちが着けたつてことだな！」

「そうだ。そして」

「お待たせしました。社長さん」

「ジェニーさん！」

「漸くスクロールが纏まりましたのでお持ちしました。」

「あとは検分し奴らへと渡すだけだ。」

「ハイネさんは漸く疲れが抜けたようで安心しました」

「心配お掛けしました……」

「まあヴェールさんが悪いのが大半ですからね。」

「ジェニーさん、ヴェールはどうなの？」

「今溜まった書類を片付けてますからもう少し掛かるかもですね。」

「そうなんだ。」

「早めに今の仕事を終えて一時休業することでしたから心配はいりません。久々のお休みですからね。」

「ジェニーさんの仕事も物凄い大変だからね。」

「そうなの？」

「そうだよ。依頼の凱旋にそれに見合った報酬なのか、ウィッチクラフトの宣伝にスクロール作りにギルドの依頼書の整理、換金とか色々忙しいんだ。」

「聞いてるだけで目まぐるしい忙しさだね!？」

「まあ慣れですからね。ヴェールさんとは長い付き合いですからね。」

「私も今の仕事はマスターとジェニーさんから教わりましたからね。」

「最初はヴェールさんとジェニーさんから始まったらしいからね!」

「…お姉ちゃんとジェニーお姉ちゃん凄い魔法使い!」

「そんなに誉めても何も出ませんよ」

「そうして城之内たちは準備をしマサカの宿で明後日に町を出ることを伝えると名残惜しそうであったが身体に気を付けてと言われ

「先生と恵理さんに教わったこと忘れずに精進します!なのでまた、料理が上達したら食べに来てください!」

とソーナから言われたのであった。

「そうして町を発つ前日にギルドへと顔を出す城之内たち。」

「そうかい。行つちまうのかい。そりゃあ、寂しくなるねえ。あんた達が戻ってから賑やかで良かったんだけどねえ」

「それにあんたらのお陰でブルツクの貧困層も大分縮まってねえ、ウチにも良い子達が

入ってくれて助かるよ。」

「世話なつたぜキャサリン、また寄ることがあつたらそんなときは宜しくな！」

「あんたも嫁さん手放すんじゃないよ、まっあんたらの様子を見てたらその心配もなさそうだけどね。恵理も何かあつたらウチに來な、あたしがぶん殴つてやるからね！」

「あはは、ありがとうキャサリンさん、でも克也なら大丈夫だよ！」

「さてと確かフェーレンへ行くんだつたね。」

とキャサリンは依頼書を手際良く探していく。

「うゝん、おや。ちようどいいのがあるよ。商隊の護衛依頼だね。ちようど空きが…後4人分あるよ…どうだい？ 受けるかい？」

依頼内容は、商隊の護衛依頼のようだ。中規模な商隊のようで、十五人程の護衛を求めていゝらしい。城之内、恵理、ハジメ、香織の分でちようどだ

「連れを同伴するのは平気なのか？」

「ああ、問題ないよ。あんまり大人数だと苦情も出るだろうけど荷物持ちを個人で雇つたり奴隷を連れていゝる冒険者もいゝるからね。

まして、ユエちゃん、シアちゃんたちは結構な実力者だ。一人分の料手で優秀な冒険者を複数雇えるようなもんだ。断る理由もないさね」

「じゃあそれにするぜ！」

と城之内たちは依頼を引き受けるのであった。

「あいよ。先方には伝えとくから、明日の朝一で正面門に行つとくれ」

「サンキューな！」

そして城之内に、キャサリンが一通の手紙を差し出す。疑問顔で、それを受け取る城之内。

「これは？」

「あんた達、色々厄介なもの抱えてそうだからね。町の連中が迷惑かけた詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手紙をお偉いさんに見せな。

少しは役に立つかもしれないからね。

まあ王女様のお墨付きのやつがあるが念には念をいれてね。」

バツチリとウインクするキャサリンに、何者なのかと本気で思う城之内たち。手紙一つでお偉いさんに影響を及ぼせるキャサリン凄いなという疑問がありありと表情に浮かんでいる。

「おや、詮索はなしだよ？ いい女に秘密はつきものさね」

とキャサリンに送り出される城之内たちであった。

余談だがブルックの町には派閥が出来ており、日々しのぎを削っている。

「ユエちゃんに踏まれ隊」

「シアちゃんの奴隷になり隊」

「お姉さまと姉妹になり隊」

「ミレデイちゃんとヘルモスを見守り隊」

「城之内夫妻のお料理極め隊」

「ハイネちゃんをクンカクンカし隊」

「天女様に癒され隊」

「ガラスの幼女に踏まれ隊」

「氷の美少女に罵倒され隊」

と様々である。それぞれ、文字通りの願望を抱え、実現を果たした隊員数で優劣を競っているらしい。

「全くこの町ってこんな変な人しかいないのかしら？それともトータス人が可笑しいのかしらね？」

（うくん、どうなんだろうね？王国の人たちは…割りともだったと思うけどそういう土地柄なのかトータスという世界の風潮なのか…あ、レイカその人も香織狙ってたから宜しくね。）

「全く退屈しない町と思うべきなのかしらね。」

とんでもない変態の巢窟なのだとハジメはレイカと代わる代わる交代しながら香織、

ユエ、シア、ポトリーに群がろうとした者たちを氷で閉じ込めたりゴム弾で尽く沈めていき決闘を挑まれる前に終わらせるため決闘スマツシャーというあだ名がつけられるのであった。

妖怪娘たちの主人（人妻感満載）の修行風景

ブルツクの町を城之内が出る少し前

ハイリヒ王国にてオルクス迷宮に潜り力を付ける勇者一行。

特に勇者（笑）である天之河光輝の成長は目覚ましく彼のステータスは軒並みオール700を越えていた。

歴代最強の勇者だと教会は持ち上げ光輝もそれを受け入れ魔族との戦争を終わらせると行き込んでいた。

確かにこの世界の人間にとってステータスがこれ程伸びていることをふまえてやはりエヒト神が遣わせた神の使徒だともてはやしていた。

他の者たちも光輝に及ばずともトータスの人間よりもステータスが優れていた。

担任であった畑山愛子は作農師のため王都を離れ各地で作物を育てる手伝いをし、その護衛で何人かクラスメイトが付いている。

ハジメが奈落へと落ち初めて死と隣り合わせなこと、戦争をする意味を知ったものたちは一部は戦闘ではなく護衛などをするようになり教会は反発したものの何とか愛子が説得をし戦争に参加するという言質も城之内が訓練には参加すると言っただけなの

で無理矢理に参加させることも出来なかつた。

迷宮攻略へ駆り出されているクラスメイトで勇者である光輝の活躍は王国を盛り上げた。

表向きはだが

リリアーナ王女は光輝の何処までも性善論なことに危険を、感じなるべく発言力を持たせないように注意を働かせ父親であるハイリヒ王へもそれとなく忠言を入れるように側近へ伝えていた。

王国の民は勇者を優遇していたものの一部のリリアーナ王女派閥の貴族たちは本当に支持すべき者を分かつていた。

そう八重樫雫と谷口鈴の二人であつた。

彼女ら二人は王国の貧しい人たちの元へと通い王国で支給される金銭など寄付し本当に救うべき者を救つていた。

王国のスラム街では盗みは当たり前、貧しい者たちの不満の矛先は貴族ひいては王国そのものへと向かいいつ爆発するのかわからない状況であつた。

暴動が起きても騎士団に制圧されて終わるがそれでは多数の犠牲者が出る。そういったことの対処もリリアーナは考えていたものの王族である自分が関与すれば貴族たちからの反感を買い余計に身動きが取れなくなるといったことから行動出来ていな

かった。

そんな時に雫たちが現れ自分の名代として代わりに行動することにより貴族たちの煩わしい干渉も受けずにいた。

更に鈴は結界師として王国の結界をより強固にすることにより魔物の侵入を今までよりも防げるようにした。

そして何よりリリアーナは、彼女ら二人は現実を見てその上で生きていることを知っている。

何より親友が頑張っているということも二人を後押ししている。

表向きの最強は勇者である光輝であるが本当のことを知っているものは雫こそが最強だということを知っている。

今も雫は王城の庭で剣を振るい感触を確かめていた。

「今日も精が出ますね雫。」

「リリイ！仕事は大丈夫なの？」

「ええ一段落しましたのでこれからお昼にしようと思ってます。」

「それなら私達もご同伴させてもらえば良いんじゃないシズシズ！」

「そうね。そうしましょうか。その前に鈴もう一回やるわよ。」

「はあーい！じゃあ行くよ！光絶…20連！」

と光の初級魔法である光絶を二十層張り巡らせそれを多重に重ね掛けることで聖絶並みの防御力を実現させていた。魔力消費もこちらの方が良く多少集中力は使うものの並みの攻撃なら防げる代物だ。

「前回よりも良くなっているわ。でも鈴まだ密度が足りないわ。真空のようにぴつたりくつついて何重もの層になればそれだけで防げて受け流すのも自在なら攻撃の幅も上がると思うわ。」

と雫は何でもないようにスパンと斬り裂いた。

「うう〜シズシズ反則染みた斬れ味だよ〜どうしてスパスパ斬れちゃうかな〜光絶君の攻撃なら軽く今ので受け止められるのに〜」

「それはそうよ光輝のはただ振り下ろすだけの暴力なだけの剣筋だもの、私のはそういった力じゃないけど綻びを見つけてそこを沿って斬ってるだけだもの。余計な力を入れずに脱力するのもポイントね。」

本当香織と見てた漫画にそういうのがあって真似して見たけど馬鹿に出来ないものね。」

「む〜それなら鈴はあの結○師のアニメの間流結界術を参考にしようかな〜あれで結滅って出来れば魔物も消滅させられるし絶界覚えれば精神攻撃もシャット出来るし本気で考えよう！」

「無理せずにはやらないと身体を壊すわよ。もっと力を抜いて」

「……ばああ！」

「あらうらら、どうしたのかしら？」

「雫驚かなかった…どうして分かったの？」

「空気の揺れる流れもあつたし気配を感じたからよ。貴女たちの気配は離れても分かるからね。」

と灰流うららは雫の背中に抱きつく。

「うららちゃんがいるということは…」

「私もいるよ。鈴頑張ってる？」

「ユウユウ！勿論だよ！エリリンが頑張ってるのに私だけ怠けるなんてナンセンスだよ！」

と幽鬼うさぎも現れ鈴を労う。

雫も鈴も、精霊たちと心を通わせるようになり彼女等の力を借り受け戦えるようになり、その影響からか本来魔物しか持たない魔力操作の技能も獲得しかなり無詠唱に近い形で魔法を発動出来るようになっていた。

ふと背後に目を配ると紫炎の姿があつた。

「紫炎、いつものお願いしても良いかしら？」

という紫炎は己の刀を構え雫も同じく構える。

暫くその場を静寂が支配したが唐突にキインという金属音が鳴り響く。

雫は八重樫流抜刀術を駆使して紫炎へと斬撃を飛ばし霞穿（かすみがうち）という神速の三段突きや紫炎の斬撃を

音刃流し（おとはながし）で受け流してカウンターの斬撃を放ちその勢いの反動を利用しして段空を放つが

紫炎はその全てを受け流す。

何度目かの攻防でキインと雫の持つ剣が手から離れ紫炎の刀が首筋へと沿えられる。

「はあ、今回も私の負けね。」

「毎度のことだけど魔力で視力を強化しないと付いてけないよ〜」

「私ではさっぱり見えませんね。しかしとても高度なのは地面に刻まれた剣戟の後を見れば一目瞭然ですね。」

雫はたまに紫炎からこうして手解きを受けている。

最初の頃は刀も抜かずに籠手などで受け流されていたものの最近では剣で戦つてくれるようになった。

それほどまでに雫の成長速度が速いと言えるのであろう。

「ごめんなさいリリイ。そろそろ行きましようか。紫炎もいつもありがとう。またお願

いね。」

グツとサムズアップをする紫炎はそのまま霊体化するのであった。

「うらら他の子達はどうしてるかしら？」

「私はここにいますわよ！」

「しぐれもいたのね。」

「零抱っこするのですわ！それと私達以外はあの野蛮人にイタズラしにいつてますの
！」

「もう程々にしないと駄目よ。」

「はいですわ！」

「鈴も行くよ。お昼冷めちやうよ！」

「そうだね！リリイも行こう！」

「ええそうしましょうか。」

と二人を伴い食事にするリリアーナ。

余談であるが他の儚無みずき、浮幽さくら、屋敷わらしはまた零の部屋へと入ろうとしていた勇者（自称）を光輝の目の前で転びぶつかられて泣かされたと言いメイドたちから非難の眼差しを受けたり

王宮の女中に休みの時間を知らせてその時間帯に勇者を取り込もうとする派閥の者

たちからのアタックで、雫に近寄れないような状況を作り出していたのであった。

そうして昼食を取り再び鍛練を再開する二人

今も迷宮を攻略する親友に追い付くために今日も剣を振るう。

そんな雫も休日では動きやすい着物基調な服を着て髪も普段のポニーテールから髪を下ろしてストリートロングに変えて妖怪娘たち五人と共に町へと繰り出す。

新しい髪留めや化粧などのコスメなどを購入し自分だけでなく妖怪娘たちにもメイクなどを施してたりする。

なので裏では凛々しい五人娘のお母さん剣士やら夫の帰りを待つ人妻剣士やら未亡人剣士など高い人気を誇っていることを彼女本人は知らない。

王宮のメイドたちの間では城之内に恋していることは全員に通達されているのでお姉様を温かく見守り隊が結成され女中たちの間で結成されたソウルシスターズを撃退など良くしていて鈴は時折プロマイドなどを持っていつては高く買い取ってくれるので懐事情も良かったりしているのであった。